

KARATSU

唐津市：藤野の棚田

TARA

太良町：海中鳥居

SHIROISHI

白石町：須古寿司

TAKU

多久市：舞

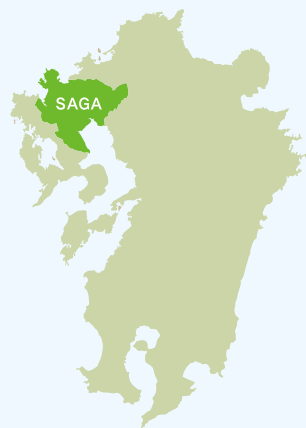


“人が輝く地域づくり”～自発と誇りが地域を変える～

全国過疎問題

シンポジウム2017 in さが

報告書



期間／平成29年

10月19木・20金

19日

全体会／佐賀市文化会館 大ホール

- 平成29年度 過疎地域自立活性化優良事例表彰式
- 基調講演「『縮充』する地域を目指して」

講師／山崎 亮氏 (studio-L 代表)

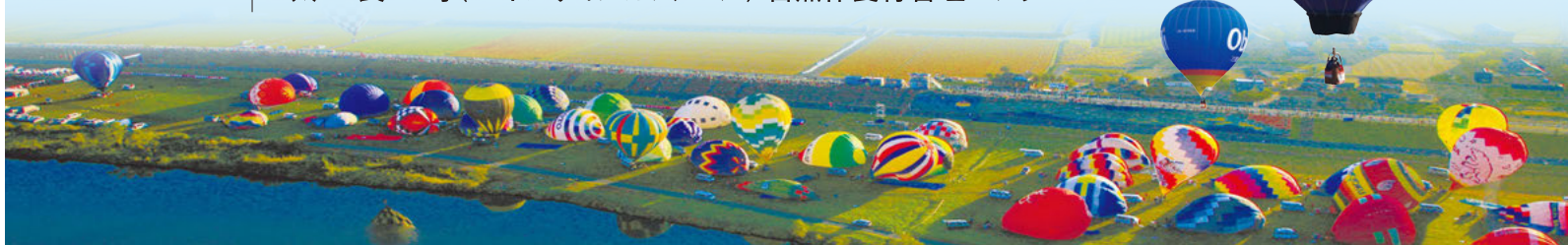
- パネルディスカッション

交流会／ホテルマリタール創世 佐賀

20日

分科会

唐津市	(優良事例発表)	相知交流文化センター
多久市	(優良事例発表)	多久市中央公民館
白石町	(パネルディスカッション)	福富ゆうあい館
太良町	(パネルディスカッション)	自然休養村管理センター



■主催／総務省、全国過疎問題シンポジウム実行委員会(佐賀県、全国過疎地域自立促進連盟、佐賀県過疎地域自立促進協議会)

■後援／農林水産省、国土交通省、全国知事会、全国都道府県議会議員会、全国市長会、全国市議会議員会、全国町村会、全国町村議会議員会、全国山村振興連盟、一般財団法人地域活性化センター、佐賀県市長会、佐賀県市議会議員会、佐賀県町村会、佐賀県町村議会議員会、公益財団法人佐賀県市町村振興協会、朝日新聞社、共同通信社佐賀支局、佐賀新聞社、(株)時事通信社佐賀支局、西日本新聞社、日刊工業新聞社、日本経済新聞社佐賀支局、毎日新聞社、読売新聞西部本社、RKB毎日放送、NHK佐賀放送局、FBS福岡放送、九州朝日放送、サガテレビ、TVQ九州放送、NBCラジオ佐賀、エフエム佐賀、佐賀県ケーブルテレビ協議会

は じ め に

総務省、佐賀県、全国過疎地域自立促進連盟、佐賀県過疎地域自立促進協議会の共催により、「全国過疎問題シンポジウム2017 in さが」を平成29年10月19日(木)から20日(金)にかけて2日間の日程で、佐賀県佐賀市、唐津市、多久市、白石町、太良町にて開催いたしました。

現在、多くの過疎地域では、人口減少や少子高齢化の進展、地域産業の衰退や生活基盤の弱体化、集落消滅の危機など、さまざまな課題に直面しています。

一方で、これらの地域は豊かな自然や農地・森林などを有し、水源の涵養、食料の生産、電力の供給、自然災害の防止などを通して、地域内のみならず、都市を含めた人々の生活や生産活動を支える公益的役割を担っています。

今回のシンポジウムは、こうした点をふまえ、「人が輝く地域づくり ～自発と誇りが地域を変える～」をテーマに、過疎対策に携わる行政関係者をはじめ、広く住民や地域づくり関係者などを交え、過疎地域の担う役割や意味、新たな過疎対策のあり方、今後の課題などについて、熱心な議論や情報交換・交流を行いました。

この報告書は、シンポジウムの基調講演、全体会パネルディスカッション、分科会などの内容を収録したものです。

本書が過疎地域の自立・活性化の一助となれば幸いです。

最後に、本シンポジウムにご参加いただいた皆様及び開催に際して多大なご協力をいただいた関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

平成30年2月

総務省、全国過疎問題シンポジウム実行委員会

CONTENTS

シンポジウムグラフ	1
プログラム	5
全体会	
開 会 宣 言 横尾 俊彦(佐賀県過疎地域自立促進協議会会長・多久市長)	8
主催者挨拶 池田 憲治(総務省大臣官房地域力創造審議官)	9
歓 迎 挨 拶 山口 祥義(佐賀県知事)	10
平成29年度過疎地域自立活性化優良事例表彰式	15
審査結果の講評 宮口 侗廸(過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会 委員長)	17
総務大臣賞	19
全国過疎地域自立促進連盟会長賞	24
基調講演 山崎 亮(studio-L代表)	28
『縮充』する地域を目指して	
パネルディスカッション	44
“人が輝く地域づくり”～自発と誇りが地域を変える～	
次期開催県挨拶 平屋 隆之(山口県総合企画部審議監)	70
分科会	
唐津市分科会(優良事例発表会、意見交換)	73
過疎地域自立活性化優良事例発表会	
多久市分科会(優良事例発表会、意見交換)	97
過疎地域自立活性化優良事例発表会	
白石町分科会(パネルディスカッション、意見交換)	125
地域を支える身近な移動手段～住み慣れた地域で暮らし続けるために～	
太良町分科会(パネルディスカッション、意見交換)	147
地域資源を誇り、磨く。～自発の地域づくりの出発点～	



開会宣言

横尾 俊彦

(佐賀県過疎地域自立促進協議会会長・多久市長)



主催者挨拶

池田 憲治

(総務省大臣官房地域力創造審議官)



歓迎挨拶

山口 祥義

(佐賀県知事)



優良事例表彰式 講評

宮口 侗迪

(過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会 委員長)



表彰式



受賞記念写真



基調講演

山崎 亮
(studio-L 代表)



基調講演



基調講演（会場風景）



全体会会場風景



パネルディスカッション



パネルディスカッション



唐津市分科会



唐津市分科会 現地視察



多久市分科会



多久市分科会 現地視察



白石町分科会



白石町分科会 現地視察



太良町分科会



太良町分科会 現地視察

“人が輝く地域づくり”

～自発と誇りが地域を変える～

全体会&交流会 10月19日(木)

●佐賀市：佐賀市文化会館大ホール／ホテルマリタール創世佐賀

全体会 佐賀市文化会館大ホール

- 12:00～ 受付開始
- 13:00～ 開会式 ●開会宣言 横尾 俊彦(佐賀県過疎地域自立促進協議会会長・多久市長)
●主催者挨拶 池田 憲治(総務省大臣官房地域力創造審議官)
●歓迎挨拶 山口 祥義(佐賀県知事)
- 13:24～ 平成29年度 過疎地域自立活性化優良事例表彰式
- 13:53～ 休憩 ※優良事例受賞者記念撮影
- 14:05～ 基調講演 ●演題「『縮充』する地域を目指して」
●講師／山崎 亮氏(studio-L 代表)
- 15:00～ 休憩
- 15:10～ パネルディスカッション
『人が輝く地域づくり ～自発と誇りが地域を変える～』
【コーディネーター】飯盛 義徳氏(慶應義塾大学総合政策学部 教授)
【パネリスト】千綿 由美氏(むらつむぎ 代表)
山崎 亮氏(studio-L 代表)
横尾 俊彦氏(多久市長・佐賀県過疎地域自立促進協議会会長)
渡邊 法子氏(アイ・エス・ケー合同会社 代表)
- 16:40～ 次期開催県紹介 ※五十音順
- 16:45 閉会

交流会

- 17:10～ 交流会受付開始
- 18:00 開会
- 19:30 閉会

〈10月20日(金)〉分科会・現地視察

●唐津市 ●多久市 ●白石町 ●太良町

第1分科会

唐津市

■過疎地域自立活性化優良事例発表会

(唐津市:相知交流文化センター)

- 9:30 受付開始
 10:00 優良事例発表、意見交換
 【コーディネーター】
 宮口 侗迪 氏(早稲田大学 名誉教授)
 12:00 解 散
 (12:00~12:45 昼食)
 12:45 現地視察 ※希望者のみ
 ○蕨野の棚田
 ○小松酒造 等
 16:30 解 散(JR佐賀駅)

第2分科会

多久市

■過疎地域自立活性化優良事例発表会

(多久市:多久市中央公民館)

- 9:30 受付開始
 10:00 優良事例発表、意見交換
 【コーディネーター】
 関司 直也 氏(法政大学現代福祉学部 教授)
 12:00 解 散
 (12:00~12:45 昼食)
 12:45 現地視察 ※希望者のみ
 ○廃校を活用した多久市児童センター「あじさい」
 ○多久聖廟、東原摩舎
 16:30 解 散(JR佐賀駅)

第3分科会

白石町

■パネルディスカッション

(白石町:福富ゆうあい館)

- 9:30 受付開始
 10:00 パネルディスカッション、意見交換
 テーマ 地域を支える身近な移動手段
 ~住み慣れた地域で暮らし続けるために~
 【コーディネーター】
 土井 勉 氏(大阪大学コミュニケーション
 デザイン・センター 特任教授)
 【パネリスト】(五十音順)
 田島 健一 氏(白石町長)
 平野 征幸 氏(特定非営利活動法人
 中原たすけあいの会 代表)
 前田弘次郎 氏(有限会社 錦タクシー 会長)
 若菜 千穂 氏(特定非営利活動法人
 いわて地域づくり支援センター 常務理事)
 12:00 解 散
 (12:00~12:45 昼食)
 12:45 現地視察 ※希望者のみ
 ○縫ノ池
 ○新有明漁港
 16:30 解 散(JR佐賀駅)

第4分科会

太良町

■パネルディスカッション

(太良町:自然休養村管理センター)

- 9:30 受付開始
 10:00 パネルディスカッション、意見交換
 テーマ 地域資源を誇り、磨く。
 ~自発の地域づくりの出発点~
 【コーディネーター】
 平尾 由希 氏(料理家・フードコーディネーター)
 【パネリスト】(五十音順)
 早津 昌俊 氏(太良シトラス会 会長)
 本田 節 氏(有限会社 ひまわり亭 代表取締役)
 山口 成美 氏(有限会社 シュシュ 代表取締役)
 若松 進一 氏(人間牧場主・年輪塾塾長)
 12:00 解 散
 (12:00~12:45 昼食)
 12:45 現地視察 ※希望者のみ
 ○みかん狩り体験
 ○道の駅太良 等
 16:30 解 散(JR佐賀駅)

全体会

開会式

開会宣言

佐賀県過疎地域自立促進協議会会長・多久市長

横尾俊彦

主催者挨拶

総務省大臣官房地域力創造審議官

池田憲治

歓迎挨拶

佐賀県知事

山口祥義





開会宣言

佐賀県過疎地域自立促進協議会会長・多久市長

横尾 俊彦氏（よこお としひこ）

こんにちは。県内外から多数の皆様をお迎えして、本日ここに「全国過疎問題シンポジウムinさが」を開催できますことを大変うれしく、また遠来の皆様を歓迎申し上げたいと思います。

過疎地域、ひと言で言ってもいろんな課題がございますが、平成の大合併の前と後を比べてみると3300市町村ほどあった時代がありますが、そのときの面積にして日本列島の半分を越えるぐらいが過疎地域です。合併を経て市域や町村の面積や形は変わりましたが、その課題はまだ残ったままであります。なんとか元気で活力のある、そして未来に希望をつなげる、そんな地域にしていきたいというのが首長である皆様や議会議員の皆様や、行政の幹部の皆様ではないかと思います。「私たちも頑張っていこう」「なんとか一緒にしていこう」というのが、今日もご参加いただいている民間の志の高い皆様だと思っています。

ともどもに、この機会を未来につなげる「人が輝く」というキーワードをテーマにした今回のシンポジウムを活かせるように頑張っていきたいと思うところです。

この会場の外では日曜日に向かって、多数の候補者の方々が国政の選挙の真っ只中ですが、少し個人的に残念だなあと思うのは、過疎問題を語る時間がなかなかないようございまして、あるいは福祉のことも、高齢化のこともなかなか語る時間がないように感じられます。一般の方が「もっと聞きたいね」「知りたいね」「私たちの未来はどうしたらいいの」「どういう施策が大事なの」という声もよく聴きます。

そんな思いも込めながら、今日、遠く離れたところからも、近くからもご参加いただいたことに重ねて感謝を申し上げ、これからの時間、ひと時を充実した会になりますようご協力をお願い申し上げまして、開会宣言とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。



主催者挨拶

総務省大臣官房地域力創造審議官

池田 憲治氏（いけだ けんじ）

総務省地域力創造審議官の池田でございます。本日は全国各地から多数の皆様にご参加いただきまして、このシンポジウム、開催されますことを大変うれしく思っております。

また、今日はこのシンポジウムを共催していただいています実行委員会を構成するそれぞれの団体から田村市長、山口知事、そして横尾市長、また表彰委員会の委員長でもある宮口先生にもおいでいただいています。また、開催地の石倉議長、山下先生にもご臨席いただきまして、こうした全体会議が始まることをうれしく思っています。

それでは野田大臣から言付かってまいりましたご挨拶をご披露申し上げます。

『本日、「全国過疎問題シンポジウム2017inさが」を開催できますことを、主催者として大変うれしく思います。』

今回のシンポジウムの開催にご尽力いただきました佐賀県、佐賀県過疎地域自立促進協議会をはじめとする関係の皆様、厚く御礼を申し上げます。また、ご臨席の皆様におかれましては、過疎対策に日頃からご尽力いただいております、心から敬意を表するとともに深く感謝申し上げます。

現在、日本は急速に進行する少子化・人口減少という「見えざる有事」に直面しております。特に、過疎地域におきましては、維持が困難となっている集落が増加するなど、重大な局面を迎えています。

持続可能な地域づくりには、地域住民自らが主体となった継続的な取組が必要です。しかしながら、どの地域においても担い手の確保が大きな課題となっており、地域の限りある人的資源をいかに有効に活用するかが、これからの地域づくりの鍵になると考えています。今後、地域で活動している自治会や婦人

会、ボランティア、NPO、消防団、経済団体、郵便局など多様な主体が力を合わせて地域づくりに取り組むことがますます重要になります。

総務省におきましては、これまでも「地域運営組織」による集落の維持・活性化の取組や、「地域おこし協力隊」を活用した地方への新しい人の流れの創出を支援してまいりました。こうした施策に加えまして、平成30年度予算の概算要求におきましては、シェアリングエコノミーを活用した地域の課題解決を推進する施策を新たに盛り込んだところです。

過疎地域は、多くの方々にとっての「大切なふるさと」です。過疎対策を日本全体の課題として捉え、地域の暮らしを守る取組を引き続き展開してまいります。

そうした中、現行の過疎法の期限が平成33年3月までとなっております。それぞれの地域が抱える課題は様々ですが、今後どのような取組が求められるのか、将来を見据えた新たな過疎対策のあり方について、皆様とともに検討してまいりたいと考えています。

今回の全国過疎問題シンポジウムは「人が輝く地域づくり～自発と誇りが地域を変える～」をテーマとしています。

佐賀県には連綿と続く伝統や歴史、豊かな文化・風土、そして美しい自然や多彩な食など、様々な地域資源があります。そうした地域資源が持つ魅力を再認識し、地域資源を活かした地域づくりに取り組む「人」に焦点をあてながら、地域の維持・活性化に向けた方策や具体的事例について、活発な議論が展開されることを期待しております。

結びに、過疎地域の益々のご発展と、ご臨席の皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

平成29年10月19日 総務大臣 野田聖子』代読。



歓迎挨拶

佐賀県知事

山口 祥義氏 (やまぐち よしのり)

皆さん、こんにちは。本日は「全国過疎問題シンポジウム」の29回目がこの佐賀県で開かれるということで、私自身、万感の思いであります。

宮口委員長、不思議な感じがしますね。一緒にここでこうやって。私もずっと過疎対策はライフワークでありまして、総務省でも過疎対策室、それから地域活性化伝道師ということで、全国津々浦々巡ってまいりましたけれども、今日も本当に多くの知っている方がこの中におられて不思議な感じがします。そして、自分の故郷であります佐賀で開催できるということ。先ほどご挨拶いただいた池田地域力創造審議官も32年前に佐賀県庁におられました。門前過疎対策室長も振り出しは佐賀県庁でありました。

そうやって関係者が佐賀に集っているということも不思議ですし、私がちょこちょこ伺った岩手県八幡平市の田村市長さんも来られたり、多久市の横尾市長も私が東京にいるときに、過疎問題でいろいろ議論した関係でございます。

そういう多くの皆さん方が集って佐賀の地で。来週、佐賀はバルーンフェスタと唐津くんちで盛り上がるんですけど、過疎問題シンポジウムを開催するのにいい時期かなと思っていたら、衆議院選挙が重なってしまって、みんな集まってくれるだろうかと心配していましたけれども、こんなにも大勢集まっていたことにまず御礼申し上げたいと思います。

さて、折角、佐賀県に全国からお越しいただきましたので、いくつか佐賀の紹介もさせていただきますと思います。

(前方のスクリーンを見ながら)

～太良町 竹崎かに旅館～

きれいでしょ。これ太良町の竹崎というところなんですけれども、目の前は有明海ですね。6メートルくらい潮の満ち引きがありまして、朝とかこの温泉から見ると本当に素晴らしいものがあります。

～太良町 海中鳥居～

これ、皆さん、見たことがある方は手を上げていただいて。ほとんど、まだですね。5%程度ですね。これも有明海の中に鳥居がこう3体見えるわけですし、この先には島があります。こういう美しい姿がありますが、潮が引くと人が通れるようになります。こういったスポットをほとんど地域の人しか知らなかったのが、今SNSとかで皆さんが紹介するもので、多くのお客さんが訪れるようになりました。そもそもこの地域は牡蠣小屋なんかで有名な地域ではあるんですけども、最近非常に地域として輝くように頑張っておられるところであります。

～唐津市 ビーチヨガ～

これ分かりますか。これは唐津で、みんなでヨガを気持ちよく外でやろうじゃないかということで「ビーチヨガ」ということで集まって、7月とか8月に。「外でヨガやろう」みたいなね。地域資源をいかに生かしていくのかという中で、それを光らせる努力を地域がしていくという取り組みが大いに始まっているわけでありまして、こんな形でみんなで唐津の砂浜を清掃して、そこから伸び伸びとヨガを楽しむ。そして、夜はバーベキューという取り組みが今、盛んになっているところであります。

～有明海 海苔ひび～

これは分かりますか。海苔(のり)畑です。海苔。有明海です。本当、きれい。あと2泊ぐらいしていただくと、土曜日に一斉にこれが海の中に出

てきます。海の中に海苔の種を広げていくわけです。色が分かれているのは光を通すかどうかとか、意味があるんです。こういう姿が有明海に現れます。飛行機の上から見ると、とんでもなく美しい姿になります。

こういったものも実は地域資源。見る人によって、地元からすると何でもない風景が「素晴らしいね」ということになっていくわけでありまして、われわれ自身の目と、外から見た目、「これ素晴らしいよ」という目を大事にしていくということが、われわれの着眼点ではないかと思っているわけであります。

～唐津市 リストランテ・マツシマ～

例えば、佐賀県には唐津市に島が7つあるわけですが、これもなかなか知られてない。長崎県さんには600ぐらいあるわけですが、うちは7つあります。こういう島を大事にしていく。小さなところを大事にしていくことが、過疎対策の始まりだという意識を持ちながら、島を大事にしています。

この「松島」という島は、何が釣れるか分からない。そのときにたまたま釣れたものを調理してもらいます。私も1日ここにいましたけれども、私の隣に写っている、宗君という友だちなんですけども、この宗君がここでレストランを開きまして、たまたま自分が行ったときにこんな大きな伊勢海老が取れるとそれを出してくれる。そうじゃないときには、それなりにというような、まさに現場そのものみたいなレストラン。最初から枠が決まってるのではなくて、そのときの状況によったレストラン。こういったものは、非常に素晴らしい取り組みだろうというふうに思っています。

～佐賀市 さがクリークマルシェ～

それから、皆さん方、佐賀の町を歩いていただいたか分かりませんが、もともと、佐賀の町は、このようにクリークというかですね、水路がお城の周りなどに張り巡らされた町でありまして、佐賀平野でのクリークの総延長は2000キロに及びます。このクリークをどうやって生かしていくのか。

これまで佐賀の人から見ると単に洗濯する場所だったり、要は生活排水なんですね。だから、どちらかというと、排水路には背中を向けながら、家とか店が立地しているところがあります。しかしながら、これも多くの皆さん方が「あれ、クリーク素晴らしいじゃないですか」「すごい佐賀らしい町並みですね」というような声もあって「じゃあ、どうしようか」ということで、NHKでも10月に放送されましたけれども、こんな形で、みんなで清掃をしてクリークで楽しめるように、町並みを整備しているところでありまして、ここにマルシェがあったりとか、いろんなものが食べられるような水辺の喫茶店みたいな、そういったものにしていこうかなというふうに思っています。

そして平成30年は明治維新150年で、佐賀では博覧会をやります。有田焼とかでオランダとの関係が非常に強いものですから、「オランダハウス」というものをクリーク沿いに造って、創作活動をするとともに、この水路というものをオランダの皆さん方はとても大事にされて美しい水とのお付き合いがありますので、佐賀もそういったものをお互い連携しながら、今までどちらかというと背を向けていた水との暮らしを、むしろ前向きにして地域資源を生かしていこうという取り組みを、この佐賀から始めていこうというのが、来年のオランダハウスの企画でございます。

～伊万里市 大川内山～

佐賀はやはり有田焼、伊万里焼が全国でも有名であります。この大川内山というのは、佐賀県の大事な観光資源でありまして、鍋島藩が門外不出で、そこだけ関所を作って入れないようにした素晴らしい陶磁器のふるさとであります。

そうした今までの伝統に加えて、今はヨーロッパのデザイナーと組み合わせた形での新しい有田焼といったものを発売して、400年間培ってきた素晴らしい技術に、今という新しいエッセンスを加えて何ができるだろうか。古きをしっかりとどりながら、今使いやすい、今皆さん方に対応できるようなものを考えるという取り組みで、非常にこれが評

判がよく、ブランドとして確立されております。

佐賀県はインバウンドの上昇率、そして外国人の定住者数は日本一の伸びを示しています。そういったインバウンドの伸びということもしっかり意識しながら、世界に誇れる町づくりをしていこうじゃないかということで、今、世界基準でものごとを考えていこうという取り組みを進めております。

～中山間地・離島・県境振興対策本部～

新たに中山間地と離島と県境を大事にしようという対策本部を設けております。県の施策がしっかり「離島を見てるよ」「県境を見てるよ」というところを、アプローチをしっかり強めることによりまして、小さな集落の1つひとつを大事にしていこうということなんです。

具体的には地域資源を見て歩いて、地域活動に参加して、声をかけて、お宅を訪問するということを県職員がそれぞれフィールドワークとしてやっていくということ。県の本部というと、どちらかというと部長が集まって「中山間地をどうしようか」と、部長から話を落としていくという会議が一般的なんですけども、佐賀県の場合は、地域を県と市町の職員が訪問し、課題が浮かび上がったところで、この会議をやる。要はボトムアップ。現場で起きた課題を整理する。既存の制度やルールが問題だということ、現場だと「それ法律や条例で決まってるもんね」ということで諦めてしまいがちなんです。ところがそういう課題を上にも上げてくると「条例を変えようぜ」と、簡単にトップダウンで落とせるわけです。

ところが部長たちは、いつも県庁の中でいろんな仕事をしているので、現場で起きている1個、1個の細かい事例がよく分からないということがあります。例えば1つの例でいうと佐賀県では、農家民宿を始めるには、「男女トイレが別々になければいけない」という条例がありました。1つの家族しか泊まれない規模のところで、男女のトイレを分ける必要があるんでしょうか。ということで条例を変えて、そういったところについては、トイレは1つでいいとしました。当たり前のことなんですけれど

も。こんなこと1つがなかなか現場ではルール、規制で閉ざされているところがあります。そういったところもしっかり現場重視でやっていくことによって解決できるわけであります。

～離島留学～

例えば、この離島留学も7つの島が、なかなか人が少なくなっているということもありますけども、むしろ、深い教育ができる。それこそマンツーマンだったり、1対2だったりできるので「島の方がいいですよ」ということで、この4月から離島留学という制度も入れております。また、今まで離島の子どもたちを毎年本土の方に送って集団学習の中での体験をしてもらってたんですけども、むしろ本土の子たちが島の方に行って、島にいる1人か、2人か、3人の子どもが島を紹介するという、島の子どもが中心になるような施策も実施しているところがあります。

～竹崎コハダ～

江戸前寿司がありますけども、築地でのコハダの出荷量日本一は佐賀県なんです。このことはあまり知られていません。なぜかという、佐賀県の人コハダを食べなかったから。いいものは高く売れるから全部出荷してしまう。コハダは長持ちしないので全部酢でしめるわけです。ところが気づきました。コハダはしめなくても、佐賀の地元でだったら刺し身で食べられるということ。これまでも地元の人はどちらかというとコノシロといって、コハダが成長したものをなんとなく食べていたんですけれども。もっと早いうちのコハダを食べるということについて、みんなで気づいていくということで、県職員が地元に入り込んで、「コハダを食うなら銀座か佐賀!」というプロジェクトも進行中です。

～子育てし大県“さが”プロジェクト～

過疎地域の少子化問題は非常に大きなことです。人口に占める15歳未満の年少人口のシェアという比率がありますけど、この比率の1位は沖縄県、2位は滋賀県、3位は佐賀県です。佐賀県は非常に子どもが多い県なんです。ところが多くの人た

ちが、例えば高校生であれば4割ぐらいの人が県外に就職してしまう。工業高校にいたっては、6割ぐらいが県外に出てしまうという構造的な問題があります。

そういったことも含めて、子どもたちを大事にする県だということと、県内就職をしっかりとしていくという新しいスタイルというものが今、佐賀県では求められていると思っておりまして、「子育てし大県」を標榜しているところであります。

まず、新刊児童書は全点購入していきまして、その中から司書が選んで子どもたちに読んでもらっています。また、「こころざしスポット」ということで、本に触れることのできる場所を、例えば公民館だとか、病院だとか、いろんなところに県内200カ所以上設けております。

それから「骨太な子どもに育てtaikenプログラム」に取り組んでいます。都市部だと豊洲にある「キッザニア」のように職業体験を箱物の中でやっています。そういう体験が、われわれ地域に住む人間にとっては、本当の現場の中でできる。そういう環境があることも佐賀県の魅力だと思っています。

それから、佐賀県だけが「子育てタクシー」ということを全県下で実施しています。タクシーの運転手さんを対象に、女性が妊娠したとき、まさに生まれるとき、子どもを育てるとき、そうした時にどうすればいいのか、どこに送り届ければいいのか、緊急時にどう対応すればいいのかということを研修を受けていただくというのをやっております。妊娠時、陣痛時、子育て時、それぞれ対応できるように研修を受けて「子育てタクシー」というものを実施しています。こんなことで子育てにやさしいんだということを前面に打ち立てています。

「知事が妊婦に」と検索していただければ分かりますけれど、これは世界中で3000万回再生。妊婦ジャケットというものを着て、私と山口県の村岡知事と宮崎県の河野知事と3人で妊婦体験をしたんですけども、本当に、やはり自分で自らやってみることがとても大事だなということを、改め

て痛感しているところであります。

～肥前さが幕末維新博覧会～

平成30年に、博覧会を開催します。「その時、日本は佐賀を見ていた」「佐賀は世界を見ていた」。明治維新の中心となったのは薩長土肥といいますが、なんで肥前佐賀がこの薩長土肥の一翼の中に入っているのでしょうか。それは薩長土とは違って、佐賀県がものづくりと人づくりで秀でていたからだというふうに思っています。

反射炉や蒸気船を日本で初めて造ったのも佐賀藩でありますし、多くの人材をむしろ明治維新を成し遂げたあとに配置したのが、佐賀でありました。札幌の基礎をつくった島義勇、日本赤十字社の創設者である佐野常民、それから2度総理大臣になって早稲田大学をつくった大隈重信ですとか、そのすべての原点にあった佐賀藩10代藩主鍋島直正といったところがございます。

～星空のすいぞくかん～

今日は、佐賀にお越しの皆さん方、市内にお泊りの方も多いと思いますけれども、佐賀県庁では、夜の6時半から県庁の屋上に行きますと夜景プロジェクションマッピング「星空のすいぞくかん」というのをやっております。NAKED (ネイキッド) というところとタイアップしてやっておりますけれども、毎晩、多くの観光客、地元の皆さん方にお越しいただいています。最初にやったのは東京、第2回は大阪、第3回は名古屋でした。第4回が佐賀です。佐賀のものが一番いいと言われています。本当にきれいに映る。東京は夜景がまぶしすぎる。やはりある程度の暗さの中で浮かび上がってくる美しさ。今の時期は6時半から10時まで、上映しておりますので、ぜひご覧いただきたいと思います。入場無料です。

最後になりますけれども、すべての原点は、こうやってもともとある自分たちの佐賀の営み、そして佐賀の素材というものを、われわれ佐賀県民がいかに知っているか。「佐賀はなんもなか」ではなくて、「佐賀は素晴らしい」と、皆さん方みたいな外からのお客様に「佐賀素晴らしかる」とどれだけ

私たちが言えるのかといったところが、この地方創生そして過疎振興の肝（きも）だと思います。いかに地域に誇りを持てるのか。

そういった思いで、私は「佐賀さいこう!」とやるんですけども、佐賀最高の気持ちのもとで、いろんな取り組みをしています。

例えば、県外に行っている佐賀出身の方たちに「佐賀って素晴らしいよ」と、「もう1回、佐賀考え直そうぜ」ということを伝える「Re:サガミーティング」という取り組みですとか、キリンビールさんやカルビーさんが「佐賀さいこうプロジェクト」にタイアップしていただいた取り組みですとかであります。今日は全国過疎問題シンポジウムでありますけれども、私は、全国津々浦々を回った中で、地域、地域に素晴らしいものがあると思います。そのときの一番の弱点というのは「自分の地域はつまるところだよ」と言うこと、そういった地域は、先に進むのに時間がかかった。まず、その共通の土俵をつくって取組を進めていくのにかなり骨が折れたような気がするんです。

ぜひこういうシンポジウムなどでそれぞれの地域自慢をして、素晴らしいところをお互い参考にしながら、前に伸ばしていく。そのときは東京や大阪のものをただ単に持ってくるのではなくて、地域素材を光らせていくという考え方が大事だろうというふうに思います。

そういった意味で「自発の地域づくり」というのは、今、佐賀県のキーワードになっておりますけれども、ぜひ、皆さん方とともにそういった建設的な話し合いが今日、明日できたらいいなと思っております。本日は本当によろこそ、お越しいただきました。

全体会

平成29年度過疎地域自立活性化優良事例表彰式

総務大臣賞（5団体）

全国過疎地域自立促進連盟会長賞（3団体）



平成29年度

過疎地域自立活性化 優良事例表彰受賞団体





優良事例受賞団体講評

過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会 委員長
早稲田大学名誉教授

宮口 侗廸氏 (みやぐち としみち)

皆さん、こんにちは。表彰委員会の委員長を仰せつかっています、この3月まで早稲田大学に勤めておりました宮口と申します。講評を述べさせていただきます。

この優良事例表彰は、平成2年から始まりました。今までに200数十の団体が表彰を受けられています。この表彰のパンフレットの最後の方に、過去の表彰団体の一覧がありますのでご覧いただきたいと思います。

私は、個人的にここ数年、過去の表彰団体をいくつか訪ね歩かせていただきまして、その後の展開を見させていただいておりますけれども、ほとんどの団体がその後も活動を続けられ、大いに進化を遂げておられる例もたくさんございます。ぜひ、本日いらっしゃっている方々は、この表彰団体の意義ある活動から刺激を受け、学んでいただければと思いますので、よろしく願いを申し上げます。

今年度も価値ある多くの取り組みの中から、総務大臣賞5団体、連盟会長賞3団体を選定させていただきました。

総務大臣賞の新潟県の「NPO法人越後妻有里山協働機構」は、3年ごとに開催される「大地の芸術祭」をお世話をされ、拠点施設の管理、空家・廃校舎・休耕田の活用などで素晴らしい協働の仕組みを作っておられます。そして現代アート作品の農村の大地への展示によって、過疎農村に新しい風格を生み出しておられます。

それから、岐阜県「郡上市」の旧明宝（めいほう）村地区では、合併後に新しい活動団体が次々に誕生し、今や20を超える多彩な地域づくり団体、NPOが横の連携を密に地域を支えておられます。この動きを郡上市の政策が強く後押しして

いることが大きく評価されました。一部過疎の地域を中央が支える素晴らしい例だと思います。

農村舞台が最も多く残る徳島県那賀町では、青年団を中心に「丹生谷清流座」を結成され、この貴重な文化を後世に伝えるべく人形浄瑠璃の公演に加えてイベントに出演、さらに地元高校での人形浄瑠璃部の発足にも貢献されています。若者がこの日本にしかない貴重な文化の価値を継承する仕組みを作られたことが大きく評価されました。

そして、この佐賀県唐津市相知町の最上流部の「蕨野集落」では、初めて「重要文化的景観」に指定された素晴らしい棚田を1つの小さな集落で守っておられます。交流の舞台としてもいろんな活動をされ、評価の高い棚田米の販売などで、わが国の農村集落の本来的に持ってきたパワーを発揮されていますが、1つの集落の力をこれだけ結集されているということは、稀有なことだと思います。

それから、鹿児島県日置市は合併後に旧小学校区で地区公民館というものを設定されたわけなんですけれども、「高山地区公民館」ではそれを受けて自主的に自治会を統合され、横の連携でイベントを強化されて、さらに住民全員参加のNPOをつくれ、お年寄りの買い物ツアーの実施や、複雑な地形を克服して、お年寄りが作られた少量の野菜を出荷する仕組みも作っておられます。ここでは運転担当の人の日当などきちんとした経理処理もされているということに非常に感銘を受けました。集落ネットワーク圈のお手本といえると思います。

過疎連盟会長賞に移りますけれども、福井県「池田町」はわが国の大きな課題である、森と木の活用のために、新たな自主的なプロジェクトを展

開し「おもちゃハウス」「冒険の森」等々、子どもたちをはじめ、多くの人を訪れる場所をつくられました。木を活かすという日本の今の大きな課題に向き合い、1つの方向を示されたと思います。

愛知県豊田市の「一般社団法人おいでん・さんそん」は合併後の豊田市が周辺の過疎山村地域を支えるために設立されたわけですが、大合併をした有力な市の周辺の農山村への目配り、特に過疎地域をいかに活性化するかということへの素晴らしい挑戦というふうに受け止めております。全国に広く伝えたい例でもあります。

愛媛県西予市の「四国西予ジオパーク推進協議会」は、科学的存在であるジオパーク、地味で静かに観察をするような場であるわけですが、そこで音楽を聴きながら大地を観察し鑑賞してもらうという斬新な発想でiPod（アイポッド）を貸し出す仕組みをつくられました。本当にユニークなアイデアであると思っております。

今年度の大臣賞には、長期にわたる活動の継続の中に、さらなる発展的状況が見えるという団体が選ばれたと思いますし、連盟会長賞には、比較的日子は浅いものの時代の新しい展開にふさわしい取り組みが選ばれたと考えております。特に豊田市のような有数の工業都市には、今はもう文化都市といってもいいと思いますけれども、周辺の山村の活性化に資する、全国の見本となるような展開を期待したいと考えております。

そして、これら表彰の対象となりましたすべての取り組みには、やはり、そこに交流の蓄積ということが大きく働いていると受け止めております。交流がいかに過疎地域において大事かということは、ずっと私が発言し続けてきたところでもございますけれども、改めて交流は過疎地域の発展に欠くべからざるキーワードであり続けていると認識をしたところでございます。

最後に、受賞されました8つの団体に心からお祝いを申し上げて、講評とさせていただきたいと思っております。どうも、おめでとうございます。

総務大臣賞



特定非営利活動法人 えち ご つ ま り さ と や ま き ょ う ど う き こ う 越後妻有里山協働機構

都市と地域の協働で行う、アートによる地域活性化
「『大地の芸術祭』の里」

事例の概要

周囲を山に囲まれた日本有数の豪雪地である当地域は、他の中山間地域と同様に過疎・高齢化が著しく、空家や廃校が増えるなど、集落のコミュニティの活力の低下が大きな課題になっていた。

この課題に対し、地域の資源や魅力を再発見することから地域活性化の手懸かりを掴み、地域外の人々とともに協働することにより自立する地域を目指すため、里山を舞台とした国際展「大地の芸術祭」を開催した。これをきっかけに空家・廃校を活用・再生した美術館・レストラン・宿泊施設の運営や、担い手のいない棚田の保全活動、グッズ開発などに集落や地元企業とともに取り組むことで、地域の自立をめざした活動を行っている。アートプログラムや棚田保全活動を通して、都市と地域が協働することで、総合的に地域の魅力を高めている。

また、「『大地の芸術祭』の里」での地域づくりのあり方は、「妻有方式」として海外メディアでも多数紹介されるなど、国内外で美術の枠を越えた評価を得ている。国内では、文化芸術による創造都市が関心と呼ぶ中、徳島、茨城、新潟市、大阪、瀬戸内など全国のさまざまな地域づくりに影響を与えている。



「鉢&田島征三・絵本と木の実の美術館」。越後妻有には廃校や空き家を再生・活用した作品施設がいくつもある。

評価のポイント

1年のうちの1/3以上が降積雪期間という全国有数の豪雪地帯である新潟県十日町市と、隣接する津南町の里山を舞台に、2000年より3年に一度開催される世界最大級の国際芸術祭「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」。この芸術祭に携わった方々の活動がきっかけとなり誕生した、特定非営利活動法人 越後妻有里山協働機構は、過疎化の結果生まれた空き家や廃校、保全の必要のある棚田などを活用し、地域に内在する様々な価値を、「アート」を媒体として掘り起こしと磨き上げを行い、国内外に発信し、その地を「『大地の芸術祭』の里」として地域再生の道筋を築くことを目標に活動している。

新潟県上越市出身のアートディレクターで、同機構の副理事長でもある北川フラム氏のディレクションの下、「人間は自然に内包される」を理念に、世界中の著名なアーティストが参加して地域住民や都市部からのボランティアなどとともに作り上げる現代アート作品は、圧倒的なビジュアルとパワーを有しながら、山間の土地を切り開いて営まれる原風景に見事に溶け込み、地域にさらなる魅力を与えている。

前例のない独創的な取り組みは、同機構が主体となって時間をかけて丁寧に地域に寄り添うことで地域の理解と支持を得ながら広がりを見せ、数多くの作品と共に、地域住民のやりがい、生きがい、アイデンティティという地域資源を作り出した。アート、食、自然環境、観光、行政、地域住民、企業、レストラン、農村、都市、教育機関など、あるものすべてを連携させている点も素晴らしく、長期的な視野と全体を俯瞰してマネジメントする取り組みは「妻有方式」と呼ばれ、アートによる地域づくりの先進事例として国内外から注目されている。今後は、アートにとどまらず、食文化、スポーツ、農業など様々な視点で取り組みのさらなる広がりを図るという。同機構の持つ総合力で、さらなる進化に期待したい。



郡 上 市

住民主体による手づくり自治と産業の創出 ～ハンドメイドの里「めいほう」をめざして～

事例の概要

郡上市明宝地域（旧明宝村）は、地域の面積の約94%を山林が占める典型的な山村地域である。平成16年3月1日に、旧郡上郡7町村が合併し、郡上市が誕生。明宝村は郡上市明宝地域となった。

合併後、長引く不況や合併のインパクトが重なり合っ、地域に疲弊感が漂うようになった。このような状況の中、明宝地域に「自らの力で地域を元気にしよう」と多くの地域づくり団体やNPO法人が生まれた。

明宝地域では、将来のめざす姿を「ハンドメイドの里（住民自治も特産品もすべて手作り）」とし、地域住民（民間）と行政が目的を共有しながら、分野を超えた組織間連携による地域活性化の取り組みを進めている。24の地域づくり団体が活発な活動を展開し、また、団体間の連携が新たな産業の創出につながる好循環を生み出している。

郡上市明宝振興事務所では、このような団体間連携の強化を進めるため、分野を超えた「多機能型組織連携」を目指した基本的な考え方を整理し、産業から福祉の分野まで多方面にわたる地域の課題の解決を積極的に支援している。



（一社）明宝ツーリズムネットワークセンターの取り組みである「冒険キッズ」にスタッフとして参加した学生の皆さん。自然体験型産業の確立を目指すとともに、学生が地域づくりに参画する仕組みづくりも進めています。

評価のポイント

郡上市明宝地域における地域づくりは、合併前の明宝村時代に端を発する。昭和から平成へと時代が移る中で、行政主導のもと観光開発や産業振興を担う第3セクターによる株式会社が設立され、過疎地域にあって若者が地元に戻って来られる雇用の場づくりに取り組んできた。

しかし、長引く平成不況や市町村合併もあって、地域に疲弊感が漂うようになっていた。その中で、有志による活動の先鞭となったのは、ソウルフードである鶏ちゃんを活用した地域の魅力発信を試み、2007年に設立された「めいほう鶏ちゃん研究会」である。

その後、合併前の地域づくりを経験した世代が、相次いで当時のスピリッツを再び実践に繋ぎ、それに刺激されたIターンやUターンの若者たちも加わって、多彩な活動が展開していく。今では、地域の資源や文化を活かして、地域内外の交流から経済を生み出す「攻め」の部分から、暮らしを支える「守り」の部分まで、20を超える地域団体やNPO法人が立ち上がっている。人口約1800人の明宝地域にあってこの地域活動の密度の濃さこそ、まず評価すべき点と言えよう。

その中から、住民同士を繋いだり、団体の活動をサポートする中間支援組織が地域内に立ち上がってきたことも大きな評価点であり、行政の明宝振興事務所とともに、住民に寄り添い、時に背中を後押しする心強い存在となっている。

郡上市としても、このような合併前の旧地域単位で取り組まれる手づくりの自治と産業の創出を尊重して、市全体での相乗効果に繋げたい意向を示している。

明宝地域の実践は、まずはチームシップで展開していくプロセスの大事さを体現しており、これから各団体の連携をもとに、地域全体のビジョンづくりにも着手しようとしている。そこから生み出される「明宝スピリッツ」第2ステージの成果を大いに期待したい。

総務大臣賞



にゅうだに せいりゅうざ
丹生谷 清流座

人形浄瑠璃で地域に恩返し ～温故創新 伝統を受継ぎ新たな創造へ～

事例の概要

山間地域にある那賀町では、過疎・高齢化が進み、産業はもとよりさまざまな伝統文化活動においても後継者不足が深刻な状況であった。

そのような中、町内に残る人形浄瑠璃用の農村舞台が全国一多いこと、町内に唯一存在する人形座が高齢化により存続が危ぶまれている現状を知り、地元青年団が中心となり人形浄瑠璃座「丹生谷清流座」を結成した。人形浄瑠璃を通して、伝統芸能の継承のみならず、農村舞台をはじめとする地域が守ってきた歴史的文化資源に新たな価値を見出し、地元住民と連携し活用することで、地域の魅力を高め、交流人口の増加に寄与している。

人形浄瑠璃公演を農村舞台で行う最大の効果は、公演の開催に際し、地域住民が行政や県内外の人形座、芸術家などと連携・協力し、これまで使われていなかった農村舞台を復活させる過程において、地域コミュニティの再生につながっていることが挙げられる。

現在では、県や町などの行政機関とも連携し、農村舞台の新たな可能性を求め、人形浄瑠璃のみならず、音楽イベントや杜の中のレストランとしての活用など、新たな可能性を追求している。



青年団が中心となり人形浄瑠璃座を結成。伝統芸能の継承、農村舞台など地域資産を活用した事業を行い、地域の活性化に寄与する。

評価のポイント

徳島県には氏神を祭る神社の境内に設けられた「農村舞台」が今も各地に存在している。多くは明治時代に建てられ、集落の住民の娯楽の場として人形浄瑠璃などが演じられてきた。徳島県那賀町はその農村舞台が最も現存している地域で、約40棟に上る。

一方で、肝心の人形浄瑠璃の人形遣いは高齢化しており、存続が危ぶまれていた。その中で、町の青年団が中心となって2009年に設立したのが「丹生谷清流座」である。現在14人の座員がおり、仕事や家事などと両立させながら月2回程度、プロの指導も受けながら練習を続け、演目を増やしている。

清流座は現在、農村舞台で年6回程度の公演を開催しているほか、徳島交響楽団との共演や福祉施設への訪問など様々なイベントに参加している。その結果、地元で唯一の高校である那賀高校に人形浄瑠璃部が発足し、16年度の卒業生のなかから2人が清流座に加入した。フェイスブックを通じて練習風景や公演の模様を発信し、新たなファンづくりにも努めている。

清流座は徳島の伝統芸能である人形浄瑠璃の継承に貢献しているだけでなく、新たな担い手集団の活躍に触発され、神社の氏子の寄付で老朽化した農村舞台を改築する動きが広がっている。使われていなかった農村舞台の「復活」の過程はまさに、地域コミュニティの再生と呼べるだろう。

農村舞台での公演は基本的に無料で行っていることもあり、活動費の多くを県や町の補助金に頼っている点は課題といえるものの、丹生谷清流座の存在は地域の伝統的な資源に焦点を当てることで、住民を巻き込みながら集落を活性化させている好例といえるだろう。杉やケヤキに囲まれ、神々しい雰囲気も漂う農村舞台の維持活用は日本の伝統的な村落共同体の歴史を語り継いでいくうえでも重要なだけに、今後の一層の活躍を期待したい。



からつ し おう ち ちょう
唐津市相知町

わらび の しゅうらく
蕨野集落

人がつながり、輝く地域 ～棚田の魅力で交流促進～

事例の概要

蕨野集落では、農家の高齢化や農産物の価格低迷等により耕作放棄地が増加していた。しかし、先人達が苦労を重ねて残してくれた集落の宝「蕨野の棚田」を活かした地域づくりを進めようとの思いから、地域住民の団結力で集落ぐるみでの取り組みが生まれた。

具体的には、日本の棚田百選や重要文化的景観に選定された「蕨野の棚田」を活かした地域づくりを進めるため、棚田の美しい景観を体感してもらう「早苗と棚田ウォーク」など生産者と消費者の顔の見える交流イベントの開催や、集落と大学や企業ボランティア、NPO法人「蕨野の棚田を守ろう会」が連携し、田植えや稲刈り体験、草刈りや用水路の清掃を実施するなど耕作放棄地の解消と棚田と里山の保全に取り組んでいる。

また、蕨野棚田保存会では、棚田米のブランド力の向上や稼げる仕組みづくりが確立されるなど、集落ぐるみの取り組みにより集落の魅力向上及び活性化が図られている。

さらに、集落内において住民による「そば処」や「農家民泊」の開設にもつながるなど、棚田の魅力を伝える交流事業を住民の力で定着させてきたことによって、地域住民が地域に誇りを持つ意識の高まりを生んでいる。



早苗の時期に、棚田の約7kmを巡るウォークを集落ぐるみで17年前から毎年6月に開催。参加者が棚田の魅力を感じて棚田ファンとなり、交流が促進されている。

評価のポイント

蕨野集落は、唐津市に合併した旧相知町（一部過疎）の南端の最上流集落であり、65世帯のうち農家は42戸、後述の棚田保存会は23戸からなる。この集落の上部にある棚田は、美しい石垣とその暗渠などの技術的価値から、棚田としては初めて国の重要文化的景観に選定されており、一小集落の棚田としては比類ないものと言える。

平成13年に当時の町長が棚田の価値を提唱し、蕨野棚田保存会と、イベントの事業主体としての「棚田と菜の花実行委員会」が設立された。棚田米はすでに九州で高い評価を受けていたが、平成18年に市が造成した交流広場に、蕨野区（集落）が蕨野棚田直売所を開設した。21年には、さまざまな連携活動の主体となるNPO法人「蕨野の棚田を守ろう会」が設立され、その年から交流広場で、NPO主催による「ふるさとの灯りコンサート」が夜なべ談義付きで開催されたが、これには佐賀大学からの支援があった。

最上流部の集落で先人が残した棚田の価値を発揮させようと、小さな集落が旧来の体制の上に17年にわたって多くの交流イベントを開催してきたことは、地域への極めて強い愛着を物語る。一種の経済組織である棚田保存会や後発のNPOも、蕨野区という集落に包含される形の中で、一体的に活動してきた。その中でも棚田保存会は農協との関係を維持しながら、棚田米の評価を高めて地区内の経済循環をつくり出し、地区の体制を支えていると考えられる。この一体感が、交流事業における住民の参加意欲を保持し、大学生との交流を始め、イベントにおける多くのリピーターの確保のもとになっていると考えられる。その意味で、古来集落を拠りどころとして暮らしをつくってきたわが国の農山村の、諸外国には見られない価値が、棚田を拠りどころとして、揺るぎなく持続している事例と、高く評価することができる。

総務大臣賞



ひ お き し た か や ま ち く こう み ん か ん 日置市高山地区公民館

地域資源と人材をフル活用 ～全員参加で地域づくり～

事例の概要

高山地区は日置市街地から約10キロ離れた標高300メートル程の中山間地域で、先人が開墾した棚田を中心に稲作や畜産、イチゴ、山菜等の生産が行われている。平成4年に地区の象徴であった高山小学校が閉校となり、その施設が研修交流拠点となったことを契機に、地域資源を活用した都市交流を中心に活動を展開してきたが、高い高齢化率を踏まえ、生活に根差した身の丈の自治の展開が課題となっていた。

そのような中、地域自治会を補完し、協働による地域づくりを推進するため、高山地区公民館を設立。地区を構成していた6つの自治会を統合した高山自治会、地区全住民加入のNPOとの緊密な連携体制を構築した。年間を通して棚田での米づくり体験や高山ふるさと秋祭り等、地域資源を総動員した体験交流イベントを実施し、交流人口の増を図っている。また、買物に不自由している高齢者のために、地区公民館から「移動販売車」に燃料費相当分を負担し、地域内を巡回する仕組みを構築している。さらに、NPO法人がんばろう高山が、高い技術を持つ高齢者の自家野菜と物産館の出荷者不足解消をつなぎ、生産物の共同出荷を実現、希望者による買い物ツアー等、買い物支援も手掛けている。



高山ふるさと秋まつりは、集落ごとに、豊かな地域資源を活かした手づくり体験等を実施。都市住民との交流を通して農村集落の活性化に繋がっている。（野下集落・かずら工房）

評価のポイント

4町が合併して誕生した日置市では、平成18年から各小学校区単位に地域づくりの拠点として地区公民館を設置することを決め、19年4月に旧高山小学校区（小学校は平成4年閉校）6集落をまとめて、高山地区公民館が発足した。さらに、市の交付金で購入したワゴン型公用車の活用をきっかけに、25年6月に、住民全員が会員となる「NPO法人がんばろう高山」を設立、活動の中心となっている。

NPO法人設立後は、「高山再生プロジェクト会議」を設置、住民アンケート、アドバイザーを交えたワークショップ、視察研修等で一致団結の機運を高め、移動販売車への燃料費補助、公用車による高齢者の買い物ツアー（週1）、農家からの少量の農産物の直売センターへの出荷など、人とモノの輸送体制が確立された。

6集落の協働は、すでに閉校舎を交流センターとして整備した20年前に始まったと考えられるが、これは、他人を迎えるための話し合いが新しい協働を生みやすいことを示す。高山地区では、それまでの集落間協働の下地の上に、2年の議論を経て、統合自治会の確立、さらにそれを支える実働部隊であるNPO法人の設立へと、すばらしい展開が生まれた。

農産物の出荷や買い物ツアーからの帰着の場面では、明るい対応が印象的であり、幅広い交流ときちんとした話し合いが、高齢の住民を成長させていると理解できた。山間の過疎地域としては稀有なことで高く評価したい。イベントの世話や運転の日当、農家の出荷額等は少額とはいえ、明確なルールのもとにお金が循環する仕組みが確立していることも、地域の明るさを増していることと思われる。今後農産物の出荷での手数料の設定、空き家での直売所・カフェの開設を予定し、小さいながらも6次産業化を目指していることもすなおに期待できる。



いけだちょう
池田町

木望のまちプロジェクト

～人と暮らしと仕事の木でつながるまち育て～

事例の概要

池田町ではこれまで、自然や風土、農林産物を活かした個性のあるまちづくりに取り組んできた。しかし近年では、観光誘客力の伸び悩みや人口減少・若者流出の傾向が顕著となっていた。

このような状況の中で、当町がこれからも持続し、穏やかで心豊かに暮らせる「あたりまえがふつうにある町」であり続けるために、町の最大限の資源である木を使ったまちづくり「木望のまちプロジェクト」をスタートした。

町の約92%を占める森林を活用し、木のぬくもりで子どもたちを育み、家族や地域の人と人が木や森を守り活かすことでつながり、絆を生み出す仕組みの構築を目指している。町内各所の交流拠点施設では、森林資源を活かした地域循環型経済の創出、若者の雇用促進、移住・定住人口および都市農村交流人口の拡大により、農山村の力を活かした地方創生につなげている。

今後は、整備された施設を活用し、町内施設との連携、まちぐるみの協力体制をさらに強化するとともに、スタッフの木や森を伝えているスキルをさらに広げ、深め、観光の産業化を進めていく。



おもちゃハウスこどもと木・木とのふれあいを通して、子どもたちが森や自然の魅力や豊かさを感じて感性を育む木育施設。木のおもちゃで親子が一緒に遊ぶ事で豊かな家族の時間を過ごすことができる。

評価のポイント

これまで池田町では有機農業を核とした取り組みから、有機農産物の認証・販売や生ゴミの堆肥化などのシステムを作ってきた。しかし、町の特徴でもある豊富な森林資源（町の92%を森林が占めている）が手つかずだったことに着目し、森林資源を活用するプロジェクトを展開。森林所有者の理解を得ながら、木材の地産地消や木に親しむライフスタイルや価値観の普及などに取り組んでいる。

これまでの有機農業や生ゴミの堆肥化などの取り組みは、住民主導や住民参加のスタイルを町全体に定着させてきた。そうした実績が、現在の「木望のまちプロジェクト」への地域住民の主体的な関わりに結びついている。

また、地域住民の満足度を高める視点から、どのように森林資源の活用をしていくのかを追求している点が評価できる。具体的には、学校で使用する木の机・椅子のプレゼントや製材、薪割りなどの体験プロジェクトなどを通して、木材の産地であるからこそ、その豊かさを実感できる取り組みとそのネットワーク化を図っている点である。

また、活動のコンセプトや活動自体をはじめのきっかけは、町長や行政主導であることが多いが、その後の活動は、住民による主体的な取り組みとして継続性が保たれている。また、規模の小ささを活かしたビジネスやビジネスにつながるネットワークが生まれている点も評価できる。具体的には、地元産木材を地元の業者が製材し、別の団体が木材の切り出しと薪割り、販売を行っているなどである。

また、廃校になった小学校を可能な限り内装を木質化し、滞在型宿泊体験施設として再整備するなど、既存の施設に対するソフト面、ハード面両方のでこ入れにより、施設の活用が進み、それによる地域資源磨きの効果もみられている。

全国過疎地域自立促進連盟会長賞



一般社団法人 おいでん・さんそん

都市と山村が支え合う「暮らし満足都市」豊田市
～中間支援組織“おいでん・さんそんセンター”の取組～

事例の概要

豊田市は、平成の合併により過疎地域を含む広大な都市となった。集中的な過疎対策にも関わらず人口減少に歯止めがかからないことから、2013年8月、都市と山村が共存するまちだからこそ可能な、都市と山村の支えあいをコーディネートする中間支援組織「おいでん・さんそんセンター」を設立した。そこをプラットフォームとして住民、企業、団体、NPO、研究者などが集い、専門性を生かしながら市民主導の取組みを迅速、柔軟に展開している。

都市と山村をつなぐ支援として、耕作放棄地に悩む山村部の集落と農業を通じた若手社員の人材育成を狙う都市部企業のコーディネートを始めとする企業と山村地域のマッチング支援、研修・体験・CSR事業のコーディネート、山村でのソーシャルビジネスへの助言等を実施している。また、移住定住を総合的に支援するいなか暮らし総合窓口も開設している。

このような都市と山村を「つなぐ」中間支援は、低コストで、都市と山村双方の課題を同時に解決し、過疎の問題を山村固有の問題とせず、都市住民と共に解決する仕組みづくりに工夫を凝らしている。



都市部の小学生が親元を離れて山村の暮らしを体験する「セカンドスクール」を春休み、夏休みを中心に開催、延べ200名の児童が参加する。

評価のポイント

広域合併により都市部と過疎山村を含む新豊田市が誕生した後も、過疎地域の人口減少に歯止めがかからないことから、この地域ならではの、都市と山村が共存できる、支え合いをコーディネートする目的で「おいでん・さんそんセンター」が設立された。主な活動は3つあり、①山村の資源である、農地、山林、農家の技術などと都市住民や企業やIターン希望者などを結ぶコーディネート事業、②田舎暮らし総合窓口として、移住者受け入れのための空き屋活用プロジェクト、③支え合い社会に向けた調査、研究とその広報活動である。

コーディネート事業の実績は、平成25年以降137件あり、多様な人と資源を結ぶ、事例の多様性が見受けられる。例えば、精神障がい者福祉施設「畦道」の設立において、家主と地域住民との橋渡しなど後見人的役割を果たしたり、また、耕作放棄地を都市部の会社の研修で使用してもらえよう、伊熊営農クラブと企業の仲介を行ったりした。

自治体による仕事は管轄地域限定だが、おいでん・さんそんセンターでは、生活の実態に即した生活圏という広がり重視している。それによって、人と資源の結びつきが次々に生まれている。そうした結びつきは、くらしの満足度を高め、I・Uターンの連鎖反応を生み、小学校の生徒数を小学生以下の幼児数が上回る異変（！）が起きている。

また、地域住民とI・Uターンの連携で小さな経済が動き出している。そのことに主体的に関わる住民による満足度は高く、地域で暮らすことへの誇りすら感じられる。それゆえ、都市との関係も、利害関係を越えた、山村での様々な活動を共に行う同志的な関係が結ばれていることも大いに評価できる。



しこくせいよ 四国西予ジオパーク推進協議会

リアル風景と音楽の融合

事例の概要

「四国西予ジオパーク」では、海拔0mから1,400mの標高差の中に、古生代から新生代までの様々な地層や、リアス海岸・盆地・河成段丘・カルスト台地などの多様な地形が存在する。

これらの風景に雰囲気盛り上げるBGMが加われば、より一層素晴らしい風景になるはずとの思いから、人々の営みや文化、生態系、地形、地質と地球との関わりを体感できる「四国西予ジオパーク」と音楽の融合を目的として四国西予ジオミュージックプロジェクトを開始した。地域の魅力を表現した楽曲や映像作品を募集したコンテストの開催や市内最大の集客施設である道の駅どんぶり館では、観光客向けにジオミュージックを収録したオーディオプレイヤーの貸出を行い、交流人口の拡大と地域活性化に取り組んでいる。

今後は、ジオミュージックや動画コンテストで集まった動画作品などの質の高いコンテンツをプロモーション活動へ活かすべく、各地のデジタルサイネージを利用したPRやプロジェクションマッピングへの応用などが考えられ、コンテンツの活用については大いなる発展性が期待されている。



四国西予ジオパークの見どころのひとつ約4億年前の縦じまの地層が広がる須崎海岸。ガイドが案内する際のBGMとしてジオミュージックを使用。

評価のポイント

現在、日本には地球活動に伴う地層や地形などを保護し、観光や教育にも生かす「ジオパーク」が全国43地域にある。そのジオパークの魅力を高めようと、カルスト台地や海岸など市内の見所ごとに、それにふさわしい音楽をつけて観光客や市民に楽しんでもらおうというのが、西予市が始めた「ジオミュージックプロジェクト」だ。

音楽共有サービスの運営事業者などと連携して楽曲を募集したところ、2年間で3800曲も集まり、そのなかから240曲を選定した。楽曲は、それを収録したiPodを道の駅で貸し出して幅広く提供しているほか、学校や図書館などでもBGMとして流している。RPGゲームを音楽が盛り上げているように、ジオパークというリアルな風景と音楽を融合させようという試みである。

5つの町が2004年に合併して誕生した西予市は、市の全体がジオパークに指定されており、そのことが旧5町の壁を越えて市の一体感を醸成する効果を生んでいる。作曲する過程で様々なアマチュアミュージシャンが西予市を訪れて市民と交流するなど今回のプロジェクトは市の活性化にもつながっている。ジオミュージックを生かした動画コンテストも開催し、西予市を舞台とする映画をつくることも検討中だ。

人口4万人弱の自治体が短い期間に、様々な音楽関係者を巻き込んで大がかりなプロジェクトを推進した点は評価に値する。一般的に面白みがないといわれるジオパークの付加価値を高めようという試みも面白い。自然の風景と音楽の融合は、海外からも観光客を呼び込む可能性を秘めている。

ただし、プロジェクトが始まってわずかということもあって、ジオミュージックを収録したiPodの貸出件数は年間200人程度にとどまっている。今後、観光振興に寄与し、市民の参加が広がる展開を期待したい。

全体会

基調講演

『縮充』する地域を目指して

studio-L代表

講師／山崎 亮





『縮充』する地域を目指して

studio-L代表

山崎 亮氏 (やまざき りょう)

1973年愛知県生まれ。大阪府立大学大学院および東京大学大学院修了。博士（工学）。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。著書に『ふるさとを元気にする仕事（ちくまプリマー新書）』、『コミュニティデザインの源流（太田出版）』、『縮充する日本（PHP新書）』、『地域ごはん日記（バイインターナショナル）』などがある。

ご紹介いただきましたstudio-Lの代表の山崎亮と申します。よろしくお願いします。普段こんな礼儀正しくやらないんですよ。でもちょっと今日、さっきの授賞式見てたら、過疎地域の人たちっていいなと思ったんです。なんかこう、ピシッとしてますよね。お辞儀が深いなと思いました。都市部だともう少しゆるい感じになりますが、ああやっぱり、これがいいよなというふうに思いました。残念ながら僕は、そういう素養を持ってなくて、今もネクタイをしめてきたらよかったと反省しきりです。

過疎地域の方々の魅力の1つは、ある形式のようなものが共有されていて、そういう人たちがたぶん地域の財産なんだろうと感じました。だから先ほども、慣れないけど深めにお辞儀を試みたら、皆さんが拍手をしてくれたので嬉しかったです。

ご紹介していただいたとおりstudio-Lという事務所を大阪でやっています。全国で200ぐらいの地域ですかね。呼んでいただいたら、その地域へ行って、その地域の方々が地域を元気にすることのお手伝いをするというのがわれわれの仕事です。

講演をお願いしていただくと、当初は何を話するかを事前に考えてパワーポイントでスライドを作ったことが多かったのですが、過疎地域の問題に関わる方々がどんな方々なのか、佐賀で全国から集まれた方々の顔ぶれ、年齢、性別を知

らないままに、100枚ぐらいスライド作って持ってきて話すのは、なんかちょっと嘘っぽいなと思うようになってきました。皆さんが聞きたい話をしていない気がしてきたんですよ。だから事前にスライドを作るのはやめました。

今日はスライド2,500枚持ってきていますので、この2,500枚の中から皆さんの表情を、顔をじっと観察しながら、どの話をしようかなと決めて話を進めていこうかなと思っています。だからどうぞ皆さん、分かりやすい反応をしてください。興味ある話が始まったら興味あるという顔をしてくださいね。笑うべきところで笑うとか、メモ取っているふりするとかね。分かりやすく反応してくれたら、僕その話、長くやりますんで。興味がない話が始まったときも分かりやすく反応してください。「興味ね〜」って顔して、あくびするとか、いびきかいてみるとかね。全然、結構です。すぐやめて、この目次に戻って別のネタで勝負しようと思いますから。50分くらい時間ありますね。15時までということですから、50分お付き合いいただければと思います。

なんにも考えてきてないのですが、「『縮充』する地域を目指して」というタイトルだけはお伝えしていただきましたので、基本的に皆さんと共有したいと思う話は「縮充」ということですね。縮みながら充実していくという地域があっていいんじゃないかと。これを縮退や縮小というと若干淋しいなという気がするし、かといって補充とか拡充の時代でもないよなと思いますから、少数精鋭化する地域をつくっていくことを目指すというのが、これからの日本のなかではいいんじゃないかというふうに思っているという、そんな話をしたいと思います。

まさに、先ほど表彰を受けた方々っていうのは、縮充の担い手になっている方だと思います。「何

かあったら自分たちの地域は自分たちで変えていこう」という少数精鋭の方々なのだろうと思いますし、会場にお集まりの皆さん方もそういう問題意識を持って、地域づくりを進めていこうとされているの方々なのだろうと思います。なので、今お伝えしたことが結論です。

何か、僕も今思いついた事例をいくつかお話ししようと思いますが、十日町の方が表彰されていましたよね。十日町という文字があるので、それをクリックして自己紹介代わりに話をしていきたいと思います。

先ほど、越後妻有の芸術祭をやられてる方々だったんですけど、われわれが呼ばれてお手伝いしたのは“まちなか”ですね。まちなかの商店街の部分。昔かなりにぎわったエリアだったんですけど、ちょっと元が気なくなってきたという場所です。ちょっと経緯は省きます。何人かの方々が呼んでくれたという、講演会から始まりましたが、このまちなかを元気にするためにどうするか。

これはもう皆さんご承知だと思いますが、“中心市街地＝商店街”ではないということです。これをまず前提にしないといけない。中心市街地というのは時代の流れのなかで、たまたま商業が中心にあった方がよかった時代は、商店街がたまたま町の中心市街地にありましたが、これからも商店街がそこに位置しないとイケないかどうかは、1回疑って見たほうがいい。もちろん、昔は商店街が中心じゃなかった時代もあったわけですね。それにこれからはひょっとしたら、その商店街自体があったところが各種病院になっていって、高齢者の方が常に中心に集ってくるというアーケード付きで、その下でリハビリができるような総合病院みたいな病院街になっていくという可能性があってもいいと思います。中心市街地をこれからどう考えていくかというのは、かなりいろんな議論があっていると思います。

十日町の場合も商店街を活性化させようという話だけだと、ちょっと難しいかもしれないと。だからまず、地域に住んでいる人たちにとってこれから

の未来に、中心市街地ってどういう役割を持っていたらいいんだろうかという話し合いからスタートすることにしました。

住民参加で物事を進めていくっていうのが、仕事でいつもお手伝いさせてもらっていることです。100人の住民の方に集まってもらって、100人で話し合いを進めていくというのもいい。しかしここでいうと、下に17人ぐらい人がいて、デザイン勉強会というのがあります。全体のワークショップとは別に勉強会みたいな、少人数の勉強会をやって、町がこれからどうなっていくんだろう、というようなことを学んだ人たちがワークショップに行くと、このワークショップのファシリテーター、誘導役みたいなことをやってくれる。それが終わったら、また17人の方々が、また勉強会をやって、2回目をやって、と繰り返していく。そんな建付けにしています。

このように住民参加のワークショップとしてたくさん人に集ってもらい、それを何度も繰り返していくというよりは、コアメンバーといわれる主体的にこの町を変えていこうと思うチームを20人弱ぐらいでつくって、この20人の人たちが100人のワークショップに入っていく、物事を動かしていくというような建付けにすることが多いです。

デザイン勉強会の方は少人数の方々と集まり、ここには建築家とかデザイナーとか、あとお店をやっている方々といった地域の有志の方々が友だちを連れてきて、本気で自分たちの未来を変えていこうという話し合いをしました。

デザイン勉強会という名前のチームにするのもいいんですけど、何か違う名前にしたほうがいいんじゃないかと本人たちが話し合いまして、彼らは「En+Design（えんでざいん）」という、多分地域の「縁」だろうと思いますが、人と人とのつながりをデザインしていくというようなチーム名をつくって活動しています。

ワークショップを「En+Design」のチームの方々が進めた結果ができあがったので、それをコンセプトブックという冊子にしました。十日町の町中っていうのはこれから、こんなふうになんが使い

こなしていく場所になったらいね、というような考え方を一つの冊子にまとめました。

重要なのは、市役所の方々がこれをずっと横からサポートしていて、市役所としては何かコミュニティセンターのようなものをつくりたいとか、市民活動センターなどをつくったらいいのではという思いもあったようですが、「一旦、何をつくるかというのは言わないようにしてくれ」と。町中がどうなればいいのかというのは市民と話し合いながら決めて、決めた結果どうしてもこんな空間が必要だという話になったときに、市役所の方々は、「じゃあその空間をどう作るか」という話をしてほしいと言っていました。

最初に市民の方々と1年半くらいずっと話し合いを繰り返したんですけど、繰り返しているときには何をつくるかという話はほとんど出てこなかったですね。このコンセプトブックが出来上がって、市民活動を応援するような空間があった方がいいとか、人がいた方がいいっていう話が出てきてから、じゃあ市役所としては市民活動センターと市民交流センターという2つを、新しく造るのではなく古い建物を改修しながら造っていけばいいんじゃないか、というふうに言うてくれました。そして実際に設計してもらうか、どんな空間になったらいいか、というのをまた市民とともに話し合いました。

設計者を決めるときってというのは、専門家がずらっと並んで、いわゆるコンペ、設計競技みたいなことをやります。しかしこの場合は「En+Design」チームの市民の方々が審査員になって、あと専門家も何人か審査員に入ったんですけど、主に市民の人たちがどの人とだったら仲良く、そしていい空間がつくれそうかという建築家の人柄も含めて、審査していくというようなことをやりましたね。

選ばれた建築家の方が青木淳さんという建築家なんですけど、この方が古い建物2つを同時に改修するという設計をしてくれました。そういうワークショップやっているなかで、ワークショップのメンバーがその中で知り合った人たちが町中でお店を出し始めるとか、設計者の青木淳さんという方は東京の設計者ですが、商店街のなかに自分の事務所の分室を作ってくれたり、その分室の中でまた話し合いを進めたり、いろんなイベントを分室の中でやるということをやりながら、拠点づくりというのをやりました。

これは拠点を泥だんごで造っていこうというインテリアの設計をしているところですね。あとは、拠点の名前も公募しようということで公募した結果が「分じろう」と「十じろう」という名前が出てきましたので、その「分じろう」と「十じろう」とい



うのが2つの建物の愛称になったということです。これは奥に、みんなが造った泥だんごの壁が見えていますが、こういう展示スペースがあったり、茶室があったりというところと、市民がコワーキングスペースみたいに使ったりとか、いろんな市民活動を応援することができるような場所ということで2つの拠点が出来上がりました。

当初から活動のコアメンバーになっていた1人が、この場所の市民活動のコーディネーターをやると言ってくれたので、この人は今センターに常駐してくれています。建物ができたというだけで市民が集っているような活動をやってくれるというわけではなくて、それを応援するような人材も育てて、その人たちが建物の中で活動するというようなことが行われているというのが十日町市の町中で関わらせてもらったものです。

今、ざっと説明しましたが、かつて僕は設計やっていました。こういう空間の設計をやっていたから、20世紀のころに仕事をするときは、だいたい「こんな建物を建ててほしい」ということから始まって、それがどういう意味があるのかとか、誰が使うのかというのは建てた後に分かるということが多かったんです。だから建ててほしいと言われて市役所の人から言われる条件をのんで、「じゃあこれぐらいのホールが必要ですか」とか、「こんな部屋があったほうがいいですか」とか言いながら造っていましたが、気持ち悪いなと思うことが多かった。

通常、住宅を設計するときは、誰がどう生活するかをよく聞いたうえで、形つくるんですよ。お父さん、お母さんと息子が二人と猫がいてというようなことを知った上で、じゃあこんな空間とかこんな生活実現しましょうとやるんだけど、公共空間を設計することになると急に利用者の話が聞けなくなっちゃうんですね。多くなり過ぎるからといって。だから市役所の担当者と話をして、結局決めちゃうんだけど、これは本当に使いたい人たちの意見になっているのかと。担当者はその市に住んでなくて、隣の市から通勤している人の場合もあって、な

んかこれ作り方変えなきゃいけないんじゃないかなと思ったのがちょうど20年ぐらい前です。じゃあ設計の仕方を変えていこうということで、将来その空間を使うであろう人たちと一緒に話し合いながら設計を進めていくということをやっていた。まず設計があるかどうかわからないけど、ちょっと寂しくなってしまった町の未来を地域住民とともに考えて、考えている間にコアメンバーみたいな人たちをちゃんと組織化して、この人たちが何か新しい活動をやるっていったら核のチームになってくれて市役所と協働しながら町を元気にしていくという状況をつくる。この状況がつくれたら、そのとき必要な空間とか道具とかそういうものが見えてくるので、はじめてその時に設計という仕事が出てくる。そんな順番に今は徐々に変わってきた気がします。

われわれの仕事も実はその先の設計もやってたんですけど、今は設計をする時間がほとんどなくなってしまっていて、設計やってくれる人をお願いする。この場合だったら青木さんという事務所の方が設計をやってくれるということになってきました。

なにか地域を元気にしていきましょう、というふうに言ってきたときに、ここの会場にお集まりの方々と、でっかい箱物建てれば地域が元気になるというふうに思っている方はいらっしゃらないとは思いますが、何かをつくっていこうというふうに思う前段階が結構大事です。いかに地域の人たちと話し合うか、これは合意形成っていわれますね。合意をつくっていくということと、もう1つは主体形成ですね。主体的に動いてくれる人たちの組織をいかにつくっていくのかっていう、2本の柱が重要になっていると思います。合意を形成することと、活動主体である団体をつくっていってしまうこと。これを同時に進めていきながら、必要な空間が出てくれば空間をつくるし、組織が必要なら組織をつくっていくという順番で物事を進めていくというのが、特に過疎地域と呼ばれる地域の活力を高めていこうと思うときに必要なプロセスなんじゃない

かなと思いますね。

こういうのは結構、時間がかかるプロセスだとは思いますが、時間も1つの資本だと思います。だから貨幣資本だけではなくて、かかる時間をいかに確保できるかということが、今度は役所の方では重要になってきますし、あるいは議会の方々の理解も必要になってくると思います。早く進めなさいと言われて、早くお金かけて専門家に外注してやってもらいましたっていうことだと、なかなか地域の機運って高まらないので、むしろゆっくり時間をかけながら地域の方々の理解や組織をつくったりしていった、持続的に地域が元気になっていくという方策を練っていく必要があるんじゃないかなという気がしています。

こんなに笑いのない話で大丈夫ですか。地域の中山間地域や離島地域に呼ばれておじやますると、ワークショップで会場に集まってくれた人、一番若い人が75歳という場合が結構多いんですよ。そういうときって、5分に1回くらい笑いを入れておかないと、みんなすぐ固まっていっちゃうんですよ。でも今日はすごいですね。こんなに笑いのない真面目な話ししていても、ずうっと聞いてくださる。

「しまのわ」いきましょうか。広島県ですね。これは1個の市町村ではなく19の市町と一気に仕事をさせてもらったもので、ちょっと範囲は広いです。範囲は広いけどやっていることは変わらないです。それぞれの地域においては、さきほど表彰された方々のような活動を目指して、それぞれの地域の人たちが、まちづくりの活動を展開し始めたというようなプロジェクトですね。

2014年を中心として、その前の年と後ろの年も含めて3年間お手伝いしたというプロジェクトです。広島県の知事に呼んでいただいて、瀬戸内の魅力をもうちょっと発信したいと思うと。お隣では、香川県と岡山県の間の瀬戸内海で、瀬戸内国際芸術祭やっている。うちも、なにか瀬戸内海の魅力を発信していくようなプロジェクトをやりたいと、愛媛県と広島県の共催でなにかやりたいと思

っているけど、「どんなんがええ？」という話を聞きまして。芸術祭というのも優れたやり方だと思うんですけど、一方でこの島々にはすでに芸術的な暮らしをしている人たちがいっぱいいて。さきほど山口知事の話にもありましたが、地域の魅力を本人たちはそんなに自覚していないけど、外から見ると「これすげーおいしい」とか、「すげーきれい」とか、「すげーおもしろい」とか思うようなものが結構あると。だから外の人たちがそこを訪れて地域の人たちと交流するようなイベントをやったらいんじゃないか。このときは「観光から関係へ」という言葉にしたんですけども、人間関係をつくっていくようなツアーがあってもいいんじゃないというようなことを提案しました。

半年間イベントをやりたいということで、「しまのわ2014」というイベントをやることになりました。半年間の間、もちろんたくさんの人を集める、1万人規模で集めるようなアーティストの演奏会みたいなのもありましたが、われわれが頼まれたのは、市民の活動をたくさんそこに生み出して、東京や大阪から来た人たちに、ちょっと日常的な活動をおすすめするようなプログラム、これをたくさん生み出してほしいと言われました。そこをお手伝いして、400グループぐらいの市民活動を生み出して、東京や大阪や福岡や、あるいは広島本土から来た人たちに、自分たちの日常的なプログラムをちょっとずつ紹介していくというような観光イベントをしました。

新しくできたのは170件ですね。420件あって、すでに今までまちづくりの活動をやっている人たちが提供してくれるプログラムが280ぐらいありました。今回を契機に全く新しく、今までやってなかった人たちが、まちづくりの活動をつくってくれたっていうのが170件ぐらいありました。これはもうご想像どおりです。これってイベントじゃないんですよ。半年間のまちづくりの活動を生み出しながら、半年が終わったら、その後は、まちづくりの活動を継続して続けていってくださいねっていう、むしろスタートのイベントです。まちづくりの活動を

これから開始させるという時のイベントという位置づけにしていますね。だから打ち上げ花火のようにボンと地域が頑張って、「ようこそ!」と人々を受け入れて、終わったら「終わった!」と打ち上げをやって終りではなくて、むしろこの半年間がわれわれの地域づくりの活動のスタートで、「これが終わったら本格的に日常的なプログラムを開始します」というような位置づけにありました。

なので僕らはイベントに向けて「どうするんですか?」という準備をずっと聞きながら、イベントが始まったら「イベント終わった後、どないして続けるんですか?」っていう話をずっとしてきました。今でも、終わった後に活動してくれてる団体がたくさんいます。イベント翌年の2015年に、終わった後の年にフォローアップを何度かやったということもあって、活動続けてくれる方々が多いということはとっても嬉しいことです。

4つの支援内容と書いていますが、基本的に僕らは、この地域に「こんなことやっていいですよ」と言いに行くわけではないので、地域の人たちが「こんなことやりたいんやけど」と言ってきたものに対して相談にのって、デザイナーとしてできることを支援していくというのが、われわれの方法です。

ワークショップもやりますが、デザインの講習会みたいなこともやることが多いですね。地域の人たちが、自分たちはいい活動をやっているんだけど、情報の発信の仕方がちょっとうまくいってないというようなことも結構多い。そこで地域の方々にチラシとかパンフレットとかWebサイトとか冊子とかこういうふうに作っていったほうが人々に読んでもらえますよ、というようなことをお教えすることもあります。

それができるようになったら、僕らが地域からいなくなった後も自分たちの活動をうまく発信していってくれるようになるから、そういう技術を残して帰ってくるといようなことをやっていることも多いです。そのとき僕らが一方的に教えるんじゃなくて、1回やっぱ実際に皆さんに作ってもら

というようなことをやりながら、時間はかかるけど、じっくりじっくりデザインについて学んでもらうということをやりますね。

これは、1つのチームが手作りポスターを作ってくれたもので、「今人気集中」っていうのは手書きで作ってくれて、じゃこれ次回までにパソコンで作ってきてくださいっていったら左側みたいな、マイクロソフトのWordで作ったポスターを作ってきてくれた。これもうちょっとおしゃれにするために、色をもうちょっと数を少なくしましよとか、余白をデザインしましよとかお伝えして、さらにこのポスターをおしゃれなものに変えていく、というのをやったりします。

「町並みガイド」のチームの人たちは、自分たちの町の地図がないということで、「じゃあ手書きで地図書いてください」と地図を書いてもらって。

「じゃあ次回までにパソコンで作ってきてください」っていったら、これをExcelで作ってきてくれたんですよ。Excelって表計算ソフトですからね。多分この裏には罫線が、マス目がいっぱい入っていると思うんですよ。その上にオブジェクトをものすごいいっぱい置いて、この地図を作ってきてくれたんですね。「そんなに面倒くさいことやらなくても地図作れますから」と言って、地図を作るためのソフトを紹介して、どうやって地図を作ったらいいのかという話をご紹介します。

そんなことをやっている間に徐々に皆さんのデザインというのが、少しずつ理解されてくるんですね。写真を撮るときに真ん中をボンとあけたような写真を撮った方がいいとか、対象物をちょっと左端に寄せて撮るとしたら右側にコピーが入れるとか。例えば、真ん中が抜けた写真を自分たちが撮ってきた場合、どこにコピーを配置するのかとか。また文字はフォントの級数をどれぐらいにして、改行幅はどれぐらいにしたら読みやすいとか、両端を揃えておいた方がいいのか、むしろ揃えない方がいいのかということを理解してもらって、僕らいなくなった後も各種170の団体が作るチラシやWebサイトが、ちょっと見てみようか

なと思うようなデザインになっていくというのが大切だなあというふうに思っています。

もちろん見た目のデザインだけではなく活動の内容も重要です。何度も何度も活動の練習をしてもらって、実際半年間は東京や大阪や全国各地の方々が来てくれますから、その方々に対して自分たちができる範囲のプログラム、日常的なプログラムをおすそわけする。そういうことをやりました。

これは、「おかんアート美術館」をやったチームの内容ですね。この人たちは75歳ぐらいのお母さんたちでしたね。おばちゃんたちの5人組。平均年齢75歳ぐらいのおばちゃんたちが、われわれのワークショップに来てくれて、企画の相談会というやつをやったんですよ。相談会やったら町歩きをやりたい。「音戸」っていう地域なんですが、「音戸の町歩きをやりたいのよ、私ら」と。「え～じゃないですか」と。「町歩きでなんか困ったことがありますか」と言ったら、1人のお母さんが「町歩きはやりたいんですけど、歩いている途中でトイレするところないよ」と言われたんですよ。「トイレするところないの。それ困りますな」と。だいたいそのお母さんたちって、「簡易トイレとか予算つけて、広島県さんなんやから税金でそういうの置いてくれへん」という目をしてるんですけど、僕らそういうの一切やらないんですね。「自分たちの力でなんとかしてください」というのが基本的なスタンスなので、「トイレないと困りますね」。「困ったのよ」。「困りましたね」。ずっと「困ったのよ」という話をしていたら、おばちゃんの1人が「うちのトイレやったら使ってくれてえ～で」と言ったんですよ。「じゃあそのトイレチェックしに行きましょう」とお母さんの家のそのトイレを見せてもらったんですね。

そしたらその家の中に「おかんアート」がいっぱいあったんですよ。お母さんがついつい捨てられないもので作ってしまった、何の役に立つんやろうという品物ですよ。ヤクルトのプラスチックのびん、飲んだ後捨てられないんですよ、もったいないか

ら。上切って、周りにビューっつつまようじ張って一輪挿しを作っているんですね。なんの役に立つんやろうと思うんですけど、こういうの作っちゃうんですね。うちのおかんも作ってました。この怪物くんみたいな帽子もそうですね。たぶん手芸をやっていて余った布ですね。もったいなくて捨てられないんですよ。だからこれを小さく切って、帽子を作ったらしいですね。親指にかぶせるぐらいの帽子ですけど、かぶせられないんです。中に綿が詰まっていますから。裏側にピンが付いててくれれば、バッジみたいにして帽子にかわいく付けることもできますけど、ピンも付いてないですね。この帽子は机の上には置いておくことしかできない、帽子ですね。「何の役に立つんですか」と言うんですけど、おかんたちはこういうのが大好きなんです。いっぱい作ってる。この家は2ミリから2メートルまでの作品が家の中にありましたね。すごいですよ。2ミリっていうのは、米粒に「米」って書いてあるんですけどね。それを虫メガネで見るとっていうだけの作品なんですよ。2メートルっていうのは5円玉で作った五重塔ですね。

こんなのが家中にあったので、「町歩きやめませんか」って話したんですよ。「町歩きじゃなくていいじゃないですか」と。「あなたの家を1週間限定の『おかんアート美術館』にしたらええやん」と。「これみんなに見せて、説明してあげてください」と言ったら、おかんたちは自信がないわけですよ。「いやいや、お客さんこーへんて」と。「でも来なくてもいいじゃないですか、別にこれ商売でやるわけじゃないんだから、自分たちの生活を楽しくするためにやるんだから、1週間に10人しかこーへんかったって、その10人と友だちになれたらいいじゃないですか」と。「東京から来た人と知り合いになって、今度東京に行ったとき遊びに行きますねと関係性ができるだけでいいでしょう」と言って、おかんたち「ほなやろうか」と、しぶしぶ「おかんアート美術館」というのをやってくれましたね。

普通の民家に見えますけど、ここが1週間限定のおかんアートですね。台所とか家ん中とかすっご

くきれいに掃除して、ここに自分たちの作品をずらっと並べて、おかんたちがそれを案内してくれるんですね。お客さんが来たら、自分たちが作ったおかんアートを1個ずつ案内してくれるっていうのをやるんですね。こういう折り紙で作った小箱とか、トイレとかに置いとくようなタオル掛け。あと、来てくれた人たちに小箱をお土産として渡したんですよ、おかんたちは。とにかく「ようこそ来てくれました」と、お土産として折り紙で作ったちっちゃい箱ですね。こういうのを「渡していきたい」ということでこんなことやってくれましたね。

いずれも僕は、おかんたちに「なんの役に立つのか分かれへん」とずっと言っていましたけどね。ピーナツドールとかね。これもおかんに「なんの役に立つんすか」とずっと言い続けていましたけど、おかんたちいわく「これはまだ下の方にピーナツが入っているので、いざというときに役立つ」って言ってました。そんな時くるのかなあとと思いますけど、でもこういうの好きなんです。こういうのいっぱい作って、いっぱい展示してくれてると。

これ1週間に10人くらいしかこーへんのちゃうかなと思ってたら、1日目で10人突破したんですよ。20人、30人、40人、50人突破して、想定外ですね。こんなに人が来るとは思っていなかったから、お土産に渡すための色紙の小箱が足りないですよ。

あれ20個ぐらいいしか用意してないから、「ちょっと待って、ちょっと待って、今折るから」と一生懸命折って「はい、これ、お土産」と渡しながら、おかんたち一生懸命やって。それでも全然間に合わないんで、いつの間にかおかんだけでなく、おともも巻き込まれて一生懸命折ってましたね。

さらに、いつの間にかおとんたちも「自分たちの作品を並べたいよね」と、軒下に「おとんアート美術館」も小さくできあがったりしていて。自慢の盆栽とか。こういうことが起き始めるということになります。

これ1週間でどれくらいお客さん来たと思いますか。800人来たんですよ。1日だから100人以上がおかんの家にあがりこんできたということです。全然、想定外ですよ。だから、「アンケートも取っておいてください」って言ったんですけど、おかん、アンケート用紙も20枚くらいしか用意してないんですよ。でも1日目にすぐなくなるのよ。「ちょっと待っててください、あんたこれコピーしてきて」、アンケート用紙、おかんがまたコピーして走って持ってきて20枚。だけどそのあとすぐなくなっちゃうんですよ。「またあかん、これコピーしてきて、これ」って渡して何度も。おかんもかなり慌てたんでしょうね。もうすでに誰かが答えたアンケート用紙を「あんたこれコピーしてきて」と渡して、20枚く



らい誰かが答えたアンケートにみんな“×”って横に答えを書いているっていうアンケート用紙がありましたけど、そんな状態でしたね。

アンケートの結果、95%が女性だったそうです。おかんアート見に来た人は女性。無回答以外は全員「満足」という回答ですね。このへんが、お金払ってやる観光と大きく違うところですね。やっぱお金払っているとお客様になっちゃうんですよ。スリッパなかったやないか、説明うまく聞かれへんかった、寒かった、暑かったって、必ず「不満足」っていうところに“○”が一定の割合います。

でも、回答忘れた人以外全員満足なんですね。不満足のところ“○”を打てなかったから無回答なのかもしれないですけど配慮がきいてますよね。つまり、両方市民だからです。迎え入れているお母さんたちもお金もらわずに、自分は市民としてプログラムを提供している。東京や大阪から来た人たちも市民として人の家にあがらせてもらっているという対等な関係性だからこそ、感謝しか出てこないという状態になっているわけですね。この辺りは、地域の活動をやっていくときに、すごく重要な点だなと思います。人と人との関係っていうのを一体どう生かしていこうとするのかということですね。

自由記入も結構多かったですね。「見るもの全部感動でした」とかね。あと、「悔しかったので頑張ります」という人もいますね。この人はおかんアーティストなんでしょうね、きっと。東京あたりにいる人なんでしょうけど。自分も家でおかんアートやってるんだけど、膨大な物量に圧倒されて悔しくなって、自分も家に帰って頑張りますというような人みたいですが。

こういうプログラムが生まれて、今おかんたちはより新作を作って、おかんアート美術館をさらに発展させてくれていますね。もう3年経ちますけども、いろんなおかんアートが生まれています。この75歳から80歳くらいのおかんたちがみるみる元気になっていってますね。すごい社会的になって、いろんな人たちを呼び込むようになってきましたので、そ

ういう意味では分野は違いますけど、地域包括ケアと言われるようなものも、健康で長生きをどうやってサポートしていくのかということですが、地域の人たちが熱中してつながって、何かを成し遂げるというような元気の源になるような活動がその地域にいくつあるか。これが大事な視点なんじゃないかと思いますね。医療費や介護費をこれから下げていかなきゃいけないんだけど、このことと過疎地域をどう元気にしていくのかということは、実はものすごく近い概念なんだろうというふうに思います。

おかんたちだけじゃないですね。おっちゃんもなんか活動し始めましたね。これは、「狼煙（のろし）を上げたい」と言ってきかない、おっちゃんがいるんですよ。「狼煙を上げたいんや」と。「瀬戸内海って朝鮮通信使の時から狼煙で信号送ってたんやから、今、狼煙を上げたらあかんという法はないはずや」と言って狼煙を上げたいと。誰も狼煙の上げ方なんて分かんないわけですよ。とにかくこれ、男のロマンみたいですね。「高い山のてっぺん登って、煙を上げてみたい」なんですよ。「やりたいなら、やりなはれ」ということで、おっちゃんたち山のとっぺん登って、広島に絵下山（えげさん）という山があるんですが、山のとっぺんまで行って毎月の第4日曜日に煙を上げるんです。

ところが、狼煙の上げ方分かんないから、発煙実験といって、何度も何度も繰り返すわけです。まっすぐ狼煙を上げるにはどうしたらいいのかとか、よりシルキーな煙を上げるにはどうしたらいいとかかね。このおっちゃんたちと話をしていたら、シルキーとかミルクとかいろんな言葉が出てくるんですよ。「今日の狼煙はミルクやなあ」みたいな。みんなそれで通じているんですけどね。もくもくもくと。ミルクティーの中に、ミルクをぶちよっと入れたときのムワーンという感じに出てると、彼らはミルクと言ってるんだと思うんですよ。あんな感じで上がるときと、絹の糸のようにすーっと上がるときとがあって、なんかその上げ方の違いがあるらしいですね。あと、どの葉っぱいれるかによ

って、グレーになったり白になったり、茶色になったりするらしいけど、そんなことをずっと研究してたんです。山のてっぺんから何度も、何度も上げてたんですよ。

そしたらいつの間にか向かいの島から応援狼煙というのが上がるようになってきて、「見えたぞー」と向かいの島からも上がるようになってきたんですよ。「これおもしろいやん」と。ここで狼煙上げると、向こうでも上がるっておもしろいやん。狼煙でリレーしようということになったんです。

「狼煙リレー」させていこうとなって、これどうやって次のリレー地点を調べるかっていう問題が出てきたんです。われわれ設計者は等高線というのが読めるので山の上からあげると、断面図書いてみて、どこまでだったらこの煙が見えるかっていう範囲を書くことができるんですけど、おっちゃんたちは素人ですから、そんな等高線とか読んで断面図を書いてとかできないわけですよ。そんじゃあプロに頼もうかといっても、そんな金もないと。さっきのトイレと一緒にですね。「そんなのできませんよ、自分らでなんとかしてください」っていったら1人のおっちゃんが「facebookでやろう」と。facebookで今度の日曜日に、山のてっぺんから狼煙を上げると告知する。もし見えたら、facebookのGPSで位置情報をオンにして、「見えた」とつぶやいてくれと。そしたら、大体どの点まで見えてたのかが分かるから、その範囲の中に次の狼煙リレーの中継点をつくらう。それでつないでいったらいいんじゃないかと言ってくれたんですよ。

これはなかなか現代的な方法を使うやないかということで、「分かった。ほなやろうという」ことで、僕もfacebookでシェアしました。「広島に住んでいる方々で、今度の日曜日午後13時から狼煙を上げます。山の上から狼煙が見えた人は位置情報をオンにして『見えた』とひとつぶやいてください。それが役に立ちますから」と言ったんですよ。いろんな人たちが「楽しみにしてます」とかいいろいろ言ってくれたんですよ。

当日、残念ながら曇りでした。どこから上がって

るのか、さっぱり見えないんですよ。facebook上は「見えません」「やってますか?」、そんな言葉ばかりでしたね。おっちゃんたちは盛り上がってたね。煙出てますから、「やったー」とか言って、すげー盛り上がってるんですけど、facebookは全く見えないという状態になってましたね。最後はプロがちゃんと消火して帰るという。

こういったことを半年間ずっと練習しながら、仲間を増やしてずっとつなげていこうとやって、結局半年後には57カ所ですね。57カ所から狼煙が上がるということになりました。広島県が30団体、対岸の愛媛県は21団体、頼んでないけど山口県も6団体ぐらい上げてくれたんですけどね。狼煙の本番、NHKが空撮しました。57カ所から煙が上がっているところをヘリコプターで撮ってくれて、夜のニュースになりましたけど、今も広がっています。

3年経ちましたけど、狼煙の匠っていう言い出しっぺの人がいろんなところに、狼煙リレーを全国に広げたいらしいんですよ。なので、東の方もどんどん進んでいますよ。もう今、愛知県ぐらいまで行きましたね。西にも、たぶん、佐賀くらいまでは来ていると思いますね。仲間が増えていってますので、西にもどんどん広がっていて、まずは日本を狼煙のリレーでつなげたいというふうに思っているらしいですね。

彼らの目標は世界をつなげたいらしいです。広島ですからね。平和の広島ですから「平和の狼煙で世界をつなぐ」というのが、彼らの夢みたいです。2020年には、聖火リレーの横を「聖煙リレー」というのでつなぎたいらしいですよ。ブラジルから煙でぶわーっと日本の東京まで、煙のリレーでつなげていきたいと思っているみたいです。

最終的にノーベル平和賞がほしいらしいみたいです。ノーベル平和賞を取りたいらしくて、今一生懸命、狼煙の活動を続けてくれていますね。

セクシーダイナマイトさんという人がどこからともなく現れてきて、「狼煙音頭」という音頭を作ってくれたんです。この人、振付師らしいんですけど

ど、狼煙音頭というのを作ってYouTubeにアップしてくれていて、今は狼煙のチームに入った人たちは、狼煙音頭を練習して狼煙音頭を踊ってから着火するという状態になっている。

これは、おっちゃんたちがただ、ただ楽しいことをやっているように見えますけど、ご想像とおりです。狼煙を上げるときは必ず周りに燃えうつるようなゴミがあっちゃいけない。草があっちゃいけない、枯れ草もちろんあっちゃいけない。だから彼らは狼煙の前に雑草を全部刈るし、ゴミも全部集めます。終わった後も、それ全部キレイにして帰りますから、毎月1回57カ所の山の上の公園がきれいに清掃されることになるんですね。彼らがやりたいことをやっていたら、結果的に地域のためになっていたという。

「まちづくりのために何かいいことやりましょう」って、地域のための活動だけをやっている、掃除を毎朝やってますというのだと若干飽きちゃうことが多いんですね。活動が3年経ったら止まっちゃいました、ということになることがあります。町のためになるかどうかは後で考えようと。まず、われわれがくすっと笑えるような面白いプログラムを作ってみよう。やっている間にこれをどうやれば地域のためになるのかというふうに考えて、少しずつ変容させていって、地域のためにもなるし、何よりも自分たちがやっていて楽しいという状態を常に更新し続けましょうというのが、われわれがお手伝いするときによく言うことですね。正しいだけではなくて、楽しいをそこにくっつけて活動を続けていきましょうというようなことをお話ししています。

このあと、中山間地域が広島県知事に意見を申したそうなんですよ。「なんで沿岸部だけなんや」と。「『しまのわ』って、なんで島ばかりでやっているんですか。『やまのわ』もやってください」と言ったらしくて。今年、「やまのわ」が始まりました。今「さとやま未来博」というのをやっていて、われわれも呼んでいただいて、今度は山間部の方々がさっき言ったような活動を自主的につくって、自分たちで地域を元気にするような活動をやりましょ

う。これを僕らはまた講座や交流会をやって、いろんな活動が生まれつつあるところですね。

「もんぺ」を現代的にやろうと、「もんぺのプロジェクト」が今は盛んですね。若い女性たち3人がスタートしたんですよ。もともとこの3人は違うプロジェクトをやろうと思ってワークショップに来てくれたんです。そのうちの1人が、古い着物をリメイクしてもんぺを作っている人で、それをちょっと広げたいと思っていた他の二人も「あっ、そっちの方が面白いかも」と、自分のプロジェクトはやるんだけど、「ちょっと一緒にやりましょう」とつながってくれて、それが「もんぺる」というプロジェクトになって、おしゃれなもんぺを作って、これを広島県の山間部で広げていこうというような活動をやってくれていますね。

この人たちが作った「もんぺる」がいつかアウトドアの「モンベル」で扱われるようになったらいいなと言って活動を続けていますね。

今は300くらい新しい活動が生まれいて、中山間地域で活動を続けていってくれているという状態です。

あと、コラボも出てきましたね。「しまのわ」の狼煙チームのおっちゃんたちが、山まで来て上げてくれたんですね。さっきの狼煙のおっちゃんが、山バージョンで、小さく携帯できる狼煙を開発したんです。ドラム缶を2個つなげたでっかいやつじゃなくて、モバイル狼煙っていうのを作ったと言って、モバイル狼煙を試しに山側まで来てくれたそうなんですけど、どうみても七輪なんですよ。でもまあ、モバイル狼煙をやってくれているのが、今の広島県の山側ですね。こうやってつながっていくことも嬉しいことだなあと思います。

あとは「陸沢」を紹介します。千葉県の睦沢という町の県道を拡幅するっていうプロジェクトです。県道拡幅のプロジェクトなんだけど、今は歩道がない道路。歩道がない道路を広くなるように拡幅しようというプロジェクトに呼ばれたんです。われわれ、もともとデザインをやっていたから、県道の歩道が広がって、そこにベンチが置かれて

木陰があって、とっても気持ちがいい空間になったら人が歩くっていう発想を信じてないんです。今まで毎回そういう設計をやってきたけど、結局人は歩かなかったから。どれだけアメニティ豊かな空間をつくっても、人なんか歩かないんですよ。

それが分かったので、空間もちろん大事だけど、歩きたくなる仲間がいないと歩かないし、歩きたくなる出来事がそこで起きてないと歩かないと。だから歩きたくなる空間と歩きたくなる仲間と、歩きたくなるような出来事をセットで考えていく必要があると。でもイベント屋さんにお金を払い続けて、そこに出来事を起こすわけにもいかないので、地域に住んでいる人たちが県道沿いで何か面白いことをやっているから、そこへ行こうと思うと結果的に県道を歩いちゃってましたね、と。それで結局、みんな健康になりましたね、というような状態をつくっていきましょうと。それだったら住民参加で進めていかないといけないだろうということで、住民参加のワークショップをやりました。

アイデアを出してもらって、比較的少ない人数から進められるものと、たくさんの人数がいらないとできないものを縦軸に整理して、それから今すぐ活動開始できることと、ちょっと長い時間準備がかかるものに整理してそれぞれを配置していきました。そして4つ選んで、4つのチームを作って、それぞれ活動を開始してくれました。

フリーペーパーのチームは、とにかく歩きたくなるためには歩きたくなるような情報がまとまった小冊子がないといけないんじゃないかと。そこでデザインについて教えて、みんなが読みたくなるような冊子を作りましょうということを進めました。

田舎散歩チームは、チームの人たちが都市から人たちを、いろんな散歩に連れて行って最後は地域のお母さんたちが作った手料理とかを食べるといったものを1つのプログラムにしちゃいましょう、有料のプログラムにしちゃいましょう、というのをやりました。

あと、子どもの遊び場があると県道にみんな来てくれるんじゃないかということで、県道沿いの空

き地を借りて、これ民間の土地だったんですけど、チームの人たちが民間の人たちに交渉して借りて、遊び場をつくるっていうことを今やっています。

最後の一つが「こちゃ倶楽部」っていいんですが、「こちゃ」っていうのは、小さいお茶って書きます。「こちゃしようや」と、「ちっちゃいお茶しようや」と、ちょっと休憩してダラダラしゃべりましょうという意味みたいです。この陸沢町では、方言でこちゃ、こちゃと言うらしいんですが。コミュニティスペースのような、人が集まってきてお茶飲みながらいいいできるスペースが作りたいというチームがいて、このチームも行政から何か借りるとか、補助金じゃなくて、「自分たちの力でなんとかしなはれ」と言ったんですね。そしたら、このチームの中の1人が、自分の知り合いが昔やっていた魚屋がつぶれてて、本人が「そこ使ってくれてええで」っていうから、そこを「こじゃ倶楽部」の拠点にしよう。

「魚勝」といって、県道沿いにある古い建物なんです。中はもう空が見えるくらいの廃墟なんですけど、これを自分たちの手で改修して、みんなが集まりやすいようなスペースやろうと。カフェみたいなをつくらうとってたんなんです。来年の4月オープンだと決めちゃったので、その間に資金稼がなきゃいけないとなり、イベントがある度にそこに行って、そこでうどんとザンギという唐揚げを売って利益を出して、ホームセンターに行って材料を買って、ペンキ買って、板を買って、とにかくイベントで儲かったらそれで内装をつくっていくということをやりました。

行政の方々からの補助をもらってもいいんですけど、火を使うとか、お金儲けやっちゃだめとか、お酒飲んじゃだめとか、いろいろ規制がかかるので、それはやめて自分たちでできることをやりましょう、ということで始めました。

このプロジェクトはうちの若い女性スタッフが担当者だったんですね。担当者はおしゃれなリノベーションができるんじゃないかなあと思ってたんですよ。カッコいい若者が好きそうなね。おしゃれな改修ができるんじゃないかなあと思っていまし

た。例えばこんな感じですね。壁を白く塗って、観葉植物をいくつか置いたら、おしゃれにリノベーションできるんじゃないかなあと考えていたわけですよ。

ワークショップで「魚勝、どんなインテリアにしますか」って話をしていたんです。おっちゃんに聞いてみたら、1人目がいきなり壁に竹を貼り付けようと言い出しはじめたんです。これはおしゃれにならないですね。竹を貼っちゃだめだろうと。あかんと思って、うちのスタッフはほかの人に聞いてみようと思って、ほかのおっちゃんに聞いてみたら「いいね」と言われたわけですよ。これはやばいんじゃないか。いきなりおしゃれにならないんじゃないか。男性の話ばかり聞いていたらだめなのだろうと思って、お母さんがいたので、「お母さんどう思いますか」と言ったら、「私はフリルのカーテンを付けたい」って言われたんですよ。これもおしゃれにならないですよ。フリルのカーテンはやばいと。話し合いは最初から失敗なわけですよ。われわれはデザイナーですから、「ちょっとデザインについては私たちに任せてくれませんか」と言ったら、おっちゃんたちはしぶしぶ、「まあ任せるわー」と言うんですけど、明らかに顔が怒っているわけですよ。「そんなんやったら、なんで俺らに意見ださせんねん」って顔になってる。

じゃあ、壁を白く塗る。これはリノベーションの鉄則ですから白く塗ろう。白く塗ったらおしゃれになると思っているわけですよ。白く塗って、芸大生とか呼んで、いわゆる若い人たちがおしゃれだと思うような空間を無理やりつくっちゃったんですよ。こういうのも白く塗りました。ただ白く塗っただけですよ。ビフォーアフターでおしゃれになりましたね。お金が少ないながらも、なんかおしゃれになりましたね、とやっていたんですけど、われわれは千葉にずっと住めないんですよ。睦沢は1カ月に1回通うんですけど、1回通ってワークショップで壁が白くなって、次の月に行ってみたんです。行ってみたらカウンターの上に屋根が付いていたんですよ。しかも木の皮がついたまんまの屋根。

付けたおっちゃんは相当、自信満々なわけですよ。

「俺がつくった」みたいな感じで。もう「取ってくれ」って言えないんですよ。しょうがない。「これはこれでいいですけど一応、設計図面の通りにやってください」と。「こういうのやるとイメージ変わりますから」と言って帰ってきたんですよ。

そして次のときに、もう1回行ってみたんですよ。すると白い壁のところに竹が貼りつけられていたんですよ。もうだめですね。完全に居酒屋ですよ。おしゃれな空間にはならない。こうなったしょうがない。諦めたんです。好きなようにやってください。好きなようになったら仲間が増えたんですよ。やりたいようにやれることになったら、どんどんお父さんたちが来てくれて、一気にオープンまでこぎつけることができ。結局誰がどう使いたいかってことが大事で、勝手にこっちのデザイナーがおしゃれだと思うものを押し付けたって、地域はうまく回らないんだと、よく分かりました。

これでオープンして、ものすごい人気です。人がたくさん来るんですよ。ここでいろんなイベントが行われています。

県道をいろんな人たちが歩いてここまで来てくれることになりました。その後はよりカオスな状態になっていますね。よくわからないものがいっぱい置かれていて、神棚はもうお酒だらけ。マットとかも絶対踏みたくなようなものが玄関に置いてあったりするんです。それでも健康体操やったりとか、カフェが開かれたりとか、地域の人たちが本当にリラックスしてられるような空間になっているそうで、こういう進め方っていうのが大事なんだろうなという気がしました。

常々われわれは、地域の方々の活動をサポートするのが自分たちの仕事だというふうに言っていますが、「一体何してんの」というと、今日のタイトルの通り「縮充」ということを意識しています。小さくなっていくんだけど、充実していくっていう地域をどうつくっていくのか。縮退や縮減は寂しいよね、ということですね。

これは行の縦割りって呼ばれているのを横に割

ただけの話なんですけど、人々が参加する、協働するということが再び重要になる時代が今、来ているなと思っています。公園は市民参加型のパークマネジメントが出てきていますし、都市計画は今、まちづくりと呼ばれて、デザインも住民や利用者参加型でデザインを決めていく時代になりました。アートもソーシャル・エンゲイジド・アートやコミュニティアートと言われて、かなり参加型のアートの比率が増えてきています。彫刻家がすごい彫刻をつくった、終わり。見てくれ。じゃなくて、人々がそこに関わることによって活動自体がアートだというのが増えてきています。

娯楽はもう参加型ですね。YouTubeは素人の人たちが上げたものを、ユーチューバーとかいう番組を作っている一部の人たちをのぞいては、ほとんど素人の人たちが作っています。それを僕は楽しんでいるし、Instagram（インスタグラム）などの画像共有もそうです。素人の人たちがアップしたものを僕は見ている。

環境問題は昔から参加型ですね。公害反対運動やったり、自然破壊の反対をしたり環境、地球環境問題、全部参加型でないと乗り越えられないといわれています。

教育も参加型に変わりましたね。「アクティブラーニング」と言う言葉をよく聞くとありますが、昔はスクール形式って言って、ただ椅子に座って、先生の話聞くってただけでしたが、今は小学校中学校行くと、もうすでに生徒たち自身が話し合ってる形が見られる。自分たちで授業をやって、先生は隣からアドバイスをすると。あるいは、今日は武雄の市長もお越しですけど、武雄市が先導してやられているような反転授業もそうですね。最初にタブレットで一流の算数の授業を見ておいて、学校に行ったら「わかんなかったところある？」って教え合おう。教えることが大きな学びであるということに教育業界が気づきつつあります。教えてもらうことが学びなんじゃなくて、知ってる人が知らない人に教えたら、教える方がどんどん賢くなっていくというのが分かってきちゃったので、授業が参加

型になってきています。

情報分野も参加型ですね。リナックスというOSは、世界中のプログラマーが参加して作っているOSです。この会場にいる人たちのスマートフォンの半分は、リナックスがベースです。アンドロイドっていう携帯を使っている人はリナックスですから、あれは世界中のプログラマーが新しいものに書き換えているOSです。ほかもそうです。ウィキペディアなんかは昔信じられなかったわけですよ、百科事典を素人が作るなんて。でも今は、その参加型の百科事典を僕らは参照していることになっています。

マーケティングもそうです。関係性のマーケティングとか、「AKB48」なんて昔じゃ考えられないですね。ファンが応援してファンが決めていくアイドルっていうのは。吉永小百合をみんなで育てるっていうことはなかった、昔は。でも今はアイドルこそ、もう自分たちの参加型でつくっていきましょうということになってますよね。

福祉もそうですね。今はもうコミュニティワークになって、医療とくっついて。そして地域包括ケアとなっていますけど、人々の参加が不可欠という時代になってきています。

医療はそれに先立って、患者参加型の医療というのがありましたね。80年代にインフォームドコンセントといって「情報全部与えるから、あんたが判断してね」っていうこと。これは急性期ではなくて慢性疾患が多くなってきたからです。生活習慣病が増えてくるときに、お医者さんが病院でできることはものすごく少ないです。3分診療のなかで、3分間アドバイスしたって、残り23時間57分あなたが何をしているかということで健康が決まるわけですから、患者参加型でないと医療は成り立たないという時代になってきていますね。

なので、もうすでに今、参加型っていうのが主流になってきているということ。まちづくり、地域づくり、過疎問題を乗り越えていくときに、専門家を呼んで行政職員が一生懸命やるってただけじゃなくて、地域の人たちの意識が変わって、そして地域

が変わっていくという手順を踏む必要がある。専門家に任せきりにする財源は行政にはもう無いという時代を、これから生きていくことになると思いますね。

いかに地域の人たちに参加してもらうか。これを逆に言うと、主体的になってもらう住民を増やすということですが、縮充というのはまさに、人口は減るかもしれないけども、その中身が問題で、「よし私たちの町は私たちで変えていこう」というふうに充実させるということが同時に進められているかどうかということが重要だと思っています。

市民参加はひそかにバージョンを変えています。市民参加は反対運動みたいで怖いって思う方がいらっしやるかもしれませんが、それはバージョン2.0です。1970年代に主流になった参加ですね。でもその後、阪神淡路大震災の95年にはボランティア元年といわれてバージョンアップしましたし、全部これ25年ごとに変わってきていますから、2020年には市民参加4.0が当たり前になると思います。

これ、シェアリングエコノミーといわれていますが、Uber（ウーバー）やAirbnb（エアビーアンドビー）、コワーキングスペース、クラウドファンディングなど、まだ新しいからこなれた名前にはなっていま

せんけども、人々が協働しあって問題を解決していくような状況が、当たり前のように生まれる世の中が2020年に来ていて、その端緒はかなり見えているわけですね。この時代に、過疎問題を地域の人たちのつながりの中で、どうやって乗り越えていくか。これがすごく重要になってきていると思います。

最後に1つ。『縮充する日本』というPHP新書から本を出しました。今言ったようなことですね。縮充という言葉ですが、ウールをアルカリ水でクチュクチュもむと、縮んであったかい素材ができる縮絨ウールというものがあります。そこからヒントを得て出してきた言葉ですが、縮充というのをこれからどうやっていくのかというのを、各章で参加型がこんなに進んできたんだという歴史を8章に分けて、福祉、教育、芸術それぞれにわけて書いた本がこれなんです。書いて、書いて、書きまくったんです。調子にのって書き過ぎて、これ新書なのに450ページあるものになっちゃったんですよ。「おまえの本を縮充しろ」とよく言われるんですけど、縮充できてないんです。ダラダラと続く本ですが、もしよかったらパラパラとめくっていただければと思います。これで僕の話提供は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。



全体会

パネルディスカッション “人が輝く地域づくり” ～自発と誇りが地域を変える～

コーディネーター

慶應義塾大学総合政策学部教授

飯盛 義徳

パネリスト

むらつむぎ 代表

千綿 由美

studio-L 代表

山崎 亮

多久市長・佐賀県過疎地域自立促進協議会会長

横尾 俊彦

アイ・エス・ケー合同会社 代表

渡邊 法子



パネルディスカッション

テーマ

“人が輝く地域づくり”

～自発と誇りが地域を変える～

コーディネーター



慶應義塾大学総合政策学部教授

飯盛 義徳氏 (いさがい よしのり)

佐賀市生まれ。長崎県私立青雲高等学校卒業。1987年 上智大学文学部卒業後、松下電器産業株式会社勤務。1992年 慶應義塾大学大学院 経営管理研究科修士課程入学。1994年 同修了後、飯盛教材株式会社入社。1997年 同社常務取締役。2002年 慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程入学。2005年 慶應義塾大学環境情報学部専任講師。2008年 同大学総合政策学部准教授、2014年 教授、2015年 SFC研究所所長就任、現在に至る。

専門は、プラットフォームデザイン、地域イノベーション、ファミリービジネスマネジメントなど。総務省ふるさとづくり懇談会、総務省人材活性化研究会、国土交通省奄美群島振興開発審議会などの委員を務める。主著に、『社会イノベータ』(慶應義塾大学出版会)、『地域づくりのプラットフォーム』(学芸出版社)など。

パネリスト



むらつむぎ 代表

千綿 由美氏

(ちわた ゆみ)

武雄市若木町には、樹齢3千年といわれる大きな楠(くすのき)があります。私はそこから10キロほど離れた町で生まれ育ちましたが、楠の存在を知りませんでした。初

めて川古の大楠(おおくす)に出合ったとき、このような大きな楠が住宅地の中にあるのはなぜだろうかとその歴史に心ひかれました。平成16年からNPO法人に所属し、空き地空き家情報の掘り起こしから、空き家改修や家創り体験の活動を企画運営する中で、その地域のことも少しずつ知ることができました。町を歩き交う人々の姿を長年見守ってきた大楠のことを思うと、私もまたこの地で、いのちを育み、歴史を受け継ぐ一人になりたいと思い、18年に、大楠のそばに空き地を購入し家を建て、家族と移住しました。現在、改修した牛小屋で土に触れる体験やカフェ「つちのや」を営業しながら、移住相談などを受けています。IターンUターンの仲間たちとつくる「むらつむぎ」では、地域の意欲ある人たちとつながりあい、楽しく田舎に暮らし続けたいと、新しいイベントを創りだしています。



多久市長・佐賀県過疎地域自立促進協議会会長

横尾 俊彦氏

(よこお としひこ)

1956年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。松下政経塾1期生。

1997年多久市長に就任し、現在に至る。

全国市長会副会長、佐賀県市長会会長等を歴任。また、全国後期高齢者医療広域連合協議会会長、厚生労働省社会保障審議会医療保険部会委員、地域IoT官民ネット共同代表、全国ICT教育首长協議会会長等を務める。



studio-L代表

山崎 亮氏

(やまざき りょう)

1973年愛知県生まれ。大阪府立大学大学院および東京大学大学院修了。博士(工学)。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。

著書に『ふるさとを元気にする仕事(ちくまプリマー新書)』、『コミュニティデザインの源流(太田出版)』、『縮充する日本(PHP新書)』、『地域ごはん日記(パイインターナショナル)』などがある。



アイ・エス・ケー合同会社 代表

渡邊 法子氏

(わたなべ のりこ)

1960年生まれ。東洋大学大学院博士前期課程修了。

2003年NPO法人全国まちづくりサポートセンター事務局長(2004年より理事兼任)。2007年4月1,281人の応募者の中から選ばれ、静岡県伊豆稲取温泉観光協会事務局長に就任。地域を主体とした観光まちづくり事業を担う着地型旅行会社「稲取温泉観光合同会社」設立。退任後、2010年京都府京丹後市観光協会事務局長就任。在任中に道の駅「てんきてんき丹後」内に訪日観光を担う旅行部門設置。2009年より内閣府地域活性化伝道師・環境省エコツーリズム推進アドバイザー・2016年より内閣府クールジャパン地域プロデューサー(至現在)。アイ・エス・ケー合同会社代表として現地旅行会社との協働体制を基盤に観光客のニーズに対応しながら全国各地域の貴重な特徴ある地域資源を活かしたツーリズムの推進やインバウンド(訪日)観光の誘客のしくみづくり、集客の支援に取り組んでいる。

飯盛 皆様、こんにちは。これから“人が輝く地域づくり”というテーマでパネルディスカッションを展開してまいりたいと思っております。私、今、ご紹介いただきました慶應義塾大学の飯盛義徳と申します。飯盛という名前でお気づきの方もいらっしゃると思いますが、私は佐賀市の生まれ育ちでございます。ふるさと佐賀に帰ってこられまして、本当に改めていいところだなと思ひながら、またなんと言ふんでしょうか、ほっとする地域であるということ、また再認識した次第でございます。

先ほどから過疎地域の優良事例でたくさんの素晴らしい話をうかがい、また山崎さんのお話から、参加型の大切さということをいろいろと勉強をさせていただきました。これからのパネルディスカッションにおきましては、やはり、今日の流れのとおりであります、まずその過疎地域を元気にするというにつきて、いかに地域の資源を見だして磨き上げて発信をしていくのかということが、まず大切なのではないかというふうに考えております。その中で人と人との新しいつながりとか、また今日の大きなテーマでもあります「自発」と「誇り」をいかに持ってもらうか。こういったことが大切なテーマなのではないかと思っております。

今日は先ほどご紹介がありましたように、各地で活躍をされている多彩なパネラーの方にお越しをいただきましたので、皆様からの話を聞きながら、過疎地域の活性化を具体的にどうすればいいのかという、何かのヒントになればと思っております。

それでは、まず最初に皆様の簡単な自己紹介のあとに、皆様のお取り組み内容などについてご報告をお願いしたいというふうに思っております。まず最初に横尾様の方からお願いをいたします。

横尾 こんにちは。佐賀県の中央部にあります多久市の市長の横尾です。

佐賀県過疎協議会として取り組んでいることと、多久のチャレンジをご紹介したいと思ひます。

要は創造して挑戦して変革をしていくことが、行政において極めて重要と私は思っています。最初に市長になるときに「市役所という漢字は、その名の通り市民に役立つ所」であり、これを目指して行くことで、鋭意努力をしているところです。

県内にはこの地図のようにピンク色に塗ったところの自治体が過疎地域であります。現在9ですけども平成の合併前は12ありました。当時49市町村です。いろんなチャレンジをしていますし、協議会としては皆さんもされているように、情報の交流、そして切磋琢磨、人材の育成などに努力をしています。

最近の取り組みとしては、太良と江北と唐津それぞれの自治体において、アワビの陸上での養殖とか、「かしわめし」の復活とか、あるいは廃校した施設を使つてのレストランとかがあります。

今回は、佐賀市がメイン会場。そして明日は分科会として唐津や多久や白石や太良でそれぞれ会がございましてぜひエンジョイをしていただきたいと思ひます。今日は首長さんもおいでですので、地元の紹介をそれぞれさせていただきます。

ということで、現在の認識をまずお話しします。今世界的な変化は、第4次産業革命の中に、われわれ過疎地域もあるということ強く認識すべきと思ひます。いろんな可能性も出てきますし、課題も出てくるし、それにどう対応していくか。これからはデータを使った時代だと思います。そして、もう1つはデジタルというICT、IoTをどんどん使っていく時代になりますので、こういったことも念頭に置いた戦略。特にインターネット・オブ・シングス、IoTとよく聞きますけど、もっともっと広がっていきますから重要だと思ひます。

過疎地ですけど、小なりと言へども、過疎地域と言へども未来に向けてやるべきことやできること、積極果敢にチャレンジしていくことが何よりも大事だろうと思ひます。

そういうことで多久では、いろんなことに取り組みをしています。教育、健康、町づくり、経済のこと

や防災のことなどです。少し詳しく述べてみます。
限られた時間なので急ぎます。

教育については、実は4～5年前に小中一貫教育に取り組みました。全地域、全校、すべてあげて10の小中学校を3つの小中一貫校に変革をし、4年目の今年は義務教育学校にシフトしました。いろんな効果が出てます。

こういったふうに学校の統廃合をしました。統廃合されるところは、いろんな課題や意見もありましたけれど、しっかり聴きながら対応させていただいています。残った施設や跡地の活用としては、例えば児童センターとして利活用することになりました。大変、活況を呈しています。またグランドや体育館、校舎があったところを取り払って、改めて、人工芝を導入した多目的の運動広場を造りました。これも土日などに本当に市内外のサッカーとかいろんなスポーツの関係の方が使って活況です。こういった新しい展開も入れながらやっていくということをしています。

多久には310年目を迎える「孔子廟」があります。そのご縁をもって教育に、取り組んでおりまして、もう長年、20年以上やってますけども「論語カルタ」という取り組みをしています。子どもたちは100の論語を覚えています。

そして、新しい時代を見据えていくと「21世紀

型スキル」という新しい時代の教育が欠かせません。そのことを取り組むためにクラウド環境を整備して、最先端のデジタル環境の会社にもサポートをいただきながら総務省の予算を活用させていただいて、フルクラウドモデルの実験をしながら導入ということを試みました。実際に子どもたちはタブレットPCを使って調べますし、また同時にインタビューや現地視察・調査もして取りまとめものを提言8つにまとめてそれぞれ、市長に提案するということをしました。提案もスカイプを使ってあえて学校と市役所を結んでの通信環境の中で行いました。いわば最先端の動きをする。これも過疎でもできるということです。

こういったことをより進めるためには、国の予算や施策の充実が欠かせませんので、有志の首長さん10数名と、「全国ICT教育首長協議会」を一昨年11月に立ち上げました。互選で私が会長を務めています。117自治体が入ってます。実際に未来に必要な教育をつくっていかうという取り組みをしています。お互いに切磋琢磨が大切と思います。

そこでアンケートを取ったら課題が分かりました。財源の不足、人材の不足、制度の充実。これらについてはこういった項目で提案をしようということを取りまとめて、大きく3つの提案に整理して文部科学大臣にお会いして、具体的に提案をさせ



ていただくなどしてしますので、今日ご参加でない自治体がいらっしゃったらぜひアクセスしていただいて、ご参加いただいたらありがたいと思います。

また合わせて健康のことですけれども、これもIoT、ICTを活用するとPHR（パーソナルヘルスレコード）と言います。つまり個人の健康記録を使えるようにしていくことで、自分の自己管理あるいは地域での管理ができるようになりますし、医療費の抑制や適正化にも資するものでもあります。しかし、まだまだこれは日本で進んでいませんので、チャレンジ的な動きを多久でも始めることにしました。東京大学の名誉教授にサポートしていただいています。

もう1つは若者が非常に頑張ってくれていて、アートを生かす町づくりも取り組むことができています。シャッターをこういうウォールアートに変えたり、壁画を描いたり、あるいは右上にありますのは、これは多久出身で気鋭の芸術家・池田学さんという方が大変緻密で壮大な絵を描かれます。今、高島屋等でも東京でも展示会がありました、あるいは「ボンドアート」ですね、接着剤とポスターカラーを使っての新しいアートを使ったりするアートの動きも出て活況が出てきました。

さらにシェアリングエコノミーです。先ほどの話題の中にもちょっと出ていましたし、審議官のご挨拶にもありましたが、あえてチャレンジしようということで早々にキックオフをして、動き出しを始めました。多久駅の直線500～600mのところに、このコンテナを3つ、つなげたワーキングサポートセンターを立ち上げて、ここをキーステーションにシェアリングエコノミー協会にいらっしゃる、今170社くらいありますけれども、その主要な10社に来ていただいて研修会をしました。市内外どころか県外からも生徒に来ていただいて、これをもとにいろんな実際に仕事をするということが始まっています。

そういうことをしている5つの自治体で「シェアリングシティ宣言」を行いました。これが1つの発信になっていろんな展開になっていければなと思っています。

こういう新しい取り組みも過疎だからできないではなくて、過疎だからこそやってみるということが必要と思っております。特に知恵を出すということが重要かと考えます。

合わせて、IoTを活用してG空間、地図情報を使った防災システムにも今年はチャレンジしようということで、総務省の「IoT実装推進事業」の内定をいただいて、これから取り組みますけれども、地図情報と防災、安心安全を高めるようなシステムを多久でも実験しようとしています。

さらに早稲田大学とのご縁を県が結んでいただきましたので、早稲田大学の後藤研究室の皆さんに入ってきていただいて、いろんな活動をしました。政策提案、アクティブ提案をいただいて、それを受けてつい2週間ほど前ですけども「町歩きゲーム（多久の魅力再発見まち歩きゲーム）」を行って、町を知る、そして活性化につながる。自分たちもやりたいという人たちがどんどん集まってこれています。

こういったことをやっていますが、実は私、市長になったとき、初めて自治省（当時）に行ったときに財政のお願いに行ったときの当時の財政課長、のちに官邸に入られた方ですけど、その方がこういう話をされました。「日本には過疎という言葉があるけれど、欧米には、たぶん欧州にはないよ」と。それぞれの町の中に広場やカフェやパブ、小さな宿があって、どんな小さい町でも、そこに行くと人々が集まって交流したり、泊まったりしてると。身の丈にあった生き方で、そこで人生を謳歌されている。日本はどうだろうか。人が多い、少ないで一喜一憂しないで、本当に幸せな人生をどう生きるのか。その心豊かな人生を実現するステージとしての地域づくりこそ大事ではないか、という話を当時聴きました。本当にそうだなあとと思います。ぜひ、今日お集りの皆さんが「今やらねばいつやる」。できることなら「自分がやらねば誰がやる」ということを思って、お互いに志高く頑張っていきたいな。そのことが過疎地域の活性化、自立につながっていくと思っております。以上です。

飯盛 どうもありがとうございました。事前打ち合わせ通り、秒単位で完璧な時間でした。貴重なお話ありがとうございました。たくさんの方が多久市で生まれていて、実践されているということが分かりましたし、小さな地域だからこそできること、ということをやはり私たちは認識すべきじゃないかなということを考えております。ICTにしても、このような先端的なものを、例えばいろんなドローンを飛ばすとか、こういったこともいろいろその合意形成を取る場合の手続きなどについても、いろいろ可能性も広がっていくわけですので、ぜひ参考にしたいと思います。

横尾市長にお伺いしたいのですが、佐賀県の過疎地域の何か特徴みたいなものはございますでしょうか。

横尾 医療の全国の公立病院の会議の委員をしたり、他の会議とか出ますけれども、佐賀は過疎といっても、まだ恵まれているほうだと私は感じています。中部地方、東北地方、九州山地のど真ん中にある地域では医療の問題もありますし、移動手段についても大変厳しい状況があるということを認識してます。現地の村おこし、町おこしを若いときに手伝ったこともあります。そうすると佐賀とか、例えば多久の市役所からは、1時間で（福岡市）天神のど真ん中に行って乾杯できるんです。福岡空港も佐賀空港も1時間ほどで到着できるわけです。アクセスとして非常に便利。そういった環境に感謝をしながら、さらに踏み込んだ努力をしなければいけないだろう。そのときに、佐賀は実は、全国から来られた方にはなじみがない言葉かもしれませんが、「三夜待（さんやまち）」という言葉があります。これは昔から毎月23日に集まって、みんながいろいろ語らうんですね。これは男の会。女性の会は「十六夜待」というのがありますけれども、まさにそういう会がよくあります。同級生の仲間だったり、親しい活動の仲間だったり、地域の仲間だったり、まあ10人とか、10数名ですけども、ここで語らっているわけですけども、できれ

ば、それを1つの活力源にしていくともあると思います。

もう1つ大事なのがありまして、それは明治維新になるころに、当時お殿様をアドバイスした人たちがいて、その中に次のような言葉があるんですね。

「佐賀には3つの悪い癖がある」と。それは「ねたみ」「優柔不断」「足引っ張り」です。人がなんかやろうとしたら、ねたむ。やってみようとしたら足引っ張る。最後にいろいろそういうことがあって、結局活性化しない、と。これを乗り越えなくてはいけないと言われているんです。まだまだ、こういった部分がどうしても課題としてあるなど。これは見えないことですけども、そういったことに日々われわれはチャレンジしていくということがとても大事です。日々新たな気持ちで1つ、1つやっていく、その仲間をさっきの三夜待でもいいし、ほかの活動でもいいのですが、やはり仲間をつくって一緒にやっていく。そういったことをしていくと、もっともっと佐賀もパワーアップしていんじゃないかと期待をしています。

飯盛 元気の出るお話、ありがとうございました。それでは今のお話は、全体にかかる話でもありますので、またあとでお話をさせていただきたいと思います。それでは続きまして千綿様、自己紹介、活動内容についてご紹介ください。

千綿 佐賀県の西部の方にあります武雄市というところから来ました。武雄市若木町の千綿と申します。私が活動しているのは、いろんな活動の中での1つの形というものを今回、報告をさせていただきたいなと思っています。

私が住んでいる若木町というところは、中山間地域になるんですけども、さっき多久の市長さんが言われていた山手の地域、多久と隣接した地域なんですけれども、人口が減っているということも、過疎地域として指定はされていないと思います。人口は減ってるよねということを考えながら、自分たちが活動してきました。

NPO法人を平成15年に立ち上げたときに、ここを基盤に活動するとしたら、何がいいだろうということを、私たちは建築家、建築関係者の集まりでしたので、空き家を活用してそこに移住者を増やすことで地域の活性化につながらないだろうかという取り組みを最初始めました。

人口の状況ですとか、地域の住宅の空家の状況とかを調べるところから最初、始めました。

そのとき、初めは空家バンクという形でホームページも立ち上げたんですが、そのころは全国で検索をしても綾町か天草か、どこか行政でホームページを持っているぐらいで、ほとんど検索というものができなくて、私たちが始めたときに西日本新聞かなんかに載せてもらってYAHOO!のトピックスでトップに上がったときには、座る暇もないくらい連日、電話がかかってきました。それぐらい田舎暮らしとか、移住とかに興味を持つ方がたくさんいらっしゃるんだなと思って、後押しをしていただきながら、また地域の調査をしていくことになりました。

そのころ、町の中でも、上の方に見えますのはヤマザクラ。ヤマザクラを1本守っていきいたいという人たちですとか、棚田をなんとかしたいという方たちですとか、下の石室みたいに見えるのは「永野の風穴」というんですが、ここは氷室ではなくて風

の穴なんですね。冷蔵庫みたいな1年中一定の温度のする冷蔵庫みたいな場所です。なぜこういうふうにしてあるのかということを調べていこう。守っていこう。知ってほしいという人たちが動き出していました。そういう人たちが地域の中にいるじゃないということをもっともっと伝えながら、移住の支援をすることになります。

空家なんかも地元に入って調査をしていくと「もう壊そうと思っとるもんね」。「こんなところに入っもんおらん」。「入る人はいないよ」という人たちが本当に多くて、もう壊そうと思っているというようなものを「1年間とりあえず預けてください」という感じで預かったりして、今も左の方の写真なんかはカレー屋さんになっています。右の方はまた改修されて住宅になったりもしていますが、たくさんの人たちの問い合わせの中でも要望が多いような古民家という住宅はなかなか武雄市にはなかったもので、ある程度使えるような住宅はすぐうまってしまったんですね。なので、空き地を活用して移住を進めていこうということで、家を建てようということも支援をしていきました。

黒い家は私の家なんですけれども、モデルハウスとしてとりあえず建てようということになって、県産材で土壁の家を造るということに。そのワークショップを「家づくり塾」ということで始めました。



毎週土曜日にとにかく何かの活動をするということをNPOの方で支援をしながらやりまして、本当にたくさんの方たちが、若木の方に遊びに来てくれたり、お話を聞きに来てくれたり、体験をしに来てくれました。それがきっかけで移住をしてきてくださった方もたくさんいらっしゃいます。土壁からあるとき芽が出てきて、芽を育ててみたら稲だったので、稲まで育ててみたりとかして、農作業もちょっと体験したりとかしました。

そういうことをしているうちに、とうとう空家がなく新築もなかなか難しい。貸してくれるところがあったらという話の中で、とりあえず住居はいいから、作業場を貸してくれないだろうか。工房を造りたいんだけど、というような話もありまして、この牛小屋を再生することになりました。

牛小屋はまず新築の住宅をするための倉庫として借りてたんですが、そこを1つ、木工作業の方が工房として借りたということで、自分でこつこつ手を入れながら作業場を造られました。小さい小屋の方は再生を繰り返して、泥壁の小さなお店になりました。

探しているのが住まいだけではなくて、作業場とか店舗にしたいという方も、すごくチャレンジをしたい方の支援という形でつくっていくんですけども、この間も武雄市の方が調査に来られたんですが、やはり、倉庫だったら安くすむんですが、それが店舗になったり、住居になったりすると、固定資産税が上がるよね、ということで調査に来られたんですが、若木町の方には武雄市の市営住宅みたいなものがないので、こういうものに対しての優遇措置とかそういうものがあるといいなと思って、今日は行政の方がたくさん来ておられるので、そういうことをいろいろ考えていただければ助かるなあとと思っています。

そういう活動をしているときに、地域の中でお祭りがなくなるという事態が発生しました。このときは佐賀県がメガソーラーを造るということで、その用地としてお祭り会場がなくなってしまうということです。そのときの話し合いに、私もたまたま参

加をしたんですけれども、これまで24年間本当に大変だったと。地域の人が総出でおもてなしをするということの大変さをみんな語っていて、なかなか畜産部会にも後継者がいない。少ない人数をやり繰りしながら、その2～3時間をみんなでやるということがとても大変と言われて、一旦終了してしまいます。

そのときには地域の中にバイパスが通るよとか、トンネルが通るよとか、太陽光で住宅ができるといいねとか、教育改革で子どもたちが増えるよとか、そういうことを行政がいろいろ言ってくさるもんですから、地域の人たちは行政がやってくれるんやったら、なんもせんでいいんじゃないというような、そういうのりになってきてしまって、これではいけないなと私たちは思いました。自分たちで自分たちの町に楽しみを作り出さないと住んでる喜びとか楽しみとか、子どもたちに伝えるものがなくなってしまうんじゃないかということになりまして、これから新しいものを持ってくるのは大変だから、今やってることとか、やりたいと思っていることだったら何かできるんじゃないかということで、「むらつむぎ」を立ち上げてそれでイベントを始めます。そのときに自分たちの仲間でお店を出したりとか、お金を出しあって資金を集めてイベントをしたりとかします。そのときにいろんな方たち、Iターンの人だけでなく、Uターンの人たちも一緒にじゃあやろうって。本当にこだわってやっている人たちが自分たちも一緒にやりたいということで関わってくださって、それを始めます。その祭りを2年間やりましたら、地区の方たちが、これを若木の祭りとして一緒にやろうということになります。今また、間もなくですけど11月にずっと開催ができるようになりました。

自分たちが考えていた、よその人たちを呼び込むためのイベントという形とはちょっと違うんですけども、町民の人たちが自分たちで「やっぱいせんばいかん（やっぱりしないといけない）」というような、自分たちが動き出さないといけないということを感じてもらえたきっかけだったんじゃない

かなあとします。

さっき写真にもありましたように「ジラカンス（山桜）」のライトアップですとか、風穴の見学会ですとか、そういう一年中水が豊かな地域の水辺の公園ですとか、そういうものを地域の人たちが、それぞれ自分たちの地区だからということであることを動き出したんですね。こんなよそ者がやっぱりやってるから、自分たちもやらなきゃと思ってくださったのかなというふうに思っていますが、そういうふうにいるんな人が動き出すことが可能になるきっかけを自分たちはできたかなと思ってます。これがさらにお互いに収入がアップして、本当にここで暮らし続けられる人が増える、仲間が増えるふうな状況にもっともってなっていけばいいなと思っています。

過疎の部分でも人口の減少という部分があると思いますが、なぜそういうふうにな人が減っているのかということも考えながら、私も婦人会の方でいろいろ活動もさせていただいてますが、なぜ自分たちの地域で人が減ってしまっているのかということちゃんと受け止めて、それを改善していくことも怖がらずに外の人も受け入れていくこと。そして自分たちにできる、ここにしかないもの、田舎のこのお店でしか実現できないもの、体験できないものというのをやっていくというのが目標です。

私もお店を1つやってるんですけど、絶対びかびかになる泥だんごというお店をやっています。400年以上前から焼きものの地域だった。その地域から掘り出された土で作る泥だんごは絶対びかびかになるので、それを楽しみに今いろんな人が遊びに来ていただいています。

小さくても地域の魅力を生かし、活動をするということが、私たちの本当に草の根的な市民の活動の動きを報告させていただきました。ありがとうございました。

飯盛 ありがとうございます。たくさんの活動が生れてらっしゃいますけども、例えば空家のリノベーションなどをやられているということですが、最

初のきっかけは、誰が担ったのでしょうか。

千綿 私だけでないですね。NPOの方で昔ながらの建築技法、土壁ですとか、竹を使った、地元の資材を使った建物の再生をやろうということの勉強会みたいなものから始まりました。

飯盛 それは地域の方々、それとも地域外の方々も。

千綿 地域外の方が多かったですね。

飯盛 最初は、そこから始まったということですね。

千綿 はい。そうです。

飯盛 ありがとうございます。また今の話に関して、いろんな自分たちがやるという人たちが生まれてきたというのは、素晴らしいことだと思います。これはまたあとでお話を伺おうと思います。ありがとうございます。

それでは渡邊様の方から、自己紹介を含めてよろしくをお願いします。

渡邊 皆様、こんにちは。渡邊法子と申します。本日の「人が輝く地域づくり～自発と誇りが地域を変える」というテーマは、私自身もずっと町づくり活動として取り組んできたテーマとぴったりでして、今日は実際に過疎地域、半島地域の観光協会事務局長として住まわせていただいて、地域の皆様と一緒に活動してきた内容につきまして、「きっともって輝く地域の魅力」というふうに題して、ご紹介をさせていただきます。

まず、わが地域ならではの、徹頭徹尾ということで、どの地域にもその地域にしかないオンリーワンの魅力が必ずあります。それぞれのわが地域を見直すことから始めてまいりました。

地域の地形、気候、それからいろいろなそれに

伴う自然。そして、そこから生まれた暮らしの知恵。また、そのことを1番よく知っているのが、地域の方々ということで、自然観光資源が宝であり、よく知っている人つまり地域の地元住民の方こそ主役という考え方です。

地域の経済をやはり活性化していくということを目的にした活動ですので、まずは地域の方にそのことを理解していただく。そういうことも地域の方が訪れてくる人たちに、自分自身の魅力ある地域が「素晴らしいものなのだ」ということをお伝えすることができてはじめて、訪れる方への付加価値であったり、今よく言われているニューツーリズム、それから観光町づくりなどにつながっていく、いわゆる交流をすることによって新たに経済も活性化してくる「異文化交流の新産業」と自分自身で勝手に名付けまして、そんなふうに考えながら取り組んできたわけです。

地域の中には、いずれの地域にも観光業界、物産協会、商工会、行政、市民団体の皆さん、さまざまな方たちがいろんな事業を行っておられます。懸命に自分たちはどう自立して、どう再生して、どう創生していったらいいんだろうかと。予算確保も厳しい中でいろいろな知恵を働かせていらっしゃるんですけども、なかなかそれがうまく進まない。やはり、閉塞感と絶望感にさいなまれているような

状況をよく見受けますけれども、何か地域の水平的なネットワークがまだまだ構築されていないのかなというふうに思ったりもします。

それを作っていくために必要なのが、これまでの予算を組み替えていくという作業ですとか、それから明確なビジョン、みんなが1つになれるような、1つの分かりやすいビジョンが必要かなあというふうに思ってきました。

それを言葉で言うのは簡単なんですけど、なかなか全体が1つになったり、水平的ネットワークも作れないという中で、活動する中で1番感じたことは、やはり地域の、その地元の方の、地域ボランティアと書きましたが、住民の方に参画していただく。その人たちと、その人たちを核にしていく、人と核づくりが大変重要なのではないかなというふうに思いました。

これから、私が住んで行いました京都府京丹後市の事例と、静岡県東伊豆町稲取での事例をご紹介しますので、よろしくお願いいたします。

京都府の京丹後市、本当に丹後半島の突端で、佐賀のように飛行機だとか、あるいは新幹線で福岡から1時間以内で来れるという状況ではございませんで、本当に2次交通、最後には車でしか行くしかないというような突端です。

ここで、まずはとにかく、あるものすべて地元の



地域資源の再認識から始めました。それをテキスト化しまして、最初は商工会の事業でしたけども、徐々に市全体に広げましてオープンカレッジということで、こんなふうに座学としてゼミ形式で、自分の地域はこんなものがあるよというようなことも取材しながら進めてまいりました。10年以上続いたわけですが、そんな中で200人以上の修了生が、今ではNPOを組織しまして、その皆様方を中心に人材育成事業ですとか、いろいろなテキスト販売、それからガイドツアー、そういったものをちゃんと時給1000円で長続きするように進めているような状況です。

そして、地域の人が活躍するような状況を作り出していくわけですが、「あんな丹後半島の端っこに誰が来てくれるんだ」というような質問もありまして、確かにお客さんに来てもらわなきゃ困るなということが次の課題になるわけですが、

実は外から来る人だけが客さんではなくて、地域の中に住んでいる人、あるいは隣接区域の方、九州で言えば九州全体というような形で、いろんなところから呼び込むことばかりではなくて、本当に地元にいる方も1つ交流人口に含まれるわけですし、また地域性によっても千差万別かなと思います。

丹後の場合は、車で来られる方がほとんどで75%の方がドライブスルー。「天橋立」と「城崎温泉」に挟まれておりまして、とにかく車ですーっと通って「そんなところがあったっけ」というような場所でした。ですので、先ほどのNPOが道の駅に拠点を作りまして、道の駅「テンキテンキ村」というところに旅行業を持っていただきまして、インバウンドツアーですとか、着地型旅行商品を販売していただくという取り組みを始めました。ガイドツアーに関しましては、本当に隣接の商工会の女性部の方のツアーですとか、近場ですが、相当な人数来られてまして、大変心配された「誰がガイドを聞きに来るのか」ということもなく回っています。

次に稲取温泉の場合ですが、稲取温泉

は温泉地としてはなかなか有名なところでしたが、どんどんお客様が減っているという状況でした。同じように私が事務局長として入りましたときに、町づくりボランティアを募集しました。そして4つのプロジェクトに分かれていただきまして、「楽しみ感動プロジェクト」「いやし満喫プロジェクト」「歴史ロマン体感プロジェクト」「こらっしえ稲取発信プロジェクト」ということで、まずはあるもの探しから徹底して始めていただきました。

その素材を磨いてどう発信して、さらにどう継続的な事業にするのかということで、住民の皆様さんと一緒に始めたわけですが、本当に面白い商品がたくさんできまして、「こらっしえ稲取大作戦！ あるものさがしがいって発信総合プロジェクト」というプロジェクトになりましたけれども。その中で、今堤防から飛び込んでいる写真がありますが、これは「ラムネ世界大会」ということで稲取温泉の漁港を使って、堤防から飛び降りるイベントでしたり、稲取弁で「うえいら」は「俺たち」という意味ですが、「ウェイラ」という情報誌ですとか、ネイチャーガイド、テキスト、人材養成事業など、やはり住民中心に始めてまいりました。

同時進行で、稲取温泉観光協会と稲取温泉旅館協同組合の皆様にご提案をさせていただいて、これはさっきのプロジェクトのメンバーからのご提案ということで、旅行会社をつくりたいんだと。一応、旅行業法のことをきちっとしながら皆さんが考えた商品を売らなければならないということで、地域丸ごとプロモーション事業として発足することができました。今でいうDMOのようなものですが、本当にこの会社は宿泊送客とか、手配旅行だとか、チケット売買で、現在で10期を越えましたが、一応年商が5000万ぐらいの地域企業として現実に動いております。

そんなような中で、地域の皆さんが地域の中でずっと遊んできたようなものが、楽しいオプションルツアーとして誕生しました。2つぐらいご紹介しますが、「ひっこり大作戦」というのは、見えているあのカニを稲取独特の釣り方で釣って、

それを達人と一緒に味噌汁にして食べるということで、この達人の口が悪くてお客様に「バカやろう」とか言うんですけども、大変大人気のヒット商品として今でも人気を博しています。

また屋号が面白いところで、選挙も屋号でできるところなんですけれども、例えば床屋さんの名前が米屋さんだったり、魚屋さんという米屋さんがあったり、酒屋さんで豆腐屋さんという屋号だったり。屋号と商売が違うんですね。それを「ウソつき通り商店街」として、たくさんのガイドツアーがまた楽しまれています。住民主体で稲取の魅力を発信して、ともに味わっていくという仕組みづくりができあがったということになります。

早口ですみません。こういうあるもの探しを商品化したということで、実は「ニューサマーオレンジ」というおいしいみかんがあるんですけども、それをたったの何カ月しか、みかんとしては味わっていただけなので、年間で味わっていただけないかということで誕生したのが、住民の方の発案で「ニューサマーサイダー」というものができました。これに関しては最初3000本試してつくったものが、翌年には10万本売れたという大ヒット商品になりました。

こんなような形でご紹介させていただきましたのは、私の活動の紹介というよりも地域の方々が本当に自分たちの知恵と、連帯と一生懸命な活動で多くの人に自分たちの地域を知ってもらいたいというようなことから、現在も継続されている魅力ある活動の1つになります。こういった魅力は地域そのものの魅力にもなりますし、どこの地域にもそういう皆様方がいらっしゃいますし、熱き心を持っていらっしゃる、実践力もあるお一人おひとりがいらっしゃる、ぜひ一人ひとりの人間力を生かして、地域の人間力と競争力、協働して創造しながら、大変なこともたくさんあると思いますけど、どうぞ逃げずに粘り強く頑張っていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

飯盛 どうも、ありがとうございました。2つの事

例をもとにお話しいただきましたけれども、地域の資源の再認識というのは本当に大切なことで、過疎の地域にいらっしゃる皆様のところも同じような思いをもっていらっしゃることも多いと思います。地域の資源の再認識をするコツみたいなものはありますか。

渡邊 さっきパネルでちょっとありましたけど、私がやりましたのは、最初に100均で3冊くらい売ってる単語帳カードをメンバーの皆さんにお渡しして宿題を出して、うちの地域にはこれがあるよというのをランダムに持って来ていただきました。最初に何をやりたいかは4つくらいのグループに分かれてましたので、そのテーマに沿ってわが地域の宝、これはみんなに知ってもらいたい。あるいは思い起こしてもう1回味わいたいというものを思い出していただいたんです。

飯盛 それを編集するときはどうされたんですか。

渡邊 最初から私は抜けてまして、すべて住民の方にプロジェクトごとにリーダーもそこで決めていただき、それから決め方もどうやっていくかも、すべて皆様方にお任せをして、そうするとプロジェクトごとに競争しながらいいものができあがっていくというような感じでしたけれども。

飯盛 ありがとうございます。今3人のお話は、基調講演をされた山崎さんの話と非常に近いものがたくさんあったんじゃないかなと思います。それじゃ山崎さん、お話を聴かれて気が付かれたことなど、コメントをお願いしたいと思います。

山崎 ありがとうございます。特に地域を元気にといったときに、必ずお金がたくさん回ることが元気にと思ってしまう場合が多いです。そうすると、「お金が回ったけど結果どうだったの」とは問われないというか、お金が回った、よかった

ねと。その先は何も問われないことが多いんですけど、今のお話をお聴きして感じるのは、お金に行きつくまでが結構大事で、われわれは一体、誰とどう生きていきたいのか。どう働きたいのかということが明確になって、さらにそれを事業化して、最低限のお金が回るためにどうしたらいいのか。ここに市役所の方々がどういうふうに関わればいいのかとか、あるいは制度をどう変えたらいいのかというようなことが出てくる。だからたぶん、結果として出てくるようなものというのは、すごくいいお金の回り方になってるんだろうという気がするんですね。持続可能でなきゃいけないし、お金はやっぱり地域を回らないと地域活性化にならないね、という機運に僕も乗っかろうとして地域でそういう話をして、儲かり始めた地域が1つあったんですけど。

注文がすごい殺到して「がんがん売れるぜ」となったときに、おばちゃんたちから怒られたんですよ。「わたしら、こんなんしたかったんちゃうねん」って言われて、「仕事でやってるのとちゃうしね」と。そのおばちゃんたちは海苔の佃煮を1つの鍋から30瓶だけ作ってたんですけど、テレビで放映されたら注文が1000通きちゃったんですよ。最初は黙って1000通に応えようと一生懸命、海苔の佃煮をぐるぐる回してたんですけど途中でキレて、「わたしらは二の腕が痩せるぐらいしかやりたくないのよ」みたいに言い始めて。だから1000通の人たちに800通ぐらいかな、もう1回「いつまでも待ってくれる人だけ注文し直してください」というメールを出し直したら、800通「いつまでも待ちます」という注文が来て、その人たちは半年くらいで海苔の佃煮1瓶届くのを待っていていたんですけど。届いたら、「この海苔の佃煮は和風スパゲティにすごい合います」とか書いてレシピ書いて送ってくれたり、そういう人たちと商売がしたいという人たちとつながることができた。

だから地域の経済を活性化させることはもちろん大事なんですけど、それを一体どう働いて、どんな人たちと取り引きして、自分たちはそのお金で一

体何をしたいのかということがきっちり定まって、共有できているうえでの、狭い意味での地域経済なんだろうなという気がしていましたので、今日のお三方（さんかた）のお話を聴いていて、すごくプロセスを大切にされているなというのが印象的でしたね。

飯盛 私も全く同感で、地域の経済活性化はきちんとやっていかないといけないし、お金も回っていかないといけない。これは全くその通りなんですけれども、そこまでにいくまでにやらないといけないことも多々あります。いわゆる地域づくりというのは、本当にいろんな分野があって、そういう土壤づくりみたいなことも、考えていかないといけないんですね。その土壤づくりをしたうえで、おそらく地域の経済活性化ということになっていくんだろうなということを私も感じて、山崎さんと全く同じ感想を持った次第でございます。

それでは今、皆様からお話をお伺いしましたので、これからこのテーマに沿った意見交換をしたいと思っています。まず最初に、今日のパネルディスカッションのタイトルでもあります「自発と誇りが地域を変える」、これは全くその通りだというふうに思います。今日のいろんな発表の中にもありましたし、山崎さんの話の中にもあったと思います。では、地域において、地域の方々の誇り、思いを醸成して、自発的な、いろんな活動を生み出すためには具体的にどういうことに気を付けたらいいのか。何かそのときのポイントはなんなのかということとを今日、いろいろと実践をされている、いろいろとアドバイスされている方々からお話をお伺いしたいと思っております。何か誇りを生み出す、そして何かの活動、自発的、自発性を生み出すために、こういうことはあり得るんじゃないかということがあれば挙手でお願いしたいと思います。

横尾 先ほどちょっと簡単にしかお話しできなかったんですけど、県とのタイアップの関係で早稲田大学に入ってきていただいてやっているのです

けれども、面白いことがありました。私はもともと昔「ガタリンピック」を仕掛けたり、いろいろムラおこしの手伝いをしていたので感じてるのですけれど、「知らないことには好きにならない」のですね。好きになったら、いろんなことをやりたくなるのですけど。まさにそういったことをやる機会がありました。

有志の方々に、市内5町から集まっていたいで、ワークショップするのです。町別に集まっていますが、まさに単語カードじゃないけれども、ポストイットを使いながら好きなところ、気になるところ、なんとかしたいところ、どんどん出してもらう。それを学生さんのアドバイスも活かしながら、ファシリテーターしていただきながら整理していくと「これみんな大好きだよね」「これもっとなんとかしたいよね」、1人の人が言っているけど、実はみんなそうだったということが分かる訳ですね。そうすると「何かしようよ」になるわけですね。

実際、この間、1年ぐらいいしか経ってませんが、例えば桜の名所があったけど、みんなで下草刈りしてきれいにしようとか。どうせなら桜を見る会をしようとか。動きが実際にあってすでに活発に動き出してます。先ほどの町歩きゲームもどうせやるならやろうということで、有志の方々が集って実施されてます。あるいは、全く別の動きですけども、あるお医者さんがトレイルランニングが好きでやりたいと言い出して、市庁舎に仲間と一緒に相談に来られて「やりましょう」となったんですね。

「市は何をしたらいいですか」と言ったら、怪我しないように場所貸しとサポートだけでいいから、と。あとはみんなでボランティアを呼びかけようと、私も声かけたんですけど。そうすると実際にこれ半年ぐらいで実現してしまったんですね。来たトライアスロンとかやる人たちも大変感激されて、今年11月2回目があります。

こうやって知ることで好きなこと、好きなことでやってみたいことをチャレンジすればいいと思うんですよ。どうしても農耕民族・日本人はちゃんと成

功すると分かってないとしにくいという腰の重さがあるのですけど、思い切ってやってみるということを含んで励ましたり、そういうチャンスをつくるのが、まず大事だなと思います。そのためには地域にあるよさ、伝統等を知ることが大事です。

そのためには、ぜひ、団塊の世代以前の方、長老の方々に、例えば「この仏像は」とか「この史跡は」「この川は」「この洞窟は」とか、こんな意味、こんな歴史、こんなことがあるんだということを語っていただいて、そのことを語ることによって、年代を超えた交流もできるし、「じゃあ、おじいちゃん、おばあちゃん一緒にやろうか」とか、「若者集めて一緒にやろうか」とか、そういうことが新しい活力につながっていくので、ぜひ、そういったことができるように、いろんな仕掛け、あるいは場づくりということがまず大事かなと。そのためには「知る」ということを基本において、ぜひやっていったらいいなと感じてます。

飯盛 ありがとうございます。まず知ること、好きになること。知ったことが好きになって、そこから始まっていくだろうということですが、全くその通りだと思います。今おっしゃった、最初にチャレンジする人。このような人を、地域の中から次から次へと生み出していくような仕掛けというのは例えばどういうことがありますか。

横尾 足早に紹介したスライドの中にも出ている人たちが、それをやってらっしゃるんです。やった人たちは不思議なDNAを持っているというか、1つの熱意をもっていると思うんですね。これをやっぱり伸ばした方がいいと思うんです。私はそういう人に出会ったら「どんどんやって。君ならやれるよ」と。(マラソンの)高橋尚子さんがメダルを取るようになったように、お互いにやっぱり励ますことが大事だと思うんですよ。「それできないよ」「それ難しいでしょう。こんな問題があるから」とついつい行政でありがちな緻密な分析と非常に堅い発想ではなくて、柔軟に考えながらやってみるとい

うことをやる。やってみるによって変化が生まれますから、そしたらやれるんじゃないかなと思います。

さっき少しご紹介したシェアリングエコノミーも昨日、審議官にも視察してもらっていますけども、やってみるといところから始まっているわけですよ。仮にやってなかったら、未だに私はどっかの文献の話しかできなくて、政府からくる「最近、内閣府も動き始めたんだ」という資料を職員に配って市民の皆さんにご紹介して、シェアエコやってみましょうかという程度しかできないと思います。たまたまキックオフでやってみたので、これはできそうだなとか。こういうことは意味があるとか。もっとこんなことをしたらいいと気づくようになるんですね。

ぜひ、やってみたいという方は実は町の中にいっぱいいらっしゃいます。ムラおこし、まちおこしで走り回っているときに分かったんですけど、「俺もこの地域ずっと生きていくし、他人のことじゃないのでやってみたい」という人はいっぱいいます。でも何がないかというと、みんなの前でいうのは恥ずかしいんですね。飲み会のときに言うとか「あいっただけ何か言ってるよ」となりがちです。でも「それに勇気を持って言ってみるとどうですか」という場を1回、作りました。いろんなところに。そうすると「実は俺もなんだ」「私もなんだ」という人がいっぱいおられます。ですから、たまには町の話や、こういう地域づくりの話を語りながら、飲みかわすとか食べるとか、一緒にひと時を過ごすとか、そういうのをぜひしていただいて、共感できる仲間にはフィーリングの合う人がいたら、その人と一緒に「やってみようか」というふうにやればいいと思います。そういう熱意があれば役所に行ってください。役所がよく断る理由で、私が言っているのはよく言われました。「予算がない」「事業計画、総合計画に入っていない」「突然言われても困る」。最後、口説きに口説いても「前例がない」と言われるのがだいたい断られるパターンですけど、前例がなくてもやらなくてはいけないときはあると思います。幸い

最近、金額の多寡はありますが、ふるさと納税というのがあるので、「その他、市長が使っているもの」に寄付している方が結構おられますので、そういうのを例えば活用するとか、あるいはちょっと大きい仕掛けだったら、いろんな省庁がソフト予算というのをもちますので、「今年は無理だけど来年は一緒にやってみようか」とか、そういうやり取りの中から役所も市民サイドに近づくし、市民の方も先ほど皆さんがおっしゃったように「役所ばかり頼ったって（頼っても）始まらないよ」と、「この地域は私たちがつくるんだよ」という機運を伸ばしていただくことがよりよい地域づくりかなと考えています。

飯盛 先ほどの山崎さんの参加型のモデルの1つですね。

横尾 そうですね。そういうふうになっていくと思います。

飯盛 ありがとうございます。まさにお隣の千綿さんは、実施された方だと思うんですが。

千綿 そうですね。「自発」の前に「誇り」というものが、どれくらいあるのかなというのが、本当に田舎の人たちは控えめで、自分たちが誇りとしているものが何なのかというものをきちんと確認しないままいるような気がします。空家の相談を各地域で「空家があったら情報を出してください。住みたい方がいらっしゃるときにはご案内をしますから」ということを話していくと「自分たちの町は自分たちの今住んでる人間でいい」「よそから人こんで（来ないで）いい」「自分たちでなんとかしたいけん（したいから）、よそから人こんでいい」「逆にそういう人たちがよそから来られたら乱される」「それが怖い」というくらい、たぶん、外の人に向かって自分たちの町がこうありたいとか、こういうところが素敵ということの内輪だけでなあなあで過ごしてくることに安心感を得てたんじゃないかな

と思います。

でも、外に向かって「うちはこちらがあるよ」「これがあるけん（あるから）、若い人が残ってくれるよ」「人が来てくれるよ」ということをちゃんとと言えるようになるっていうことが、まず大事なのかなって思っていて、外に向けて空家の情報を出すということとともに、地域の情報を出していくんですよ。ここには何がありますか。どんな人が住んでいますか。そこがポイントになって移住に結びつくんで、地域の魅力をまず自分たちで再確認をしていただく。そして「だから来てほしい」「だからそこに人が増えてほしい」、「もっとここに住み続ける人が増えてほしい」ということをみんなで共有する、確認するということが大事なと。そこがあったうえで、やっと自発的に「そのために何をしようか」ということが出てくるんじゃないかなあとやってみて思っています。

飯盛 なるほど。「誇りを持て」と言ってもなかなか誇りって持ちにくいじゃないですか。千綿さんはコーディネーターのような役割を果たされたと考えてよろしいですか。

千綿 そうですね。外から見て何がいいかということは、ちょっとずつ小さなことをチャレンジするしかないんですよ。中の人ができなければ、外の人間が集まってでも、そこで何かイベントをするなりして町を見てもらったりとか、「これいいよね」、さっきもちょっと写真を出してましたけど、大きな茅葺き屋根の家の屋根換え現場を見に来る人たちが、ただそれだけの人たちがいらっしゃったりとか。そういうことを見てもらうこと。よそからの人たちがわざわざ来てくれるそういう資源がこの地域にあるということ、外の人たちの評価というものもちゃんと伝える、住民の人に伝えるということが大事なと思っています。

飯盛 なるほど。ありがとうございます。ほかに何か誇りを持ってもらって自主性、自発性を発揮す

るにはどうすればいいか。はい。どうぞ。

渡邊 先ほどちょっと紹介しましたが、丹後の事例でガイド、地域案内人養成と申しあげましたけれども、そういう堅いテーマで募集するとなかなか人が集まらないんですね。先ほど来の話の通り、自分の地域の誇りを持って伝えられる人になってほしいという思いから、そういう講座をするんですけど、逆にそういうふうに「ガイドさんになってください」とか、「案内人になってください」ということではなくて「もっと地域を知りましょうよ」とか。そのぐらいのテーマとしては柔らかく、誰もが「私も参加してもいいのかな」というように入り口を広げて、実際、ゼミ形式で座学で一緒に丸まってやっていきますと、それぞれの地域、自分自身の子どものころの話とか、誇りを持ってお話をされて、最後の現地研修というので、バスで一人ひとり、自分の地域のところはマイクを持ってもらうんですけど、本当に目を輝かせて堂々とお話をなさって。だからもともと自分の中にあるものが喜ばれる。皆さんが聞いて「へえ」と言ってくれるという体感、体験をして初めて伝えることが楽しいんだというふうに変わっていったかなと。実際に皆さんを見ていて、その変化がうれしかったですね。

飯盛 最初の1歩のところで「地域のことをもっと知りましょう」という集め方をされて、何人か来られた方々が、ということなんですが、おそらくお客様に喜んでいただいたという体験は、必ず何か次につなげようとか、何かもっとやろうという気になるんですけども、そこまでいく勇気付けとか、動機付けとか、そのへんはどのような工夫をされたんですか。

渡邊 テーマは「もっと知りたい。伝えたい丹後の魅力」みたいな感じにしまして、現地研修が終わったあとは、まず自分たちで今度、同じ市内なんですけど合併してますので海側の人は山のことは知らないです。山の人は海のことを知らないという

ことがあって市内を回る。先ほどお伝えしたように自分の地域のことを話していただくと、そこに来た10数人の方々がみんな目を輝かせて「へえ。そんな歴史がここにあったんだ」と驚き、感動がありまして、まさか自分が住んでいる市にこんなにすごい歴史があったんだ。そこらへんから聞いた方も、それから伝えた方もものすごく化学反応を起こしていくと思うんです。そして、少しモニターツアー的のほかの団体の方に来ていただいて、ガイドを実践してやっていただくというような形を取って、徐々に自分たちで、今や本当に2週間に1度ぐらいは集まって研鑽を常に皆さん方の中でやってるという形になったようです。

飯盛 最初の仕掛けというか、一番最初の、丹後の歴史とか文化とか、何か決まったものというか、そういうものを用意されていたわけですか。それともみんなで探そうみたいな感じでしょうか。

渡邊 最初は、丹後の場合は大学生のゼミをはじめとして、本当に小さな資源を全部、掘り起こして、それをテキスト化したということから始まりました。そのテキスト化された中から、ガイドツアーになりそうなものを、全部出したいですけどテキストにやっぱりあまり多く載せてもですので、簡単に

しゃべれるようにこちら側が本を作って、そして皆さんと学んだと。

稲取の場合は全部それを町民の方がやってくれました。やっぱり歴史ロマンの方はそれに関するもの、いやし満喫プロジェクトの方は山野草だとか、そういったものに関するものすべて自分たちの手で。地元にいっちゃるんですね。郷土史の先生とか、先生までいなくてもよく知っている方とか、そういった方に取材したり、町営のいろいろな図書館に行っているいろいろなものを掘り起こして、ご自身たちで「イナペディア」、稲取のウィキペディアでイナペディアというのを作って、それを小さなカードにしたりして実践が始まりました。

飯盛 今このように地域の方々のいろんな知識とか、思い出とかを地域の資源にしようという活動がいろんなところで行われています。例えば滋賀県立大学の上田先生などが中心としてやってらっしゃるのが、「心象絵図」という、地域の高齢の方々の思い出は立派な地域の資源になるというプロジェクトです、例えば昔の地図を用意して、今は川は小さくなって汚れてしまったけれども昔はとてもきれいで魚がいっぱいいて、ここで泳いでいたということがあれば、地図に子どもたちが川で泳いでいる姿がちゃんと書き込まれていて、それを大き



な絵屏風にするんですね。三双（さんそう）とかの絵屏風に、それをもとに例えば高齢の方が古地図みたいな絵屏風をもとに子どもたちに「昔の地域はこうだったんだよ」ということを説明して多世代で交流をする。そして、その地域の文化を継承するというようなことを、ずっと繰り返していらしゃいます。

今まさに丹後も稲取も、そういうその地域のいろんな思い出とか文化とかそういうものを資源としてきちんと記述をしてみんなに、一部は参加型にして展開をされているということだったと思います。

山崎さん、地域の方の誇り、気付きをつくったりとか自発性を生み出す、今日のお話はすべてが地域の方々の自発性に基づくところなんですが、お話の端々に貴重なノウハウがいっぱいあったというのは、私も気が付いてますけども、山崎さん意識して地域の方の自発性とか誇りを生み出すことでやってらっしゃることは何かありますか。

山崎 今の、昔のようすを1つの大きな絵屏風にしていくというの、すごくいい情報だなと思いましたし、地域の資源をテキスト化してずらっと並べてみんなて共有化していくのもいい方法だなと思いましたね。「これでいいんだ」というふうに地域の人たちが共有する場をどこかでつくる。それが絵であったとしても、文字であったとしても、目指すべき地域あるいはかつての地域、これでいいと言える状態を共有していくというのは、わりと重視して進めている気がします。

変な例えなんですけど「昼飯食いにいこうよ」と言って皆さんは友だち誘ったり、後輩誘ったり奢ってやろうかなと思っているときに「何、食いたい」と言ったら、後輩が「うどんがいいです」と言ったら若干カチンときますね。「うどんがいい」ってどういうことだよと。奢ってやろうと言ってんの「うどんがいい」では、あまりよくねえ、と。「うどんがいい」というのは俺に失礼だし、そもそもうどんに失礼ですよ。ね。「うどんがいい」ってどういうことだ、と。そ

こは「うどんがいい」と言ってほしいわけです。何がいいのかというのをきっちり言ってくれと。だから「で」じゃだめなんだ。「で」じゃなくて「が」でいこうと。

千綿さんがおっしゃったみたいに、この地域にはこういういいところが、「これがいいんです」「あれがいいんです」「これがいいんです」。だから地域で何かいいところを発信していこうと思うと、まず「で」じゃなくて「が」でいこうと。「うちはもうこれでいいから。ほかの人なんか入ってこんでいいんです」という集落の人がいると。「このままでいいです」の「で」じゃなくて、「が」で話してくれというのが多いですが、これが完成形ではない気がするんですよ。「あれがいい」「これがいい」ってみんながたくさん出してくるじゃないですか。それを絵図にまとめてもいいし、テキストにまとめてもいいですが、みんなの「が」がたくさん集まったときに、全体を見て「ああ、これでいいんだ」というふうに得心するところがどこかに出てくるんですよ。2番目に出てきた「で」はネガティブじゃないんですよ。最初のやつは消極的な「で」なんですよ。「これでいいんです」の「で」は。だけど、そうじゃなくて確信を持って、「これでいい」とみんなが言える状態というのは、地域の誇りを共有したときなんだと思うんですよ。

その2番目の「で」が出てくるまで、まずは「が」をいっぱい出してもらおうということです。「これがいい」「あれがいい」というのをいっぱい出してもらって、全体眺めて共有して「われわれ目指すのはここだよ」「これでいいよね」というふうに自信を持って言える状態というのが誇りなんだろうと思います。だから「自発と誇り」というくくりで言うと、自発の部分が「が」ですよ。ね。「これが」「あれが」「私はこれがやりたい」「あれがやりたい」「あれがいい」。それがたくさん出ると、たぶん、誇りにつながっていくんだと思いますが、「これでいい」と言える状況をつくる。この2つをどうやって接続していくかですよ。ね。一番最初に出てきた「で」を乗り越えて、「が」をたくさん出して、「が」

を集めて、2番目に出てくる「で」をどういうふうにつくるか。そのようなことが必要だといつも思っていますね。

飯盛 なるほど。たぶん現場で日々奮闘されている千綿さんなんかは、気を付けてらっしゃることや、今の山崎さんの話で腑に落ちたというようなことはありませんか。

千綿 本当にその通りだなと思います。「これでいい」となんとなく「このまんまでいい。変わらなくてもいい」というような消極的な気持ちであることが、やっぱりストップをかけてしまっているところがあるので、よさを拾い出して書こうという渡邊さんが言われているような、そういうことをみんなで、町民全員で、地域の人たち全員でやると本当に「これがいいんだ」というのが見えてくるんじゃないかなというのは、本当にすごく思いますね。

私たち、普段生活していてもなかなか知らない地域の魅力というのはいっぱいあるんですね。私も武雄市の若木町の隣の町で生まれ育ったんですけど、武雄市には樹齢3000年の大楠、楠の木が3本もあるんですよ。でも、それを知らずに成人するまで、若木に戻ってくるまで、帰って来るまで、Uターンしてくるまで、知らずにいたんですね。そういうことを誰も、ここにこんなにすごい大楠があるということ、「が」を付けて言わなかったというのが、すごくもったいなさ過ぎるというのを、先ほど質問されたときに答えたかったんですけど、ちゃんと伝えられる人がいなかった。じゃあ、私が伝えると言って、仲間たちと一緒に3本の大楠をめぐるツアーを試してみたりとか、そういうところで食事をしてみたい、それを伝えようという気持ちが、本当に「が」があるとやれたんだなあというのが、本当にまた改めて気付きました。

飯盛 なるほど。ありがとうございます。ほかに何か皆さんの話を伺って、自発性を生み出そうとか、いろんな活動を生み出そうとするとときに気を付け

てらっしゃることとか、大切だなと思われているポイント、何か付け加えはありますか。お願いします。

横尾 誇りを輝かせるには、ほこり（埃）をかぶっているところを、ほこり（埃）を払って、違うほこり（誇り）に変える。そういうことが大事なあとと思うんです。

例えば、私どものところに若木との境に、女山峠（おんなやまとうげ）というところがあるんですけど、今度トンネルになるんです。そこに西多久というエリアがあるんですけども、伝統野菜、全国どこでもあると思うんですよ。その地域にしかない野菜ですね。伝統的な野菜として「女山大根」すぐそばには「桐岡なす」とかがある。大根に関して、大根だけでフルコースとかをつくってみたりとか。栽培されている方々がおられて、少し加工もしようとしていたりしているんです。たまたま最近報道で話題になると、翌日電話が次々鳴るんです。それを聞きつけた関西が関東かのバイヤーさんが来られて、ネットに書かれちゃうと、また来ちゃってるんですね。ですから、きっかけはいつ来るか分からないんですけど、それに応えていこうという気持ちのある生産農家の、もちろん年長の方も大変たくさんおられて数は多くないんですけども、ご苦労は多いと思うんですけども、それがあ意味うれしいチャレンジになっているわけですね。

そういうチャンスを生かすときに励ましてあげたり、われわれ行政はしっかりサポートしなきゃいけないと思うし、地域の皆さんも一部のグループが最初はスタートかもしれないけれど、それはしっかりサポートするような、応援するような、そんな空気をいろんなところにつくっていくと、それぞれにどんどん出てくると思います。

今日、聞いてびっくりしたと言ったら失礼かもしれませんが、3000年の楠は知らなかったですね。逆にいうと学校教育も抜けてるところがこれまでであって、地域のいいものを知らなきゃいけない。ナイル川、ミシシッピー川は知っているのに裏の川は

知らないとか、そういうことはだめなので、そういう歴史的なものとかランドマークとなるようなものは、ただ教科書で教えるんじゃないで、その場に行って触れて五感で感じて「ああ、こういうことなんだ」「こういうものなんだ」と、そういうものをぜひ活動の中で教えていただければ、お子さんたちもふるさとの歌を唄うときもイメージが変わるし、ふるさとに帰ってくるとき、通うときの思いも変わるんじゃないかと思いますね。

飯盛 子どものころから何か触れておくというのは、大事ですね。例えば、横尾市長のところは「論語カルタ」がありますよね。あれはうちも子どもも持ってるんですけども、あれで論語のことを勉強している。勉強しているわけではないんですが、遊びながら学んでますよね。

横尾 カルタで遊びながら覚えていきます。保育園・幼稚園ぐらいから覚えはじめて小学校中学年、高学年になると100枚ぐらい覚えてるんですね。多久の子どもたちにとっては当たり前なんですけど、市外に出て行くととてもユニークなことなので、みんながびっくりされるとよく聞きます。私が期待しているのは、好きな言葉が論語の中に1つか2つあれば、困ったときとか、頑張るときに力になる言葉になると思うのです。将来、ひょっとして仕事に苦しんで悩むときに、あの言葉で頑張ろうとか、そういえばこうことを学んだとか、その辺の助けになったらいいし、そういう願いを込めてカルタを百人一首方式で作ってやってます。ぜひこういったことも、地域、地域でたぶんどけることはいっぱいあると思うのです。

飯盛 全国いろんな地域で、何々カルタがありますね。ほかに何か自発性とか、誇りとか。ありますか。

渡邊 活動の中で感じてきたのは、地域の方の中によそからお嫁に来た方とか、1回外に出た方と

か、その、1度自分の地域から離れた方、新たに来たの方が、先ほど来、子どものころから知ってたり、当たり前風景だったり、当たり前食べ物だったり、当たり前のおとぎ話が、伝説が、本当に珍しいものだったりと感じて、そういった方々をぜひ糾合して、一緒に声をかけあって参加していただくというのが、大きな活動の相乗効果を生むような気がします。

飯盛 そうですね。まさにおっしゃる通りで、山崎さんの活動なども結局、山崎さんがその土地の方じゃなくて、山崎さんの目で見たことを地域の方がいろいろ生かしてらっしゃるわけです。私たちの研究室もいろんな地域にお伺いをしていますが、やはり、いろんな地域の方々から、全く初めて来た学生たちが多いわけですけども、視点が参考になったとよくおっしゃっていただきます。なので、よその人の目を大事にするというのは大切なポイントじゃないかなと思います。

後半、「人」のことについての話がいくつも出てきました。やはり地域づくりは人づくりとよく言われます。これは過疎地域でも全く同じことだと思っています。自発、誇りを持ってもらうためには、いろんなアイデア、いろんな工夫してらっしゃることをお話しいただきましたけれども、そういうことを「展開できる人」というのを育成しなければいけないかもしれません。確保したり、育成しなければいけないかもしれませんし、いろんなパターンの人、山崎さんのお話ですと『縮充』するためにも活発に活動するような人たちがもっと、もっと現れてくるというような社会の話がされました。縮充の中にも人の確保、育成というものが非常に重要になってくると思います。

ただ、これはなかなか難しくて成果、例えばテストをしていい点数が出るという分野でもないわけですね。そういった中で、どうやってそういう人を確保したり、育成をしたり、縮充の社会に向けてどういうふうにすればいいかということ、皆さんアイデアなり、お考えがあれば教えていただ

きたいと思いますがいかがでしょうか。

千綿さんはまさに実践の中でいろんな、おそらく気が付いて意識してやってらっしゃることと、たぶんそうではないけども、意識はされてないけれども端から見ていてこういうことをやってらっしゃるんだなと気が付くようなことがあるかと思いますが、いかがでしょうか。

千綿 移住をすすめる中で、まずそこにわざわざ来てくださるという方は、人材としては有望な方なんです。その地域が本当に好きで来てくださるので、その地域の環境とかの魅力を感じて来てくださるということがまず大きな力ですね。その方たちの子どもさんたちというのは、自分が好きな環境のことをまたちゃんと伝えてくださるんですね。なので、またその子どもさんたち、そして移住してきてくださった方たちとか、「地域が好き」と言っ一緒に活動してくださる、今言われたようなお嫁さんですとか、Uターンして帰ってこられた方たちも「ここが好き」というところがあって地域の活動ですとか、PTAの活動ですとか、婦人会の活動ですとかに参加をされると意見をちゃんと、思っていることを伝えてくださるようになるんですね。なので、すごく貴重な人材だなと思いますし、そういう人たちと一緒に取り組めることを、また企画をしたいと思っていますね。

横尾市長が言われたように、本当に学校教育というのが、すごく力が必要としていることなんじゃないかなと思います。若木の中でも小さな小学校がありますけれども、本当に地域の人たちが今入って「花まる学習」とか地域の人と一緒に、本当に花丸を付けるような勉強をされてるんですけど、子どもたちがさらに地域の人たちと密接につながりながら、地域のことを本当に誇りとしていることを伝え聞いてくれるといいなという取り組みにもっともっと広がって、つながっていけばいいなと思うので、教育というのはすごく重視しないといけないなと。数少ない子どもたちなので、私たちももっともっと学校と関わっていきたいと思っていますね。

飯盛 学校の中で出会った人とかを、いろいろ地域づくりに関しても声をかけていくということですか。

千綿 はい。そうですね。PTAの方で意見をどんどん言われるような方は、結構関心を持ってくださってるんですよね。学校のことについても、いろいろ直接は言えないけど話し合う仲間がほしいとか、そういう話し合う場を私たちの活動の中でつくってみたり、三夜待ではないですけど、そこまできっちりしたものではないけども、「おしゃべり会をするけん（から）、満月と新月の日に集まらん（集まらない）？」とか、ちょっとしたおしゃべり会をすることで意見を出しやすくしたり、活動の一步につながるような取り組みはしてみたりしています。

飯盛 いくつか「集まらん（集まらない）」というのは、千綿さんから声をかけるのですか。

千綿 そうですね。道で会ったときに、話したいと言われる方もいらっしゃいますし、そういう場をできるだけつくっていきなと思って声かけをしています。

飯盛 しつこいようですが、そういう声かけをする人をどうやって見つけるのでしょうか。

千綿 反応してくださる方ですね。できるだけ私自身も地域の活動にどんどんいろんな形で出ていくようにしているので、ただ単純に「頑張ってるね」じゃなくて、自分もこういうことをしたいなとか、こういうことで困っているというのを私に問いかけてくださったり、私の仲間たちみんななんですけど、そういう人たちに相談したりしてくれる人たちを、ちゃんとつなげていこうと思ってやっています。

飯盛 これは非常に肝（きも）となる部分だと思うんですね。地域づくり、過疎振興についても、ど

うしても担い手は大切なポイントになりますので、いろいろと地域づくりのプロジェクトを推進しよう、事業を推進されようとされている方は、本当に、そこは気をつけてらっしゃるんじゃないかなと思います、いかがでしょうか。

千綿 PTAの活動とか、婦人会の活動とか、地区の活動に参加したくないというような動きも最近すごく多いと思うんですけど、そこからきっと何か新しい1歩が始まるんじゃないかなと思うので、ぜひそういうものに参加しながら変えていったり、新しい活動をできるような環境づくりができるいいなと思うので、どんどんそういう地域活動にみんなが楽しんで参加できるようになればいいなと思います。

飯盛 ありがとうございます。ほかにいかがでしょう。

横尾 人が輝くためには、人がやっぱり笑顔とか元気にならなきゃいけないと思うんですね。そうするとやっぱり、コツは集うときに楽しい仕掛けを仕掛けていくことだと思うんですよ。たまたま多久の例ですけども、有志の市民のボランティア的な人々と市職員の人たちが日常会って、声をかけて、多久に居てハッピーになろうということで、「ハピたくらぶ」というのをつくったんですね。言葉を重ねた名称ですけど、なんと「ハピたくバーガー」というのをつくったのです。多久は大変有名なまんじゅうがあって「岸川まんじゅう」というんですけど、これをバンズにして、中にいろんな旬のものを入れてつくります。それで何をやるかというと、祭りやイベントのときには仮店舗出して、収益が若干出るんですがそれは自分たちの飲み食いではなく、次の活動に使おうということでやってらっしゃるんですね。そういう仲間の中から楽しみながら、次の活動、次の展開ということをやっているとなっています。そこに人がいますので、出会った人たちはまた次の輪、違う輪をつくっていくと

いうことがあります。

それと、歴史が50年ぐらい経ってますけれども「山笠まつり」というのがあって、この中に若手の会があります。若衆会といいます。途中から「提灯山」が始まって、2基目ができて、最近何を始めているかというともっと盛り上げようということで、いろんな人たちに参加してもらうようになってきたんですね。市の方も「TABICA (タビカ)」というシェアリングエコノミーのツアー関係の着地型ツアーとリンクをしようと思ってますが、そこに体験に来ませんか、担ぎに来ませんかということと、それでもまだまだ資金が必要ということで、彼らと色々な話をしたら、自ら進んでクラウドファンディングをやりたいとなりました。「いろんな知恵とか情報を市長教えてよ」といろいろディスカッションしましたけど、そういうふうな動きが出てきます。

そうすると、自分の友だちがただ単純な飲み友だちじゃなくて、ある目標のために一緒にやろうと仲間になっていったりして、それを見てる違う友だちとか違う関わりの人が入ってきて、これが1つのグループになって「これでなんかやっていこうか」ということになっていきますので、何ごととも楽しくやるということを得ながら、出会いとか人のつながりをととても大事にしながら、どんどん仕掛けていけばいいと思うんですよ。一発目から10割打者のホームランバッターなんていませんので、10個やって3割できればイチローぐらいの打率ですね。さらに1割でも十分じゃないかとトライアルする、やってみる。そのことが1つ、1つ意味があるし、そのことでいろんな出会いもできるんだから、思い切ってやっていこうとなっていく。そういう気風や文化をぜひ、広げていきたいと思っていますし、新しい若い人たちの動きとかは積極的に応援していきたいと思っています。

飯盛 ありがとうございます。元気な地域というのは、非常に多様性があって、いろんなことが次から次に起こっているということをよく言われますので、そういう人がいるということと、人がいるこ

とによる文化ができているということが、極めて重要じゃないかなと思っています。今の発表ですと、ICTを使ったり、いろんな面白いプロジェクトとか起こってますので期待しています。

渡邊さんいかがでしょう。

渡邊 最初から、「この人は」という人はなかなか出てこないと思うんですね。特に地域にいきますと、「この指止まれ」をなかなか言えないという状況も多いので、ある程度仕掛ける側の人が必要でしょうし、ビジョンを示して、先ほど言ったように分かりやすく、誰もが参加できるような形で、しかも出入り自由、なるべく多くの人に参加していただきながら、放っておくとちゃんとそこでリーダーシップを取る人が出てくるんですね。PTA会長経験者とか、普段から地域に何か貢献したいと思っているとか、そういった方々がちゃんとまとめていってくださるので、大人になってからのそういう集まりですから、それぞれ皆さん経験もされているので、ある意味お任せしながら、自由にやっていただく中でビジョンだけはしっかり示されておけば、むしろ面白いものが人も含めてたくさん、その地域ならではのすばらしい宝として輝いてくるのかなと思います。

飯盛 たぶん、渡邊さんは、よそから入られた立場ということで、そういうやり方もあり得るんじゃないかということですが、私もなんとなくその理解ができるんですが、プラス何かがあると、例えばそういう場をつくって放っておけばうまくいくこともあるでしょうが何かノウハウはありますか。

渡邊 プロジェクトにちゃんとテーマを、そのテーマを分かりやすく、誰もが自分も参加できるなというビジョンもですけどテーマも、プロジェクトの名前も常に分かりやすくして、そこにそういうのをやってみたいなという人に集っていただく。基本がそこにできているので、そこからの意見の出し合い。もう1つ必ず私が言うのは、地域というとうして

も先輩、後輩とか、あの人が社長で、自分が納入業者とか、いろんなしがらみがあって、この人の前では何も言えないとかいうことがあるときもあるので、それをまずすべてを外してください。肩書とか年齢とか男女の別とか、いっさいをまず肩から抜いていただいて、ただし自分の経験とか、今のお立場とかそういったことは活動に生かしていただいて自由闊達な意見をくみ交わしてくださいということをお願いします。

飯盛 対等性ですね。そのへんは数々のプロジェクトを推進してこられた山崎さんはいろんなノウハウをお持ちだと思います。担い手の確保、もしくは育成、もしくはそこから派生して人がいろいろ集っていく場づくりとか、例えばどういうことを考えてらっしゃいますか。

山崎 横尾市長がおっしゃったような「楽しい」みたいなことは、すごく重要だなと思います。これは俺のパソコンを前に示すことができるんですかね。示せれば何か1つ、2つお示ししようかなと思うんですけど。人々は正しいだけじゃなかなか動かないよという話を、先ほどちょっとさせていただきましたけど、行動経済学が、自発するとき、どういうふうに動き出すのかということを明らかにしていますね。「システム1」と「システム2」と呼ばれてますけど、基本的に人間の脳に、これをやるかどうか、自発的に何か行動を起こすかどうかといったときに、最初に入ってくる判断はシステム1の方で、感性寄りなんですね。直感的で、そのプロジェクトは美しいか、おいしいか、かわいいか、カッコいいか、楽しそうか、気持ちよさそうか。要するに感性の方で判断して「楽しそうだったら、やろうかな」と。まずその門があるんですよ。これは予備知識なくても判断できるんですよ。おいしいもの食べたときに「うまっ」と言うのに、予備知識はいらない。しかも、その判断は短時間で判断できるというのが特徴です。システム1は。すぐ分かるんです。おいしいかどうか。カッコいいかどうか。すぐ分

かる。

分かったら、次にシステム2の方に情報がいくんですけど、そっちは今度は理性です。それは正しいのかどうか。経済的かどうか。効果的か。効率的か。これで判断して、本当にやるかどうかというのを決めるんですね。こっちは予備知識が結構必要なんです。いろいろ知ってないと正しいかどうか、経済的かどうかとか判断できないし、判断に時間がかかります。ちょっと時間がかかる。やるかどうか決めるまで。

だから町づくりや地域づくりやりましょうと言って、とても正しいことを説得してもなかなか「よしやろう」とみんな、腰がこう上がらないですけど、それはまず本人たちは正しいかどうかよりも、楽しいか、おいしいか、カッコいいか、おしゃれか、やっている人たちがどういう人たちなのか、どういう内容なのかで判断して、その門を突破した情報だけが、正しいのかどうかとか、効率的なのかどうかという判断に基づいて、自分に得があるか損があるかも含めてやるかどうか決めてるわけですね。

だから、人々の自発性を生み出そうと思ったとき、われわれがよく注意しているのは、どうしても過疎の課題を、問題を解決するためにこうしよう、正しい話をしてしまいそうなところを先にも

っと大きなバルーンで「楽しいからやろうよ」という気持ちをまず先にもってくださることですね。これで楽しんでいる間に「ただ楽しんでいるだけじゃねえ」ということから徐々に「意義のあることにしていこうよ」という話になっていくという、その道筋をつけることだと思いますから、「意義あることをやりましょう」で動くというのはなかなか難しいんじゃないかと思っています。

例えでよく出すのが、たばこを吸いたい人と、たばこを吸ってもらっちゃ困る人たち。省庁との掛け合いですね。医療費がかかるから、たばこ吸って肺がんになる人が増えたら困るなどと思っている省庁が霞が関にあるんだと思いますが、しかし一方で、たばこを売りたいなどと思っている企業もあるわけですよ。企業の方は完璧にシステム1から入るわけですよ。たばこ吸う人がカッコいいかどうか。おしゃれかどうかから入るんです。たばこを吸ってほしくない霞が関の省庁の方は、正しい情報を出そうとするんです。肺がんになる人の何%の割合で、たばこを吸っていてなんとかとか、そういう情報を出ちゃんうんですね。

こういう広告が出るわけですよ。カッコいいんですよ。これ見た瞬間に「カッコいい。たばこ吸いてえ」と思うんです。たばこ吸うのがいいかどうか別として、カッコいいんですよ。これの一番上の方



に、正しい情報が載ってるんですね。「あなたの健康を損なうおそれがありますので、吸い過ぎには注意しましょう」と。吸いますね、若い子たちみんな。カッコいいから。女性の方は口紅で細い指できれいな、たばこ吸ってるみたいな「おしゃれ〜」となっちゃうんです。

もしたばこ吸ってほしくない陣営がシステム1から入るなら、たばこを吸わない生活がどんだけおしゃれかとか、どんだけごはんがおいしいのかということを前面に出して、たばこ吸わない、という方向に行かないといけない気がします。

われわれが地域の活動で人々の自発性を生み出していこうと思ったときは、その戦略を間違えないように、地域に意義があるということをあまり言い過ぎないようにするというのも1つ重要な点かなと思っていますね。

あと、飯盛さんがずっとこだわっている、じゃあ、そんなことを発想する人材を「どうやって生み出すねん」という、その部分は結構難しいけど、僕は今は「論語カルタ」をやるべきだなと思います。「論語カルタ」をずっとやるということが結構大事で、偏差値と違うところの能力が、人々を魅了する言葉を出してきたり、信頼関係や統率力を出してくれるところになると思いますから。うちの大学の学生たちに、幼稚園のときに道徳で、挨拶する、みんな仲良く、うそつかない、助け合う、と習ってるのに、小中学校、高校になると副教科のところに入ると、「みんな仲良く」「道徳」という部分は、ほとんど学ばないままになってるんだけど、これはきっちり「五倫五常」みたいなものをずっと続けていく必要があって、「仁（じん）」とか困っている人を助けようとか、正しいことをやっていこうとか。礼儀をちゃんとやろうとか。あるいは信頼されるような人間になるにはどうしたらいいのかとか、それは「父子の親」だったりとか、「君臣の義」であったりとか、そういうことも含めて人との関係性をどうやってカスタマイズしていくのか。調整していくのかということが、分かった人が地域で活動

し始めると、みんなに応援される人になるし、やるべきだと思うことをちゃんとやれる人になるような気がするんです。

それがどうもこの部分が軽んじられてしまっていて、偏差値で計れるような能力の部分だけが拡大解釈されてしまっている。

そこは何か変えていかなきゃいけないなというふうに思っているのが、今考えていることです。ハワード・ガードナーという人が「8つの能力」あるいはこれを20に分けているやつもありますけど、人間の能力は実は、偏差値で計れるのは2つの軸しかない。論理、数学能力と、言語、語学能力しかなくて、実は僕らはいっぱいほかの能力を持っていて、その中に人々の信頼をどう勝ち得るかとか、道徳心の能力だったり、統率力だったり、責任を持って最後まで遂行する能力だったり、空間を一気に把握する能力だったり、歌って踊って魅了する能力だったり、スポーツの能力だったりあるけど、地域に来て活躍する人材が来るかといったときに「どこの大学を卒業した人」「それすごい人やなあ」「この人すごいかも」と思うんですけど、偏差値の高い大学を出た人が地域に来てくれたといっても、20の能力のうちのわずか2の能力が高いのかどうか確認されてないので、ほか残り18の能力が高いのかどうか全然分からないわけですね。

論語カルタをがらがんやっていた人の方が、残り18能力のバランスがいい可能性がありますから、その意味では論語カルタはやるべきじゃないかなと思います。

横尾 全国から来訪の方、メモの用意をしてください。論語カルタはインターネットで見れば「多久論語カルタ」で検索できます。それと電話番号を言いますが0952-75-5112というところが、公益財団法人「孔子の里」というのがありまして、そこで作って皆さんにご提供していますので、0952-75-5112です。ぜひやっていただければ、スタッフも喜ぶかなと思います。本当に不思議なくらい、子どもたちの吸収力も大人顔負けですから。そこで

教えていただいた「四書五経」に通じるような教えとか、本来こういう教えは、日本は孝経、論語、小学、大学、中庸で教えてたんですね。寺子屋、藩校の時代に。それが明治、学制発布、そして戦後からかなり一部になってきたし、こういったことをもう一度教えてほしいなと文部科学省の会議の場では申し上げてます。

飯盛 今のおふたりのお話、まとめみたいになっていいですね。事前打ち合わせでは一切この話はしませんでしたので、私もびっくりしました。

横尾 私もびっくりしました。

飯盛 しかもスライドまであったとはびっくりしました。貴重なお話を皆様ありがとうございました。やはり、この過疎の問題というのは、いろいろと解決策を議論されていますが、なかなか正解と呼べるような、唯一無二のものを見出すのはなかなか難しいと思うんですね。やはり一歩踏み出して、動いてみるということが大切なのではないかということが、今日の皆様のお話から見えてきたんじゃないかなと思っています。

私はいろんな人たちが交流をすることによって、何か予期しない、まさに自発の活動が生れてくる、自発的に価値が生れてくるような状態を作り上げることがすごく大事じゃないかなということを考えています。

そのためには今日、何回もお話がありましたが、外とのうまいつながりをつくっていくということ。そして、できれば参加型を仕掛けていくこと。今日のキーワードだったと思うのですが、参加型を仕掛けていくことによって、地域に気付きが生れて、そして自発が生れてくるんじゃないかなと思っています。

そのためには、いろんな人たちと交流をしていくこと、そしてお互い学び合っていくということが極めて大切じゃないかなということを考えております。

今日、会場にいらっしゃった皆様は、過疎の問題に対して興味、関心のある方々ばかりだと思っています。ぜひ、この場をいいチャンスとしていろいろな交流をしながら、いろいろお互い学び合いながら、1歩1歩、歩を進めていければというふうに考えております。

ちょうど時間となりましたので、これでパネルディスカッションはお開きとさせていただきたいと思っています。皆様、どうもありがとうございました。パネリストの皆様、どうもありがとうございました。

全体会

次期開催県挨拶

山口県総合企画部審議監

平屋隆之



次期開催県挨拶

山口県総合企画部審議監

平屋 隆之氏（ひらや たかゆき）

皆さん、こんにちは。ただいま、ご紹介をいただきました山口県、私、総合企画部の平屋と申します。本日は、ここ佐賀県におきまして、このように盛大に「全国過疎問題シンポジウム」が開催されましたことをまずもお慶び申し上げます。

先ほどの山崎先生の基調講演でありますとか、今の飯盛先生のコーディネートによりますパネルディカッションなど、本日ご参加の皆さん方にとりまして、今日は大変に有意義で実りの多い1日になったに違いないというふうに思います。

開催にあたりご尽力をいただきました総務省の皆様、佐賀県の皆様、関係者の皆様、そして本日ご登壇をいただいた先生方に心から感謝を申し上げたいと思います。

さて、来年の平成30年、ちょうど30回目ということを知っております。この記念となるような節目のシンポジウムを山口県の方でお引き受けをさせていただくことになりました。

ご案内のように山口県は本州の西の端にございまして、三方を海に開かれ、内陸部には中国山地が広がっております。県内で19ある市町のうち、一部過疎も含めてですけれども12の市町に過疎地域がございますが、その多くが中国山地から日本海にかけての山陰側に所在をしております。やはり人口減少と少子高齢化が急速に進行しております。

そのような中で各地においては、この流れを食い止め、地域の元気を取り戻すための取り組みが地元市町、そして地域住民の方々自らの手によって活発に進められております。田舎ならではのといいますか、田舎だからこそという美し

い自然景観ですとか、これまで培われてきた歴史文化、あるいは豊かな農林水産物。そういったそれぞれの地域の個性であるとか、資源を活用しながら、観光、交流による地域おこしでありますとか、六次産業化などの取り組みが展開をされているところであります。

総務省の「地域おこし協力隊」制度も積極的に活用させていただいております。県内で活動中の隊員数は、この4年間で4倍以上に増加をいたしました。

県といたしましても、各地域の取り組みをしっかりとサポートしながら、地域を維持し、活力を高めていくために複数集落の範囲で、生活サービス機能の拠点化、そしてネットワーク化を図ります「やまぐち元気生活圏」づくりというものを推進しているところでございます。

来年のシンポジウムでは分科会での発表等を通じまして、具体的な取り組みの状況もご紹介をさせていただければというふうに考えております。

また、来年は明治150年。明治改元から150年という大きな節目の年でもございます。当地、佐賀県もそうでございますけれど、山口県も明治とは大変にゆかりの深い県でありまして、幕末明治期に活躍をし、時代を動かした多くの先人を輩出をしております。

人口減少社会の到来など激動の時代を迎えている今だからこそ、同様に多くの困難に直面しながらも、これを乗り越えて明治維新や日本の近代化を成し遂げていった先人たちの志と行動力、そういう明治のチャレンジ精神というものに改めて学び、今に生かし、そして未来につなげていくことが必要である。そういった考え方

で現在、本県では、そのためのさまざまな取り組みを、明治150年プロジェクト「やまぐち未来維新」という名称で県をあげて展開をしています。

ちょうど来年のこのシンポジウムの時期には、プロジェクトの中核イベントであります全国都市緑化フェア「山口ゆめ花博」というものを開催中でございます。従来のように花と緑を目で見て楽しむということだけでなく、体験・体感型のコンテンツを充実をさせ、博覧会型のそういうフェアにしたいというふうに計画をしておりまして、それに向けて今準備を進めております。

また、企画運営への県民参加というのも特徴の1つでございまして、こうした取り組みを通じて高まった機運、盛り上がりを全国に広く発信いたしますとともに、これからの県づくり、人づくり、そして過疎地域のおけるさらなる取り組みの推進にもつなげてまいりたいと、このように考えているところでございます。

来年、本県へお越しの折には、ぜひこの「山口ゆめ花博」にご来場いただきますようよろしくお願いを申し上げます。

これからの1年、今回の佐賀県さんのようにできるかどうか分かりませんが、シンポジウムの開催に向けまして精一杯の準備に努め、皆様をお迎えをしたいというふうに考えております。

名物のふぐもこれからがまさに旬の時期ということでございますし、山口県は全国で唯一、日本酒の出荷量が10年連続で増加をしております、例えば「獺祭」でありますとか、昨年末に山口県でありました日露首脳会談の際、プーチン大統領からご称賛をいただいたんですけども「東洋美人」といったような、おいしい地酒が数多くございます。

そういうところも楽しみにしていただきまして、ぜひより多くの皆様に本県にご来県いただきますようお願いを申し上げまして、次期開

催県としてのご挨拶とさせていただきます。来年、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

唐津市分科会

過疎地域自立活性化優良事例発表会

歓迎挨拶

(唐津市副市長)

柴田 ^{あきら} 哲

コーディネーター

(過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会 委員長 早稲田大学名誉教授)

宮口 侗 廸

事例発表団体

池田町 (福井県池田町)

木望(きぼう)のまちプロジェクト～人と暮らしと仕事が木でつながるまち育て～

丹生谷 清流座 (徳島県那賀町)

人形浄瑠璃で地域に恩返し～温故創新 伝統を受継ぎ新たな創造へ～

唐津市相知町蕨野集落 (佐賀県唐津市)

人がつながり、輝く地域～棚田の魅力で交流促進～

日置市高山地区公民館 (鹿児島県日置市)

地域資源と人材をフル活用～全員参加で地域づくり～



過疎地域自立活性化優良事例発表団体



池田町 (福井県池田町)

連盟会長賞

木望(きぼう)のまちプロジェクト

～人と暮らしと仕事が木でつながるまち育て～

町の約92%を占める森林を活用し、木のぬくもりで子どもたちを育み、家族や地域のひとと人が木や森を守り活かすことでつながり、絆を生み出す仕組みの構築を目指している。町内各所の交流拠点施設では、森林資源を活かした地域循環型経済の創出、若者の雇用促進、移住・定住人口および都市農村交流人口の拡大により、農山村の力を活かした地方創生につなげている。



丹生谷 清流座 (徳島県那賀町)

総務大臣賞

人形浄瑠璃で地域に恩返し～温故創新 伝統を受継ぎ新たな創造へ～

町内に残る人形浄瑠璃用の農村舞台が全国一多いこと、町内に唯一存在する人形座が高齢化により存続が危ぶまれている現状を知り、地元青年団が中心となり人形浄瑠璃座「丹生谷清流座」を結成した。人形浄瑠璃を通して、伝統芸能の継承のみならず、農村舞台をはじめとする地域が守ってきた歴史的文化資源に新たな価値を見出し、利活用を進めることで、地域の魅力を高め、交流人口の増加に繋げるとともに、世代間交流や各種団体との交流を積極的に行い地域愛の醸成や地域の活性化を図っている。



唐津市相知町 蕨野集落 (佐賀県唐津市)

総務大臣賞

人がつながり、輝く地域～棚田の魅力で交流促進～

日本の棚田百選や重要文化的景観に選定された「蕨野の棚田」を活かした地域づくりを進めるため、集落ぐるみによる「早苗と棚田ウォーク」など生産者と消費者の顔の見える交流イベントの開催や、集落と大学や企業ボランティア、NPO法人「蕨野の棚田を守る会」との連携により耕作放棄地の解消などの棚田と里山の保全に取り組んでいる。また、蕨野棚田保存会では、棚田米のブランド力の向上や稼げる仕組みづくりが確立されるなど、集落ぐるみでの様々な取り組みにより集落の魅力向上及び集落の活性化が図られている。



日置市高山地区公民館 (鹿児島県日置市)

総務大臣賞

地域資源と人材をフル活用～全員参加で地域づくり～

旧小学校区のエリアに協働による地域づくりと地域自治会を補完する組織として、高山地区公民館を組織し、地区を構成していた6つの自治会が統合した高山自治会と緊密な連携体制を構築した。年間を通して高山ふるさと秋祭り等、地域資源を総動員した体験交流イベントを行っている。また、買物に不自由している高齢者のために、地区公民館から「移動販売車」に燃料費相当分を負担し、地域内を巡回する仕組みを構築している。

《現地視察》



- 蕨野の棚田
- 小松酒造株式会社
- JAからつ逢地の里直販所

過疎地域自立活性化優良事例発表団体

池田町 (福井県池田町)

木望(きぼう)のまちプロジェクト ～人と暮らしと仕事の木でつながるまち育て～

丹生谷 清流座 (徳島県那賀町)

人形浄瑠璃で地域に恩返し ～温故創新 伝統を受継ぎ新たな創造へ～

唐津市相知町蕨野集落 (佐賀県唐津市)

人がつながり、輝く地域 ～棚田の魅力で交流促進～

日置市高山地区公民館 (鹿児島県日置市)

地域資源と人材をフル活用～全員参加で地域づくり～



歓迎挨拶

唐津市副市長

柴田 哲氏 (しばた あきら)

皆さん、おはようございます。昨日の全体会への参加、そして、その後の酒を酌み交わしながらの懇談会、誠に疲れさまでございました。今日の分科会の開催地は、ここ唐津市相知町です。「逢う土地」という、云われのある土地でございます。昨日に引き続きまして、全国の皆様と今日ここで再会できたことを大変うれしく思っています。

今日の、この挨拶、本来ならば開催地の市長がここにやってきて行うべきではございますけれども、現在、海外出張中でどうしても出席できませんので、私の方で冒頭の挨拶をさせていただきます。

「全国過疎問題シンポジウム2017inさが」唐津市分科会開催にあたりまして、ひと言ご挨拶を申し上げます。皆様には全国各地より、佐賀県唐津市へお越しいただき、誠にありがとうございます。地元を代表いたしまして、心から歓迎申し上げます。

近年、過疎地の多くは人口減少や高齢化がま

ます進行し、地域活力の低下や生活環境の低下など依然、厳しい状況が続いております。

こうした中で個性豊かで美しい自然環境を生かし、地域の産業と文化の振興を図る自立的な地域社会を構築する活動が全国各地で取り組まれています。

ここ唐津市相知町でも地元の蕨野集落の皆様、今日はたくさん出席していただいておりますけれども、地域の宝である棚田を生かした棚田米のブランド化や都市住民との交流、棚田の保全活動に日々、懸命に取り組まれています。

本日はこの蕨野集落を含め、優良事例として表彰されました全国4団体の事例発表を行っていただくことになっております。優れた事例を互いに学び合い、意見交換を行うことは地域発展へとつながる大事な要素の一つと考えておりますので、活発で有意義な意見交換となりますことを期待しているところであります。

なお、本日お昼からは、現地視察として「日本の棚田百選」や「重要文化的景観」にも選定されました蕨野の棚田をご覧いただくとともに、地元の酒蔵である小松酒造やJAからつ逢地の里直販所にも立ち寄ることになっておりますので、相知の地酒や棚田米をはじめ地元で取れた新鮮な野菜などをお土

産としていただければ幸いです。

結びになりますが、本日ご参加の皆様のご健勝とご多幸、そして全国の過疎地の発展を祈念申し上げます、私からの挨拶とさせていただきます。皆さん、ここ唐津の地で有意義な時間を過ごしてください。

過疎地域自立活性化優良事例発表会



コーディネーター

過疎地域自立活性化優良事例表彰委員会 委員長
早稲田大学名誉教授

宮口 侗廸氏（みやぐち としみち）

1946年富山県生まれ。

東京大学大学院博士課程にて社会地理学を専攻し、早稲田大学に勤務、1985年教授、その後教育学研究科長、教育・総合科学学術院長を歴任。

自治大学校講師を務め、総務省過疎問題懇談会座長として過疎法改正延長に尽力。

富山県景観審議会会長、富山市都市計画審議会会長などを務め、地方の発展のあり方について発言を続ける。

主著に『地域づくりー創造への歩みー』（古今書院）、『新・地域を活かすー地理学者の地域づくり論ー』（原書房）、『若者と地域をつくる』（共編著、原書房）など。

宮口 皆さん、おはようございます。今、ご紹介いただきました早稲田大学の宮口でございます。この表彰委員会では10年余り委員長をさせていただいておりまして、毎年候補に挙がってきた地域に視察に行かせていただき、そして、今日のように表彰地域の発表を聞かせていただくことを、いつも楽しみにしております。参加の皆さんも発表を聞かれて、人間はここまでやれるんだ、という感動を持ち帰っていただき、地域ごとに、それぞれの未来をつくっていただければと思いますので、よろしくお願ひ申し上げたいと思います。

それでは時間もなくなりますので、早速、発表に移らせていただきますが、非常に意義のある発表

がこれから続くと思います。特に公務員の方は出張で勉強に来ておられるわけですから、ぜひ、質問などをしていただいて、それを地元を持ち帰ってご報告いただくというようなことをぜひお願いしたいと思います。

それでは、早速事例発表に移らせていただきたいと思います。最初の事例発表をしていただくのは、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞された福井県池田町の宮下礼さんです。「木望（きぼう）のまちプロジェクト～人と暮らしと仕事の木でつながるまち育て～」という事例発表をしていただきます。それでは、池田町さんよろしくお願ひします。

池田町（福井県池田町）

木望（きぼう）のまちプロジェクト
～人と暮らしと仕事の木でつながるまち育て～

宮下 おはようございます。福井県池田町、特命政策課の宮下と申します。よろしくお願いします。まずは会長賞、どうもありがとうございます。

前半はちょっと駆け足で進めさせていただきま。池田町は岐阜県の境にありまして、一昨年の国勢調査で人口2638人、高齢化率は43%、町の92%ぐらいが森林です。ほとんどは民有林なんですけども。アクセス近いところは針葉樹の造林が多くて、山奥の方は広葉樹が多いと。33集落ありましてこども園、小学校、中学校全部1つずつ。過疎地域指定、特定農山村地域指定、振興山村指定、特別豪雪地帯の地域指定集落となかなか遠慮されやすい地域でございます。福井県の中では、消滅可能性自治体として1番です。人口も1950年と比較しまして、8380人が2638人まで3分の1以下になりました。それで、この調子で進んでいきますと2040年には1298人、2060年には581人、高齢化率63.4%という状況になってしまいます。

ただ、今まで町として何もやっていなかったのではなくて、いろんな取り組みを町ぐるみでやっておりまして、それでも若い世帯等がどんどん出て行ってしまうという状況ではあるんですけども、今までの取り組みを簡潔に申しますと、農業で地域資源連結型複合経営の農村づくりということで生産、販売、回収、土づくり、そしてまた生産につながるような循環型の農業ということで取り組みをしています。

農業というところで、畑で、自家消費で作っていた野菜を福井市のアンテナショップで販売するようにして、販売することで、それが自信につながったりということですね。それが町の農作物の無農薬ですとか、無化学肥料栽培というところを打ち出しておりまして、それを見ることで消費者の方も「安心だね」ということで買っていただけると。それでまた作る方々も自信になるということでやって

います。お米も同様にやっております。

販路もJAを通したり、「協同屋」という別のルートをつくったり、個人で販売したりと多様な販路を確立しておりまして、そういうことを担う農業公社というところもつくってやっておりまして、トマトの販売ですとか、野菜もあまったものを確保したりとかしております。最近、先週ですけども「豆乳ヨーグルト」という、新しいものも発売をしております。

出た野菜の生ごみを回収するようにしまして、たい肥センターで牛糞等を入れて、たい肥化させています。そのたい肥、土をまた畑に使って作物をつくりまして、販売してという循環型の取り組みをしています。

それで町ぐるみで取り組んでいることとしましては、セイタカアワダチソウの駆除ですとか、オオキンケイギクの駆除ですとか、そういうことも、ずっと町ぐるみでやっておりますし、来年は福井国体があって休止してしまうのですが、廃油を使った「エコキャンドル」というのもずっと13年やっております。

このような取り組みが評価されてはおりまして、さまざまな取り組みで頑張っているんです。しかし、将来的に厳しい状況だと。どういうことができるのかなというところで、町の92%ある森林を活用してできないかということで「木望のまちプロジェクト」が始まっております。

「木望のまちプロジェクト」をですね。経済政策も含めて、複合的にやっていかなければいけないということで仕事の、雇用創出とかも考えているんですけども、現状で池田町の経済構造としましては、町外消費が多いですね。家計調査をしたら、食品、エネルギーの部分だけなんですけれども、3割が町内、7割が町外という形でちょっともったいない状態になっていると。エネルギーもガソリンとかは町内で買う方が多いんですけども、木を活用することによって、より町の地域内の資源活用循環につながるのではないかとということで、木造建築の推進、木質化などをやっていったり、あとは森林を資源とした木育や自然教育産業

の創造を行っております。

特に町内で生産して、町内で加工して、町内で販売するということが経済効果とか出てくるのですけども、そういうことをしっかりやっていかなければいけない。また、観光の方々も町外からいらっしゃる方も増えてきておりますので、そういう方々にも買ってもらえるような魅力的なものをつくっていかねばならないということです。町内で生産、加工していくことで、町内に経済効果が出てくるということで、仕事も出てくる。仕事の可能性が出てくれば、移住の可能性も出てくるということで、人口の取り戻しですとか、交流人口拡大ですとか、地産地消の経済取り戻しですとか、外貨の獲得、観光客に観光に来てもらうということを目指しております。

それでその木を、森林を活用して自然との共生ですとか、自然資源を生かして経済エネルギーを循環的に創造することですとか、命を学び感じる中で豊かな生を育むことを目的とした「木望のまちプロジェクト」を立ち上げまして、学ぶ観点、楽しむ観点、繋ぐ・巡る観点というところで施設を造ったりしているんですけども。

1つ目は、「おもちゃハウス」といいまして、ちっちゃい子どもたちが木と触れ合って、木に親しみを持ってもらう入り口の部分です。そういう施設を造っております。入館者も2万人以上。町の人口が2700人切っておりますので、多いかと思うんですけども、それで情操教育の場として活用しています。

あとは木工ですね。木を使ってものづくりをするという「Wood LABO (ウッドラボ)」というのも造っております。木でものづくりというところのスペースになっております。

それから「Tree Picnic Adventure (ツリーピクニック アドベンチャー)」というアドベンチャーパーク施設を造りまして、「メガジップライン」とかあるんですけど、ここができたことで新規雇用、若い人の雇用というのが生まれていまして、新規雇用が20人ぐらいおります。平均年齢も30代で若い

ですね。こちらの施設が、「NIKKEIプラス1」の「なんでもランキング」で1位となっております。このあたりのスライドは飛ばさせていただきます。

それで、また木を活用して、運動場の外壁ですとか、建物ですとか、木の机と椅子を小学校入学時に渡したりですとか、民間の方が「薪(まき)の駅」というのをつくっております、薪の販売を「薪の駅」でしたり、薪ストーブを活用している方が増えてきているという状況ですね。

これはチェーンソーアート等でお客さんを楽しませるようにしております、町内各所にチェーンソーアートがごぞいます。結城登美雄さんも「買う暮らしから、つくる暮らしへのシフト」とおっしゃっていますけど、木を買うのではなくて、木で作って生活の中に取り込むとことですね。町の92%が森林である、木がすぐ近くにあるわけですから、木を活用して、自分たちで作って生産、加工、販売、または自分で作っていくというところで、地域内のその経済循環につなげていくと。そして仕事にもつなげていくことを目指しております。

また、バイオマスの部分をいろいろ検討しております、近隣の長野市に出してはいるのですけれども。バイオマスの熱利用ももうちょっとしっかりやっていけないかということを検討しております。

廃校を改造しまして宿泊合宿所を造っておりますけども、ここも木質で、木をふんだんに取り入れてやっております。

また、町のスポーツとして、ウッズスポーツというのを創造しまして、「木(キ)ッター」、のこぎりで



切るのですけどね。「ゲッター」ゲタみたいに履いてムカデ競争みたいにするのですけども。「立ッター」積木みたいに積み上げていくのですけど、そういうウッズスポーツを町のスポーツにして、木と触れ合うようなものを考えております。

国体でクライミングが池田町で行われますので、体育館を、ここの合宿所の体育館、廃校であったところの体育館をクライミングセンターにしていきます。

「木望のまちづくり」というところで、木を素材に共同の心で協働していくと。家族への愛、山への愛、町への愛、愛ですね。地域資源活用の内発型でのビジネスの創造、お金もエネルギーも循環なので、サークルで輪、ほぼ「O」になっていますね。若い世代、YOUTH (ユース) は、Y (ワイ) O (オー) U (ユー) T (ティー) H (エイチ) なので、プリンスみたいにユーという使い方ですけども、が居続けられる町ということで木という地域資源を生かす、つなげる。主体的で多様で複合的な相乗効果の絆が生れる運動として、事業展開をしようとしております。

池田町が木望の町になるように、しっかりとこれから取り組んでまいりたいと思います。以上で、発表を終わります。

宮口 ありがとうございました。昨日、講評でも申し上げましたが、木をいかに活用するかというのは、日本全体の大きな課題であります。それに果敢に挑戦されているわけですが、このプロジェクトは、何かプロデューサーのような人がいるんですか。

宮下 町長、副町長がリーダーシップを執って。

宮口 具体的な中身はどなたが考えたんですか。

宮下 特命政策課ですとか、「株式会社まちUP いけだ」という、まちづくり会社ですね。第3セクタ

ーなのですけども、それがあまして合同して。

宮口 まちづくり会社のメンバーは池田町の中の人たちですか。

宮下 主にそうです。

宮口 かなり地元主導でやっておられるわけですよね。ネーミングなんか結構しゃれて「食Uターン」とか、「百匠一品 (ひゃくしょういっぴん)」だとか、いろいろしゃれたネーミングが出てきましたけど、そのあたりもそういうチームで作ってこれたんですか。

宮下 そうですね。

宮口 池田町、過去にも意義のある取り組みをいろいろ積み重ねてこられた町なんですけども、思いきって木にシフトされ、木を活用することに頑張っておられます。まだ日は浅いようですが、これからぜひ育てていただきたいと思います。会場からは、またあとで改めて質問を受けさせていただきます。それじゃ、どうもありがとうございました。

宮下 どうもありがとうございました。

宮口 続いて事例発表を行っていただきますのは、総務大臣賞を受賞された徳島県那賀町「丹生谷清流座」です。人形浄瑠璃の座ということですけども、「人形浄瑠璃で地域に恩返し〜温故創新〜」、温故知新ではなく「温故創新」と言っていますが、地方創生の「創」です。「伝統を受継ぎ新たな創造へ」ということで、丹生谷清流座の湯浅さんに事例発表をしていただきます。それではよろしく願いいたします。

丹生谷 清流座（徳島県那賀町）

人形浄瑠璃で地域に恩返し ～温故創新 伝統を受継ぎ新たな創造へ～

湯浅 丹生谷清流座の湯浅です。事務局というところで来ておりますが、普段は人形を使ったり、三味線を弾いたりというようなこともしております。短時間ですがよろしく願いいたします。

それでは、丹生谷清流座ですが、「人形浄瑠璃で地域に恩返し～温故創新 伝統を受継ぎ新たな創造へ～」ということで発表させてもらいます。

まず、那賀町ですが、県南にあります徳島県の6分の1の面積がある広大なところでございまして、少子高齢化、存分にもれず、時代の最先端を行っております。面積的には淡路島より広くて、琵琶湖より若干広くてというところで、端から端までだいたい2時間ぐらいは、国道1本なので、時間がかかりますし、枝葉に入っていくともっと時間がかかりますという、すごくチャレンジングな場所でございます。

丹生谷清流座ですけれども、平成19年度に開催されました「国民文化祭・とくしま2007」を契機といたしまして、平成21年の6月に那賀町内の青年団が中心となりまして、地元農村舞台の活用による地域活性化や伝統文化の継承を目的に人形浄瑠璃座を結成いたしました。現在、座員は14名です。今年4名の加入がありまして、そのうち地元の那賀高等学校の卒業生、人形浄瑠璃部の子が2名入ってくれてまして14名となっています。うち女性が4名ということで、やっとなんと華が増えました。

結成の経緯ですけど、先ほど申しましたように平成19年の秋の22回目の国民文化祭を契機に、徳島県内の人形浄瑠璃用の農村舞台が脚光を浴びました。そこで那賀町内には農村舞台が多数存在。全国の約半数の40棟あまり。それと人形座は町内に1座だけ残っている。昔は何十もあったと聞いておりますが、1座だけで、あと高齢化によって存続の不安も拭い去れませんでした。

そこで教育委員会の方から、那賀町青年団に白羽の矢が立ちまして、ここ農村舞台ですけど、ここらへんですけど、那賀川がここ通ってるんですけど、ここら辺に農村舞台が集中しております。これ全国一を誇っております。言ってみれば世界一ということですかね。

そこまで青年団活動は何をしていたかという、よくあるクリスマス会。親子で100人ぐらいの参加がありました。家1軒、1軒電話して「みな、来てよ～」とか言って集めたりしてました。節分豆まきですが、「なまはげ」をもじって「なかはげ」といって出前鬼をやって、子どもを驚かせたり喜ばしたりということを楽しみにやっておりました。やり過ぎてちょっとクレームがきたりもしてたんですけど。あと、棚田散策といって「地元でもこんなきれいなところあるよ」というのを、子どもと一緒に遊びに行き、これとか滝とか、いろんなところを回ったりもしてました。

そのほか資金稼ぎに婦人会と合同で映画会を開いたりしました。このときも近所の農家しよるおばちゃんが「映画好きなんやけど、映画見に行くまでに片道1時間半かかるし、行って戻ってきたら3時間かかって、映画見て、ついでに買いもんしていいよったら農業できんようになる」というのを聞いて「映画会しようや」という話で、映画会始めました。あと、フリーマーケットで「いらんもんいっぱいあるんや」というので、「フリーマーケットでもしようか」とか。あと賑わいでお祭りのときの出展なんかをしていた団体でございます。

そういう中、町から依頼を受けたものの誰も人形を触ったことない。若干1～2名は、いたんですけど、触ったことない。ほとんどの団員が人形自体、人形浄瑠璃自体知らない。当然、人形1体を3人で使うということさえも知らないという状態の中でした。

そういう中、家に帰って「どうするか決めんか」ということで、話し合いをしたんですけど、「家で聞いたら、近所のおばあちゃんが「近くの神社に人形座が来てな～ここで人形見るのがごっつい楽

しみだったんよ」とか。親戚のおじいちゃんが太夫（たゆう）さん、語りをしよったとか、そういう話がいっぱい出てきて、「ほな、とりあえずやってみるか」と。「どうなるや分からんけどやってみようか」ということでやることになりました。いろいろ話によって、やるんだったら最高の素人集団を目指した方がいいんちゃうかなあというような意見もありまして、意志を固めました。

それから月2回くらいの練習が始まったんですけど、やっぱり広いということで、50キロあまりの距離で通うものがあったりとか、2交替勤務体制の仕事が入るとるものとか、あと家庭。消防団も入ったりするので、消防団の練習との兼ね合いとか、いろいろありまして練習日程を組むのも一苦労でした。

練習では人形が5キロあまりあったりするので、重い。3人の息がどうしても合わない。思い通りには動けないというような意見がたくさん出ながら、でも切磋琢磨というかみんなで部活感覚で続けてきたわけです。

「名前がいるよね」ということで、ちょっとメディアに出たりしたので「名前ないとカッコ悪いよな。ちょっと付けよう」という話になりまして、那賀町というところは、5町村の合併したところですけど、昔からその地区は「丹生谷」という名前と呼ばれてました。丹生谷を使うということと、町内に源流を持っている一級河川的那賀川のすがすがしいイメージが入ったらいいかなというのと、青年団という変な誇りがあったりしたので「青」というイメージ、「青がほしいね」というで、青のイメージを重ねて「清流座」はどうやろとなり、全会一致で決まりました。ふるさと思う気持ちを小っちゃい子から高齢者まで共有できて、多くの方に慣れ親しんでいただけるようにという思いで、この名前にいたしました。

それから初舞台になるんですが、本来は舞台、時間をかけて練習して出るものですけど、メディアにせかされたこともありまして、「早く出てくれ」というような空気になりました。そういう中で、結成

して半年後に出るようになりました。そこも18年ぐらいいやってない農村舞台がございまして、自分達だけではできないということで、ほかの座の方が中心で、一緒に手伝ってもらいながら出るという形を取りまして、出演しました。

そのときに、せっかく出してくれるんやから、事前に掃除とか準備とか手伝いに行こうということで、2週間ぐらいに草刈りを手伝いに行ったんです。そしたらそのときに地元のおばあちゃんとか、おじいちゃん80とか90歳の方がいっぱいいて、チェーンソー振ったり、草抜いたりしとったわけですけども、休み時間というかご飯を食べてるときに「ここで農村舞台見れることはもう、死ぬまでないと思うとった」とか、「若いのにやってくれてありがとう」とか、「地元の若い衆がこんなところまで来てしてくれるけん、私も草抜きくらいはできると思って、来てみたんよー」とかいっぱい言ってくれたんです。それでやっぱり頑張らないかんと思って、最後の追い込み練習をして初舞台となりました。

いよいよ当日ですけど、このように狭いところなんですけれど、準備のときの、あのうっそうとした暗いイメージなんかとはかけ離れまして、お祭りが行われているというか、ほんまに人がいっぱいいて、この日のために帰省してきたと思われる家族の方であるとか、見かけない人がいっぱいいて、地元の特産品販売ブースが設置されていたりというのを見て、「すごいな」、「ありがたいな」と思いながら見ました。



そこで、始まったときには、500人。集まりまして、テレビ局もいっぱい来てまして、注目されてるという感じでした。やっぱり、こういう休んでたところが復活しているということ、若い子らが浄瑠璃をしようというところに、テレビ局の琴線に触れたのかなあというふうに思いました。

そこで演技を行いまして清流座のみならず、人形浄瑠璃という文化が地域に大切にされて、しかもずっと守られていたんだなということを肌で感じたところです。

上演が終わり緊張の糸が解けて舞台から降りたら、準備のときに一緒に草刈りをしたおばあちゃん、座って一緒にしゃべりよったおばあちゃんが、涙を流しながら、うちら座員の一人ひとりの手、握りながら、「よかった。よかった。ほんまによかった。ありがとう。ありがとう」って何度も何度も言ってくれて涙流してずっと手を握ってくれました。

地元の高齢者の方に喜んでもらえる。また町おこしの一助になるならという思いで始めた人形浄瑠璃であったんですけれど、あちらこちらから出演依頼など、想像以上の反響がありました。なかには「どうせ若い衆が思い付きで始めたやつやけん、すぐやめるんだろ」とか「何年かやって、お前ら『やいよるっ』って言え」とか。結構辛辣な意見もらいながら、続けてきました。人形浄瑠璃による地域へのかかわりが、多くの人の気持ちを動かし、地域に潤いを提供し、また今後地域を変えていく原動力になる可能性があるんじゃないかということを知ることになりました。それからは、さまざまなイベントの出演とか、練習はもとより、自分たちの立ち位置、「若い」であるとか、「機動力がある」とか、そういうことを意識して活動の幅を広げていくことにしました。

主な活動内容ですが、町内の農村舞台公演というのが、昔は3カ所ぐらいだったんですけど、今は6カ所程度。町内教育機関によるワークショップ。これも清流座が学校に直接交渉して、「今年、こんなんしたいんやけど、どこかで授業の中に入れてくれないですか?」というような交渉の中でワ

ークショップを行っています。教育委員会と離れたところでやっております。後継者育成と支援ですか、地元那賀高校の人形浄瑠璃部のお手伝いだったりとか、相談にのったりとか、人形の使い方の指導をしたりしてます。

あと、福祉施設の慰問では、近くにある高齢者施設がメインなんですけど、そこに行ったら、やっぱり、おばあちゃんが涙して喜んでくれるので行ってます。

また、農村舞台の音楽公演の主催ということで、農村舞台を利用した音楽公演、農村舞台自体をハードとしてとらえまして、そこを野外ステージに見立てて、音楽公演をしています。

ほかのジャンルとのコラボレーションというのでクラシックとコラボレーションしてみたりとか、いろいろ新しいことにチャレンジしております。

国際交流活動ではインバウンドの人とかに関わってみたりとか、県や町の事業の中で外国人を呼んだときに、浄瑠璃をやってみたり、話したりとか。また、さまざまな依頼により出演をしております。

ここは八面農村舞台ですが、こういう客入りになります。普段は閑静なところなんですけれど、600人入る県下で1番大きいところで、間口が4間余りあります。奥行も4間ありまして、すごい大きな舞台です。ここでも音楽公演をやったりします。当然、人形浄瑠璃公演もやってます。

ここは最近復活したところで、辺川神社農村舞台というところですけど、この奥に「襖からくり」というのがありまして、これで襖を入れ替えてみんなに見せるということです。ここ太夫座は、中高生やお師匠さんとかと一緒に三味線を弾いています。

ここ、拝宮農村舞台といいまして、これも町の指定文化財になってるところですけど、ここも古く明治とかの建物でございます。ここで明日、キューバのジャズピアニストのオマール・ソーサという方が来て公演をするんですが、外国の人もすごい喜んでくれてます。

ここは北川舞台といって、高知の県境にある舞

台です。あと鎌瀬農村舞台、それと寺内。これは坂州農村舞台ですが、国指定の有形民俗文化財になっているところです。特産品販売はこういう簡易なところですけど、結構お客さんに買っていただけて、おばちゃんとかもすごく喜んでます。

ワークショップ、年2回とか、そのぐらいしてるんですけど、小中学校とか、こども園とかに行って、そこに合わせたワークショップをして、ちょっとでも人形浄瑠璃になじんでもらおうとしてます。昔は、人形浄瑠璃という言葉さえ出てこなかったんですけど、ちっちゃい子どもから、人形浄瑠璃というワードが出てくることに驚きながら、8年あまり続けてきてよかったな、というふうに思っているところです。

後継者育成支援ということで、那賀高校の浄瑠璃部です。これ一番はじめに行って、ワークショップで行ったときに見て、そのときに「私らもやりたい」という子がいて、びっくりしたんですけど、これがとんとんと進みまして同好会になって、浄瑠璃部になってます。

こんな風に、三味線は三味線で教えに行ったりとか、人形は人形で教えに行ったりとか、そういう風にかかわっております。

共催事業なんですけど、これが音楽公演です。徳島県出身の住友紀人（すみとも・のりひと）さんという音楽家の人がおりまして、ドラマや映画とかのBGMをつくったりとかしている、すごい方と一緒に、農村舞台を野外劇場として、他分野からの集客ということで、音楽に興味がある人にもこういうところがあるってことを知ってもらうために行きます。

「県南伝能ライブ」と銘打ちまして、徳島県の南部の3団体が自主公演で3会場、3町村ですね、順ぐりに回りながら人形浄瑠璃や、太鼓をやったりということを行っています。これがすごい手間かかってるんですけど、徳島交響楽団とのコラボレーションということで、普段行っている浄瑠璃の節を大学の先生に頼みまして採譜してもらいまして、クラシックに編曲してやっています。これ、終わった

あとに大阪の人が「見よった。よかった。」ていって、電話で1時間ぐらい話をしましたが、それほど感動していたみたいです。

その他の出演ですが、イベント依頼ですが、京都の国文祭（国民文化術）のときにグランドフィナーレで出させてもらいました。これが太鼓をやっているところの人から依頼受けて、一緒にやろうと祭りを出たりとか、落成記念とか、食祭りとか。こういう交流とかもやっております。表彰関係もあって、上演演目は5つくらいです。また、すみません。地元の協力ということで、普段はこういうなんもないところですけども、氏子の寄付でここに太夫座ができました。この前、後ろの柱が腐ったということで、500万円かけて改修してくれました。地元の氏子44名、44戸と聞いておりまして、半数が単独世帯、老人単独世帯という中でこういう改修をしてくれました。また、情報発信で手ぬぐいとかも作っています。

これからですが、私たちが育ててくれた地域に感謝して、恩返しをしていきたいと考えています。また、子どもたちにも青年の目線から古き良き伝統や風習を伝えて、素晴らしい風景や地域のつながりを再確認してもらいまして、また若い世代からも新しい感覚で地域社会に対して関心を促せるようになれば、私たちの那賀町がもっと良い町になるのではないかなというふうに考えています。

これからも那賀町の広告塔として、また那賀町の潤滑油として、また伝統芸能の伝承者として、初舞台で手を握り涙してくれたおばあちゃんを忘れることなく、努力していきたいと考えております。ご清聴ありがとうございました。

宮口 どうもありがとうございました。少し時間が超過しましたが、まあ、いいでしょう。徳島県は本当に世界に誇る人形浄瑠璃という文化をお持ちで、しかもそれを都市の劇場でやるのではなくて農村舞台でやる。本当にこれはすごいことですよね。入場料はあるんですか。

湯浅 普段の人形浄瑠璃公演については、無料です。祭り延長ということで、無料公演となっています。

宮口 高校との接点は、誰が思い付いたんですか。

湯浅 うちのメンバーが、社協におりまして、ボランティア活動のときに「ちょっと浄瑠璃やりよると小耳にはさんだんやけど」と聞いてきて、それでその子が交渉して、学校からの要望もあったし、こっちからもやりたかったの、ということで始めました。

宮口 青年団にはいろんな立場の人がいて、小さな町ですから「小耳にはさむ」というのはものすごく大事なことなんですよ。正式にいろいろ考えて、なんてことやってたら大変ですね。時間も押しておりますので次に移りますが、徳島の人形浄瑠璃を見たことある人は、ちょっと手を上げてください。少ないですね。佐賀の人も行ってください。はい。どうもありがとうございました。

それでは3つ目の事例発表として、地元です。総務大臣賞を受賞された、ここ唐津市相知町蕨野集落です。この相知町は合併で唐津市の中の一部過疎地域ということになっているわけですね。

「人がつながり、輝く地域～棚田の魅力で交流促進～」というテーマで事例発表をしていただきます。それではよろしくお願いします。

唐津市相知町蕨野集落（佐賀県唐津市）

人がつながり、輝く地域 ～棚田の魅力で交流促進～

川原 おはようございます。私はここ唐津市相知町にある蕨野の棚田で農業を営んでおります。合わせてNPO法人の「蕨野の棚田を守ろう会」の理事長を務めております川原増雄と申します。本日は過疎地域自立活性化優良事例発表会におい

て、蕨野集落における地域活性化の取り組みについて、ご説明させていただきたいと思います。

その前に蕨野棚田の紹介をさせていただきたいと思いますが、蕨野棚田は唐津市相知町の南端にあり、八幡岳の北側斜面に標高180メートルから420メートルの急傾斜面に位置しております。高さ8.5メートルという日本一の高い石積みの棚田をはじめ、手のひらの5本指を広げたような形状で谷々に広がっており、その数は全体で700枚。36ヘクタールと全国有数の規模となっております。しかし、棚田での農作業は、大変に苦労が多いものが実情です。棚田が急斜面に位置しているため、1枚当たりの面積が狭く、圃場や石垣の管理などもあり、農業生産性としては平坦部の4倍と言われる重労働となっており、さまざまな問題を抱えておりました。

そんな中でも先人たちが苦労を積み重ねて残してくれた集落の宝である蕨野の棚田を生かした地域づくりを進めようとの思いから、地域ぐるみでの取り組みが生まれました。現状を打破し、生産には負のイメージである棚田を保存し、豊かな森と清らかな水に育まれた棚田米の生産を中心に地域の活性化を図ることになりました。つまり、蕨野集落の住民が棚田の歴史的価値や景観としての魅力を認識し、その景観を次の世代につなげていく取り組みを誇りを持って進めており、それぞれの活動を目的に棚田米の販売や棚田を観光資源とした都市と農村との交流事業など、住民主体による地域づくりを行っているところでございます。

具体的な組織としては、1.都市住民と交流事業を行う「棚田と菜の花実行委員会」、2.棚田米の生産管理と販売を行う「蕨野棚田保存会」、3.棚田米、加工品などの販売を行う「蕨野棚田直売所」、4.棚田の保全のための農業用施設の維持・管理を行う農家の組織である「蕨野地区の農村環境を守る会」、5.大学、企業、ボランティアなどと連携して、棚田の保全や維持管理を行うNPO法人「蕨野の棚田を守ろう会」というように、集落内で組織する主な団体が5団体ありまして、集落の

住民の多くはそれぞれの団体に重複して加入しております。5つの団体がそれぞれの目的に応じて活動しておりまして、私はその中のNPO法人の代表を務めておりますが、5つの団体をまとめるのが蕨野集落という組織であり、その代表者が区長です。

それでは集落活性化の取り組みを紹介させていただきます。その活動は主に3つの柱からなっており、それは最初に「棚田米のブランド化」、次に「都市住民との交流の促進」、最後に「大学や企業ボランティアによる棚田の保全活動」の3つの柱であります。

まずは棚田米のブランド化についてですが、棚田米の特長としては、棚田の中には民家がなく、棚田が集落より上部に位置しているため、生活雑排水が入らず、八幡岳からの清らかな水で生育します。次に平坦地に比べ昼夜の寒暖の差が大きく、稲が時間をかけてゆっくりと熟され、良食味米が生産されるという特長があります。豊かな森と清らかな水に育まれた棚田米の生産を中心に地域の活性化を図ることになりました。

最初のきっかけとしては、平成9年から都市住民を対象にした棚田PR事業、農業体験ツアーを開催したことです。県内外からの多くの参加者でにぎわったことが地域住民の自信につながり、地域づくりの動きにつながっていきました。

そして、平成13年には佐賀県の奨励品種「夢しずく」を生産する農家36戸で棚田米の販売組織「蕨野の棚田保存会」を結成し、同年にJAの協力によりカントリーでの乾燥調整や注文に合わせて玄米を精米して、出荷・販売できる体制を確立することができました。これにより販路確保へのセールスにも積極的に取り組むことができ、その結果、従来の棚田米より60キロ当たり5000円以上も高い価格で販売することに成功いたしました。棚田米をブランド化して販売することで、生産効率の悪い棚田における持続可能な営農活動と棚田の保全を図っていきました。

そして、平成15年からは棚田米の生産におい

て、減農薬、減化学肥料栽培に取り組み、翌年には佐賀県の特別栽培の農産物認証を受けブランド力の向上を図り、生産拡大へのさらなる取り組みを続けているところでございます。

また集落で運営している蕨野棚田直売所では、棚田米のほか棚田米を加工した「棚田米せんべい」「米サイダー」、昨日夕方会場に出ていたと思いますが、そういう販売をするなど六次産業化にも取り組んでおります。なお棚田米については、平成13年に熊本県で開催された「九州米サミット」の普通作部門において、味や香りなどが最も優れているとの評価で、

最優秀賞を受賞させていただいているところでございます。

次に2番目の柱である都市住民との交流促進についてですが、生産者と消費者の交流により棚田の魅力を向上させる取り組みを行っているものでございます。

交流が始まったきっかけは、平成13年に、新たな交流事業に挑戦しようと、地域ぐるみで区長を委員長とする「棚田と菜の花実行委員会」を組織。早苗と棚田の美しい景観を体感してもらう「早苗と棚田ウオーキング」を6月の田植えが終わったときに開催したところ、県内外から約1000名が参加されました。また、会場に設けた直売所では、棚田米の予約販売と農産物や加工品の直売を行いました。これ以降、棚田ウオーキングのイベントは、現在まで毎年開催するほどに定着し、参加者と生産者の顔の見える交流が続いているところでございます。

このほかにNPO法人「蕨野の棚田を守ろう会」や、企業との協力を得ながら、「ふるさと灯りコンサート」を毎年10月に開催したり、また里山に桜の苗木の植栽などを行う「棚田と桜の里づくり」事業を2月に開催するなど年間を通した交流事業として、定着しているところでございます。

最後に3番目の柱である大学や企業、ボランティアによる棚田の保全活動についてでございます。これは平成15年に地元佐賀大学農学部との間



で、耕作放棄地の利活用を柱にする「地域交流協定」を締結し、棚田の保全に取り組んだことがきっかけで、大学を中心に学生、地元、住民、市民ボランティアからなる現代版の「手間講隊」である「棚田援農隊」を結成して棚田での耕作放棄地の復田、有機・無農薬栽培の実験、新しい作物の栽培実験、環境教育、食農教育のフィールドとして活用していただいております。住民と行政、市民、大学という地域連携による棚田保全活動を進めてきておりました。この活動を通して、集落では若者の声が響き、住民との交流によって集落に活力が生まれてきているところでございます。

また、平成21年には棚田保全活動の支援を目的としたNPO法人「蕨野の棚田を守ろう会」を発足させまして、蕨野の棚田と里山を保全し、都市との交流を通じた地域の活性化のための自主活動と支援活動に取り組んでおります。このNPO法人の設立によって、佐賀大学の棚田援農隊とともに棚田の復田、保全管理に取り組むなど集落外からの支援体制の強化につながっております。

結果としては、これまで15年以上にわたり、都市住民との交流事業を継続してきたことで、蕨野棚田のファンが広がり、棚田米のブランド力の向上につながったほか、生産者としても棚田の魅力を再発見する契機となり、棚田の保全活動を継続していくという機運が醸成され、地域内での連帯感が高まったものと考えております。

また直売所の女性会員等による手づくりの加工品の開発、販売という動きも生まれ、高齢者の生

きがづくりや、地域内での交流機会の増加にもつながってきております。

さらに集落内において、住民によるそば処や農家民泊の開設にもつながるなど、棚田の魅力を伝えることを目指した交流事業を住民の力で定着させていくことによって、棚田米のブランド力向上だけでなく地域住民が地域に誇りを持つ意識の高まりを生み、棚田を中心とした地域の魅力を生かした住民の取り組みへと広がってきております。

総括すると地域づくりの取り組みを継続していくためには、1.住民が地域を誇りに思う意識づくり、2.住民が主体となって活動するための組織づくり、3.活動を通じて稼ぐ意識を持つことが重要だと考えおります。

ここで私たちの宝である蕨野の棚田についての、これまでの数々の受賞歴などについて簡単に紹介させていただきます。平成11年度に棚田の歴史的価値と石積み景観が評価され「日本の棚田百選」に選定され、平成16年には全国棚田サミットも開催されました。そのほかにも平成20年には、棚田では全国初となる「国の重要文化的景観」にも選定されており、また平成27年には全国土地改良事業団体連合会主催の農業農村整備優良地区コンクールの農村振興整備部門において農林水産大臣賞を受賞させていただいております。

さて、今後の活性化の取り組みと課題についてですが、まずは棚田保全に対する認識をさらに深めることや、後継者対策と地域活性化につながる地域、都市住民との交流活動をさらに拡大していくこと。次に佐賀県の特別栽培農産物認証制度による栽培技術の普及や棚田米の生産拡大に努めること。最後に地域農産物の栽培拡大や加工品の開発など蕨野棚田直売所の活性化が必要になってくるものと考えております。また、近年のイノシシ被害拡大に対する防止対策の徹底や、今後とも都市住民との交流事業費を確保することも重要であると考えているところでございます。

以上で蕨野集落における地域活性化の取り組みについての事例発表を終わらせていただきたい

と思いますが、皆様方には私共の取り組みにつきまして、今後ともご支援、ご協力をいただきますようお願いいたします。私の発表を終わらせていただきます。つたない説明でしたが、ご清聴いただきありがとうございました。

宮口 どうもありがとうございました。今日、午後からの視察でも蕨野を案内されるようですので参加される方はぜひじっくりとご覧いただきたいと思います。

1つの集落で、集落の上の方に全部の棚田があるので、生活排水が入らない。自然の水しか入らない。そういう素晴らしい棚田であることを生かすような取り組みを積み重ねてこられました。5つの団体がばらばらにならないで、ちゃんと集落というまとまりの中でうまく動いている。これは日本の伝統的集落の本来的な特徴だと思いますね。私はおじゃましたときは、もうちょっとすっきりした組織にしたほうがいいんじゃないかなあと一瞬思ったんですが、でもよく考えてみると、これが日本の集落の姿なんですね。それをちゃんと保持しておられるところがすごいなというふうに、思い直したような面もございます。大学との接点はどうやってできたんですか。

川原 主に行政主導でやっていただいたと思います。それと学生がうちに寝泊まりして、蕨野の棚田について、いろいろ石積みのことなんかを考えてくれたということで、行政に伝わっていったと思います。

宮口 大学の先生なんかも来るんですか。

川原 大学の先生は主に五十嵐教授という先生が、主になって来ていただいております。

宮口 交流もちゃんと続いているわけですね。のちほど、また伺いたと思います。ありがとうございました。それでは最後になりますけど、総務大臣賞

の鹿児島県日置市高山地区公民館から、「地域資源と人材をフル活用～全員参加で地域づくり～」というテーマで、ご発表をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

日置市高山地区公民館（鹿児島県日置市）

地域資源と人材をフル活用 ～全員参加で地域づくり～

立和名 それでは、日置市高山地区公民館の活動をご紹介します。本日の説明をさせていただきます高山地区公民館館長の立和名と住吉でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、日置市についてご紹介いたします。日置市は鹿児島県薩摩半島のほぼ中央に位置し、鹿児島市に隣接し、平成17年には旧4町が合併し、人口約5万人の都市としてなっております。また、西は日本三大砂丘の1つである吹上浜と東シナ海に接しており、海と山の自然に囲まれたところでございます。

ここから、私たち高山地区をご紹介します。日置市の最北部、旧東市来（ひがしいちき）町に位置し、鹿児島市と薩摩川内市を結ぶ県道が中心を貫く山間地域で、県道や川沿いに農地が点在する以外はほとんどが山林地帯でございます。世帯数は111世帯、人口184人、高齢化率は67%と、過疎高齢化が進んでいる現状でございます。

このような中、平成18年から日置市が進めてきた各小学校区単位に生涯学習や情報発信の機能を有する地域づくりの拠点として、平成19年4月に現在の高山地区公民館が誕生いたしました。自分たちの地域は自分たちでよくしていこうという「共生・協働」の意識のもと新しい高山として集落の力を結集し、地域住民がみんなで支え合い、長年取り組んできた村づくり活動を地域全体でさらに発展させるきっかけとなっております。

これは高山地区が一目で分かるように作成した案内看板でございます。山や川沿いに6つの集落があり、山間部に広がる棚田やタケノコがとれる竹

林、川遊びやホテルが生息するきれいな川や、「田の神様」の史跡など豊かな自然に囲まれたところでございます。

次に私たちの村づくり推進体制について、ご説明いたします。公民館長を中心に各種事業を行う5つの部会で構成され、人口は少ない地域ですが、地域全体の行事や各部会の活動が活発に行われております。

次に地区内の多様な活動実施団体と公民館が密接に連帯を取り、農地保全や棚田の都市・農村交流、地域の秋まつりの開催、地域活性化に取り組むNPO法人活動などまとまりのある幅広い村づくり活動に取り組んでいます。

それではここから、私たちが取り組む主な村づくり活動について、4つの柱にしたがってご紹介いたします。まず1つ目の、「小さなメダカが興した村づくり」の取り組みでございます。標高300メートルの里山にある尾木場（おこば）集落には、明治後期から野上休右衛門によって、約45年の歳月をかけて原野から開墾された棚田が広がっております。現在もその子孫である野上操氏を中心に地域の人が先人の苦勞と開墾魂を受け継ぎ、伝統ある美しい棚田が守られております。棚田の用水路にはたいへん珍しい在来種の「クロメダカ」が生息し、きれいな水で育ったお米「めだか米」として、付加価値を付けて販売に取り組んでおります。このお米は地域のイベントや農業体験で販売のほか市内病院との契約販売により、毎年完売する人気となっております。平成16年からは農業体験交流をスタートし、棚田での田植えや収穫体験、地元食材を使った昼食交流会を行っております。棚田の歴史の話や地域住民との交流によって、棚田への理解も深まり、リピーター確保や口コミの参加者の拡大につながっております。

春の里山の豊かな自然に触れてもらおうと、毎年4月に棚田散策と合わせてワラビ、ツワなど山菜狩りやタケノコ掘り体験イベントも行っております。これからもイベントを継続することは非常に大変ですが、訪れてくれる方が棚田や豊かな自然で

癒せると喜んでいただけることによって地域の元気になり、次への大きな活力となっております。

この棚田には年間を通して、多くの見物客や写真家が訪れるスポットになっており、ここで撮影された写真は鹿児島県の「フォト農美展」において、数々の賞を受賞するなど多くの人々の心を動かす原風景が残されています。

次に、2つ目に地域資源を生かした農村の魅力発信の取り組みについてです。都市・農村交流を進めようと平成14年度から、各集落の代表などで構成する実行委員会を組織し地域全体で取り組む「高山ふるさと秋まつり」を実施しております。高山地区交流センターをメイン会場に地域農産物の販売や新米おにぎりの昼食、ピザ窯の実施。実演販売なども行うとともに集落ごとに数々の体験活動が楽しめるプログラムを提供しております。

郷戸（ごと）集落の溪流マス釣り大会や野下集落のかずら工房体験、桑木野（くわきの）集落のこんにゃく作り体験、尾木場集落の「田の神まつり」など各集落の資源を生かしたイベントを組み合わせ、高山の魅力を丸ごと感じてもらおうと、体験を通して地域住民との触れ合いや新たな交流も生まれております。宝の詰まった地域資源を最大限に活用した、この秋まつりの開催は豊かな知識や技術と合わせて地域住民の力を引き出すとともに、アイデア次第で小さな農村集落にも多くの人が訪れてくれる都市・農村交流活動として定着しております。

次に3つ目に、交流センターを拠点に始まった



若者との交流についてです。地区内に唯一あった高山小学校は明治24年に開校して以来、児童減少が続く、隣接地区の小学校との統廃合が検討され、平成4年についに廃校となりました。

そのような中、若者の地域離れと人口減少を食い止めようと、小学校跡地を活用した地域内外の交流を図る施設として平成8年に「高山地区交流センター」が開設されました。旧小学校の施設を生かし、体育館、プール、調理室、宿泊施設、ピザ窯設置など整備を徐々に進め、平成10年からは宿泊合宿を受け入れ、スタートいたしました。小中学生のスポーツ少年団や大学生のサークル活動として利用されるなど、現在では夏休み期間中は600人程度が利用する交流拠点の施設となっております。特に鹿児島大学のギターサークルの合宿受け入れは15年以上続き、地域住民を招待した「サマーコンサートin高山」では合宿の成果が披露され、音楽を通じた住民との交流の場になっております。

このような交流をきっかけに「ふるさと秋まつり」での大学生のボランティア協力や大学のほか、サークル合宿の受け入れをスタートするなど新たな取り組みになっております。

次に、4つ目に地域ぐるみで支える農地保全や高齢者支援でございます。地域の課題解決を模索する中で、地域活性化と地域ぐるみの事業運営を図ろうとし、平成25年3月集落全員が会員となる「NPO法人がんばろう高山」を設立いたしました。外部委員も含めた「高山再生プロジェクト会議」を設置し、住民アンケート調査やワークショップの実施など約2年がかりで住民の合意形成を図り、地域住民主体の新たな活動体系を構築いたしました。

主な取り組みとして、棚田の保全でございます。高齢化の進行や生産条件の厳しい棚田が多いことから、平成25年度からは耕作者のいなくなった棚田を「NPO法人がんばろう高山」が作業委託するほか、「農地・水保全管理支払交付金」などを活用した農地農村環境の保全に取り組んでおります。

また高齢者の移送サポートを行うため、移動販売車の地区内巡回の回復や、買い物・温泉・食事ツアーを毎月行うなど高齢者を地域ぐるみで支える組織づくりを行っております。

これまで女性部は高山加工グループを設立し、農産物加工技術とともに「けせん団子」の試作を続けながら、商品化に向け取り組んでおります。近日常に農産物直売所で「けせん団子」を販売する計画でございます。

また、「NPO法人がんばろう高山」では地域活性化の新たな施策として、「農産物共同出荷事業」がスタートいたしました。これまでは作った野菜の多くは身内で消費しておりましたが、集荷車で出荷者登録の農家を回り、農産物直売所へ出荷することで地域住民の所得向上と市場への新鮮で良質な野菜の供給を図っています。住民からは「農産物が売れることは生きがいになる」「健康づくり、所得向上になる」と前向きな話を聞いております。今後さらに農家出荷者や耕作面積の拡大につながるの期待をしております。

これからも住む人も訪れる人も心安らぐ自然豊かなふるさとづくりを目標に、地区交流センターを拠点にした体験型、滞在型の都市・農村交流を通じて豊かな自然や地域資源の魅力を発信し続けるとともに、地域住民で支え合いながら一つひとつの目標に向かって、一致団結した活気ある村づくり活動を展開したいと思います。

最後になりますが、先祖から受け継いできた伝統ある棚田や貴重な地域資源の宝物を次世代につなぎ心癒される美しい農村の風景をこれからも守り伝承していきたいと思っています。以上で事例発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

宮口 ありがとうございました。私、実は今回の表彰の候補の視察ということで、先ほどの蕨野、それから今の高山地区公民館、両方を行かせていただきました。蕨野は1つの集落でかっちりと頑張っておられる。この高山の場合は山間に散らば

る、もうちょっと小さい規模の集落6つが合体しました。小学校区ぐらいの単位で集落が支え合った方がいいのではないかとということで、日置市は合併後に地区公民館制度をつくりました。ちょっと上から目線だったかもしれないんですが、それを高山地区の場合はしっかりと受け止めて、自治会まで一体化して、名実ともに地区公民館というものをつくり、それからお祭りも連携してやるということを始められたわけですね。その1つの地区にメダカのいる棚田があるということだと思います。

そういう意味でなかなか全国的に稀なケースだと思っています。本音で旧小学校区を一体化されたわけですね。伺った際も、おばあちゃんたちの明るいやり取りが印象的でした。館長さん、自治会まで合併するという流れというのはどんな感じでできていったんですか。

立和名 日置市は合併した当時、集落の合併の促進もあったんですが、うちの自治会等では、さっき言ったように6つあったんですけど、自治会が非常に小さくなって戸数が10戸とか、12戸ということで役員のなり手もないということと、各自治会で行っております行事等が非常に難しくなったということで何かいい方策はないかとということで、各自治会にあった財産等もございましたので、なかなか合併には難しかったんですが、そのところを2年あまりかけて、皆さんの同意を得ながら、自治会活動を一緒にできるようにということで合併にもっていききました。

宮口 ありがとうございます。なかなか日本では難しいことです。先ほど日本の集落がいかに強いかわという話を、蔵野でさせていただきましたが、一方でこういう集落ネットワーク圏という動きも生まれているんですね。また、あとでご質問いたしたいと思います。 ありがとうございます。

■意見交換

宮口 先ほどはご発表ありがとうございました。

時間があんまりございませんけれども、これから会場の方と意見交換をぜひさせていただきたいと思います。

本日は4つの団体にご発表いただきました。最初は池田町で、これは町が木の活用のために「木望（きぼう）のまちプロジェクト」、木の望みということですが、行政が仕掛けられたプロジェクトということで、そのあたり予算とかどうなってるのかとか、いろいろ気になることもあると思います。ぜひ、いろいろご質問をお願いしたいと思います。

それから丹生谷清流座。これは青年団が地域の文化を守ろうと立ち上がった。最初は渋々だったような話もありましたが、途中、まだ完全じゃない状態でも公演しちゃったそうで、よかったんじゃないですかね。勢いがついて。素晴らしいことだと思います。

それから3つ目は地元の蔵野の棚田ということで、集落というまとまりの中で5つの団体が素晴らしい活動をされ、まさに日本の農村集落の結束力を示されました。

それから最後に、高山地区公民館。これは6つの集落が、自治会も一緒になっちゃって、素晴らしい展開をされてます。私も少量の野菜の集荷やおばあちゃんたちの買い物ツアーに大変感銘を受けて、帰ってきました。

というような、まさに色とりどりの今日はご発表があったわけですけども、いかがでしょう。まず会場から何かこのへんをもっと教えてくれとか。あるいはこういう考え方はどうかというご質問、ご意見がございましたら、手を上げてもらいたいと思います。

はいどうぞ。所属とお名前を簡単におっしゃって。

加藤 奈良県川上村から来ました、加藤と申します。今年入らしてもらったばかりで、ピントが外れたご質問もあるかと思いますが、すみませんがよろしく願います。

貴重なお話を聞かせていただきまして、ともに過

疎地域から盛り上げていきたいなというふうに思っているんですが、池田町さんの方で本望のあるプロジェクトということで進められていると思うんですけども。地域に住んでいる住民の方々とかと、本当に協働して同じ方向を向いていかないと、なかなかうまく進んでいかないのかなと感じる部分があるんですが、そこで何か工夫して取り組んでいらっしゃるのとかがありましたら、お聞かせいただければ幸いです。

宮口 池田町さん、よろしくお願いします。

宮下 以前ですと環境計画を作る際に、100人の住民と100回の会議を重ねて作り上げたということもあるのですが、最近ですと、まちサロンといいますか「ちょっといいですか?まちの話」、出前相談みたいな形で各集落と集落の課題について話し合っ、どう一緒に取り組めるかなということをは話し合う機会を今、設けて回っているところございまして、そういうところも絡めて「本望のまち」にもつなげていければいいかと思っております。



宮口 来る人は町内の人が多いんですか、今のところ。先ほどの子どものサロンだとか大人の木工教室みたいな。

宮下 「おもちゃハウス」は町外の方が多いですね。「Tree Picnic Adventure IKEDA」も町外、県外の方多いです。

宮口 予算の状況といいますか、今の投資額と今の年ごとの出入りなんてどんな感じなんですか。相当、町がつぎ込んでおられるのかどうなのか。

宮下 建設自体はかかっておりまして、年次の収支と言ってまだ1年、「Tree Picnic Adventure IKEDA」は1年半前にできたので1年だけなんですけども、1年の収支はとんとんでございました。

宮口 何かつくるときに補助事業とか、どういうものを利用されているのかちょっと教えてください。

宮下 「過疎債」を使っております。

宮口 そうですか。ぜひ、過疎債はちゃんと使っていただきたいと思います。農水林野系の補助事業というのは、特にあまり使っておられない。

宮下 そうですね。使ってない。

宮口 農水省とか、林野庁とか、木を使うわけですから、そっちの方もあるといいですね。

宮下 これからになりますかね。

宮口 分かりました。ありがとうございます。奈良県川上村というのは吉野林業発祥の地。奈良県の非常に険しい山奥で、私もよく付き合わせていただいています。質問ありがとうございます。ほかにはいかがでしょうか。はい。よろしくお願いします。

小倉 鹿児島県伊佐市の小倉と申します。受賞された団体の方々おめでとうございます。池田町さんにまた質問になってしまうんですけども、公共事業を使って町づくりに生かしていらっしゃるということで、木を使ったということで林業事業体であるとか、建築業界の方とか。そういったところに何か新しい動きとか、そういうのがもし出ていれば教え

ていただきたいなど。

宮口 はい。よろしくお願いします。

宮下 林業事業体では新しく民間で、株式会社さんが立ち上がっていきまして、山の持ち主さんに依頼されて森林整備等を行っているところがございます。これから本当に進めていく中で、連携を図っていかなければいけない課題かなと思っております。

宮口 まだ、何年も経っていないような部分もあるので、ぜひ、これからそういういい関係を育てていっていただきたいと思いますね。ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。はい。お願いします。

築山 佐賀県玄海町役場産業振興課の築山と申します。今日は素晴らしいご発表を聴かせていただきありがとうございます。蕨野集落の方と高山地区公民館の方にお伺いしたいんですけど、事例発表を聴いてるときに都市部との交流が重要かなというふうに、私は受け止めたんですが、それを広げていくために当初はどういうふうなことを具体的行われたのか。そして当初、何人ぐらい参加されて、その後、現在何人に増えたとか、そういうのを具体的に教えていただければと思います。よろしくお願いします。

宮口 蕨野の方から、棚田でウオーキングみたいなことをやっておられましたが、一番最初がどういうふうに始まったのかなど、よろしくお願いします。

川原 最初、始めた人が後ろに控えてますので、後ろの人に。

宮口 はい。ぜひ。

秀嶋 最初、平山地区全体で当時の町長、大草町

長だったんですけども。平成13年でしたか。平山全体で菜の花を植えて、下から棚田まで17キロぐらいですか。それくらいの規模で菜の花植えて、「菜の花ウオーク」をやったんです。そのときは1000名規模。これが2～3年続いたんですけども、ほかの地域が蕨野に協力できないということで、「自分たちばかりじゃいか目おうてから（自分たちばかり良い目にあって）」どうのこうと、いろんな不満が出はじめまして、じゃあ、蕨野だけでやろうということで、蕨野だけでやるには1000名はちょっと受け入れきれないということで600人規模で縮小して、それ以降ずっと続いた形で続いてきております。

宮口 それは、どういうふうに宣伝したんですか。

秀嶋 当時の町長が平山全体でやって・・・。

宮口 平山とは、蕨野を含む小学校区ですよ。

秀嶋 そうです。4地区ありまして、その土地の野菜とか、できたまんじゅうとか、そういったものを自分たちで売っていったらいいんじゃないかということで、ウオーキングの途中にそういったテントを立てて物産品を販売してたんですけども、なかなか4地区の足並みがそろわなくて2年か3年くらいで、ほかの地区がやめたということで、撤退しまして、蕨野だけでやっていこうという形になってきています。

宮口 最初は棚田というのは、あんまり意識しなかったんですかね。

秀嶋 最初は棚田のブランド化というのは、そこも頭にあっただんですけども、全体でいったほうが盛り上がるんじゃないかということで、4地区をまとめようとしたんですけど、なかなか足並みがそろわなくて、最終目的は蕨野の棚田米をブランド化する

ることが目的だったんですけども、そこまでほかの地域の協力が得られなかったということです。

宮口 そんなすごい宣伝をしなくても、600人や1000人くらいは今の時代来るのかなというような気もしましたが。高山地区の場合はいかがですかね。

立和名 高山地区の場合はいろんなイベントを行うんですが、この祭り等も最初の2～3年は地域住民の力が発揮されずにいましたけど、先ほども申しましたように、自分たちの地域は自分たちで守るということを皆さんに徹底して話し合いをしながら、「自分たちのことは自分たちですることが当たり前ですよ」と。「今の時代、行政ばかり頼っておっても、行政もいろいろお金等、予算等みんな付きにくい」ということで、自分たちでやらなければいけないということで、3年間くらいは非常に大変でしたけど、うちの祭りとかイベントは全部有料でしておりまして、すべてお金をもらっております。その中で運営していて、例を言いますと秋まつりも11月最後の日曜日にほとんど行ってるんですが、天気の良い日は1000人ほど来ていただいています。昨年度は大雨でしたけど、スタッフの方が非常に心配して「今日は誰も来ないだろう」ということでしたけど、去年も800人ほど来ていただきまして。その運営も、その日だけでも120万～130万円かかるんですけど、グリーンツーリズムの方から16万ほど補助が毎年ございますが、それ以外は地域のイベントの体験料と売り上げですべてまかなって、少し余剰金が出た場合は、地域住民に還元する方法で。自分たちも楽しみながら、祭りをしても、ただするだけではやりがいがないということで、した甲斐（かい）があるということをみんなに見せつけながらやっているような状況でございます。

宮口 私が伺ったところでは、小学校を交流センターにしたときに地元出身の鹿児島大学の学生がギターサークルを連れて来てくれて、そのサークル

はその後ずっと来ているんですよね。ですから、細い糸が太い糸になっていく可能性があるわけで、そういうことも大事だろうと思いますね。いろいろイベントの宣伝なんかをすると同時に、人脈をたどって縁をつくるというか。そこからワァーッと広がっていくという、そういうことがあるんじゃないかなと私は思いましたね。ほかにもう1人くらいいらっしゃいませんか。はい、どうぞ。

錦織 福岡県のうきは市役所から来ました地域おこし協力隊をしております錦織と申します。よろしくお願ひします。本日は貴重な成功事例を聞かせていただく機会をいただきましてありがとうございます。日置市の高山地区公民館の方にお伺いたいんですけども、廃校になった小学校を利用されているということで、うきは市の方もまさに来年度から、1校山村部の小学校が廃校という形になりまして、山村地域ではよくある話かもしれないですけども、廃校の利活用というのは、どこも課題にしてると思うんですけども、交流センターで利用されているということですが、年間を通してだいたいどれぐらいの頻度で利用されているのかということと、あと合宿以外にも何か活用をどういったことをされているのかというのを教えていただければと思います。

宮口 はい、よろしくお願ひします。

立和名 今、交流人口としましては、鹿大のサークルとか、年間を通して夏休みはほとんど、土日はほとんど利用されているような状況です。子ども会とかピザ体験とか。夏の方が多いんですけど、土日は満杯。毎日誰か使っているというような状況でございます。

宮口 あと地元の人の集会にも使っておられるでしょう。

立和名 そうです。地元の方は高齢者の方が踊り

を毎週2回と、グランドゴルフを2回、それと地区の婦人部の方の農産物の六次産業化に向けて団子づくりをしております。今後は団子づくりも週に2～3回するようになると思います。販売に向けてしますので、なると思います。閉校にはなりませんが、交流人口は1年、1年多くなってきていたでいて、非常に喜んでいてところでございます。

宮口 私が視察におじゃましたときも、夕方そこで交流会をしていただいて、料理は婦人部の人が作る。それから65過ぎると婦人部卒業して、高齢者部になるんですよね。その交流会には70代、80代のおじいちゃん、おばあちゃんも何人も来てくださって、楽しくそこで会話をしておられました。私、実はそれに一番感銘を受けたんですね。要するに日頃から横の付き合いが素晴らしい。買い物ツアーもニコニコして行かれるとか、会話が深いとか、そういうことにも成果が見えますね。外との交流だけではなく、ここの場合は6つの集落が合体したわけですが、それがいつも顔を合わせているということがすごいことだなと思いました。余計な補足ですけども、よろしいでしょうか。

それで与えられた時間がそろそろなくなりますので、それではまとめのコメントとさせていただきますと思います。

今日は4つのそれぞれ違ったタイプのご発表がありました。池田町につきましては、町の行政の取り組みから始まり、そこに住民をいかにうまく巻き込んで、成果を上げていくかが課題でしょうね。ただあれだけの子どもの遊ぶ施設が造られましたので、それなりに外からたくさんの方が来てくれている。それはやっぱり都市に対して山村が、自分たちは木を持っていてそれをちゃんと使うんだということを主張する場になっているんですね。ぜひこれからいい形で経営をしていていただきたいなと思います。

それから、丹生谷清流座は、あまり質問は出ませんでしたけども、この時代に、青年団という生きのいい世代が、地元の素晴らしい文化を受け継

ぎ、さらにそれを高校生、小学生などにも伝えて、三味線を弾いて浄瑠璃を語るというのは大変なことですよ。本当に。私、徳島県内でそういう伝統を守るために、農村舞台を維持して頑張っているところも知ってますけども、いつも三味線と浄瑠璃ができる人がそこにいるかという、やっぱり大変なことなんですね。その農村舞台、ずいぶん雰囲気がありましたね。あれは本当に素晴らしい風景だと思います。若い頃から何度も見て育ったおばあちゃんが涙を流すというのもよく分かる気がします。なんとか続けていっていただきたいですが、大丈夫なようです。頑張ってください。

それから、蕨野の集落ですけども、高さがあって地形が非常に複雑なんですけども、何カ所もあって驚きました。その複雑な地形に合わせて、場所によっては高い石垣を積み重ねなければならない、そういう棚田を先人がつくられたわけです。それを1つの集落でなんとか維持していこうということで、いろんな工夫をされて団体がいくつもできました。その背後に集落というものがあって、強力にまとまって活動しておられます。

ただ、ご高齢化も進み、難しい将来が予想される中で、私自身は集落の上にどっかりとあるような組織から、もう少し外部の人をうまく使うような、今もちろん交流はされているわけですけども、中心になって働いてくれるような人材の確保ができないか。あるいは若い人が戻ってきて次の展開があるといいなというふうに思いました。ただ、集落としてこれだけ頑張っておられる姿は、日本の農山



村の、世界に例のない誇るべき力だと理解をしておいていただきたいと思います。

高山地区公民館の場合は全員がNPO法人に参加して、運転担当の人が野菜を集めて出荷されたり、買い物ツアーに行かれるんですが、これにきっちと日当が出ます。会合の料理を作ってくれる女性部も、働いたときには日当が出る。イベントには参加費をもらうということで、小さいお金が非常に筋の通った形で回っていることが素晴らしいなと思いました。日置市が役所のOBなどを支援員として地区に派遣して、それをサポートしていることも素晴らしいですね。

先ほども言いましたが、山間に散らばっている集落では、お店もないし、お医者さん行くのも大変だ。そういうところが全国にいくらかもあるわけです。それを何とか支えようと国は小さな拠点づくりとか、私どもの過疎問題懇談会では集落ネットワーク圏という方向を提案しています。集落をなくすとか、合体するということではなくて、システムとしていい形にしていいただきたいなということを提唱してるんですが、そういう意味ではこの高山地区公民館は、その素晴らしい見本であると受け止めました。本当にお年寄りの笑顔が素晴らしい。

私日本の過疎問題にずっと付き合わせていただいておりますけど、「今までの過疎対策の成果はなんですか」と、ときどき国のちょっと違った筋のお役人とか、都市の人に聞かれるんです。私は、日本の隅々でお年寄りが笑顔で暮らしている。そういう状態をこの日本の国ではなんとか維持してきている、つくってきている。世界にはそうないですよ。それが基本的な成果だと思います。ある時期は山の中の集落に車が入れるように道路を付けることも必要だったでしょう。そして今は、地域社会の仕組みというものをよりよい形に少しずつ変えていく。そういうことが求められているのではないかなと思っています。

表彰された団体はさらなる発展に向けて、そして分科会に参加された皆さんはこれをよい刺激として新しい取組みの実現に向けて、それぞれ頑張

っていただくことをお願いして、私のまとめとさせていただきます。時間が尽きましたので、これで第1分科会を終わらせていただきたいと思います。どうも、長時間ありがとうございました。

唐津市現地視察

蕨野の棚田



小松酒造株式会社



JAからつ逢地の里直販所



多久市分科会

過疎地域自立活性化優良事例発表会

歓迎挨拶

(多久市長)

横尾俊彦

コーディネーター

(法政大学現代福祉学部 教授)

関司直也

事例発表団体

特定非営利活動法人 越後妻有里山協働機構 (新潟県十日町市)
都市と地域の協働で行う、アートによる地域活性化「『大地の芸術祭』の里」

郡上市 (岐阜県郡上市)
住民主体による手づくり自治と産業の創出～ハンドメイドの里「めいほう」をめざして～

一般社団法人 おいでん・さんそん (愛知県豊田市)
都市と山村が支え合う「暮らし満足都市」豊田市～中間支援組織“おいでん・さんそんセンター”の取組～

四国西予ジオパーク推進協議会 (愛媛県西予市)
リアル風景と音楽の融合



過疎地域自立活性化優良事例発表団体



えち ぎ つ ま り さ と や ま き よ う ど う き こ う
特定非営利活動法人 越後妻有里山協働機構 (新潟県十日町市) **総務大臣賞**

都市と地域の協働で行う、アートによる地域活性化『大地の芸術祭』の里

里山を舞台とした国際展「大地の芸術祭」をきっかけに、過疎化の結果生まれた空家・廃校を活用・再生した美術館・レストラン・宿泊施設の運営や、棚田保全活動、グッズ開発などに集落や地元企業とともに取り組むことで、地域の自立をめざした活動を行っている。アートプログラムや棚田保全活動を通して、都市と地域が協働することで、総合的に地域の魅力を高めている。



ぐ じ ょ う し
郡上市 (岐阜県郡上市) **総務大臣賞**

住民主体による手づくり自治と産業の創出
～ハンドメイドの里「めいほう」をめざして～

明宝地域では、将来のめざす姿を「ハンドメイドの里（住民自治も特産品もすべて手作り）」とし、地域住民（民間）と行政が目的を共有しながら、分野を超えた組織間連携による地域活性化の取り組みを進めている。24の地域づくり団体が活発な活動を展開し、また、団体間の連携が新たな産業の創出につながる好循環を生み出している。



い け い で ん さ ん そ ん (愛知県豊田市) **連盟会長賞**

都市と山村が支え合う「暮らし満足都市」豊田市
～中間支援組織「おいでん・さんそんセンター」の取組～

中間支援組織「おいでん・さんそんセンター」を設立し、そこをプラットフォームとして住民、企業、団体、NPO、研究者などが集い、専門性を生かしながら市民主導の取組みを迅速、柔軟に展開している。都市と山村をつなぐ支援として、企業と山村地域のマッチング支援、研修・体験・CSR事業のコーディネート、山村でのソーシャルビジネスへの助言等を実施している。また、移住定住を総合的に支援するいなか暮らし総合窓口も開設している。



し こ く せい よ
四国西予ジオパーク推進協議会 (愛媛県西予市) **連盟会長賞**

リアル風景と音楽の融合

「四国西予ジオパーク」の雰囲気盛り上げるBGMが加われば、より一層素晴らしい風景になるはずとの思いから、四国西予ジオミュージックプロジェクトを開始した。地域の魅力を表現した楽曲や映像作品を募集したコンテストの開催、市内最大の集客施設である道の駅どんぶり館では、観光客向けにジオミュージックを収録したオーディオプレイヤーの貸出を行い、交流人口の拡大と地域活性化に取り組んでいる。

《現地視察》



- 廃校を活用した多久市児童センター「あじさい」
- 多久聖廟、東原庁舎

過疎地域自立活性化優良事例発表団体

特定非営利活動法人 越後妻有里山協働機構（新潟県十日町市）
都市と地域の協働で行う、アートによる地域活性化「『大地の芸術祭』の里」

郡上市（岐阜県郡上市）

住民主体による手づくり自治と産業の創出～ハンドメイドの里「めいほう」をめざして～

一般社団法人 おいでん・さんそん（愛知県豊田市）

都市と山村が支え合う「暮らし満足都市」豊田市～中間支援組織“おいでんさんそんセンター”の取組～

四国西予ジオパーク推進協議会（愛媛県西予市）

リアル風景と音楽の融合



歓迎挨拶

多久市長

横尾 俊彦氏（よこお としひこ）

おはようございます。昨日から、続けて参加いただいている方、ありがとうございます。たくさんいらっしゃいますね。全国各地から今日は800人くらい、合計して、昨日の全体会にもご参加いただいて、そのときに総務大臣表彰また過疎地域自立促進連盟の会長表彰を受けられた事例を4つ、この多久でご披露いただくことになりました。関心がある方が全国から、また市内でも議会や行政や地域の世話役の皆さんはじめ、各種団体からご参加をいただいて、心から御礼を申し上げたいと思います。ようこそ多久へ。

私は、県の過疎地域自立促進協議会の会長をさせていただいてますが、昨日少しお話したのですが、平成の大合併の前の3300市町村時代では、過疎団体は1200ぐらいだったと思います。しかし、面積を見ると、国土の半分が過疎地域だったのです。平成の合併がありましたの

で、市の区域は変わりましたが、今でもそれは変わらないものがあります。都会の皆さんや、全国の皆さんがストレスを感じて、「ほっとしたいな」と遊びに行くときは大概、過疎地です。海、山、湖、清流、おいしいもの食べますね。「これうまいな」と食べる食材も、かなり過疎地域から出てくると思います。そうやって考えていくと、命にとっても、心にとっても、とても大切な空間が過疎地域にあるなと僕自身思っています。

今日、初めてお見えになった方もいらっしゃるのですが、昨日の議論の中でもお話ししましたが、私市長になって最初に、交付税要望や市の財政確保のための要望に総務省に、当時自治省ですが、行きました。そのときに自治省幹部の方から、こう言われたのですね。「ヨーロッパには過疎という言葉はないよ」と「日本にはそうあるけど」。「どういう意味ですか」と聞

いたのです。英語ですと過疎つまり「人口の少ない」という意味は「depopulation」というのです。

さて、どういう状況になっているかというと、例えばフランスなどでは数百人の村や町があって自治が行われていますし、それぞれの町の真ん中に人が集ってきて、広場にはちょっとした噴水や植栽があって、その周りにカフェとかバルとか、パブとか、ミニホテル、旅館があって、そこに旅人が来て語ったりしながらひと時を過ごしたり、元気に明日の活躍を、お互いに励まし合ったりしてる。そういう形で育てるんだという話を、当時聞いたことを昨日のことのように覚えています。そのときに、その幹部の方とお話をして、これからの時代大切になるのは、人口の多い少ないは、もちろん、ある意味で適正な人口の規模は必要だと思いますけれども、今いらっしゃる皆様やこれから来てくださる皆様が「ここはいいとこだな」「すてきなあ」「ほっとするな」というところを創っていくような、中身を高めていくことが必要だなあと、その時感じながら、その幹部の方とお話をしました。その幹部の方はその後政権中枢に入って大きな仕事をした方ですが、そういったことを思い起こしながら過疎地域のあるべき姿、いろんな工夫がされているムラおこし、地域おこし、そして各地で展開されているということです。

今日、お手元の資料にございますように、新潟県の十日町、岐阜県は郡上、そして愛知県の豊田、そして愛媛県西予、それぞれの地域に知ってる方が、何人もおられまして、今日は楽しみに私も勉強させていただきたいと思います。

また、今日全体のガイド役をしてくださる図司先生は、お話してびっくりしたのですが、早稲田大学とのコラボで多久で今、町歩きをされたり、町の活性化のグループの勉強会、ワークショップをしています、その指導教授である後藤先生とは門弟関係があると聞きました。

図司先生は農業経済にお詳しい先生ですので、また今後応援いただければと思っています。お名前の図司とはすごいですね。「図りごとを司る」と書きますから。すごいなあと思っています。

それぞれの地の事例の詳しいご報告と、それを踏まえて図司先生のもとで行われるディスカッションが、実りある機会となりますようにと存じます。

そして午後にはオプションツアーを用意してまして、定住促進に資するように廃校舎を整備した子育て支援の児童センター、手元の資料にありますように多久聖廟関係のご紹介もさせていただきますようにしています。なお、ご予定に余裕のある方はどうぞ、泊まってください。日曜日は投票日でございますけど、多久聖廟では300年以上にわたって続いている「釈菜（せきさい）」という孔子を讃える祭典が午前10時から開催されます。会場の外がそわそわしているかもしれませんが、このひと時はお互いの未来、お互いの地域のことを考えながら、すてきな時間となることを心から念じて、またご参加いただいた皆様に心から感謝をささげて、ご挨拶にかえさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

過疎地域自立活性化優良事例発表会



コーディネーター

法政大学現代福祉学部 教授

図司 直也氏 (ずし なおや)

1975年愛媛県生まれ。東京大学農学部を卒業し、東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻に学ぶ。2005年に同研究科博士課程を単位取得退学。博士（農学）。財団法人日本農業研究所研究員、法政大学現代福祉学部専任講師、准教授を経て、2016年より現職。（財）地域活性化センター・地域リーダー養成塾主任講師、地域振興・人材育成に関するアドバイザー等を歴任。専門分野は、農山村政策論、地域資源管理論。主な著書は、『地域サポート人材による農山村再生』（筑波書房）、『人口減少社会の地域づくり読本』（共著：公職研）、『田園回帰の過去・現在・未来』（共著：農山漁村文化協会）、『農山村再生に挑む』（共著：岩波書店）など。

図司 皆さん、おはようございます。法政大学の図司と申します。よろしくお願いします。今回、優良事例の発表ということで、たくさんの方々に分科会にお集まりいただきましてありがとうございます。聞くとおところによりまして、かなりの数の方がご希望されて、ただバスのご都合もあって、ほかの分科会の方に移っていただいた方もいらっしゃると思います。そういう意味では、過疎地域での取り組みに対して皆様方に深く関心を持っていただいていることに大変ありがたく思っております。

私、今回ここでコーディネート役を引き受けさせていただいているのも、今回の優良事例表彰の委員会に関わった経緯もありまして、「責任をもってコーディネートをしろ」と言われたと思っております。

4団体にこれからご報告をいただきますけども、15分ずつぐらいのご報告になります。そのあと意見交換の時間も持ちますが、昨日のシンポジウムのように余裕をもってという形にはならないかと思います。何より今回事例を聞いて、ぜひ皆さん方には、それぞれ現場の方に足を運んで、現地の様子とそこで展開されている皆さん方との交流を通じてご理解を深めて、またそれぞれの地域の今後の展開にも一歩踏み出すきっかけにつなげていただくのが、おそらくこの分科会の役割であろうと思

います。どうしても時間の関係で至らないところもあるかと思いますが、ご理解をいただければと思います。

意見交換の後に短い時間ですけど、会場の皆さんからのご質問をいただければと思いますので、ぜひ短い時間ですが、もし何かありましたら積極的にご活用いただければと思っております。

それでは、最初の事例発表に入っていきたいと思います。最初は、総務大臣賞受賞されました特定非営利法人越後妻有里山協働機構の山崎聡さんから「都市と地域の協働で行う、アートによる地域活性化「『大地の芸術祭』の里」をテーマに事例発表をしていただきます。山崎さん、どうぞ前の方にお上がりください。どうぞ、ご着席の上よろしく願いいたします。

都市と地域の協働で行う、アートによる 地域活性化「『大地の芸術祭』の里」

山崎 皆様、おはようございます。越後妻有里協働機構の山崎と申します。今日は、よろしく願いいたします。着席して報告させていただきます。

団体の名前が、非常に漢字が多くて分かりにくいんですけども、パンフレットの方で紹介させていただいてますが、アートによる地域活性ということで、現代アートを活用した取り組みを行っております。

なかなかアートというのは、あまり皆さん身近にないという方も多いと思うんですけども、どのようにアートが過疎問題に対して関係できているのかというようにところをご報告できればいいかなというふうに思っております。

まず、私どもの団体のベースとなっているものが、「大地の芸術祭」という現代アートのイベントになります。こちら3年に1度開催しているもので、初回が2000年ですね。来年また2018年夏に第7回の予定をされていますけども、このようなイベントを軸として行っております。

最近、日本全国でかなり現代アートのこういったイベントが非常に増えていって、今年もおそらく6か、7ぐらいやっているとは思いますが、そういった先駆けと言ってもいいのかなというふうなものです。こちら「大地の芸術祭」。

なぜこういったイベントが開催されてきたかという背景ですけども、当然、過疎問題ということで空家とか、廃校の増加とか、集落のコミュニティとか、低下とかそういったところは、いろんな各地域とも共通するかと思うんですけども。

もう1つの要素として、この新潟県の十日町市、そして同じく芸術祭を行っている、合同で行っている隣の津南町。そういったところは日本有数の豪雪地でもありまして、非常に1年の3分の1くらいは雪、ゴールデンウィークくらいまでもまだ雪が残っているぐらいの非常に多い雪が降るわけですけども、そういった中で里山文化というものが継承されてきたと。こ

ういった豪雪地だからこその文化ということもあるわけで、そういった地元の方が自然と関わってきた技術とか、そういったものをうまく活用しながら新しい魅力に転換できないかなということで、アートを使うという方法もですね。

なかなか地域の技術とかを単純に伝えるってことも重要なんですけども、そこに別のアートといったような要素が入ることで、それまで全く無関心だった人が、例えば技術を知ることができるとか、あるいは文化を知ることができるとか、新しい世界、媒介にアートというものがなり得ますので、そういったところが1つポイントになるのかなというふうに思います。

目標としては当然、地域の資源や魅力の再発見ですとか、それだけで自立する地域を目指すということで行っています。

その中で、私どもの団体、NPOということで、実は2000年に芸術祭が始まっているんですけども、団体としては2008年に設立されています。当初はボランティアを主体とした方々と、市役所の方とかと一緒にやっていたんですけども、そういったところを体系化して、しっかりと地域と向き合っていくためということで、2008年に設立されています。

そして芸術祭が、3年に1回ですけども当然イベントで終わってはしょうがなく、昨日のパネルディスカッションでも話が出ましたが、地域と関わっていくプロセスというのが大事だという話がありましたが、そういったことで3年に1度だけではなく、毎年常々、地域と関わっていくために、ということで、NPOの方が活動しているということですね。ですので、こちら下半分にスケジュール別紙と書いてありますけども、大地の芸術祭というものを軸にしながら春夏秋冬と地域の魅力ございますので、そういったところを対外的に伝えていくような努力を通年の取り組みとして、NPOが行っているというものになります。

具体的に3点ほど活動が上げられるかなというふうに思っています。1つ目は当然、アートによる地域活性ということで、こちら左側に写真が3点あるのは、1番上が廃校ですね。廃校を使ったアートの施設で、こちらは学校を丸ごとそのものが作品となって

るもので、お客さんが体育館から始まって校舎を巡りながら、物語を読むというか体験するというような施設。

2番目の日本家屋があるんですけど、こちらももう百数十年経っている日本家屋で、地震のときにちょっとぶれかかったんですけども、それを再生して今は主に陶器ですね、焼きものを館内にいろいろ飾っていて、床の間が焼きものになっていたりとか、お風呂も焼きものになっていたりとか、そういった形でちょっと特色のある美術館のようなものみたいになってますし、1番左下は美術館です。こちらそのまま美術館として活動している施設で、展示会などを行っているといったものですね。

あとちょっと少し毛色が変わってしまうんですけども、私どもは「まつだい棚田バンク」というような取り組みを行っています。こちらは先ほどの過疎問題ということで人が少子高齢化で人が少なくなっていくんですけども、その中で多くの田んぼが、なかなか地元の方が管理できないということで「もう、だめだよ」と言って相談されたりして、その中で私どもが棚田を預かって、それで都会の人に株主になってもらって、その資金をもとに地元の棚田を保全するというような活動を行っています。

こういったものがあることで、例えば株主の東京からのお客さんがこう稲刈りにやって来たりとか、田植えにやって来たりとか、そこでまた地元の人と交流されたりとかということで、いろんな都市と地域の交流がされていくというようすがありますね。

そういったところで、最後、都市と地域の交流で、まさにタイトルとして上げていましたけれども、そういったイベントをやったり、アート自体も本当にほとんど都市部とか、最近だと海外からも非常に多くお客様いらっしゃいますので、そういった方が地元の方と触れ合ったり、あるいは地元の食材を使ったレストランを作って、そこでほんとに地ものだけで食材を提供して食の交流を行ったりとか。あと、いろんなツアーとかも当然、行ったりしてますし、右下は自転車のイベントをやったりとか、こういったこともやって、いかに都市と地域をついでいくか、といったことが非常に大

きな軸ということになっています。

こちら具体的な写真として今、説明したような内容ですね。この主に美術館だったり、あと空家だったり、廃校だったり、あと木材作品も多数ございますね。右下の、里山は自然にいかに関わり合っていて、里山を運転していると急にアート作品が現われて「おっ」となるんですけども、それが意外にまた新しい里山の風景として溶け込んでいくことで、新しい魅力を生み出すこともできるかなというふうに思います。

冒頭に春夏秋冬のいかに通年で魅力を伝えるのか重要だということで、当然いろんな地域に日本全国春夏秋冬の魅力あると思うんですけど、私どもも例えば春だったら、山菜採りを行ったりとか、夏は水っていうものをテーマにして展示会をやったりとか。あとは秋だったら当然、紅葉とか、トレッキングのイベントやったりとか、あるいはキャンプのイベントやったりとか。あと冬は本当に豪雪なのでなかなか難しいんですけども、でも冬でも地元の皆さんは冬を過ごすための保存食をうまく使ったりとかいうことをしていますので、その保存食とかを楽しむ「雪見御膳」というような、雪を見ながら食事を楽しむようなツアーなんですが、そういったものを企画して、四季それぞれの魅力を伝えるというようなことをやってますね。2016年で来場者は8万人ぐらい、短い期間だったんですけども、これぐらいの来場者がいらっしゃっています。

重ね重ねになってしまうんですけども、こういった棚田バンクのイベントですと、下のほうにある耕作面積ですと今、5万平米を超えている形で、非常に大きな面積ですね。里親の方、主に東京とかの方が多くですけども300人を超える方がいらっしゃいますので、右側の写真がイベントの写真なんですけども、イベントのときは200人ぐらい一気に来られて、みんなで一斉に田植えをやったり、稲刈りをやったりとか、そういったことをしています。

概要として、なかなか地域と都市がどうやって、アートによって結びついていくかということで、具体的には集落の方、当然いらっしゃるんですけども、そこ

にボランティアが入ったりとか、あるいはアートをつくるアーティストが来たりとか、さっきの里親さんですね、都会の方とか。最近ですといろんな、なぜかIT企業の社長さん方が興味を持っていらっしゃるのか、お越しいただいたりしているんですけども、そういったことで、いろんな側面で交流の場を今、設けることができます。

今後の取り組みとして、新しい取り組みをいろいろ行っています。右下にサッカーをやっている女性の写真があるんですけども、前回の2015年の芸術祭のときにサッカーのチームを作ったんですね。これはどういった背景があるかという、なかなか女性の、特に、なでしこリーグはあるんですけども、結構そのあとサッカーの選手寿命が短いので、食べていくのが結構大変だということで、別の技能をうまく習熟できるような機会が与えられないかなということで、これまさに農業をしながらサッカーを実は選手を目指している取り組みで日中、畑に行き、午後は練習するみたいなことをやって、あとは週末試合をやったりとか。一方でサッカーの選手でもあるんですけども、ただリタイアしたあと、実際農家になるかは分かりませんが、農業の技術を学ぶことで別の新しい第二の人生かもしれないので、そういったいろんな要素とアートを掛け合わせて今、活動を行っている、こういったスポーツですとか、さっきの冬の食事もそうですし、あるいは農業とか。そういったところで、いろんな側面での活動を行っているところですね。

アートというものは、なかなか非常にある意味便利なもので、なんでもありといえば、ありなので、なかなか1個のことに限らず、例えば、次はスポーツでない何かをやってもいいなと当然思っている、いろんな要素とアートを掛け合わせることで、それが更に新しい魅力につながるだろうと考えていますので、そういったところでいろんな事柄と結びついていけば、また新しい面白さが発見できるんじゃないかというふうに思っています。

最後にこういった棚田の風景まさに日本の原風景として、結構新聞なんかでも賞をいただいたりしてい

たんですけども、こういったような風景が広がっている土地ですね。

また来年2018年夏、7月28日から「大地の芸術祭」ございますので、そのときはぜひ

里山風景とか、あるいはさっきの食とか、スポーツとか、体験しにぜひいらっしゃって、アートといったものに少しでも触れられる機会ができればいいなと思っておりますのでよろしくお願いします。簡単ですが、本日は以上とさせていただきます。ありがとうございます。

図司 山崎さん、ありがとうございました。やっぱり芸術祭でも、単にイベントとしてお祭りのときだけではなく、普段から取り組みも大事だし、サッカーチームはこの間、私、番組でも丁度拝見してました。そういうアートから新しい取り組みに展開していく、非常に興味深いお話をいただきました。山崎さん、どうもありがとうございました。

山崎 ありがとうございました。

図司 どうぞお戻りください。それでは2つ目の事例の発表に移りたいと思います。同じく総務大臣賞されました岐阜県郡上市の取り組みです。伊藤雅史さんと置田優一さんからご報告をいただきます。「住民主体による手づくり自治と産業の創出～ハンドメイドの里「めいほう」をめざして～」ということで発表いただきます。

どうぞ、お越しく下さい。

郡上市（岐阜県郡上市）

住民主体による手づくり自治と産業の創出 ～ハンドメイドの里「めいほう」をめざして～

伊藤 こんにちは。岐阜県郡上市明宝振興事務所の所長の伊藤と申します。よろしくお願いします。今回、私たちの地域の活動が認められ、優良事例として総務大臣賞をいただいたことに心から御礼申し上げます。また本日、こういった場で発表の機会を

いただきましたことに感謝申し上げます。限られた時間ですので、ちょっとスライドの数が多いですけども、はしょった説明になると思いますが、よろしくお願いしますと思います。

また本日は郡上市市長公室・置田部長と2名で説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。それでは座って説明させていただきます。

では最初に、郡上市の紹介を簡単にします。まずは郡上市の位置です。郡上市は日本の人口の重心がある岐阜県の中の、さらに真ん中に位置をしています。郡上市には特徴的な観光資源がたくさんありますが、その中でも「郡上おどり」が有名で7月上旬から9月上旬まで32夜にわたって踊り明かすという、圧倒的な踊り文化が根付く地域であります。

郡上市の面積は1,030平方キロと広大な市域になります。ここからは明宝の概要です。平成16年3月に郡上郡の7町村が合併して、明宝村は郡上市明宝となりました。位置は郡上市の北東部、岐阜県の丁度真ん中あたりになります。

明宝地域は自然や歴史、文化、山里の暮らしが今に残る典型的な農山村地域です。面積、人口はご覧のとおりです。平成27年国勢調査で高齢化率が37%を超えました。人口も最盛期から3000人以上が減っています。こうした急速な過疎化の流れを食い止めるため、明宝地域の地域づくりがスタートしました。

明宝地域の活性化の歩みを人口の推移の中で見ますと、1980年代後半からの第1ステージ、そして2000年に入って以降の第2ステージに分けることができます。地域づくりの第1ステージは、第3セクターを核とした地域づくりです。簡単に言いますと地域の交流人口や滞在時間を増やし、地域消費を拡大するための特産品や特産品販売をする拠点を整備して雇用場を生み出し、地域内経済循環と、これによる波及効果を高めるという戦略でした。結果、これといった産業がなかった過疎の地域に雇用が生まれ、地域経済の活性化を達成しました。これが第1ステージになります。

昨夜の交流会で皆さんにご提供させていただき

ました「明宝ハム」は、地域活性化の核となる存在です。

そして第2ステージ、これが今回の表彰対象となった取り組みです。地域が一体となって過疎の村を変革していったスピリッツを引き継ぎ、今度は住民主体のさまざまな地域づくり活動が活発化してきました。わずか1,728人の地域に22の地域づくり団体、3つのNPO法人、2つの一般社団法人、そして3つの第3セクター会社が存在し、それぞれ連携しながら活動を展開しています。これは地域づくり団体一覧です。団体数は全部で27になります。

ここから取り組みの一部を紹介します。最初は「めいほう鶏(けい)ちゃん研究会」です。2010年から毎年「B1グランプリ」に参加し、地域の魅力を発信しています。「鶏ちゃん」という郷土食を掘り起こし、それに磨きをかけてひとつのブランドに育てあげました。「鶏ちゃん」を加工販売する会社も立ち上げ、雇用の場も生み出しています。

次は、「ふるさと栃尾里山倶楽部」です。13世帯の小さな集落での活動ですが、活動は幅が広く、活動を通して多くの移住者も生まれています。活動の柱は「栃尾里人塾」という地元住民と都市住民の交流と集落づくりを実践する場になっています。古民家を再生し、これを拠点とした活動に多くの都市住民が共感して、これまで延べ1000名以上が塾生として参加いたしました。またこの活動をとおして、郡上市内に多くの住民が移住、地元自治会へは3組、5人が移住しています。

次は、「NPO法人ふる里めいほう」の活動になります。このNPO法人は、福祉有償運送や放課後児童クラブ、公共施設の管理運営等を主な事業としていますが、小さなお子さんを持つ若い女性の働く場や活躍する場づくり、または買い物支援の実証事業など新しい事業にもチャレンジしています。

次は、「明宝山里研究会」の取り組みです。森林所有者の山への関心を高めることと、地域の中で小さな経済の循環を生み出し、過疎地域で新たなビジネスを実現することを事業の目的としています。この「めいほう里山もくもく市場」は、薪ストーブを自宅

に設置する人が都市部でも増えてきたこともあって、薪ストーブユーザーをターゲットに戦略を絞り込みました。それによって顧客の囲い込みに成功し、一定の原木や薪を販売することができるようになりました。

そしてこの研究会は、平成26年度に郡上市の市営温泉施設に導入した木質ボイラーの運営にも深く関わっています。温泉施設の木質ボイラーはチップと薪の2種類の木質ボイラーを導入しています。このうち薪ボイラーに使う燃料の薪の調達、納入はすべて研究会が担っています。地域の中でエネルギーの循環の仕組みが出来上がり、雇用の場も生まれています。温泉施設の燃料代も、年間で約500万円の節減効果が出ています。温泉施設の木質ボイラーを動かすために、身近な山の資源を生かす仕組みづくりが一番重要になります。こうした地域の経済循環に研究会が関わることで、温泉施設へのエネルギーの供給の仕組みが確立しました。では、ここからバトンタッチして置田の方から説明させていただきます。

置田 郡上市長公室付部長の置田と申します。最初に「NPO法人ななしんぼ」の取り組みを紹介いたします。「ななしんぼ」って、こちらの方言で、半人前のことを言います。名前がないという意味もありまして、つまり地域の黒子になって、そしていろんなものをつなぎ合わせて、未来をつくるという目的で立ち上がった中間支援組織になります。

「ななしんぼ」の事業の柱になっております「集まる」について少し紹介をします。「ななしんぼ」では、ワークショップで再生した地域の空き工場を活用して「コミュニティカフェ」を運営しています。この「コミュニティカフェ」が、いろんな人が集まる場づくりになっていまして、みんながやりたいということをチャレンジするそういった場にもなっています。この写真は子育て世代のお母さんたちがカフェとかギャラリー、料理教室に使っている様子になります。ほかにもお年寄りの方のサロンとか、同窓会とか、また、地元高校生が「高校生カフェ」を定期的に開催をしていまして、学

びと実践の場としても活用されています。

「ななしんぼ」を発案した「MOSO塾」というワークショップなんですけど、ちょっと手法は時間がないので説明できませんが、このMOSO塾から出されたアイデアが実際の取り組みとして動きだしている、そういう事例もたくさん生まれています。

それからこれはもう1つ、「ななしんぼ」の取り組みの柱の中で「育てる」というものがありまして、この育てるの中にはいろいろあって、その中には「空き家」も入っています。空き家を地域の大切な資産として捉えて、さらに活用する仕組みを考えて、これを実践するというのもやっています。先ほど説明したコミュニティカフェも空き家の活用の1つの事例になります。現在までに、4組がこの制度を活用しています。このほかにも、地域づくり団体の事務局支援を主な業務としてやっています。

次に「明宝ブランドづくり戦略会議」を紹介しています。この取り組みは第3セクター会社とか、NPO法人とか、地域づくり団体、それから行政が構成メンバーとなっております。地域の資源をいかした新しいブランドとか、特産品を作り出してそれを地元の「道の駅」で販売していこうというものです。戦略会議では、手づくりの価値をみんなで高めて、これにしっかりデザインをかけて、内外に戦略的に発信をしたいということで取り組みを進めているものです。

次は「月刊めいほう製作委員会」の取り組みです。平成26年6月から地域の密着情報誌「月刊めいほう」を毎月発行していまして、明宝地域全戸に配布しています。公民館だよりとか各種のお知らせ、地域のさまざまな情報を1冊の冊子に集約して配布することで、自治会チラシの配布の負担が軽減しています。この写真にあるように地域の動きや課題というものを、住民の皆さんが自分のこととして考えられるように、特集記事も毎月欠かさず掲載をしています。

次に「一般社団法人明宝ツーリズムネットワークセンター」の取り組みになります。この組織は、地域振興事業部と自然体験事業部の2つの部で構成していまして、現在、持続的な地域経済実現に向けて

本当に多くの取り組みを実践しています。

この組織の設立目的は、まず地域密着型、それから着地型のツーリズムの商品を開発してリピーターを増やすことと、それから自然体験を軸にした地域資源活用型の新しい産業づくりを目的にしています。自然体験を入口にした移住者の増加というものにも期待をしています。

この法人の事業部門の地域振興事業部では、農家民泊事業の企画・実施、また、地域の視察が多いことから、視察をプログラム化し対応しています。そのほかイベントの開催や、地域密着型のツーリズムの商品を開発しています。

もう1つが自然体験事業部。この写真にあるように、子ども向けの自然体験プログラム「冒険キッズ」というものをやっております、その他にも家族向けの企画をやっています。「明宝ふるさと家族」という制度を設けまして、リピーターの獲得に力を入れています。平成27年度5013人、28年度6552人がこの「冒険キッズ」を利用しました。

この法人なんですけど、地域の中にスキー場の経営を行っている「めいほう高原開発株式会社」があるんですが、ここの旅行事業部門「めいほう旅えもん」と事業連携を強めるということで、今後両者の間で季節に偏っている雇用を通年雇用に変換していくような、そういった仕組みづくりも今進めているところでございます。

それから、最後に紹介する団体「明宝ジビエ研究会」があります。この会は地元有志の皆さんが使われなくなった消防詰所をすべて自分たちの手作業で改修をしてジビエの加工所として整備しました。獣害対策で処分されていた鹿とか、猪という山の恵みに光をあてて新しいブランドを確立していこうと、新しい商品開発に取り組んでいます。現在、福岡から移住された女性が獣肉加工と指導にも関わって、加工場の経営を進めています。

明宝地域では明宝振興事務所が地域の住民や団体の方と一緒に、戦略を練って事業を推進しています。実際にNPO法人とか、地域づくり団体構成員に職員も入って活躍しています。職員のダイ

レクトな関わりの中で、課題が明確化されます。また情報共有がしっかりできるということもありまして、次のステージにむかう足場が築かれるという、そういった好循環を生み出しているということです。

現在、本当に多くの組織とか団体、横のつながり、これをより高めていくために、まず事業のロスをなくして効果的な地域経営を目指していきたいということで、多機能型の組織連携の仕組みづくりを進めているところです。それぞれの団体が持つ人的資源、経営資源というものを、しっかり共有しながら未来を担う人材づくりとか、そういったものを強力に進めていきたいということを考えております。

最後に、郡上市の取り組みを少し紹介します。郡上市は今、「郡上カンパニー」という取り組みを進めています。この取り組みは同じ志を持つ仲間、「カンパニー」が力を合わせて、地域に眠っている資源を仕事に変えていく学びと実践の場になります。地域の価値の持続、地域の中の経済の循環の仕組みを構築することと移住、定住の新しい形をつくること、それから都会に軸足を置きながらも、郡上市に深く関わりたいという「関係人口」の増加に向けて事業を推進していくものでございます。

大変走った説明で申し訳ありませんでしたが、以上で郡上市明宝地域の事例発表とさせていただきます。ありがとうございました。

図司 ありがとうございました。郡上市、特に旧明宝村、明宝地域の中心としたご報告をいただきました。私も現地にお伺いしましたけれども、今回受賞の対象が「郡上市」になっているのは、実は郡上市さんも、合併前の町や村の取り組みを尊重して、そのよさをしっかり引き出すような後押しをしようということもありましたので、今回「郡上市」という形で表彰をさせていただいております。お二方どうもありがとうございました。どうぞ、お戻りください。

それでは、次に全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞された2つの団体のご報告に移りたいと思います。

まず、「一般社団法人おいでん・さんそん」の鈴木

辰吉さんと西田又紀二さんから「都市と山村が支え合う「暮らし満足都市」豊田市～中間支援組織“おいでん・さんそんセンター”の取組～」ということで報告をいただきます。よろしくお願いします。

一般社団法人 おいでん・さんそん(愛知県豊田市)

都市と山村が支え合う「暮らし満足都市」豊田市～中間支援組織“おいでん・さんそんセンター”の取組～

(画像・音楽)

旧豊田市街を流れる一級河川矢作川は人工林の間伐遅れのため保水力は低下し、市街地も氾濫寸前だった。その災害をきっかけに2005年に豊田市と上流の6町村とで合併をし、森林面積が7割を占める日本の縮図ともいえる新しい豊田市が誕生した。新しい豊田市は「暮らし満足都市」を目標に掲げ、地に足の着いた新しい幸せの形を提案すべく人と人、町と田舎、企業と地域を繋ぐためのプラットフォームとして「おいでん・さんそんセンター」を設立した。

(音楽)

鈴木 改めまして、皆さん、こんにちは。愛知県豊田市からまいりました「一般社団法人おいでん・さんそん」代表理事を務めております鈴木でございます。チーフコーディネーターの西田でございます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

この映像です。トヨタ自動車に勤める袋真司さん44歳は、平日はトヨタ自動車の自動車ラインの設計をするエンジニアです。週末になりますと「きこり」に変身して山間地域の山に入って森林ボランティアをやると。彼にとってそれが最も暮らしやすい幸せな形と彼は言います。豊田市は、都市と山村が両方共存する都市であるからこそ、見えてくるのがたくさんあると思います。多くの過疎地域というのは、過疎地域の側から物ごとを考えますが、豊田市の場合は、課題が実はいっぱいある都市の側からも山村地域を見ることができます。

豊田市はこの山村地域に暮らしながら都市に通勤をする人もいるし、袋さんのように都市に働きながら週末に山村に行く。あるいは都市の側から山村に移住をしてしまって、農的暮らしを行う。そういう方も多くおります。

日本の縮図ということで森林が7割を占める地域でございます。実は、平成の大合併で合併するときには過疎問題というのは、そんな大したことではないと実は考えていて、豊田市は今42万5千人の中核都市でございます。しかも自動車産業という強大な産業を持っておりますので、財政力も本当にありがたいことに豊かでございますので、お金をかければ過疎などという問題は一気に解決するだろうと高をくくって10年間、いろんな社会資本整備、経済対策等々いろんなことをやりました。

ところがこれが10年経ったときの豊田市の人口の状況でございます。実は合併前の10年間、合併をされたといいますか山村地域の人口減少が著しいというふうにいわれておりましたが、実は10年間で減った人口は8.6%。ところが合併してさんざんお金をかけて経済対策をやり、社会資本整備を行ったにもかかわらず、人口の減少は14.2%に加速しました。それ以降「おいでん・さんそんセンター」ができて改善したかという、まだまだ実は改善しておりません。人口は減り続けているのが、現状でございます。(画像)次お願いします。

そこで過疎という問題に対しては、経済対策や社会資本整備だけでは太刀打ちできないんだということに、ちょっと遅かったですけども気づきまして、2013年8月に「おいでん・さんそんセンター」というものを立ち上げました。ここでやっている仕事は主に3つです。①いなかと町の交流コーディネート、②いなか暮らし総合窓口、③「支え合い社会」の研究・実践ということで、豊田市から一般社団が業務受託を受けて①、②の事業を行います。3番目は一般社団の自主事業でございます。3番目の自主事業を行うために、この専門部会というのが市民の皆さんで作られまして、概ね100名くらいの方が活動しておりますけども、それぞれのテーマに分かれて、どうあるべ

きかということについて研究したり、実践をしております。

具体的な事例を紹介します。これは1つ目の仕事、市からの委託業務でございます。田舎と町の交流コーディネートということで、主には企業や労働組合へのCSR、農業体験、研修などのこれで44事業のマッチングをしております。あるいは大学や研究機関と調査、スタデーツアーそういったものをマッチングをしております。等々この5年間で、3月ですので4年間、139事業のマッチングを行ってまいりました。

具体的な事例を1つ紹介します。本当はたくさんあるんで、いっぱい紹介したいんですが、今日は1つにします。このマンツーマン株式会社っていうのは人材派遣会社でございます。静岡県から沖縄まで14の事業所があります。

この会社が「七・五・三」と言われるように、中卒で大体3年経って辞める人が7割、高卒が3年経ってやめる人が5割、大卒でも3年経つと3割の人が辞めてしまいます。それが日本平均の定着率なんですけども、そこもそういったことを解消しよう、なるべく定着してもらおうということで人材育成をする。あるいは幹部候補生といいますか、将来の会社を担う人材を育てるということで、相当お金をかけて今まで研修をやってまいりました。

あるとき海外へ進出をしようということで会社が方針を決めて、この若手の中から誰かを連れていこうということで、若手社員に「われと思わん者は手を上げろ」というふうに投げかけたところ、1人も手が上がらなかったということで、会社の担当役員がショックを受けて「もう、だめだ」と。「こんな研修やってもだめなんだ」と。いっそのこと、田舎へ連れて行って自分たちがどうしたら育つか、自分たちで考えろという研修をやります。

それを「おいでん・さんそんセンター」がコーディネートをして、これは牛糞堆肥をやっているところなんです。そうしたら彼らに任せたとろリーダーシップをとる者、企画力が伸びる者、コミュニケーション能力が伸びる者、ぐんぐん成長してきたということで、この会社は3年こういった事業を続けております。

この会社のなかでは他の事業は全部、予算削減の中で青天井予算、この事業にはいくら使ってもいいということになっているという好事例でございます。これはこの都市側のニーズの応えと同時に、山間地域の耕作放棄地の解消につながっているという事例でございます。(画像)次、お願いします。

次が、「田舎暮らし総合窓口」ということで、豊田市では田舎への移住を進めるためのビジョンを作っております。いわば移民計画を作りました。1年間に40世帯の町側に住む人に田舎に移り住んでもらうという、無謀と言いますか、そういう計画を実は作っております。その実現のために「おいでん・さんそんセンター」に「いなか暮らし総合窓口」という機能を持つように、これも委託業務で進めておるところでございます。(画像)次、お願いします。

行っているのが、特に昨年、集中的に行ったのが「隣の家に明かりが灯った。何年振りだろう」これは、定住促進委員さんのつぶやいた言葉をキャッチコピーに使用しましたが、この豊田市の山間地域で、向こう10年で新たに1800戸の空家が出ると。今ある世帯の23%が、「わが家は空家になるかも知れない」というアンケート結果が出ております。

現在でも1000戸くらい空家があるんですが、それがさらに1800戸増えるということですから、もう空家だらけの地域ができてしまう。多くの空家のオーナーは貸そうという気持ちは持っておりません。そういったオーナーに声をかけて「なんとか流通させてもらえませんか」というのが定住委員の仕事でございますが、そういった機運を高めようということで先ほどビデオにありましたような、出前講座とかいうのを20数回行って、うんと機運を高めてまいりました。

今年に入りまして、今度は都市側から田舎側に移ってもらおうということで「豊田の田舎移住計画」ということで、このユニフォームは「車だけって思った?」ということなんです。豊田市には山間地域があつて、移住先としても最適ですよということをPRするTシャツでございますが、こういった事業を始めました。

それでこの「空家情報バンク」を使って移住をし

た人だけで、この7年間で157世帯、409人が移住しました。そのうちの5割は豊田市の市街地から、山村地域の空家に移住しています。4割が愛知県内の豊田市以外の自治体、主に名古屋から豊田市の山間地域に移住してます。たった1割が県外からの移住でございます。したがって他の過疎地域で取り組んでいる移住対策と少し様相が違うのかもしれませんが、こういうことができるということです。目標は40世帯でございますが、本年度に入ってこの移住計画をすすめて40世帯ほぼ目標達成できるということです。これを毎年やっていこうと考えてます。(画像)次お願いします。

最後、「支え合い社会の研究実践」ってことでいろんな取り組みをしております。「地域スモールビジネス研究会」というところから発生したいろんな企業がありますので、2点ご紹介します。これは「あぜみち」という精神障害者のデイサービス型地域活動支援センターでございますが、山間地域にはこういった引きこもりとか、うつとか、10人に1人はかかる可能性がある、これは単なる病気なんですね。ところが田舎ではそういったことを隠してしまって、ひっそりと暮らしている人が多いということで、彼らは山村地域にこういった施設をつくらうということで、「おいでんさんそんセンター」が支援して設立しました。5月にオープンして来年の目標が20人の登録だったんですが、もうすでに8月末で20人に達成したと。

その背景は、地域から「いいんだ」と。「これは単なる病気で自分は普通に社会復帰できるんだ」ということを思った人がどんどん登録をしたという好事例でございます。(画像)次お願いします。

これはIターンの人たちは、どんどんネットワークを広げていって仲間ができます。仲間ができて、このIターン女子たちが、お菓子作りが趣味だったんですが、趣味が高じて店を開くということになって、こういった「すぎん工房」という工房を開くことになったという事例です。

まとめでございますが、特に今日申し上げたいのは、最近総務省がおっしゃっておられる関係人口、「観光以上、移住未満。」の山村に関わりを持つ人

たちをどうやって増やすかが今後の決め手になるということなんですが、中間支援という仕組みがかなり有効だということが、私どもの取り組みからいえると思います。

2つ目、移住者を受け入れる山村地域の持続化は可能。これは「1%戦略」、藤山浩さんの話と一緒になんですが、1000人というコミュニティに対して2世帯の子育て世代を毎年入れていくと、人口が減っていきます。減っていきますが人口の構造が変わって地域が持続化できるということです。

私どもの地域で、こども園というんですが未就学の幼稚園、保育園と合体しておりますけども、その数が約60人ぐらい、小学校の数が47人ということで、3歳から5歳までで60何人いますので、もう次の小学生は安泰という状況が生まれております。その背景はIターン者がどんどん仲間を呼んで入ってきて子どもをどんどん産み、Uターン者がそれにつられてどんどん入ってくるという現象が起こってる地域もあって、まさにこの2番のことは持続可能だというふうに思います。

あと地域活性化とは、つながり支え合う「真の自治」ということで。これは昨日の山崎さんの話にもございましたが、お金が、経済が回ることが活性化ではない。本当に安心して暮らせるということが自治に、地域の活性化につながるということが分かりました。

4番目でございますが、都市は都市らしく、山村は山村らしく磨き上げるということですが、私も勘違いしておりました。過疎地域というのは都市に比べて不便で暮らしにくい。だから少しでも便利になるように上げ底にしているいろんな対策をやるということだと思っていたんですが、実は山村に移住してくる人たちは、都市では息苦しくて暮らしにくい。山村なら自分はのびのびと暮らせるという山村にある魅力求めてやって来るわけですので、山村を都市にしてみたってはいけないということだと思います。

最後でございますが、豊田市ならではのことで都市と山村両方持っておりますので、山村の課題もわかりますし、実は都市の方が課題は満載です。

都市の課題は、実は山村はケアする力があるということも分ってまいりました。したがって、日本各地に都市と山村というのは一定あるわけでございますので、それぞれの都市と山村がうまくつながることによって日本中の地方創生、そういったものは東京の一極集中とか、その前に地方における都市と山村の支え合いが必要かなあと、今はアイデア勝負みたいな出し抜けは勝ち残れるというような話もございますが、そうではなくて、こんな狭い日本です。どこも消滅していいというところなんかないと思います。日本中が生き残っていけるそういう社会ができればというふうに思っております。以上でございます。

図司 ありがとうございます。豊田も一部過疎で、どうしても合併して一部過疎になると、山から里にどんどん人が降りてくるという現象が各地で起こってますけど、その逆の仕組みをどうつくりだしていくのか、いろいろな取り組みをご報告いただけたかと思います。どうもありがとうございます。お戻ください。

それでは最後の事例発表になります。同じく全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞されました愛媛県西予市、四国西予ジオパーク推進協議会の山下元紀さんより「リアル風景と音楽の融合」というテーマで事例発表いただきます。どうぞ、お上がください。

四国西予ジオパーク推進協議会（愛媛県西予市）

リアル風景と音楽の融合

山下 失礼いたします。こんにちは。四国西予ジオパーク推進協議会事務局西予ジオパーク推進室の山下と申します。本日はよろしくお願いいたします。座って説明させていただきます。

今回受賞させていただきました「四国西予ジオミュージックプロジェクト」について、ご説明をさせていただきます。

まず、その前に西予市のご紹介です。西予市現

在人口は39,103人、今もちょっと少なくなって38,000人後半ぐらいになっています。平成16年に西予市合併したのですが、それから12年で約7,000人も減少しておりますので、だいたい1年間で600人くらいは人がいなくなっているという状況です。高齢化率は39.6%。これも今現在は39.6%からさらにもっと上がっているのではないかと考えております。

西予市の位置ですが、皆さん西予市の名前と場所も分からない方が、多いのではないかと思います。西予市は16年に合併しました。県内には西条市という町がありますので、なかなか西予（せいよ）と呼んでもらえなくて、「さいよ」と呼ばれることも今までよくありました。愛媛県の西南地域にございますので、ここ佐賀県までは西予市から約6時間でこちらに参りました。

西予市の課題といたしまして、平成16年に合併いたしました。当時、旧5町が合併した町ですので、合併してから市としての統一感であるとか、市全体での取り組みというものがありませんでした。そういったところで、この日本ジオパーク認定に向けた取り組みを始めさせていただき、平成25年には日本ジオパークに認定をされました。

ジオパークというのは地球科学的に非常に価値の高い地質や地形、そういった自然遺産を保護・保全して教育や防災活動あるいはジオツーリズムといわれる観光に生かす取り組みで、有識者からなる日本ジオパーク委員会が認定をしております。

西予市は平成25年に日本ジオパークに認定されましたが、当時25地域だった認定地域も現在は43地域になっております。そして、この四国西予ジオパークの特徴ですが、西予市旧5町が合併したことで海拔0メートルからなんと1,400メートルの標高差を有しております。その中にはリアス式海岸であったり、高原盆地であったり河岸段丘、カルスト台地などいろんな地形がございまして、その中にはいろんな地形が化石、岩石がある。そういった多様性が特徴となっております。

これが日本全国のジオパークの位置図、ちょっと図から判りにくいのですが、赤い丸と青い丸がジオ

パークに認定されている地域。ちょっとこれもまた分かりにくいのですが、緑の場所がジオパークを目指している地域。今なんと全国の自治体の10分の1が、このジオパークに関わっているというふうにいわれています。

先ほど申し上げましたように、これだけジオパークが増えてきているとその中でも差別化をしていかなければいけない。さらにジオパークの中でもその質の担保が、近年叫ばれております。

さらに市としても何か、一体的に市民が取り組めるものがないかというところで、ジオパーク活動が始まりました。そういった背景があつてこの「ジオミュージックプロジェクト」が始まったわけですが、四国西予ジオパークには屋外に非常に美しい見どころ、自然遺産がたくさんございます。そういったものを活用して地域活性化や交流人口の拡大を実現したいといったところで「ゲームミュージック」に着目をいたしました。

皆さん、なかなかゲームってされたことないと思うのですが、近年テレビゲームっていうのは非常に進化しておりまして、ゲームの中の風景がまるで現実の風景と見間違えるようなものがテレビの中に映し出されます。そういったゲームの背景にはその場を盛り上げる音楽があります。例えば、映画なんかでも最後の盛り上がるクライマックスでは、その場面に相応しい音楽があります。この四国西予ジオパークでもそういった屋外の美しい風景に、その雰囲気盛り上げる音楽が加わることで、もっと楽しめるのではないかとということで、このジオミュージックプロジェクトが始まりました。そして、このジオミュージックプロジェクトですが、リアル風景と音楽の融合というキーコンセプトで、開始をさせていただきました。

まず、プロジェクトの展開といたしまして、ミュージックなので音楽が必要になりますが、私たちにはなかなかプロのミュージシャンとのもつてございませんし、自分たちで作るわけにもいきませんのでアマチュアミュージシャンに声をかけて曲を作ってもらおうと思いました。

そこで着目したのが、プロアマ問わず多くの音楽

制作者が集まる「M3」という音楽イベントです。このイベントが東京で開催されておりましたので、実際に私たちも参加してアマチュアミュージシャンをスカウトしました。

アマチュアミュージシャンの方に話を聞くと、近年、非常に音楽制作が手軽にできるようになったということでした。昔はギターとかピアノを弾きながら曲を作っていたのですが、最近はずべてパソコンで行われるみたいです。しかし、曲を作る環境は整ったけど発表の場がないため、誰かに制作した曲を聞いてほしいという思いが強くあつたようです。こういった意見が非常に多くあり、キーコンセプトであるリアル風景と音楽の融合を実現したいとお話をする、アマチュアミュージシャンの多くの方が興味を持っていた、プロジェクトに参画をしていただきました。

そして、そういった方々を実際に当市までお招きして、現地を回りながらその雰囲気を感じてもらって曲を作っていただきました。そうすることで現地の環境が分かり、川のせせらぎ、海の波音、そういったものを生かしたクオリティの高いジオミュージックが誕生いたしました。

さらにプロジェクトの展開として、クオリティの高い楽曲をアマチュアミュージシャンに制作してもらう一方、より多くの曲を集めたいということでジオミュージックコンテストを開催しております。コンテストはインターネット上で開催し、審査委員長にはゲームミュージック界では神と呼ばれる植松伸夫さん。また、福審査委員長にピアニストの西村由紀江さんを迎え、審査を務めていただきました。平成27年に開催した第1回コンテストではなんと2,187曲もの応募がございました。続く第2回は1,660曲。第1回に比べて若干減ってはいますが、曲のクオリティ自体はかなり上がっております。

さらに、このコンテストの特徴といたしましては、楽曲を応募する際に天候、四季、こういったのもイメージしていただいております。どういったことかと言うと、たとえば上と下に写真がありますが、これは同じ場所です。四国カルスト大野ヶ原と呼ばれる場所で、石灰岩台地なので白い石灰岩が点々と散らば

っているような場所です。上は、すすきが広がっている秋口の写真。下は新緑が美しい季節の4月、5月の写真ですが、同じ場所でも全く雰囲気が違ってきます。このため、楽曲を作っていただく方には、その場所のこういった季節を、こういった天候をイメージするのかということまで考えて、音楽を作っていたら、コンテストを通じて約240曲の楽曲が誕生しました。更にアマチュアの方の制作した楽曲を合わせて全部で300曲ものジオミュージックが完成しております。

さて、このような音楽をどう楽しむのかといったところなのですが、そういった楽曲を私たちは実際現地で楽しんでいただきたいと考えておりますので、オーディオプレーヤーiPodにこの楽曲を収録し貸し出しを始めました。

貸し出しをする場所といたしまして、市内最大の集客施設「道の駅どんぶり館」。こちらでiPodを1台100円で貸し出しをしております。貸し出したiPodは当日中に返していただく必要がありますが、借りられた方は、自由に現地に行って好きな音楽を聴いて、その雰囲気を楽しむことができます。

さらに、iPodと併せてヘッドフォンの準備をしております。よく言われるのが「音楽を聞いたら、せっかくその場所にある自然の音が聞こえないじゃないか」と言われるのですが、そういったことも考えて、このヘッドフォンは音楽も聞きながら、周りの環境音が聞こえる非常に指向性が強い特殊なヘッドフォンを使用しています。

iPodの利用者からは、「美しい風景をより強くしてくれた」また「自然と音楽がマッチして気持ちよかった」などの評価をいただいております。ただちょっと利用者が伸び悩んでおりまして、年間200件ほどしかないのが実情でございます。

その他のコンテンツの活用として、せっかく非常に多くの楽曲があるので、多方面に活用を広げております。その1つとして、ガイド案内時のBGMです。「四国西予ジオパーク」を案内してもらうジオガイドがいますが、そういった方々が案内する際のバックミュージックであるとか、あるいは観光客の方が市内

を移動する際の車内のBGMとしても活用しておりますし、市内の観光施設等の館内ミュージックあるいは学校の昼休みにかけてみたり、図書館でかけてみたり、色々なところで活用して市民からも高い評価をいただいております。

また市民が、自分たちの地域にある見どころをイメージした曲を作ったクリエイターを招いて交流するなど市民独自の取り組みも広がってきているところではあります。

さらに対外的なプロモーションといたしまして、音楽を使った動画コンテストも開催いたしました。せっかくですので、その動画コンテストの作品を1つ紹介させていただきます。

これは、実際にアマチュアミュージシャンの方が制作されたジオミュージックと、動画を作られる方がコラボして作った動画作品となっております。

(動画・音楽)

こういった動画コンテンツも活用して、プロモーションを強化しておるところです。また、県内でPR番組も制作いたしまして、はやりのドローンを用いて空撮をして、その映像とジオミュージックを組み合わせたPRなども展開しております。

そして、今後は事業の集大成といたしまして、ジオミュージックなどに関わっていただいたクリエイターの方々、動画コンテストで関わっていただいた映画監督、市民など一体になって四国西予ジオパークを舞台とした映画の撮影を検討しております。最後となりますが、四国西予ジオパークには約300曲ものジオミュージックがございます。それぞれにストーリーがあって、現地の風景をさらに楽しむことができますので、ぜひ皆さん、西予市に足を運んでいただきますようお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

図司 ありがとうございました。先ほどの越後妻有がアートであるならば、それにこう音を付けて、さらに立体的に展開していくという、そういうつながりも見

えてきたようにも思います。山下さん、どうもありがとうございました。どうぞ、お戻りください。

これで受賞されました優良事例発表が以上をもちましておしまいとなります。これから意見交換に移りますので、少々そのままでお待ちください。

■意見交換

図司 これから全体の意見交換を進めてみたいと思います。まず、改めて受賞されましたそれぞれの団体の皆様、おめでとうございます。

先ほどご報告をお聞きいただきましたけれども、いかがでしたでしょうか。それぞれ骨太の内容とお感じいただければ幸いです。意見交換の時間がちょっと限られるんですけど、できれば2つぐらい伺ってみたいと思っています。

1つ目は、昨日の議論シンポジウムの中でも、主体形成という話が、ひとつ軸になっていたかと思います。もうちょっと、かみ砕いて言えば、過疎が進んで人口減少が進む。あるいはどうしても高齢化が進んで、地域の中でいわれる「誇りの空洞化」と呼ばれていますけれども、こう地域の中、将来に向けてのあきらめ感みたいなものが出かねないような中で、アプローチはかなり多彩であったかと思いますが、その地域の皆さんに、なんらかの変化をもたらしているんじゃないかと思っています。それぞれの取り組みを通して、地元の皆さん、まさに過疎地域に住まわれている皆さんにどう変化が起きてきているのかというところを、それぞれ少し事例の取り組みと絡めてご紹介いただくと、「ああ、こういうところに、こういう取り組みとかうまく効くんだなあ」とか、「そういうつながりがあるんだなあ」と、おそらくフロアの皆さんにもご理解いただけるかと思っていますので、先ほどの事例を補足していただくことも含めて、コメントをいただければと思います。

では、事例の発表順になりますけれども越後妻有の山崎さん、その辺いかがでしょうかね。

山崎 山崎です。今日は、ありがとうございます。主体形成ということで、非常にいろんなパターンがある

と思うんですけども、1番大事なのは地元の方が1番得意な部分ですよ。そういったところを、いかにこう来場者の方とかにお伝えするのが一番ポイントかなあと考えてます。われわれ、現代アートというのがきっかけで、いろんなところから、都会とか海外からお客様お越しいただくんですけども、そこが入り口だったというのは全然いいんですけど、結果的にこう皆さん帰られるときに「どうでしたか」と聞くと、大体こう「アートがよかった」よりは「食事がおいしかった」とか、あるいはなんか「地元のお母さんと話したのが面白かった」とか、やっぱりそういったところが一番印象に残っているんですよ。

われわれ10年以上この芸術祭の活動を続けているんですけども、そういったところで、レストランやっているお母さんが元気だったり、あるいはさっきの田んぼとか、稲刈りとか、そういったところのイベントやると、そのお父さん方がすごい楽しみにしてるんですよ。そのイベントのことを。われわれの準備が始まる前から「今年どうすんだ」みたいなかんじで声かけてきてくださるので、活動の中で地元の方が得意な部分を、いかにスポットをあててあげるかみたいなところが、主体形成に1番つながっていくかなあとこのように思います。



図司 なるほど興味深いですね。そういう意味ではアートという切り口から、ある視点をずらしているんですかね。それともうまく広げている、その辺はどう考えていいんですかね。

山崎 さっきの発表でも説明しましたが、アートはいろんなものに簡単にくっついていけるし、ある意味、懐が深いところもあるので、どちらでも正直いいと思っていて、われわれ敢えて視点はずらそうとは思ってないですけど、結果的にずれてきているということだと思います。

図司 そういう意味では、アートって、こう美術館で見たりとか、その枠の中でどうしてもイメージを捉えがちだと思うんですけど、広がりがあったりとか、ある意味、暮らしのところまで刺さっていきける、そういう深みとか、可能性があるということでしょうかね

山崎 里山の文化の中から生まれてる作品も非常に多いので、屋外の作品とかも非常に多いので、ただの美術館のいわゆる白い箱のイメージでやっているようなものとは違いますので、といったところに可能性があるんじゃないかなというふうに思います。

図司 ありがとうございます。続いて郡上市ですね。同じ質問ですがいかがでしょうかね。

置田 郡上市の置田です。よろしくお願いします。私、市の職員なんですけど、郡上市明宝地域の出身でございまして、実は職員の立場を離れて、先ほど紹介しましたいくつかの団体の、例えば事務局をやっていたりとか、役員をやっていたり、会員であったりとかということで、自分でも地域づくり活動にいくつか関わっています。主体形成とか、誇りの空洞化とか話もあったんですが、私が関わっている「ふるさと栃尾里山倶楽部」という団体がございまして、私の住む自治会の中の13世帯ぐらいの小さな集落で、「やって楽しい」をモットーにして、この組織を立ち上げました。

この背景には人口が減っていく。人口が減っていった、次の世代にその集落とか、地域のよさ、宝物をつないでいくことはなかなかできないという、確かにそういう危機感はありませんでしたけど。でも、それを自ら集落づくりを通して、そこに楽しさを組み込んで事業を

展開してきたということがございます。人口は確かにどんどん減っていくんですけど、人口は減っていても、地域に思いを寄せる、そういう熱い思いを持った人は増やしていこうと。人口は減少しますが、人材を増やすということで、そういう思いが次にうまくつながっていくような、そういう流れを作っていきたいなあということで、一つひとつの取り組みが、また、いい事例となって、また次の新しい取り組みに効果を及ぼしていくような、そういう流れが明宝の中でできてきたということで、本当にたくさんの団体が生まれてきたということがございます。

自分たちの住んでいる地域に、本当に誇りを持てるような状況にはなってきたかなってことは実感として思っています。

図司 先ほどの、「人口が減っても、人材を増やす」というのは、非常に印象的なフレーズだと思うんですけども、そのときの「人材」というのはどういう感じで、やっぱり外の方との接点の中からうまく見つかるのか。どうですかね、取り組みの中では。

置田 普段、われわれの暮らしの中で本当になんでもないと思っていたものが、実はすごい資源でそれが宝物であったりとか、そういう気づきというのは、外の人から影響を受けることは確かにありますが、ただ主体となるのは、やはり地域の人たちということがございますので、地域の方々が思いは持っていても、それを仕組みになかなか変えていくことができないというときに、地域の方と移住された方とかがうまく



く混ざり合っ、新しい仕組みができてきたってこともございますので、そういった過程を通じてNPO、先ほど説明した中間支援組織というものも立ち上がりまし、お互いにいい影響を受け合っ仕組みづくりができてきたというのは、確かにあるかと思っております。

図司 ありがとうございます。続いて豊田のおいでんさんその取り組みですけども、どうでしょうか。

鈴木 豊田市は人口ビジョンを全国自治体と同じく作っておるんですが、2025年までは人口が増え続けて2030年まで横ばい。そこから下がっていくという、全国でも稀な大丈夫な市ですので、山間地域に暮らしていても豊田市全体の人口ビジョンを見せるとなるとかなるだろうと。危機感がないという、それが蔓延しているのが現状の中で、実際はそうじゃなくて山村地域は一気に加速的に、過疎が進んでいくということなんで、そこを住民の皆さんが主体的になるために、意識を変えていただくのか、自らそういう動きになっていただくためには、どうすればいいのかということに、一番、苦勞をしています。

そのときに、名古屋大学の「簡易人口推計ツール」というのがありまして、小さい単位で将来の人口推計が100年ぐらい先まで推計できるソフトがございまして、そういったものを使って、目に見える形で地域に入っていくということを繰り返、繰り返して行く中で、そうするとまだら模様で「なんとかしよう」ということで住民の方々が立ち上がって、これは「移住」というテーマに絞った場合なんですけど、いろんなことやってるんですが、移住の場合、空家を流通して、移住者を取り込もうという集落が、まだら模様で生まれてくるということが起こっております。

そういったところをどんどん、どんどん突っ走っていくと、Iターン者やUターン者がどんどん入ってくると、地域の人たちが迎える形で「ぜひ来てほしい」という形で、Iターンの人たちが入ってくる。そうするとIターンの人たちと、地域の住民の人たちのすごく強い絆ができる。そこからいろんなことが、新しいビジネス

とか、そういったことがどんどん起こるということが起こってきます。

そのときに一番注意しているのが、昨日も話がございましたが「ゆるい」と言いますか、「楽しい」というか、それは深刻な話なんですけど深刻にせず、楽しく何か仕掛けていくということに、氣を使ってやっております。

そんな形で豊田市の場合は、まだら模様のそういったところが生れ、そういったところを習う形で地域が付いてくるという形で、今は半分ぐらいの地域でそういった「なんとかしよう」という動きに、ゼロからそこまできましたので、かなり進んだかなというふうに思っております。

図司 ありがとうございます。先ほど人口予測のツールの話を切り口にというお話もありましたが、とすると数字的には、なかなか悲觀的な数字になることもありますよね。そこをうまくカバーするというか、先ほどのゆるいとか、楽しいとかですね。あるいは「おいでんさんその」の皆さんのアプローチとか、アクションを起こしていく中で、何か工夫されているとこってありますか。

鈴木 これがその人口推計ツールで「1%戦略」のごとく500人に1世帯、1000人に2世帯を毎年入れていくと、このグラフがどうなるかというグラフを作りました。子供の数、小学生の数が今はどんどん、どんどん減って、このままだとここで廃校だよというグラフが、こんなふうになってある段階で人口も子どもの数も真っすぐ真横のラインになる仕組みとして理屈としてそうなる。全体の人口は減っていくんですけど、あるところで真横になる。「これが持続化ということですよ」ということを目に見える形で話すと、皆さん「あつ、大したことじゃない」と。本当に1000人に2世帯と。全然、普通に空家を使わなくてもいいし、新築でもいいし、アパートに暮らしてもらってもいいわけなので、全然高いハードルではないのに、「これで地域が持続化できるのか」というふうに見える形にすることで、かなり変わってきているかなあという風に

思います。

図司 ありがとうございます。そういう意味では、希望にうまくつなぐというんでしょうかね。そこが大事なのかなあと思いました。続いてはジオパークの山下さんですね。また、ちょっとツールが違いますけどもどうですか。地元の皆さん。

山下 先ほどの紹介の中でもございましたが、ミュージシャンの方は、コンテストに応募する音楽を作るときに、自分が作る対象の地域のことをすごく調べられます。もちろんこちらからはインターネット上でのコンテストなので、webサイトにテキストの情報とか写真の情報とかを公開するのですが、それ以上のことを知ろうとされます。このため、直接、事務局に電話がかかってきて、「私の住んでいる図書館に西予市の資料はないですか。写真がもっと見たいです。」みたいな問い合わせがあって、西予市のファンに、四国西予ジオパークのファンになってくれる方が、このコンテストを通じて非常に多くいらっしゃいました。

そういった方々が、実際に西予市に来て市民と交流したりするってこともあったのですが、地域づくりをする際には、地域住民が地域の資源に気付く段階が、まず重要だと思うのですが、気付く際に、昨日の講演の中にもありましたけど、外部の方からの意見として、このプロジェクトを通じて生まれた西予市ファンの方が「この地域資源がこんなにいいので、こんなミュージックを作りましたよ」と話して、地元の方がそれを聞くと、「おう、こんなものがあるのか」「こんなにミュージックがあるのか」と。そういった気付きの一助になったのではないかと思います。

図司 その気付きとしては、よくワークショップみたいな手法をわれわれは取りがちなんですけど、音楽を通じての気付きってなんか違いがあるもんですかね、どうですか。

山下 西予市はワークショップではなくて、単純にこ

の風景からこんなインスピレーションを受け取ってこのような曲を作りましたよ、みたいな、作曲意図の紹介を行うことでその地域の魅力に気付いていただきました。

図司 そういう意味で昨日のシンポジウムでも第1フェーズというか、先ほど鈴木さんからもお話ありました、そのゆるいとか楽しさというか、そっちから直観的に入っていきやすいって強みがあるんですかね

山下 そうですね。システム1とかシステム2って難しい言葉もありましたけど、まさにシステム1の直観的な耳からあるいは映像から、そういった地域の魅力に気付いていただけるのではないかと思います。

図司 ありがとうございます。もうワンラウンドしてみたいと思います。

今、それぞれ皆さんのフレーズにも出てきましたけども、住民の皆さんとかあるいは行政の皆さんとかも、当然プレーヤーとしてあるんですが、今回、共通して出てきたのが「中間支援」ですね。まさに当事者として皆さん方がやられていたり、あるいは郡上市明宝の場合は、そういう主体があったり、あるいは行政の支所でしょうかね。出先がそういう役割を担っていたりということ。その中間支援の仕事を、役目をやられていると手応えと苦勞、悩みどころも当然あるかと思いますが、その辺を聞かせていただければと思います。では、越後妻有の山崎さん、どうでしょうかね

山崎 たぶん皆さん一緒かもしれないですけども、結構やっぱり時間がかかるっていうところが一番大きいかなと思っていて、芸術祭みたいなものは特に異質なので、2000年からやってますけど、当初は割と批判的な方も地域に多くて、例えばアートをつくるにしても場所があまりなかったわけですね。「ここは使っちゃだめ」とか。空家も「この空家はだめだよ」とか「使いたい」と言っても「だめだ」と言われること

が多かったのも、そういった理解をどうやって育むかというところが一番、中間に入ってる団体としてはたぶん苦労しているところだんじゃないかなと思いますけども、その中でも粘り強くやっていくことで、少しずつ理解を得られて、今では逆に地元の方が、「ちょっとうちでもなんかやってくれよ」と話をいただくので、そういったところが一番苦労はしてる場所ですけども。

ただやっぱり皆さん、いざ始まってみると「結構面白いね」って言うてくれることがあるので、やってみないと分からないところあるんですけども、いかに辛抱強くやっていくかとか、あるいは分からないものは分からないなりに「分からなくてもいいので、やってみましょうよ」とか、そういった形でいろんな角度でアプローチして形を作っていくってことが、ひとつ大事なかなと思います。

図司 たぶん扱ってるテーマとして、なかなかお金になりにくいというところがあると思うんですけど、その辺はいかがですか。

山崎 お金はまあその通りで、なかなか簡単に美術館は儲かる事業ではないので、一方で学校とか、空家とか、そういったのを使わせていただくことで、例えば学校は市の方の所有なので、それで委託をいただいたりとか、そういったこともあるので限られる、資源は限りがあるので、それをいかにうまく使っていくかということも大事ですし、あるいは使われなくなった廃校とかも、いざアートを入れるとすごい新しいものになったりとか、それまで、あまり価値がなかったものに対して価値を与えることもできるので、それによって収支とかそういったところも大事なので、いかにプラスにしていくかは多少アートができることもあるかなと思いますね。

図司 そういう意味では価値が失われたものに息吹を取り戻して、それをお金だけではないんでしょうけども、そういうきっかけにつげていくような入り口づくりみたいなイメージですかね。



山崎 それが一番大きなところだと思いますね。

図司 ありがとうございます。続いて郡上の置田さん、いかがですか。ご自身も中間支援のようなお役目もされているような気がしますけども。

置田 明宝地域では中間支援組織がございます。これ意識的に立ち上げた組織なんです。この中間支援組織を多くの地域の皆さんにしっかり認知をしてもらおうとか、その役割を知ってもらうということ。これはなかなか難しいことがございまして、この組織の構成員として、地域づくり団体がたくさんありますので、その団体から入ってもらうとか、それから明宝ハムを作っている第3セクター会社から来てもらうとか、とにかく声かけをして多様な方に構成メンバーとして入ってもらうということをまず心がけました。

あと、地域のジョイント役というか、いろいろなことをつないで、未来をつくっていききたい。そういう思いがございましたので、自ら地域に出て行って、先ほど少し紹介いたしましたけど「MOSO塾」というワークショップをやりました。その中から出たアイデアをどういうふうに関後つないで、実現をしたらいいかというところを考え、また支援をする。夢に向かって、一緒になって歩み出し、役割を明確にしていくということをやっています。

ただやはり、その法人自体がお金を生み出す仕組みがなかなかできないので、もう1つ新しい仕組みをつくって、その主体がお金を生み出すような、そういう流れをつくっていききたいという思いがあります。

現在は過疎のソフトを使ったりとか、地域おこし協力隊を配置をしてというようなことでやっていますので、そのあたり今後どうするかというところ、先ほど課題として上げました多機能型の組織連携の中で、この中間支援組織がどういう役割を果たすかというところを今後十分検討していきたいというふうに思っております。

図司 まさに多機能自治みたいな話でいくと、それこそ総務省さんもバックアップされてる地域運営組織ですね。RMOの話がイメージされやすいということだと思うんですけど、明宝の場合は、大きい組織をつくって、そこに部会みたい感じで入るという形ではないですね。ボトムアップで、いろんなことをぽこぽこやっていて、先ほどの「ななしんぼ」とか、中間支援みたいなものがその上に何か出てきてみたいな、順番が逆で展開するようなイメージを受けるんですけど。地域運営組織との違いとか、あえてそういうところを狙っているのかとか。どうですか。

置田 一つひとつの団体に深いストーリーがもともとあって、その団体の思いをどういうふうにくみ上げて、1つにまとめ上げていくということと、それぞれの団体が持っているいろんな資源を上手に使い合うというような仕組みが大事です。そのあたりに十分心を配っていかないと、逆にマイナス効果がでてきてしまう。私どもの地域ではそういうことが考えられますので、NPO法人とか地域づくり団体、第3セクターといった法人がどういうふうに着目し、それぞれの特色とか、それから持っている強みを生かしながら、新しい組織をどのようにまとめたらいいいのか、そのあたりを検討していきたいというのは考えています。

図司 まずは、連携のところをしっかりと太くすることですね。ありがとうございます。続いて、おいでんさんそんの鈴木さんいかがでしょうか。

鈴木 私どもは中間支援をやるということを看板にしてスタートしたという経緯がございますし、先ほど

事例を紹介した通り、手応えを得たというところで今日ここに来てののかなというふうに思いますが、実のところ2013年に「おいでんさんそんセンター」というものを市の出先機関として設け、私はそのセンター長として、定年退職後の再就職先で市の臨時職員として、そこに派遣をされるという形で、市営の中間支援組織としてスタートしましたが、やはり市では、ここに求められるのは迅速性と柔軟性と専門性、そこに信用というものが加わると、機能するんですが、迅速とかそういった点で市のそのものの出先機関だと何かと差し支えがあるということで、今年2月に法人化されて、民間にしてみえと。ただし、一部の仕事は市からの業務委託ということで信用性を保つ。市の看板を持ちながら、民間の組織という中途半端な位置にいるのが、最も効果が高いということが最近分かってきて。

いいことばかりでなくて悩みもいろいろございます。実は、私ども分野を特定しない。すべての課題について向き合うということがございますので、スタッフ実は7名、パート等はいませんが、私どもは非常勤のスタッフということで7人が働いております。市からいただいているお金は2600万円ということで、ほとんど人件費に使われますけども、無限大に仕事広がっていきますから。当たり前ですけども、それをどうこなしていくのかということなんですけども、今のところ、差し支えなくやれているのは、ここに集まってくる、センターに集まってくる民間の活動のグループ、NPOなどが、私どもの仕事を肩代わりして、私どもはその準備をするという、入り口のところを整備するという、だんだん仕事が変わっていくので、どんどん増えても住民が主体で問題を解決していくというふうに、住民主導にもっていかないとたないというのが1点。あとは皆さん、共通ですけれども財源の問題で今は市におんぶにだっこでやっておりますけども、全体の事業費は3000万円ぐらい。残りの400万円ぐらいが自主事業で稼ぐということなんですけども、この比率をどんどん増やしていく。ここのところがかなり課題なんですけれども、それをしていかないと自立できないというふうに思っております。以上でござ

います。

図司 ありがとうございます。まさに組織をステージアップしながら、チャレンジしているという様子をお話いただきました。ありがとうございます。続いて、ジオパークの山下さんいかがでしょうか。

山下 私たちも中間支援、なかなか現場の声が聞こえてこない部分はあるのですが、実際にその施設などの館内ミュージックとして使っていただくことで、利用者からその施設に「館内にかかっている音楽はなんだ。売ってくれ。CDはどこで売ってるんだ」という声がかかり寄せられているようで、そういったところでかなり手応えを感じているところです。また今日は、実際に現場で活躍しているジオガイドがいらしゃいますので、生の声を色々とお聞かせいただけるものと思います。

河野 失礼いたします。実際のところ、小学生とかが簡単な言葉で、曲を聴いて「これいいね」「こんなふうに人は思っているんだ」とか「こんな所があるんだけど、市内で学校区が違うので初めて知った」と言って「現場に行ってみたい」とか、いろんな感情で音楽を聴いていただくことが、こちらからしてもとても刺激をもらっているところです。どんなふうにしたら伝わるかなというも思っているのですけれど、音楽を通すことでとても簡単にみんなが興味を持ってくれるのだなという感想です。

図司 ありがとうございます。あと山下さん、どうですかね。悩みどころというか。その辺は。もしあれば。

山下 ほかの事例の方に比べて、まだまだ始まったばかりの事業ですので、これからどう市民と、さらに外から来ていただく方に広げていくかというところが大きな課題です。

■質疑応答

図司 ありがとうございます。2つのテーマで少しラ

ウンド、回してみました。せっかくの機会ですので、フロアの皆様のご質問を受けてみたいかと思いたいますが。いかがでしょうか。事例に対してでも、全体でも。はい。後ろの元気に手が上がったあの方。

松尾 隣の町の武雄市役所の農林課の松尾と申します。今回、さまざまな立場でNPOさん、協議会さんとか、中間支援機構さん、行政そのものの方とか、皆さんの立場からいろんな市民主体の取り組みをご報告いただいて、大変参考になりました。ありがとうございました。私が行政ということもありますし、この会場にもかなりたくさんの方の行政の方であったり、小さな地域ですのでかなり行政というのが身近な立場としてあるのかなと思うんですけども、行政の関わり方をどういったふうにしていったら、うまくいくのかというのをちょっとお聞きしたいなと思っておりまして、昨日のイベントなんかでも、自分たちのことは自分たちでやるという、地域の方があくまで主人公というような言葉は大事であるのかなというふうに考えておりまして、どのような行政との関わりを持たれているのかとか、どうすれば、これから例えば関係人口が増加するために行政の取り組みとして、何かをやりたいなと思ったときに、私たちが一歩、一歩進めていく中で、どういったことに気を付けてした方がいいか、そういうことをご指導いただければと思います。

図司 いいご質問をいただきまして、ありがとうございます。これは皆さん、お答えいただいた方がよろしいですね。では越後妻有の山崎さん、行政とのお付き合い。

山崎 われわれとしては関係性上、委託をもらったりという関係もあるんですけども、一方で行政の方とは同志みたいな感じの活動してますね。毎週会議やったりとかしますし、何かあれば一緒にやりますし、ほぼ同じ視点で問題とかも共有されてますので、地域への方々にもそうですけども、一緒に各集落に全部行ったりとかもしてますし、あまり差別なくほぼ同じ同志としてやっているというような状況です

し、それが一番あるべき姿かなというふうに思っています。

図司 続いていきましょう。置田さん、いかがですか。ご自身も。

置田 そうですね。行政の職員が住民にいかに寄り添うか。住民の方に寄り添って、そこで一緒に考えてもらえるかどうかという、そういう職員を増やしていくということが必要なことは常々思っています。私が一番最初に地域で立ち上げた組織については、行政依存はなしにしようと思って立ち上げました。行政から補助金を取るとか、何か相談するということは全くなくて、自分たちでまずやってみようということで立ち上げました。ただ自分たちで財団の補助金は取りに行ったりとしました。行政と、情報共有するということは大変大切だと思いますが、大切なことはいかに地域の住民の皆さんが、自分事としてしっかり考えるかどうかという素地をつくるということのお手伝いができるかどうかだと思っています。

図司 郡上はあれですよ。団体の後押しを絶妙なタイミングで、後ろから一歩押して動きをつくっているという印象を、私も現場に行って感じました。おいでんさん、鈴木さん、ご自身もOBということにもなりますがいかがですか。



鈴木 実は先ほども申し上げましたけれども、2月に一般社団法人を立ち上げたときに設立総会で「こ

の組織の目標は一体なんだろう」という議論になって、それは「消滅することだ」という意味不明の結論になりました。それはどういうことかという、私どもは常々「未来の市役所」と思いますし、市から独立はしたんですけども、ここが「未来の市役所」と。それはどういうことかという、私どもがやっているのは全く黒子なんです。プレイヤーはすべて住民の方なり、企業であつたり、私どもは黒子としてマッチングをして、うまくこれが機能するようにもってっていく黒子をやっています。おそらく、これから人口が減少して、経済が縮小して税収が減り、職員が減っていったときに、社会の課題は決してなくなりませんので、誰が解決するかという住民が自らやるしかないことに。市役所の役割というのは、もちろん社会資本の整備といったことは必要ですけども、市役所のやることは黒子になって住民の方にやっていただくこと。市役所がそういう状態になったときに、われわれの一般社団の使命は終わります。だから、そういう社会を早くつくろうねというような感じで、私どもの立ち位置といいますか、そういうことを考えました。参考になるかどうか分かんないですけど。

図司 ありがとうございます。では、最後山下さん。

山下 ジオミュージックを推進する母体として、ジオパーク推進協議会という組織があり、私たちは事務局もしております。立ち上げ時、推進協議会の下部組織には部会が3つ、4つぐらいありました。ジオパーク活動はボトムアップを基本としておりますので、各部会で色々な意見を出し合って、活動を進めていくというのが理想なのですが、なかなか実際はそうはいなくて、どのような議論をするのかまで、私たち行政の事務局が段取りをしていましたが、ここ1年、2年ぐらい前から、それではどうしても回らなくなっていました。どこの自治体もそうなのですが、自治体の職員の方はマルチタスクでかなり忙しく、色々な複数の業務を抱えられていると思います。そういった中で協議会も上手く回らなくなったときに、部会の中で「私たち、そこまでできません」と、「もうちょっと皆さ

ん考えてください」と開き直り、無理やり市民を議論に巻き込みました。

図司 ありがとうございます。興味深い話をたくさん出していただいたと思います。本来なら、もうちょっとご質問受けたいところですけど、時間が来てしまっております。最後にひと言ずつと思いましたが、閉めた方がよさそうですので、私の方でまとめさせていただきます。

今回、4つの事例とも先ほど主体形成、中間支援というキーワードで少しお話をいただき、プラス先ほどのご質問にあるような行政との関わりというところも含めて議論いただきました。かなり、共通項があったかと思います。

やはり今どうしても地方創生の中で仕組みから入るような議論がありますけれども、魂の入れ方のところが鍵になるんだろうと思います。本来であればそれぞれの取り組みに、立ち上げからのストーリー、昨日プロセスという話が1つ話題にも上ってましたけど、そこにこそ魂の込め方とか、悩みのトライ&エラーの中で、どういうふうに乗り越えていくのかとか、たくさん詰まっているんだろうと思います。本来であれば、事例報告でそこを聞き出すのが一番いいんですけど、残念ながら今回はそこまで至りませんでした。

ただ、私も4カ所ご縁があるところですけども、先ほど山崎さんからも話がありましたが、中間支援の動きと行政の皆さんと住民の皆さんとの雰囲気とが非常にいい関係で、どこもつくられてきている印象は受けます。これは現場に行かないとなかなか分からないところだろうと思いますし、何より住民の皆さんの声を聞いていただくのが、1番分かりやすいだろうと思います。

先ほど鈴木さんからもお話ありましたが、黒子は最終的には消えて去る者というんでしょうか。「住民の皆さんが自分たちでやれば別にいいんだよ」という、黒子にそんなにしがみつかなくていいんじゃないかと、非常に含蓄に富んだ話だったと思います。

そういう意味でも、今は過渡期かと思うので、中間支援の取り組みが必要だということでは、今

日の4つの事例から学ぶところは非常に多かったんじゃないかと思います。

ぜひ、現場の方に足を運んで、皆さんと交流を深めて、力強さをそれぞれの地域に持ち帰って、さらなる前進につないでいただければ幸いです。お時間がまいりました。ここで、今日の分科会、閉じたいと思います。改めて4つの団体の皆さんに拍手を持って、お礼に変えたいと思います。どうもありがとうございました。

多久市現地視察

廃校を活用した多久市児童センター
「あじさい」



多久聖廟、東原厩舎



白石町分科会

パネルディスカッション 地域を支える身近な移動手段 ～住み慣れた地域で暮らし続けるために～

コーディネーター

大阪大学COデザイン・センター特任教授／一般社団法人システム科学研究所・上級研究員

土井 勉

パネリスト

白石町長

田島 健一

有限会社錦タクシー 会長

前田弘次郎

特定非営利活動法人 中原たすけあいの会 代表

平野 征幸

特定非営利活動法人 いわて地域づくり支援センター 常務理事

若菜 千穂



パネルディスカッション



コーディネーター
土井 勉 氏(どい つとむ)

大阪大学COデザイン・センター特任教授/一般社団法人システム科学研究所・上級研究員
1950年京都市右京区生まれ。1976年名古屋大学大学院工学研究科修了。京都市で主に都市計画行政を担当。阪急電鉄株式会社で都市開発・公共交通・集客産業等担当、神戸国際大学経済学部教授、京都大学大学院工学研究科・医学研究科安寧の都市ユニット特定教授を経て2015年度より現職。専門は総合交通政策とまちづくり。過疎地から大都市まで、多様な地域における人々の活動＝移動を支える仕組みづくりやまちの賑わいづくりに関する政策策定や、それを担う人材育成に取り組んでいます。また収支が成立しない地域公共交通に対する行政支援の意味を定量的に把握する「クロスセクター効果」についての活用や研究を進めています。著書は「まちづくりDIY」(学芸出版社)他多数。2017年度JCOMMプロジェクト賞など受賞多数。博士(工学)。技術士(建設部門)。

パネリスト



田島 健一 氏
(たじま けんいち)
白石町長

昭和49年4月1日佐賀県庁入庁、平成21年4月1日～平成23年3月31日佐賀県武雄土木事務所長、平成25年2月6日～現在、白石町長として2期目。



平野 征幸 氏
(ひらの まさゆき)
特定非営利活動法人
中原たすけあいの会 代表

平成9年3月佐賀県職員退職。同年12月「困ったときはお互い様」の理念で任意団体中原たすけあいの会設立。平成12年NPO法人認証。平成24年認定NPO。設立当初から移動サービス活動開始。平成18年から福祉有償運送活動、平成21年から無償運送(もやい号)も併せて運行。これまで全国移動サービスネットワーク理事、佐賀県東部地区福祉有償運送運営協議会委員等歴任、現在みやき町地域公共交通会議委員等就任。介護予防・日常生活支援総合事業(総合事業)における移動支援活動の関わり方について調査・研究中。



前田 弘次郎 氏
(まえだ こうじろう)
有限会社錦タクシー 会長

1961年旧有明町生まれ。平成16年に有限会社錦タクシー代表取締役社長に就任、平成25年に会長に就く。平成29年度から杵島郡身体障害者連合会、白石町身体障害者福祉協会の会長。平成25年2月～現在、白石町議会議員として2期目。



若菜 千穂 氏
(わかな ちほ)
特定非営利活動法人
いわて地域づくり支援センター
常務理事

1972年茨城県取手市生まれ。1998年岩手大学大学院農学研究科(修士課程)終了後、札幌で民間コンサルタント会社に入社。2003年岩手大学連合農学研究科(博士課程)に社会人入学し、2005年博士(農学)取得。同年現職就任。専門は農山村地域の交通計画および協働による地域づくり支援。主に公共交通の調査、検討、実施支援を通して、路線バスと患者輸送バス、スクールバス等も含めた地域交通の再構築をサポートする。また、岩手県内の地域コミュニティで、自分たちの課題を自分たちで解決できる力(＝地域力、実践力)をつけていくサポートにも取り組んでいる。



現地視察

- 縫ノ池
- 新有明漁港



歓迎挨拶

白石町長

田島 健一氏 (たじま けんいち)

本日は、「全国過疎問題シンポジウム2017inさが白石町分科会」を開催しましたところ、県内外からたくさんの皆様にご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。心から歓迎を申し上げます。また、総務省の門前(もんぜん)過疎対策室長様、全国過疎地域自立促進連盟の田村副会長様におかれましては、主催者として、白石町の分科会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。

さて、白石町は、平成の大合併において佐賀県の第一号として、平成十七年一月一日に、旧白石町、福富町、有明町の三町が新設合併して誕生し、過疎地域には、平成二十二年四月一日に指定を受けました。お分かりかとは思いますが、当町におきましては、人口は減少傾向にあります。このため、それに歯止めをかけるべく、住みよい環境の確保と、将来にわたって活力ある地域社会を維持していくことが重要と捉(とら)えており、住民の方に対して、公共交通など身近な移動手段を整備することは、その有効な手段の一つと考えています。

本日の分科会は、まず、「地域を支える身近な移動手段」をテーマにパネルディスカッションを行います。過疎問題と向き合って、日々ご尽力を賜っている皆様方と一緒に、様々な観点から、このテーマについて、考えてみたいと思っております。

また、午後からは、現地視察ということで、縫ノ池と新有明漁港をご覧いただく予定としております。縫ノ池では、四十年ぶりの湧水(ゆうすい)を守ろうと、地域住民の方々が取り組まれている様々な活動を紹介させていただき、新有明漁港では、この会場に到着される前に有明海の満潮時をご覧いただいたと思いますが、干潮時も確認いただき、潮の干満差などを実感いただければと思っております。

最後になりますが、この分科会が、実りの多いものになりますことを期待するとともに、皆様方のますますのご活躍、ならびに、ご健勝ご多幸をご祈念申し上げます。歓迎の挨拶とさせていただきます。本日は一日、よろしくお願いいたします。

パネルディスカッション

土井コーディネーターの進行により、各パネリストから取り組みの概要を順に発表

田島 今回のテーマは、「地域を支える身近な移動手段～住み慣れた地域で暮らし続けるために～」ですが、白石町だけでなく、人口減少や高齢化が進む過疎地域においては、こうした暮らしを支える身近な移動手段の重要性は、今後ますます高まってくるものと考えております。このパネルディスカッションを通じ、コーディネーター・パネリストの方々からいただく様々なアドバイスやヒントだけでなく、会場にお集まりの皆様と一緒に、今回のテーマに

ついて考えることができればよいと思っております。それでは、全国過疎問題シンポジウム第3分科会の開催地である白石町の取り組み内容等について発表を始めます。白石町は、佐賀県の南西部、佐賀市中心部から25km圏内に位置し、北は六角川を境に大町町、江北町、小城市に、西は武雄市、嬉野市に、南は塩田川を境に鹿島市に接し、東南部は有明海に面しています。町西方の杵島山系から東方へ広がる広大な白石平野は、古く弥生時代から自然陸化し、中世より現代まで幾多の干拓事業で造成された土地です。特色としては粘質土壌で、米・

麦、野菜、施設園芸等の農業好適地帯となっています。また、六角川や塩田川をはじめとする川は、地域にうるおいを与えながら、宝の海とも言われる有明海に注いでいます。このように新町全体をみると、山と平野、川と海といった美しく個性豊かな自然が一体として揃っています。

平成17年1月3町合併により白石町が誕生。合併当時は、路線バスの廃止が相次いだこともあり、交通弱者の公共交通による町内の移動手段がありませんでした。白石町は、合併時策定した「新町まちづくり計画」に安全で利便性の高い公共交通体系の構築を位置付けており、移動手段の確保策として新町の一体化等を目的に、平成17年10月に「いこカー」というものを運行開始いたしました。そして平成22年1月に新庁舎を旧白石町内に、ちょうど白石町の中心にあたるんですけども、そこに建設をしたということで交通空白地帯の解消、運行の効率化などを公共交通ネットワークの確立をはかるために、さらに平成22年7月より「予約制いこカー」というものを運行開始したところでございます。(画像)次お願いします。

この、いこカーというのは、定時定路線でございまして現在は、最初は先ほど言いましたように17年8月時点では8系統8路線があったわけでございますけども、現在は2路線ということでございます。それをかわす形で予約制いこカーというものを、これをつくってございます。これについては地区割といえますか、系統を4系統ということになってございます。

これは、白石地域を2つ、そして旧福富、旧有明、



そういった4系統の中でエリア内でのルートを設定せずに、タクシーでございまして、その中だけはこの料金300円もしくは半額の150円というのがございます。これについては、町内どこにも行けるということではなくて、そのエリア内だけということになってございます。(画像)次、お願いいたします。

そういうことで、現在は「予約制いこカーの区域デマンド」と「いこカーの定時定路線」の2つをやっているというところでございます。以上です。

土井 はい。ご発表ありがとうございます。課題としては民間とのバランス、あるいは財政をどうするのかというのも非常に大事だという話をいただきました。基本的には現在は、いこカー、それから予約制いこカーでデマンドを運行されているということでございます。そしたら続きましては、前田さんの方からご発表、よろしくをお願いいたします。

前田 こんにちは。私の方から発表というより私の自己紹介みたいな感じで話をしたいと思います。私は、白石町でタクシー業を営んでおります。錦タクシーの会長の前田弘次郎です。今回は、テーマである地域を支える身近な移動手段とのことで事業者を代表して、現在3業者で組合を作って運行を行っております。現在のタクシー業界の実情や今後の問題点などを報告したいと考えております。詳しい内容は、意見交換会の中で話をしたいと思います。

ただ、白石町は過疎地域となっております。その白石町で事業をしている、私の会社も運転手の高齢化が進んでいます。若い人の運転手は私の息子しかおりません。このような状況をほかのパネラーの方々に知っていただき、いろいろな意見を聞かせていただきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

土井 よろしいですか。

前田 あとは討論の中でゆっくり話をしたいと思います。

土井 ありがとうございます。事業者さんが抱える問題というのは、皆さんご承知のようにたくさんあるということで今1つはドライバーさんの確保の問題も言われましたけども、それから以外のことも大都市と過疎地ではタクシーの営業の仕方もういぶん違うんだというような話もまた後ほど聞かせていただければありがたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。続きましては 平野さんのほうから話いただければと思います。よろしくお願いします。

平野 中原たすけあいの会の平野といいます。よろしくお願いします。私たちは、みやき町の中の旧中原町を中心に活動しております。

最初に外出の必要性和書いておりますが、もうこれは私が言う必要もないと思います。皆さんがそういう関心があって参加していただいていると思いますので。それで最後に書いてます「地域の支え合いで確保できれば一番いいじゃないか」ということで、やっぱりこれからは、行政とかタクシー等、公共交通機関の方々をお願いするだけじゃなしに、やっぱり自分から、自分が住みたい町ですから、自分からやっぱり知恵を出して汗もかくというのが今後の方向かなと考えております。

私たちの会の歩みですが、平成9年、ちょうど20年になります。平成9年から移動支援中心にこういう活動しております。途中、NPOの法人格取ったりとか、認定NPOを取ったりとか、それから道路運送法が途中変わりましたので、福祉有償運送の登録をしたりとか、それからこれだけではなかなか地域の方の交通不便はカバーできませんので無償の運送を始めるとか、そういうことをしてきました。

私たちの特徴というのが寄付者119名と書いておりますが、地域の方の寄付での応援というのがたぶん、ほかの団体より多いかなと思います。それが特徴かなと思います。

そのほかに、移動のほかに「生きがいデーサービス」を平成12年からずっと現在までやっております。今ちょっとこっちのほうは規模縮小しておりますが、やっております。それと収益事業の介護保険事業。

平成15年から27年まで12年間やってきましたけど、2年前にこれは廃止をしております。

これが、みやき町の概要ですが、次に中原校区の概要を示してますけども交通の手段、方法といえますか、路線バスのように1つは定時定路線。時刻表があって同じルートを回るとのことですね。それと今、町のほうから、説明がありましたようにデマンド方式といえますか、方式はデマンドいろいろありますけども、私たちも予約制でドア・ツー・ドアといえますか、家から病院なら病院までとかそういう活動、方法でやっております。(画像)次、お願いします。デマンド方式のメリットを出そうと思ったら、白石町もやってあるんですけど、まずエリアを狭くするといえますかね、それが絶対条件だと思います。

そういうことで、私たちがやってるのはみやき町内ですけど、中原校区を中心にやっております。中原校区、旧中原町はですね面積が19平方キロですから、白石町の3分の1近くですかね。それと、もう1つは「コンパクトシティ」と書いておりますけど、昔からのそういう地域だったんでしょうが、日常生活に必要な施設がもう中心部に集中してるという特徴がある。書いてます金融機関4カ所とか、医療機関になったら11カ所とか、商業施設、中原庁舎あり、中原駅あり、郵便局等があります。まさにデマンド方式に一番合ったといえますか、地形というか条件満たしていると思います。

私たち、予約ですから行くときは必ず来ます。申し込みの時間にですね。帰りは病院とかお店で終わったら、病院の受付なりお店のレジの方から私たち会



のほうに電話が「Aさん終わりました」と入ります。その電話を受けて10分もあつたら、行くときはすぐ行きますけど、ちょっと待ってもらうにしても10分ぐらい待ってもらったら間違いなく迎えに行けるというのがエリアを狭くしたメリットですね。そういうことでそういう活動をしています。(画像)次お願いします。

これ実績ですが28年度、利用人員が98人の人に対して、年間延べ回数が5674と。100人に対して6000回ぐらい展開しているという。これは増えもしていませんし、減りもしてない、横ばいの状態です。(画像)次、お願いします。

それと、これからがちょっと、その今後の課題といえますか。まずは収支関係ですが収支差引、真ん中に書いてありますが、有償運送、無償運送合わせて283万円の赤字経営になってます。その分はなんで埋めるかというと、さっきの寄付金で埋めたりとか、以前介護保険事業をやっておりましたので、繰越剰余金そういうので補てんをやっております。

もっとその「経営、頑張らんばいかん(頑張らないといけない)」というのもありますけども、全国を国土交通省が調査した分でも、やっぱり全国でその運行対価、料金で経費を埋める率は65%しかありません。35%は全国やっぱり赤という仕組みといえますか、そういう現状になっています。そういう全国の補てんの状況ですが、介護保険事業等ほかの事業で埋めるとか、それから自治体からの補助とか、それから寄付とか借入金とか赤字を補填している。ということで運営されています。(画像)次、お願いします。

それと次は事業者の方からもありました運転手の高齢化といえますか、まさに私たちこそ高齢化です。基本的にはボランティアですから、この活動の運転は、原則法律では2種免許が必要です。しかし1種でも国土交通省が定めた講習を2日間受けたら、それでよしということになっておりますので、私たちはそういうのでやっております。有資格者10名くらいおりますけど、6名が中心で動くということで平均今68歳ですが、年少者45歳というのが1人おりますけど、この人を除(の)けたらもう70歳以上ということです。

ここにいろいろ書いてますけど、やっぱりこういうボランティア活動といえますか、それはなんか、人のためにどうのこうのはもちろんですけど、やっぱりボランティアする人が楽しくできないと続かないと思います。楽しくできて、それがさらに自分の生きがいといえますか、そういう環境で活動してもらうことが一番大事だろうと思っております。(画像)次お願いします。

安全対策、こういう活動に一番みんなが心配されるのが事故の問題。保険は、ここに書いておりますとおり、普通、車の保険と一般活動といえますかNPO活動総合保険をかけてます。結局、家を出てから帰ってくるまで全部その行動については、保険が出るような保険にはもちろんかけております。

保険も大事ですけど、私が思うのはやっぱりその利用者の方との信頼関係ですかね。私たち名前の通り「たすけあいの会」ですから、利用者の方それから家族の方も含めて、私たちの会との信頼関係を築くというのがまず、第一だと思います。

それから実際のその事故の防止ですが、私たちはもし利用者の方、最初に申し込みがあつたら一定の手続きをして、体の状態を調べたうえで、必ず事前に走ってみます。家に行つて敷地内に入つてどういう方向で乗るのか。目的地まではどういうルートを使うのか。その途中、右折の場所でちょっとリスクが高いと思ったら、コースから変えてそこを通らないとか。そういうのはもちろん、そういう注意は充分しております。(画像)はい、お願いします。

あとは画像だけですが、これが無償の「もやい号」という車ですけど、これは無償というか登録しなくていいですから自由に、有償運送は原則1人1台ですけど、これは相乗りが可能ですから効率よく運べるというのはあります。(画像)次お願いします。

これは、もやい号ですが、玄関から玄関だけじゃなしに、やっぱりお年寄り、行きはいいですけど帰りが荷物があつて、車降りてもその玄関というか家の中まで運ぶというのが大変な方がいらっしゃる。もちろん、私たちはたすけあいの会です。ちゃんと上がり口まで荷物を運ぶということは当然のことですからやっています。(画像)次お願いします。

海ではなくて、こちらでいうと北上川なんですけど、川のそばなので渡船場もあって、そこで収益をあげてそれを地域活動に使ってたということが描かれています。

さらには、この向こう側の部落の隣のところに山があるんですけど、ここの杉林も昭和25年に買って杉を植えたって。なんで。みんなですよ。こちらでもあるかなと思うんですが、公民館を建て替えるときとか、または何かがあったときの財産として、未来への投資というのもわずか44世帯でやってたと。今はどうでしょう。基本的には行政からの配り物を配るだけの班長さんがいて、部落長がいてという感じなんですけど、昔は地域は、きちっと未来への投資もするぐらいの力を持っていたんだと。今、私たちがお手伝いしているのも、もう1回、地域の力を取り戻すという、そういうことをやっているんだなということを、最近日々感じています。

地域づくりの最近の方向性として、国をあげて、今、実はこちら例えば行政区とか自治会とかあるんですが、こちらでいう校区ですね。小学校区でちょっと住民の組織を束ね直してというか、そういう小学校区を単位とした地域づくり、地域運営組織という言葉で最近総務省が整えたんですが、ここでの地域づくりを進めております。そこで今までの自治会はなくなるかという、そうではなくて自治会はやはり今高齢化もしていますし、世帯数も減っていますし、すでにいっぱい忙しいですよ。行事がすごいたくさんあって、そのうえでさらに例えば嫁がいない問題とか、移住・定住やれとか。そんなことは無理で、もう少しみんなでまとまってやってもいいじゃないかと。まあそんな取り組みがここで、小さな拠点とか、ちょっとここに重なってくるかなと思うんですが、その地域運営組織をつくったり、それをどうやって回していくかという、そういうお手伝いをしております。

今日、ご紹介したいのが、ここは飛ばしますが、このいわゆる校区で地域運営組織ができました。そうするとやはり地域の方が、お年寄りの方も居そうだよなということになって、実は岩手県北上市口内地区では、ちょっと典型的に分かりやすく組み込まれて

いる事例がありますので、それをご紹介したいなと思います。

ここも農村で、中山間地というような農村なんですが、人口が1500人ぐらいの1地区です。小学校はまだ、どうだったかな。中学校がなくなって、一番こう地域としてインパクトが多かったのがJAのスーパーです。町内にあったJAのスーパーが撤退すると。「あれえ、じゃあ、私たちどこに買い物に行けばいいの」と。北上駅、車で20分、30分かかるところなんですが、そこまで行かなきゃいけないのかと。まあ、普通は行っていますが、不安にかられますよね。ものすごく地域の方が。それもあって「住民自治組織」と書いていますが、先ほど言った地域運営組織が、じゃあ「空白地有償運送」という制度がどうやらできたみたいだからこれに取り組んでみようじゃないかということで、タクシー事業者さんと2年ぐらい闘って、このあと議論になるのかもしれませんが、闘ってという、最後はあれですよ。譲り合うという役割分担をするんですけども、それをして空白地有償運送制度を平成22年から取り組んでおります。

さらに、まさにこの写真を実は紹介したいんですが、これがJAの跡地のお店でJA店舗なくなったんで、じゃあNPOでお店をやるかということで、実はお店もやっています。「店っこくない」というお店。これがまさにちょうど行ったときに止まっていた空白地有償運送のマイカー。運転手のおじさんなんですけど、この人はマイカー。白ナンバー。ちょうどバス事業者さんのバスがここまで来ます。おばあちゃんが降りてきて、ここでおじさんが待っていて声をかけた。予約していたので待ってた。予約してたので「じゃあ、おばあちゃんもう帰るかい」。ちょっとお店で買い物するし、会費も払わなきゃいけないしということで、お店の中に入って、これが地域運営組織のNPO化しているので事務員のお姉さんなんですけど会費を払いつつ、「あら、なんかちょっといいお野菜があるからちょっと買っていこうかな」というような形で、乗り継ぎ拠点プラスちょっとした買い物もできるというような形でやってて、いわゆる1つの小さな拠点という、最低限の生活に必要なサービスの集積がこのような形

でできてるようになっております。

本当にお店といっても、こんな感じです。もう、たぶんこれならできそうだと思いますか。本当にこんなもんです。原価で売って全然収益出してないですけども。NPOとしては、もちろん商品も置くんですが、ここで寄り合ってほしいと。何かあったらここに来て、お茶っこを飲んでたむろしてほしい。

最近、このNPOもなかなか苦労してますので、農地・水とか直払いの事務局もできるようになりまして、そしたら、こういうおじいちゃん、おばあちゃんだけじゃなくて若手の、若手といっても60代の隆々としたおじ様方ですけども、ひっきりなしに出入りしてます。そのつどコーヒー買ったり、特産品でコロッケとかもNPOで作ったのでコロッケ食いながらコーヒーを飲んだりしてすごい溜まり場になって、本当にいい雰囲気だなあという形になっているんですが。

このような居場所づくりをしたり、あとはやっぱり、少しで終わりにしたいんですが、こういうNPOで空白地とか無償輸送やってると、そこの中で人生相談になっちゃう、たいていは。お話聞いたときに、やはりドライバーが高齢化してて問題だということで、じゃあ「ドライバーを積極的に募集しているんですか」と言うと、実は「公募はしていない」と。じゃあ「どういう基準で選ぶんですか」と言うと、運転のうまさとかもちろん事故がないというのは当然なんですけど、おじいちゃん、おばあちゃんの話をもて聞いてくれる人。そこで「おばあちゃん、そんなことじゃダメだよ」とバンバンと怒ったら、その人はあまり利用してくれないんです。そういうような基準で選んでいるぐらいです。

何が言いたいかというと、この場が人生相談になるんで、あれが困っているとか、これが困っているとか。今まで息子が月1回来て、病院に送ってくれたけど行けないとか。あとは木が伸びちゃって倒したいとか、いろんなその困りごとが聞こえてきて、それならということで、実は生活支援の有償ボランティアを始めたとか、あとは買い物の移動手段をやるんですけど、もう年取ってくると、もう外に出たくない。特に雪国ですのもう冬になったら、出るだけで死ぬという。

それであれば買ってきてくれという。分かった。じゃあ買い物サービスもしましょう、みたいな感じで、ほんとにいろんな事業がドンドンと行くたびに増えていくんですが、そういうようなこともやるようになってきております。素晴らしいなあという形です。

あと残りのちょっとだけ紹介したい事例なんですが、そういう意味でこういうお手伝いをしたりするほか、1市町村の交通のネットワークの見直しを私の方もお手伝いすることがあるんですが、最近、だいたいやったらいける、とふうにお勧めしてるのが「買い物バス」です。毎日バスを1日3往復ぐらいこう走って乗らない、乗らないというんですけど、お年寄りの方というのは、そういう乗合バスを使いたいという方というのは、むしろ週1回でも月1回でもいいから、みんなでこうバスに乗ってスーパーまで連れて行って帰って、帰りはそれに乗ってみんな帰ってくる。これが実はものすごく好評で、これでいいんだという。週1、月1でいいんだと。それよりみんな知った顔が乗ったら知った顔がばっというて、おしゃべりをしながら買い物に行って、しかも乗ってたらちゃんと連れて帰ってくれるので、自分が来るまで待っててくれる。そういう安心感がずいぶんあるみたいで、そういうような買い物バスのお手伝いとか、あとは最近、岩手県の岩手町ということで、買い物バスとか患者輸送バスですね。こちらへにもあるんですかね。東北結構多いんですけど、無料で通院者だけ運んでたんですけど、通院だけじゃなくて買い物も必要だということで、買い物にも使えるようなバスをコミュニティバスにしたりとか、その乗合バスと一体的に運行するような形に。これは患者バスの運転手さんなんですけど、この運転手さんがものすごく、その地域のおばあちゃんたちのことをよく知っていて、患者バスにおばあちゃんが乗ってくると、このおばあちゃんがどこの病院に行くか、この人が知っているのです。そうすると、その前まで来ると「おばあちゃん着いたよ。帰りはいいんだね。何時でいいんだね」「はい、はい、はい」みたいなそんな形になっていて、もうこれに代わる乗合バスはもう無理だなあという感じで、この運転手さんにそのまま有償のバスをやってもら

うとか、そういうふうな工夫を今したりとかしております。

ちょっと最後のスライドなんですけど、実は書き換えておりますので、前を見ていただければと思うんですけど。

地域、このテーマに対して本当に最近つくづく思うのが、先ほど土井先生もおっしゃったんですが移動、移動ということでバスを走らせたりとか、デマンドをやったりとか空白地を手伝ったりということが多いんですけど、本当に移動だけじゃだめだなあというふうに思ってます。移動だけ確保しても暮らしの安心にはつながらない。

私、いつもお話していることがあるんですけど、デマンドタクシーにしたんですよ。バスが乗らないし不便ですってことでデマンドタクシーにして、バスがそこに着いたら、すぐデマンドタクシーにできるように時間のセットもしたんです。そして、ある日そのデマンドが走って、完成してから調査に行ったときに、おばちゃんが1人でぼつんと座ってまして、「おばちゃん、どうしたの?」。「あれっ、デマンドタクシー来なかった?」と聞いたら「いや、デマンドタクシーが来るんだけど、今まではバスの乗り継ぎの待合で、必ずここには誰か3~4人のおばちゃんたちでいつもたむろして、いつもここで楽しくおしゃべりしていたんだけど、バスがついたらすぐタクシーにみんなさっと乗って行っちゃうので、おしゃべりすることもなくなった」と。でも、家に居てもあれだからということで「来て座ってるんだ」とお話を聞きまして、なんかこう便利にしても、本当にそれが暮らしの安心につながるのかなと。私、聞くおばあちゃん、聞くおばあちゃんそうなんですけど、出かける、病院に行くのにもものすごく、おめかししますよね。楽しみにしている。病院に来るんですけど、おしゃべりしに来るんですよ。本当に病院に来てないときには旦那がいても、旦那とは会話しないし、テレビ見ながらごはん食べてるみたいな。ここにきて誰かとしゃべると初めて人間になるみたいな。普段は熊だかアライグマだか分かんないんです私は、みたいな。

そうか、と。移動はやっぱり、移動というのはそこで

誰かと、私すごく乗り合いにこだわってるんです。乗り合いってそこで誰かと会う。そこで初めて自分は人間だったんだじゃないですけど、そういう楽しみっていうことが本当は暮らしの安心にもものすごく効果というか、役割があるんだなということを常々思ってます、交通もちょっと不便です。そのちょっと不便さを何かほかのサービスで出るんですよ。

なので、地域づくりとその交通、居場所づくりというとなんかちょっと福祉的であんまり、上から目線で嫌なんですけど、つながりを作って、拠点づくりと拠点まで来る足をつくる。両方一緒に考えていかないと全然住みよい暮らし、住み続けたい暮らしにはならないんだなあということをつくづく感じておりまして、そのためには今日、業者の方とかいらっしゃるので、他分野からのアプローチ、その「福祉ですう」とか「地域活性化ですう」とか交通ばらばらですけど同じものさしというか、同じ土壌でやっぱり会話ができるそこで生きる、そこで意見し合える仕組みをやっぱりどうつくるか、というのが、これからの課題だなと。そこに私のようなものがささって行って、ぐちゃぐちゃにかき混ぜるみたいな、そういうような役割ってのが本当に必要だなあと思って、活動をしております。すみません。長くなりましたが以上です。

土井 ありがとうございます。大変素晴らしい実践の取り組みをご紹介いただきました。便利はええことだけれども、便利をとことん求めていく、実は人のつながりが意外に消えてしまったりする可能性があります。私もよく過疎地で移動支援といいますか、公共交通の計画をお手伝いするときに、「うちの地域は非常に不便だから、みんな車ばかり乗るんだよ」と本当に耳にタコができるほどよく聞きます。「では、バスなどの公共交通がいるんですか」と聞くと、「今は車運転してどこへでも行くことができるからええんねんけれども、年取ったときに車の運転ができるかどうか不安やから将来のことを考えるとバスを残してほしい」というような話を、同じように何回も聞きます。

でも、今バスなど公共交通が運行されていないと、皆さんが年をとったときにですね、そのときに都合

よく走っていればいいですけども、なかなか残っていないですね。そこで、皆さんがまず乗ってみることから始めましょう、とお勧めをしています。「不便やから乗らない」とよく話が出るんですが、ほんまに不便かどうかは実はよくわかってない場合が多いです。

一生懸命、計画をしていいものを作っていくと、例えば意外に便利やったりするんですね。その1例がダイヤのパターン化をすることです。ご承知の方も多いかもしれませんが、例えば1時間に1本とか2時間に1本のダイヤでも、例えば9時12分、次は11時12分というように周期的にも決まった時間間隔でバスが出るとするとダイヤを覚えなくてもバスの来る時間がわかる。じゃあその5分か10分前にバス停に行きましょうということで、バスのダイヤに合わせて生活のパターンを決めることができます。同じようなパターンを決めている人がいると、そこで見知り合いができるというようなこともあって、便数が少ないことが必ずしも不便ではなくて、生活のパターンを作ると意外に使えるというようなことも可能性があるなというのはよく感じるんです。今の若菜さんの話はそれに近いなあと、いうふうに感じました。

それぞれ4人の方からお話が出たわけですけども、本当に深刻な問題の1つに、交通を支えるドライバーさんをいかに確保をするのかという問題があるようです。皆さんのお話のなかでも結構、ドライバー不足と高齢化に悩んでおられる。営業運転だと免許も2種免許を取らないといけな。これについて、ちょっと工夫の仕方があるよというようなお話もありました。

このことで、たぶん一番まず困っておられる前田さんの方から、お困りの現状と、それをどうしたらいいかということについて、是非お話をいただければありがたいです。

今の話はたぶん、田島町長さんからも最初に提起された問題と近いというふうに思いますので、まず前田さんの方からお話をいただいて、関連することがあれば、平野さん若菜さんの方からもお話をいただければありがたいと思いますので、よろしくお願いします。

前田 運転手の高齢化ということで、私のところで年齢でいきますと70歳未満の方が6名、65歳未満の方が4名、60歳未満の方が1名、25歳未満という1名ですが、これは私の息子なんです。それと60歳未満というのは、私の同級生で自衛隊に行かれて、自衛隊は53で定年になります。その後2種免許を取られて、今私のところにきて、この予約制いこカーの方を担当してもらっております。

ほかの方々ほとんど70代、70歳未満の方が6名いますので、この先このデマンドタクシーをやっていく中で、あと4～5年したら今の方たちがもう75とか、70を超えてくるんですよね。そういうふうになったときに果たして安全、安心な運行ができるかというのが1つの問題です。

ここで、うちの会社のちょっと概要というか、昨日ちょっと先生にお話したんですが、この17年から路線をやって、22年から予約制いこカーをやっています。うちは会社の売上げが17年から、17年度からみて今の28年度までみたら、約60%売上げがダウンしております。これはタクシーだけの、純粋なタクシーだけの売上げが60%ダウン。県内のこのタクシー業界の中でみると、だいたい17年度から28年度で県内のタクシー業界で売上げは30%減なんです。ところがうちの方は、もう60%減ということは、県内の業者より倍売上げが落ちています。

そういう中で、運転手さんの給料も上がらないです。今ほとんど、うちの方に来ていらっしゃる方は、年金運転手です。年金をもらって運転手をしているんです。最低賃金で働いてもらっても、要するにボランティア的な運転手さんがほとんどです。ただこの自衛隊の方も私の同級生なんですけど、63からかな年金をもらえると。そしたら「私、辞めます」と言われています。私、そいけん(だから)、話をしているのは、「63で年金もらって、タクシー辞めたら、あんた一気に年をとるよ」と。それで「少しでもいいから体を動かしにきたらいいよ」と、この間、話をしたら本人納得して、「じゃあ、年金もらっても頑張ります」というような形があります。

どうしてもそういう方は少しでも取り入れたいとは

思うんですが、なかなか現状難しいところがあります。今のこういうふうな状況、これくらいで先生よろしいでしょうか。もう少ししゃべりましょうか。

土井 過疎地の生活や移動を支えるためにはタクシーやバスはなくてはならないものだと思います。そこで過疎地におけるタクシーの現状と、現状の問題を踏まえて、どうしたら持続可能ものにしてできるのかということについてもお話いただけたらと思います。

前田 今日は、祐徳バスの社長もみえておりますので。ありがとうございます。タクシー関係の方も何名かみえとります。これは、新聞に載っていたんですけど、「自家用車タクシー」を解禁ということで、安倍さんあたりが、これは過疎の地域で特区でやろうかということで、今話をされております。昨日も話をした中で、どうしても国土交通省の規制が厳しいんですね。なんか車に関しては、ただこう自家用でタクシーちゅうのは総務省管轄でやられるみたいで、もしそうなったら、今の規制がすこしはずれるかなというのがあるんですけど、昨日もお話したんですけど「国土交通省が絶対許さないよ」ちゅうことを言われてましたので、このようなことも踏まえていろんなことを考えてます。

昨日もちょっとお話ししました。全国的にタクシーは、台数は増えております。あまり増え過ぎて台数を規制するような形になっとなりますけど、この白石町でいえば、私のタクシー会社も最初、小型は14台ありました。父親が41年から開業して14台のタクシーで営業しておりました。しかし今現在、私が小型を動かしているのは5台です。これが過疎の地域の交通手段の形がタクシー業界の厳しいという状況です。以上です。

土井 ありがとうございます。二種免許の問題とか、保険の問題とかいろいろタクシー事業にまつわる大変なことというのを、抱えながら現在も運行されているということでございます。どういう人たちに運転手になってもらうかというのが大変大事だというの



は、先ほどの平野さんの話でもありました。持続可能な移動支援の仕組みを、どういうふうにしていったら工夫ができるのかということについて、じゃあ、すみません、平野さんの方からあるいは若菜さんの方からお話していただければと思います。よろしくお願い致します。

平野 さっき若菜さんの方からも、こう説明、話がありましたけども、基本的に移動だけではだめですよ。移動のその活動をずっと、それをしようというのは、たぶん続かないと思います。やっぱりそれに伴って居場所を、拠点的な居場所をつくるとかですね、居場所をつくったら、また見えてくるものがいっぱいあるとかですね、そういうことだと思います。

私たちが今運転手の話がちょっとありましたけど、私たちは、そういうその事業としてはやっておりませんけども、先ほどのスライドでも話しましたが、やっぱり私たちの運転ボランティアというのは利用者のためというよりもその自分のためといいますかね、自分がそういう活動をして生きがいを感じるというのが、やっぱり一番大事で、もちろん続けてもらうのもそれが一番大事と思ってます。奉仕の精神だけではたぶん頑張って1年、2年くらいしか続かないじゃないでしょうか。うちのドライバーは年を取りましたけども、みんな相当うちに長く活動をしている人です。

それから具体的には私のところの運転ボランティアは、昼飯は私のところといいますか、居場所にしてますから、私のところで昼飯を食べます。週のうち水曜日はまあ20名くらい集まっておりますけど、それ以

外の日も食事づくりのボランティアの方が全く無償で来ていただいて、それを運転手は昼飯を食うと。運転手もそれいいか分かりませんし、私一番喜んでるのは運転手の奥さんだと思います。1日中、朝昼晩3度の飯を「用意せんばいかん」と思って、奥さん口じゃ言わんでしょけど、相当苦痛になると思う。うちの運転手さんたちは、人によっていろいろですけど、午前中来てから遅くとも4時前には帰りますので、その間は、奥さんは、おやじはそこに行って昼飯を食うてくるからほっといてよかと。自分の時間が取れるということです。そういう意味でうちはたぶん運転手より奥さんのほうが「行ってこい。行ってこい」という感じでしますし、まさにそれですよ。みんななんも今から町づくりとか、そういうことで地域社会で支えるというのは、なんか支えるためにというのは続きませんよ。やっぱり自分が支えながら自分もそれに生きがいを感じるといいますかね、それが一番大事だと思います。そういうことをしたら、まあまあ続くんじゃないかなと思っておりますけど。

土井 ありがとうございます。「居場所」、大事な視点です。移動のために居場所をつくるんじゃなくて、居場所をつくるというのは、乗客のために居場所をつくるんだというふうにはじめは聞こえてきたんですけど。「そうではない」と。実はドライバー等、活動を支える人のためにも居場所がある。ドライバーの人をリクルートするのも大変だと思ってたんですけども、今の話だと昼飯食べに来られる人がドライバーをしてもいいよという話になるのだと思います。これはものすごく新鮮で大事なことをご紹介いただきました。私の目からコンタクトがとれるというか鱗がとれる感じでした。一緒に食事をとるということは、1人で食べるよりもずっと楽しいし、それでお友だちも広がっていく。本人も楽しいし、奥さんにとってもいいことになるのもそうだと思います。こうした活動の延長としてボランティア輸送につながっていくということですね。ボランティア輸送やろうということだけではなかなか大変なのでやはり続いていかなければいけない恐れがありそうですが、こうした活動を進めることで移動支援につな

がっていくというほんとに素晴らしいお話をいただきました。ありがとうございます。じゃあ、すみません、若菜さんお願いします。

若菜 夫婦円満が、地域円満の秘訣ですね。東北の方のタクシー事業者さんの現状も少しお伝えしたいんですが、私が回る市町村の交通をどうしようかというのに入ったときに、1番重要にしているのがそこにタクシー事業者さんいたらですね、そのタクシー事業者さんがいかに健全な経営に近づけられるのか、生き残ってもらおうかというのを、実は一番気を付けています。それぐらい絶滅危惧種になりつつあって、岩手の交通問題は今、ものすごくタクシーさんの廃業が問題になってまして、私がタクシー事業者さんのヒアリング、そういう意味では必ず行くんですけど、こういう実態なのかということで、1つは賢いなあと思ったんですけど、ガソリンスタンドにタクシー事業者さんの事務局があって、電話もそこで受けるっていう。ドライバー不足も問題なんですけど実は受付、空白地有償運送もそうなんですけども、受付の人って必ずそこで電話取れてなきゃいけないんで意外と難しくて、ガソリンスタンドでやってました。事務もガソリンスタンドでやる、傍ら事務をやっているとところが1つありました。

もう1つは岩手県内でもタクシーの廃業が問題になっています。「タクシーやめるよ」といわれて、そこに自動車の整備会社さんがいらっちゃって、そこに「やってくれ」といって押しつけて行ってしまったという。なので、整備事業者さんがタクシーもやってて、なので整備する若者のあんちゃんも2人ぐらいに二種免許取らせて、もう、回わんないときは、そのあんちゃんが出動するという、そういうような状況になってますね。

ドライバー不足の問題は2つの方向性かな、と。交通だけでなんとかやってくか。他業種と組み合わせるか。どちらかかなというところで、このドライバー不足は過疎地でいえばドライバーだけじゃないですよ。農業をやろうとしても人手不足なんですよ。

地域づくりで人口を増やさなきゃ、増やさなきゃで、実は海士町でうまくいってるポイントの1つで、私、先生に教えていただいたのは、若いと入ってきたときに居つくかどうかとか、どんな仕事をするかどうかといったときに、漁業とか農業だけではやっぱりちょっと疲れて離れてしまうと。肉体労働と頭脳労働を組み合わせるみたいな。そういうのをやると意外とそのよい。頭脳労働だけでもなんだか引きこもって終わってしまうみたいなのもあるみたいで、今どきの若い人とかあれですけど、いろんな事業をですね、その時々によってやらせる。そういうような会社を私、ちょっとどっかでつくろうかなと、実は思ってたんですけど、そのときにやっぱり問題になってくるのが社会保険をどうするか。じゃあ、そこはうちが払って…と考えていると、派遣会社と一緒にかなと思ったりもするんですけど、そういう組み合わせっていうのは、1つありかなと。

バスも運転手さん不足なんですけど、実はバスの運転手さんと農業って意外と相性がいいと。バスってだいたい8時、9時、朝と夕方が忙しくて、朝と夕方運転手して昼間は農業やってるっていう。それでなんとかドライバー確保しているっていうところもたぶんおそらく少ない。というのが実情かと思います。

土井 ありがとうございます。非常にいいお話でした。移住促進を考える地域は多いと思います。そこで、「自分たちの地域に来てくださいよ」というときに、たしかに産業が農業だけでは大変だと思えます。雇用の場として運転士もあり、こうして働いていただくことで、顔見知りも増えていき地域にも馴染みやすくなる。そういう効果もあるということですね。それを実現するさいに、行政が担うことや地域の皆さんが担うこともあるということになると思います。今までのお話聞かれて、田島町長さんからもお話をいただければありがたいと思います。

田島 分科会の最初に先生から言われたように、今日タイトルが地域を支える身近な移動手段というこ

とで、「移動手段」というところが大きく書いてありますけども、サブタイトルのところに住みなれた地域で暮らし続けるためにという、なんかこっちのほうが大きくなってきているんじゃないかなと思います。

もちろん移動手段だけの話じゃなくて、やはりその地域が盛り上がっていくためには、みなさんがどうやって住んでいけるかということを、皆さん今、いろいろとお話をさせていただいてると思います。

また先ほど、若菜さんの方からも地域づくりと地域交通というは一緒になっていこうとお話があったんでございますけど、さらに最近のこの少子高齢化の中においては、プラス福祉の話も入ってくるわけでございまして、そういった、なんちゅうんですかね。交通のとこだけでなく人間関係まで含めたところでの大きいところではね、お話がなされているのかなというふうに思います。

やはり交通、交通って狭いとこの視野だけで話するとですね、なかなか厳しいものがあるのかなというふうに思います。

今日は、パネラーの方3名、4名ですけどもほかに、今日会場にいらっしゃる方もいろんな意見をお持ちの方もいらっしゃるかと思います。白石町においても合併して、合併する前から新町については合併していくから、交通機関がなくなるから、どうやっていこうかということでの移動手段を考えてスタートさせ、そして最初17年からスタートしたものを、22年に5年後に見直しをして、今はデマンドと2つを合わせてやっているんですけど、本当にこれでいいのかという。今後またさらに検討していかにかいかん時期にきているのではないかなというふうに思います。

先ほどから交通だけの話に限りますとですね、みなさん言ってらっしゃいますように民間事業者とのバランスといいますか、そういったところもいろいろと考えていかなければいかんやろうし、財政面においても、当初はうちも8路線のバスでは、相当な金額を負担しておったんですけど、今はデマンドということと2つ合わせてやっているんですけども、これは財政的には軽減はされているんですけども、本当にこれだけで役所としてもですね、これだけでいいのかどう

か、行政としてこれだけでいいのかどうか、やはり地域がもっともっと盛り上がっていくためには、こういった移動手段か、合わせてですね不自由な方たち、交通弱者な人たちがもっともっと町に出てくるとか、外に出て行くという機会をですねどうやって作っていくのかというのをもっともっと議論していかにゃいかんかなというふうに思いました。

土井 ありがとうございます。昨日の夜にホテルでテレビを見てたら、佐賀で免許返納の取り組みを進めていることと、その一環でご本人でなくても免許の返納ができることになったようですね。きっと私もそういう老人になると思うんですけども、高齢者のご本人は「俺はまだまだ運転も大丈夫」と確信しておられるのですが、家族の方が「あんた、そんなこと言うてても、まっすぐ道も歩けへんのに、そんなこというたらあかんよ」と、家族の人が免許返納しようということを推進する制度になると思います。ただ免許返納したらもう次に再発行することは無理だ、とニュースの中でも重ねて言っておられました。免許返納しようとするんですね、いくつかやっぱり、返納しても大丈夫だという条件がいると思います。そのうちの1つが、車に乗らなくても病院や買い物に自由に行けるということですね。それが免許返納するということは再発行無理だよ、ということだと、仮にバスやタクシーがあっても廃線などになると大変です。かなり長い期間、免許がなくて生活ができるという安心感がないと、なかなか「返納しよう」と推進しても返納しにくいというふうに思います。

そうすると、例えば移動支援で公共交通としてデマンド型のものがあるにしても、長期間続けていくためには、先ほど町長さんが言われたような、1つは財政的な安定感、もう1つは残っていく仕組みというのがないと、今走ってても、3年後にそういうものがなくなったら、どこも行けないじゃないかという不安があるとなかなか免許の返納もしにくいと思います。

そうすると財政的な基盤をきっちりつくっていく、それから民間と行政のバランスとか、事業者の皆さんが続けていくために先ほど少しお話していただきま

した。

こうした地域公共交通を持続していくための課題という点があれば、意見をお願いしたいと思います。例えば行政がこういうことをやらないといけない。あるいは事業者はこういうことをやったほうがいい。地域の方はこういうことが必要なんだよというようなことを、成功している皆さんだから言える話もあると思いますので、是非ヒントいただければありがたいと思います。前田さんからいきましょう。よろしくお願いします。

前田 なるべく短くいきます。先ほど免許返納のことを言われましたけど、実はこれ白石町であったことです。軽トラックに乗って警察に免許返納に行かれました。それで免許所返納の手続きが終わって、返納証明書ももらってます。それで乗って帰ろうとされたんです。白石警察署から私の会社の方に電話がありました。「すみません。代行してもらっていいですか」と。昼から酒飲む人のおんしゃったばいなあと。私も、従業員が行って、実は代行して送って帰って「なんば飲んどんしゃった?」「実は免許証返納に行たて、わが車で運転して行っとらすとよ」と。

さっき先生が言われた佐賀新聞のことが、今日載ってました。家族の方でも大丈夫だと。ただ、ちょっと白石町のことで言いますと、今まで白石警察署は白石町でありましたけど、今、建て替えになっております。大町町の方に移ってますので、ちょっと距離が遠いと。この間近くの敬老会に参加したらですね。「前田さん、折角そこ白石に近かったとこれ、大町まで行かんばらんやっかい。ちかっと考えろさあ」と言われました。これは「私、どがん考えても無理ですよ」と。約2年間で白石まで来ますけど、今言われた新聞に載っていたように、家族の方ができるということであれば、返納していただき。1つ付け加えると、返納した方々には、タクシーは1割引というのを、佐賀県全部の業界でやっとりまします。ですから。

土井 免許証を返納した証明とかありますか。

前田 はい。返納証明書を見せたら、1割引という

のがありますので、安心して返納してください。今日、来られている方は、まだ車に乗られておる方多いと思いますけども。ある方から言われたのは、「白石町の75歳以上の方は全部返納させんですか(させないですか)」。これは私が言うたんじゃないかなですよ。そして、その方が言うには、「このデマンド型の予約制いこカーを白石町全部に行かれるようにせんですか。そしたら75歳以上の方が全部返納したら交通事故がどれだけ減んね」ということを言われましたけど、一理あるなあと思いますけど、なかなか財政的にですね、横に町長がおられますけど、厳しいところがあると思います。

しかし先生も言われましたけど、継続していくには、どうしても行政からの支援がないと、私たち業者だけではできません。

それとこういうデマンドをタクシー会社ではなく、一般の方にされたらたぶんタクシー会社は廃業になってくと思います。今、予約制でやってますけど、私は全部予約にしていいただいたら、今の運転手さんは半分でもいいです。結局、タクシーというのは、いつ電話がかかってくるのか分からないから、いつもおらないかん。しかし予約制にしていいただくと、運転手さんに「あんた今日昼からはなんもなかけん帰ってよかよ」ということができるんですよ。そのへんのことの仕組みを少し考えながら継続をやっていくような形を考えていければと思います。答えになってますかね。



土井 ありがとうございます。そもそも免許返納をしに車で行くということ自体、判断力だいぶ低下してい

ると思いますね。私も気をつけないと。そのあとおっしゃったことが非常にいいお話だと思います。そしたらですね。平野さんお願い致します。

平野 あの免許返納という決断は、相当大変な決断だと思いますけど、私の会にも家族でみえます。おやじ連れてとか、お母さん連れて、息子なり嫁さんがみえます。たぶん家では、それこそさつきも言われましたけど、けんかになっているんだと思うんですね。息子とおやじであーじゃ、こーじゃ言うて、「危ない、危ない」と言ってけんかになる。おやじはおやじで息子の言うことはですね。なかなか聞けんちゅうことはみんな一緒だと思います。

私どもの所に来られた時に、私が真ん中に座ります。そしたら、やっぱり、おやじさんも息子もですね、たぶん家で言いよごとは言いよらんとですね。いくらかは抑えて言いよっと思います。そいけん、私がいいますから、そして私がそういう、「うちで完全にはフォローできんですけど、こういうのがありますよ」と。「よかったらそういうのを使いませんか」と言うたらですね。やっぱり、それだけじゃないでしょうけど、判断される方、返納をされる方、実際にいらっしゃいます。親子でみえたり、友だちというのもみえますね。1人が運転して、1人はその人と一緒に行動するというような人は、今まで乗せてもらいよった人も、この人が返納したら大変ですから、2人でみえます。2人でみえていろいろ話してですね。この程度やったら「うちでもできますよ」と言って、返納した人とか、そういう方もいらっしゃいます。

それと免許は、ただ運転せんぎそれで済むかという、そうじゃないですもんね。その先のことにぶつか。運転して行って先のことがありますから、なかなか単純なことじゃないと思いますけども。代理の者でもいいというように、昨日報道されていましたが、だんだん今から増えてくと思いますが、やっぱりそれに替わるものというものを、やっぱり手立てできなかったら返納はするかもしれませんけども、悲しいですよ、自分がそういうふうで返納してちょっと外出が全然自由にならなかったら。

それから先生から言われた、その持続性の、という非常に難しい問題で、私も「中原たすけあいの会」がずっと続く自信ちゅうのは、とても言えません。私も高齢ですから、5年スパンくらいは見通せるけども、ずっとは難しい。やっぱり支援する人たちのその確保はどうかということと、それから財政的に今赤字といいましたが、財政的にどうなるのか。財政的には今、皆さんご存じか分かりませんが、介護保険事業の要支援というのが市町村事務にかかりました。その中に移動というのが入っています。厚労省の方は、こういうことをしたら補助金が出せますよ、というのがありますから、今後はそういうのも財源の1つとしてはですね、そういうのも有効に組み合わせるから確保していくというのがあります。

それから、赤字というか経営の一番は、私たちもその人件費とは言えませんが、謝礼金とかそういうウエイトが結構高いですね。ですから、そういう参加意識の人の、そういう意識がどう変わっていくかでも変わってくるところです。

それから一番大事な安全だと思います。安全はやっぱり100点満点はありませんので、これは継続するためには絶対必要です。私がいつも言ってるのは、中原たすけあいの会がもう事故起こしたら止めましょう。解散しましょう、といつもドライバーと話すとき言っております。そういうのを、そういう安全の意識というのを、日頃から、うちはその居場所になってますから、空いた時間の方が多いですから、そういうときにみんなでこう話し合いするとか、そういうので安全確認しています。

そういうことで、参加してくれる人の人件費をはじめ財源をどうするかということと、安全確保というのはですね、しっかり1日、1日積み重ねていったら結果的には続けていくことができるだろうと今思っております。以上です。

土井 ありがとうございます。もう少しだけ質問させていただいてよろしいですか。本当に素晴らしい活動されておられると感じているんですけど、担い手の方々の世代交代、それになんか工夫されているこ

とがあればご意見をいただきたいというのが1つ目の質問です。

もう1つよろしいですか。財政的な話ということで先ほどスライドで119人の方が寄付者ということで、活動には参加しないがお金は出すという方がいらっしやうと思いました。これはすごい仕組みで、是非皆さんの方にご参考になるように、その寄付者をどうやって募っていくかというコツみたいな、あるいはそのお考えがありましたら教えてほしいと思います。この2つ、すみません、よろしくお願いします。

平野 まず、担い手の世代交代といいますが、今まではなんとなく例えば病気でリタイアした人が出てきたら、なんとなくこう補充がきいていました。それはやっぱり広報にチラシを一緒に挟んでもらったりしますけども、一番はやっぱり口コミですね。口コミで実際やっている人がこういうのはどうかということで来る人が多い。まあ今後将来どうなるかは非常に大変だとは思っております。

それと寄付の話ですけど、最初、私たちNPOというのは基本的には、専門的というか、認証してもらうのがNPO、一般的ですね。その中で特に公益的な活動をしているとか、情報交換ちゃん、いろいろ条件を満たしたところはですね、認定を取ります。取れます。「認定NPO」というのを取ります。私たち認定NPO、今、全国で1000団体程度なんですよ、認定NPOとっているのが。「認証NPO」というのは、5万団体以上あります。その中で1000団体前後が今取っていると思いますけど、佐賀県でももちろん私たち以外でも取ってますが。

それを取ったら何がいいかというと税制面での優遇措置があります。いくつかありますけど、まず寄付をいただいた方は、ふるさと納税の率まではいきませんが、基本的には4割、基礎控除が2000円ありますから、それ引いた残りは基本的には4割は確定申告をしたら還付されるという制度がひとつあります。それとか遺産相続の場合が税はかからないとかですね。東京のへんはそれ多いですね。狭い土地でも当然億単位のその資産でしょうから、それ遺

産相続するためには税金を払わなければならないでしょうね。税金払う金がないんですから、そういうのはもうNPOに寄付するという「さわやか福祉財団」というのがありますけど、あそこはそれで相当基金をつかって活動をしている。都市部はそういうメリット相当ある。うちも実は認定とる前ですけど、土地と家全部やるという人がですね、夫婦2人死んだら、もう子にやらんでお前にやるというのがありましたけど、その時分、ちょっとこっちももうて、それこそ払う税金も持たんですから、認定取る前ですから。

そういうのも実際ありましたし、まあそういう方、家族の方、最後は50万円現金で寄付いただくとかです、そういうのがありますので、そこらへんやっぱ、まずは信頼関係があって、そういう認定とか税制の優遇措置は上手に使うとか、そういうのと思いますけど、やっぱり寄付も「あいどま、まあやいよばい（あの人たちはよくやっている）」と思ってもらわないといけないうし。中原校区の病院、医療機関は全部寄付いただいています。スーパーのようなところからもいただいています。もちろん、うちの利用の人からですけど、全く私が顔を知らない人からも毎年、寄付いただくというのがありますので、やっぱり、言うことでしょうね。地域社会に「こういうことをやってます」。ずばり「寄付してくれ」と実は言いにくいですね。金くれというのは。「こういう活動しています」。ずばり「経営、大変です」と言えればいいと思います。そしたらやっぱり「あいどんよかことやいよ（あの人たちがいいことやっている）」と思ってもらえたら、当然寄付いただけたらと思って、今やっております。そう言いながらもどんどん増えているかというそうじゃありませんけども、100何十名くらいは、100から200くらいは、寄付をいただいております。

土井 ありがとうございます。なかなか素晴らしい寄付もあるのですね。それだけ多くの方から寄付をいただいたり、家屋敷をプレゼントされたり、すごいですね。やっぱり人間が信用されていることと、組織の活動が信用されてるっていうことは大事なことだなあとあらためて思いました。こうした活動を支えたいと思

っておられる方が、たくさんいらっしゃるということですね。そして、その活動を知ってもらうことがとても大事だということも今、お話いただきました。では、若菜さん、よろしくお願いします。

若菜 今の「認定」、認定NPOさんって本当にすごいんですよ。ここ、天と地の差があります。普通のNP Oです、こっちは。

免許返納の話に戻っていいんですよ。ちょっと戻りますが、免許返納の政策的に2つやったほうがいいんじゃないかというのがあって、1つは免許返納って必ず交通に関する網形成計画を立てると必ず事業メニューに入れないといけないぐらいの深刻な問題だし、対策も必要とされていると思いますけど、それをこうどっかで話し合ったときに、実際に免許返納してもいいかな、しなきゃいけないかなと、おじいちゃんとかが言われたことが、免許返納できるかどうかが重要で、免許返納したらですね、というかだいたい市町村さんて、免許返納したら例えば年間1万円あげますとかだいたいやるんですよ。10万円あげますみたいな市町村もあるみたいなんですけど。そういう施策は免許返納したら、しちゃったんだから別にいいんだと。むしろ免許返納してやっていけるかどうかのお試し、そっちのほうが重要だってこといわれて、そりゃそうだなあってことで、今、私は各市町村に対して、返納を促進するような回数券等の配布を提案しています。1年以内に免許返納をしたいなあと考えている人は、どうぞ来てくださいと、役場に。そしたらちょっと安いんですけど年間6000円、この6000円も現金であげちゃだめですよ。パチンコに使って終わりますからね。もしくはお酒に使ったり。6000円分のバスカードか、町営バスの回数券か、本当はこの2種類あげたんですけど、公共交通会議でタクシー事業者さんに突っ込まれてですね。「なんでそこにタクシー入れないんだと。」「ああそうだ、すみません」てことで、タクシーはですね、でも6000円なんて、うちだと距離遠いんで1回で終わっちゃうんですよ。そうすると生活に定着するかどうか分からないんで、申しわけないですけども1回500円の券

にして、1回1枚使ってくださいと。それを2種類選べる。バス券、バスカードだけで6000円分もらってもいいし、タクシーカードだけで6000円もらってもいいし、両方合わせて3000円、3000円もらってもいい。そういうような施策を、実は今年度から始めていますので、また、これさらに特典を付けまして、2年以内に無事に免許を返せたら、もう1回、それもらっていいよという。返せなかったら返せなかったでいいですよ。しょうがないです。だからそういうようなことでちょっとやり始めたところなので成果はまだ言えないですけど、そこが1つ。

あとこれ1つ、まだ、私あっちこちの市町村に提案しているものの実現できてないんですけど、やっぱり過疎地イコール農山村では、車返せないんですよ。軽トラいるでしょう。ずっと言ってるのが、このエリアの中だけは運転していいよというエリア制にしてはどうかと。

ていうのは、東北はやっぱり遠いんです。町までは。集落の例えば小さな拠点があって、その小さな拠点から病院までですね20分、車で20分だったら近い方。もう30分、40分、八幡平市は1時間くらいかかりますからね。だから地域の中の、このちょっと私の一番最後のスライドにもあるんですが、基礎集落圏の中で小さな拠点の、きちっと整備したうえでですよ。そこまでバスがきちっとつないでいる、と。そこまで作り上げたうえで、この基礎集落圏の中はどうぞ運転していいです。但し、そこから町場まで来ちゃだめ。そこが、遠いんです。そこが冬場も大変なので、これはちょっと政策的には、交通的には無理なので、例えば地域ルールみたいな協定みたいなものにして、そこの中だけ、「じゃあ、やります。町場までは行きません」と言った人には、バス券サービスするとか。そういうの、これ町づくりと一体でないといけないんですけど、そういうことをちょっとやっぱり必要だなあとって言うたんですね、国がまたそこにちらって書いてまして、盗まれたと。どっちが早いかみたいな気持ちもしてるんですが。そういうことは是非、考えられたらいいなあとって思いますので、お互い競争してどっちが早く実現できるか、頑張ってみたいと思います。

土井 エリア限定免許を新しく作ったらいいですね。

若菜 そういうルールをですね。

土井 ありがとうございます。お試し期間というのも、とっても面白そうですね。取り入れやすそうなところもたくさんあるように思います。

さて、活動が拡大すると財源、財政的な行政の支援が増えてくる可能性があると思います。先ほど財政的な問題、結構大変だよとおっしゃっていた田島町長さんからご意見をお願いしたいと思います。

田島 まあ財政的な支援ということでございますけど、先ほどからお話ありますように、返納者を優遇するということは、ちょっと少し無理もあるのかなあというふうに思います。やっぱり、私ども耳に聞こえるときに、「返納者には優遇して、もともと免許証を持たなかった人には何もしないのかい」というような話があって、そこらへんはちょっと少し色を付けるとかです、いろいろ検討しなくてはいけないのかなと、そういうところから、返納とかじゃなくて、やっぱり高齢者の方が、やはりその地域の中で暮らしていくためには、「何をせんばいかんかい」というところを、もっともっと突き詰めたところをですね考えていかないといかんのかなというふうに思います。

それは、先ほどから言われますように、デマンドのタクシーというのはいいでしょうけども、それだったら家から病院とか、家からどこかに行くというだけなので、コミュニケーションが何も取れませんので、やっぱりお年寄りの人たちはやっぱり先ほどもお話がありましたけども、どこかにいって先ほどバスとの連携の話がありましたけど、バス停の中で話すという、コミュニケーションをとるという、それが大事やろうというふうに思いますので、なんかもっと今、既成のやり方じゃなくて、もっと違ったところをもっと、もっと考えていかんのかなあと思います。

財政支援というのも、皆さんに高齢者の方たちが元気になってくれるとかですね、自分の住んでる地

域にずっと、亡くなるまでいたいよ、という方たちに、どういった支援があるものかというのを、もっともっと議論をしていかなければならないし、行政としてもそこの中にどういった補助、支援をできるのかというのを、もっともっと突き詰めんといかんのかなというふうに思いました。

土井 ありがとうございます。時計を見ると41分と、だいぶ時間が迫ってきました。最初に、皆さんの方に、もしご質問、ご意見がある方については、お願いしたいと申し上げました。質問のある方は時間の関係で、お一人か、お二人ぐらいになるかと思えますけれども、挙手いただいてお名前を名乗っていただいて、ご質問いただければありがたいと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

どなたかいらっしゃいますでしょうか。じゃあ、一番後ろの方すみません。よろしくお願いします。あの、すみません。時間が短くなっているの、できるだけコンパクトに、ご質問いただければと思います。ご協力よろしくお願いします。

庄野 大分県日田市から来ました地域おこし協力隊の庄野と申します。私は日田市の中でも、中心部から30キロ離れている中津江村というところで活動しています。若菜先生と平野先生にちょっとそれぞれ1点ずつご質問させて頂きたいんですけど、平野先生にちょっとお伺いしたいのは、みやき町のところで活動されている中、その利用者の内訳というのは、その町内の方だけなのか、それとも周辺地域の隣町の方たちも利用されているのかという、その例えば利用者の内訳ってことをまずお伺いしたい。若菜先生にお聞きしたいのは、住民自治組織の件なんですけど、私ども今ちょっと取り組みかけてるところなんですけれど、そのいわゆる県境、熊本県の小国町というところと県をまたいだところが、日田市の中心部よりかは近いので、そういうところの県境のところの住民自治組織の関連というところは事例が岩手県なり東北であったら、教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

土井 どうもご質問ありがとうございます。そしたらお二方、平野さんの方から、まずお答えいただければとよろしく申し上げます。

平野 利用者の行政区分といいますか、以前はびしゃとしていましたが、最近しておりません。制度の話は1つは福祉有償運送を利用できる人というのは、佐賀の東部地区、鳥栖みやき地区の方が基本的には利用されます。もう1つの、無償のもやい号は、みやき町の中原校区だけの利用ですから、多分のべ2800ぐらいあったと思いますが、それは全部中原校区の人だけです。福祉有償運送もですね、鳥栖みやき地区といいましたけども、そうですね、9割ぐらいは、たぶん、みやき町の方だろうと思っております。以上です。

土井 ありがとうございます。地域を限定する場合とあまり限定していない場合とあるということによろしいですね。

平野 制度が違います。制度というか福祉有償運送というのが、そういう制度になっておりますのでそれと。もやい号というのは、登録上、全く法的に制約をうけないものですから、私どもが勝手にデマンドのメリットを生かすために中原校区だけでやっているという、そういうことです。

土井 ありがとうございます。では、若菜さんお願いします。

若菜 住民、地域運営組織が、またがってできるかっているのは、おそらくないと思います。やっぱり、地域運営組織は行政との対等のパートナーという役割もありますし、市町村行政からの交付金制度とかものっかってくるのではないかなと思うんですが、ただ、空白地有償運送という制度で、県またがってエリアにしたいと。それは、山形と宮城の間ではありまして、空白地有償運送は、県境越えて大丈夫になってますので、そういう事業面で連携してやっていくという

事例でいえば、全国ではいくつかあるかなと思います。

土井 ありがとうございます。地域公共交通網形成計画も市をまたがる、県をまたがることはあまりないと思いますけど、でもお互い話をしていって、いいような形をつくっていくのはありだと思いますので、それはたぶん行政の方ともう一度しっかりお話された方がいいかもしれません。

時間がちょっとだけ1分ほど伸びましたけども、すみません、質問も以上ということにさせていただけたらありがたいと思います。またご質問ありましたら、いろんな形で事務局を通じてパネラーの方にご照会いただければありがたいと思います。

今日、簡単なまとめということさせていただきたいと思います。積極的に過疎地で人の移動を支える活動について現場からのお話をいただきました。人の移動を支えることで、人々の生活や、楽しみを支えるということを実際にやられているっていうお話をお伺いすることができました。

まだ、まだたくさん課題とか、お伺いしたいことがいっぱいあります。きっとみなさんもそうだと思うんです。

地域が抱えている問題は共通だけれども、答えの出し方は地域によって全然違うというのが、今日皆さんの話でお伺いしてみえてきたことだと思います。それは場所によって人や地形が違い、風土が違い、産業も違い、集落の構成も違うとことがあるからだと思います。それぞれの皆さんの地域で自分たちにもっともふさわしい答えを、是非これから見つけていただいて、またいろんな機会にご発表いただき、お互いの経験が交流ができれば、大変素晴らしいことだと思います。

長時間、皆さん熱心にご参加していただきましてありがとうございます。最後に、本当に素晴らしいお話いただいたパネラーの皆さんに拍手で持ってしめさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

白石町現地視察

縫ノ池



新有明漁港



太良町分科会

パネルディスカッション 地域資源を誇り、磨く。 ～自発の地域づくりの出発点～

コーディネーター

料理家・フードコーディネーター

平尾 由希

パネリスト

太良シラス会 会長

早津 昌俊

有限会社ひまわり亭 代表取締役

本田 節

有限会社シュシュ 代表取締役

山口 成美

人間牧場主・年輪塾塾長

若松 進一



パネルディスカッション



コーディネーター
平尾 由希 氏(ひらお ゆき)

料理家・フードコーディネーター

お茶の水女子大学卒。元NHK報道局キャスター。

現在は書籍や企業のレシピ開発、ドラマやCMなどのフードコーディネートを手がける他、総務省の過疎地域自立活性化優良事例表彰委員や長崎県のアンテナショップの商品選定委員、地方自治体の食に関する事業のアドバイザーとして全国各地の「食を通じた地域活性化」に携わる。

近著に波佐見焼の器を使用した「薬味の魔法(主婦の友社)」

パネリスト



早津 昌俊 氏
(はやつ まさとし)
太良シトラス会 会長

1970年(昭和45年)佐賀県太良町生まれ。1992年に福岡県庁を退職し、故郷の太良町でみかん農家を始める。2015年には

太良シトラス会の会長職を引き継ぎ、消滅の危機にある「太良みかん」ブランドの再興に向けた取り組みを始める。

現在、太良シトラス会は柑橘(みかん)農家以外に、他の経営品目の農業者や漁業者、商工業・飲食業者など多様な人材とともに活動を行っており、2015年からは都市部の学生らで組織する「東大みかん愛好会」やお茶の水女子大サークル「Ochas(オチャス)」、地元佐賀県の「有田工業高等学校デザイン科」の生徒らとともに、新たなシンボルマークの作成や新商品の開発、PR活動など、若者や都市部の消費者の視点を取り入れ、新たな「たらみかんブランドづくり」に取り組んでいる。



本田 節 氏
(ほんだ せつ)
**有限会社 ひまわり亭
代表取締役**

熊本県球磨郡相良村の専業農家に生まれ、熊本県立人吉高等学校卒業後、地元の農協に就職。5人兄弟の長男と結婚し、3人の子

ども達に恵まれる。37歳の時に1年間のガンとの闘病生活を経験。それをきっかけとして、より深く食・農・命について考えるようになる。少しずつ健康を回復し「ひまわりグループ」を結成し、ボランティアやまちづくり活動を始める。そこで出会った仲間たちと地産地消“食”を地域資源とした拠点、《郷土の家庭料理 ひまわり亭》を立ち上げ現在に至る。

生来おしゃべり大好き!おせっかい大好き!お料理大好き!そして人間大好き!ということで、全国を講演等で年間の半分近くを走りまわっている元気なお母さん。



山口 成美 氏
(やまぐち なるみ)
**有限会社 シュシュ
代表取締役**

地元農業の活性化のため平成8年にビニールハウスで農産物直売所を始める。平成12年に

「おおむら夢ファームシュシュ」をオープンし、年間49万人が訪れる人気の観光ファームに成長。アイス、パン、レストラン等の農産物の6次化にも積極的に取り組み、農家の所得向上と付加価値を高めた地域ブランド商品作りを行なっている。他にも果物の観光農園、農家民泊などのグリーンツーリズムにも注力している。



若松 進一 氏
(わかまつ しんいち)
人間牧場主・年輪塾塾長

愛媛県双海町地域振興課長、双海町教育長、愛媛大学農学部客員教授を歴任し、現在に至る。

双海町役場に在職中、瀬戸内海

に沈む夕日に着目。日本で一番海に近いJR下灘駅で開催した夕やけプラットホームコンサートが話題を集め、夕日をテーマにした数々のまちづくりを行う。真似しない、真似できないアイデアで地域力を作り上げるカリスマとして平成15年、国土交通省「観光カリスマ百選」に選定。年間100日以上全国で講演や指導を実施している。

著書に「町に吹く風」、「昇る夕日でまちづくり」、「今やれる青春」、「ミレニアム2000年その日私は」、「夕日徒然草」。

現地視察

- みかん狩り体験(針茂果樹園)
- 安東アスパラ園
- 海中鳥居
- 道の駅太良





歓迎挨拶

太良町長

岩島 正昭氏 (いわしま まさあき)

皆さん、おはようございます。九州の端の長崎県の県境の町・太良町まで、ようこそお越しいただきました。なお、昨日の全体会、大変お疲れ様でございました。昨日声高らかに、今日は「みかん狩りをやります」というふうなことをやっていましたけども、気象状況がこういうふうなもので、今、現地調査しておりますからね。あとは事務局の方でなんとか対応をすると思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。それではひと言歓迎のご挨拶を申し上げたいと思ひます。

本日は「全国過疎問題シンポジウム2017inさが」の太良町分科会に、月の引力が見える町・太良町によろこそお越しいただきました。町内、県内はもとより全国各地からお越しいただいており、地元を代表いたしまして心から歓迎を申し上げる次第でございます。

総務省の伊藤様、過疎連盟の田村様におかれましては、遠いところを太良町にお越しいただき誠にありがとうございます。

折角の機会でございますので、簡単に太良町を紹介させていただきたいというふうに思ひます。太良町は「肥前風土記」によりますと、景行(けいこう)天皇がこの地を行幸された際、「食物は豊二足へり。豊足ノ村ト謂フベシ」と言われたそうでございます。「豊足(ゆたたり)の里」とも言われるわが太良町は1年を通して山の幸、海の幸など豊かな産物に大変恵まれております。それは町の向こう側にありますけども、西に位置します多良岳、東に位置する有明海の恵みによるもので、これらの自然は私たち町民に働く喜びを与え、さまざまな食と文化をもたらしてきました。

しかし、現在は若者が流出するとともに高齢化が

進んでおり、各地区の地域コミュニティーが衰退の傾向にございます。また地域の主産業であります農林水産業の停滞や後継者不足、商店や事業所などの閉鎖といった産業経済の停滞傾向が見られるようになり、生活に必要な公共交通や情報通信施設などの住民の生活基盤も都市地域に比べ格差を残しているものが多く、厳しい状況が続いているのが現状でございます。

近年、全国各自治体におかれまして、地方創生の名のもと、人口ビジョンと総合戦略を策定し、その推進に日々努力されていると思ひます。太良町におきましても子育て支援、教育の町づくりを目指し、さまざまな取り組みを進めている状況でございます。

本日は「地域資源を誇り、磨く。～自発の地域づくりの出発点～」をテーマとしたパネルディスカッションとなっております。パネリストの方々の取り組みや意見交換を通して、今後の町づくり、地域づくりへの一助になればと思っております。

また、分科会終了後には、みかん狩りなどの現地視察も予定されておりますので、太良町の資源を体感していただきたいというふうに思ひます。

最後になりますが、本日の分科会が実り多いものになりますことをご祈念申し上げ、本日もご参会の皆様の自治体がさらにご発展されることをお祈り申し上げ、歓迎のご挨拶といたします。本日は最後までよろしくお願いいたします。

パネルディスカッション

平尾 皆さん、こんにちは。「はじめまして」の方が多いと思います。地域の食とか食文化を生かした地域活性化というのをテーマに佐賀県さんをはじめ、長崎県の市町村とか島根県、福島県さんなどと、全国各地のさまざまな地域とおいしい仕事を一緒にさせていただいております。フードコーディネーターの平尾由希と申します。今日はどうぞ、よろしくお願いいたします。

今回は全国過疎問題シンポジウムの分科会ということで、こちら太良町の分科会のパネルディスカッションのコーディネーター役を私が仰せつかったのは、昨日のシンポジウムの全体会でも行われた総務省の過疎地域自立活性化優良事例表彰というものの審査員を5年前から務めさせていただいているご縁があります。

全国各地で食を生かした地域活性化に努力をされている地域がたくさんあることから、現地に伺って調査をして、僭越ながら評価をするという、そちらの賞の審査員を5年ほど務めさせていただいております。普段は東京で仕事をしています。ほかの分科会には審査員で一緒にさせていただいている大学の先生方などがコーディネーター役で参加をされていますが、私は学識経験者でも行政の偉い人でもありません。知識が豊富というわけでもありませんが、自治体の皆さんと一緒に、すごくその地域にどっぷりと浸かって仕事を一緒にさせていただいています。公私ともにおいしいものと地方の応援団という立場で、今回コーディネーター役を務めさせていただきたいと思います。

ですので、行政が行うような難しい話でカチコチのパネルディスカッションというよりは、コーディネーターが質問してパネリストの皆さんが答えいただくような、そういう形式だったものでは、全く考えておりません。私もがんがん意見を言いたいですし、皆さんからも、今日は町長さん、行政関係者皆さんいらっしゃってますけれど、失礼ですがいいものと考えて

正直に、ざっくばらんにお話を伺っていきたいと思っています。

今回、会場の皆さんにもいろいろと質問をして、挙手をしていただく場面などもたくさんあると思いますので、どうぞ皆さんも積極的に議論に参加をしていただけたらうれしいです。

さて、今回のテーマですが、「地域資源を誇り、磨く。」「～自発の地域づくりの出発点～」というのがサブテーマとなっています。ここでまず初めの質問をしてよろしいでしょうか。

本日ご来場いただいている皆さんの中で、太良町のご出身の方って、どれくらいいらっしゃいますでしょうか。こんなにいらっしゃるんですね。ありがとうございます。地元の方、多く見えていただいて、すごいです。

今、上げていただいた太良町の皆さん、ご存知だと思いますが、ここ太良町には「竹崎カニ」だったり、「竹崎カキ」だったり、「たらみかん」など多くの特産品、地域資源があります。私は実家が長崎県の佐世保市の早岐町の近辺にありまして、どちらかというと言長崎市より佐賀県内の方が生活圏にちょっとかかっているような生活を学生時代送っています。太良町には私の高校時代からの付き合いの親友のご家族が今も住んでいらっしゃったり、浪人時代にお世話になった寮の寮長さんと寮母さんが太良町で今、施設を営んでいらっしゃったりとか、すごく個人的にもご縁がある土地だなと感じております。

すごくご縁はあるんですけれども、今回、この分科会のお話をいただいて、太良町の特産品、改めて調べてみました。実は東京市場では太良町産のコハダというのがトップシェアを誇っていることとか、長崎などでも多く見られるカキ小屋は、実は太良が発祥だったりとか、栽培面積が九州一のワサビの生産者さんがここ太良町にいらっしゃるということとかを初めて知りました。コハダのことを地域の方に少し伺っていたんですけれども、地域の皆さんも東京では

江戸前寿司でコハダが酢じめにされたものがすごく好んで食べられていること。そのコハダの味を試すと、そのお寿司屋さんの実力が分かるというほど、コハダってすごく珍重されている食べ物だということ地域の皆さんも最近ご存知になったという方もすごくたくさん多くいらっしゃいました。

こういったようにまだまだ太良町には知られていないとか、地域の人もあまりご存じないような、価値を生かしきれていない地域資源というのがたくさんあると思います。地域の食とか、よその人に来てもらう観光とかというと、自治体とか行政の一部の関係者だけのものの話のように聞こえるかもしれませんが、太良町にお住いの皆さん自身が地元の真の魅力とか、価値に目を向けて、これから先この地域でどうやって豊かな暮らしを実現していくかということに関わってくる、誰にとっても大切なキーワードがこの地域づくりというものだと思っています。

今回は地域資源の魅力を再発見して、それを生かして太良町が、もしくは皆さんがお住いの地域がますます元気に輝くためには、どうすればいいのか。はじめに、今日は県外からも太良町と非常にご縁があるパネリストの皆さんにお越しいただいておりますので、ご自身がまず普段取り組まれていることについて、15分ほどお話を伺っていききたいと思います。

皆さんのお話から、地域がますます輝くためのヒントをこれから探っていききたいと思います。では、最初に「太良シラス会」会長の早津さんよろしく申し上げます。

早津 皆さん、改めまして、おはようございます。太良シラス会会長の早津昌俊と申します。普段はみかんの木と話をするのが、仕事でございまして、このような場所でこのような発表をするのは不慣れでございまして。なにとぞ、お聞き苦しいところがあるかとは思いますが、ご容赦いただきますようよろしくお願い申し上げます。

それでは太良シラス会の活動紹介と、太良町の紹介を簡単にさせていただきますと思います。

太良町は佐賀県の西南端に位置し、西に多良岳

山系の山々、東に豊饒の海有明海を望む自然豊かな美しいところです。写真のようにみかん畑からは、有明海を一望でき、特にみかん栽培にとっては、とても恵まれた環境が整っているところだと思っています。これは私の友人が言ったことなのですが「まるで南フランスのようなところですね」というようなことを言ってくれた友だちもいました。私は、南フランスは行ったことはありませんけれども、いつか行ってみたいというふうに思ったりもしているところでございます。

日本最大の干潟がある有明海は、干満の差が最大6メートルほどあります。6メートルといいますと、満潮時と干潮時の姿は全然違います。その豊かな海では竹崎カニ、14年連続日本一の有明のり、先ほどご紹介もありました東京築地市場で有名なコハダ、カキ養殖も盛んに行われているところです。一方で山間地では、私たちの育てる「たらみかん」がたくさん栽培されていて、温州みかんからデコポン等の中晩柑類まで約半年以上、多種多様な品種が育てられています。

続きましてシスラス会について紹介させていただきます。シスラス会は平成元年に先輩方が設立され、海外との交流やスペインで栽培が盛んな「クレメンティン」の導入など実績を積んでこられました。希少なクレメンティンの栽培では、おそらくこの太良町が日本一の生産量を誇っていると思っております。

設立から20年以上が経ち、時代も大きく変わりました。みかんを取り巻く環境は一層の厳しさを増すばかりであります。全国で最盛期には約360万トンほ



どの温州みかんが栽培されていたといわれています。360万トンのみかんが今では、皆さんどれくらいだと思われますでしょうか。今では70～80万トンまで落ち込んでいると言われています。約25%ぐらいまで落ち込んでいます。まだまだ、もう少し落ち込んでいくんじゃないかなというふうに思っているところがございます。さらに高齢化、後継者、荒廃地、超獣害問題等、全国的に同じ問題を抱えているのは、なんら変わりはありません。

その中で若手生産者とともに将来を見据え、「なんとかしなければいけない」という思いで会を活性化させ、地域住民を巻き込んだ取り組みを始めてきました。

まず、最初の取り組みとして、平成27年度に「外部の意見を聞いてみようじゃないか」。そういうところから始めていきました。横浜市のフェリス女学院大学国際交流科の学生さん、東大生らで組織する「東大みかん愛好会」の皆さん、佐賀大学農学部ForS.(フォーエス)の皆さんとともにフィールドワークやワークショップを行い、若者や消費者目線で若者から見た太良町の強み、弱みと課題の洗い出しを行いました。

続いて28年度は、その中から見てきたものをもとに東大みかん愛好会、本日コーディネーターの平尾さんのご出身大学お茶の水大学「Ochas(オチャス)」の皆さん、それから地元有田工業高校のデザイン科の皆さんにご協力をいただき、意見交換や夏合宿を実施し、大きく3つのプロジェクトを行いました。

(画像)1番左が、まず「デザインプロジェクト」と題しまして、有田工業高校デザイン科の皆さんにみかん箱のデザインを行ってもらいました。それから(画像)真ん中もデザインプロジェクトなんです、東大みかん愛好会の皆さんに企画をしていただき、全国に向けて「たらみかん」のシンボルマークの公募を行いました。なんと876作品、遠くは海外スウェーデンだったでしょうか。そういうところからも応募をしていただけるように、大きな取り組みになることができました。その中で、1番最初の方にありますが、「たらみ

かん」のシンボルマークを選ぶことができました。シンボルマークの発表会といたしまして東京で2カ所、太良町1カ所で同時に発表会を行い、大成功を収めることができたと思っております。

続きまして、(画像)右側のレシピ開発プロジェクトですが、お茶の水大学Ochasの皆さんと、5種類のレシピ開発を行いました。その中でできたものが、こちらになります。

1番右上が「たらみかんデザイン箱」と題しまして、有田工業高校のデザイン科の皆さんにつくっていただきましたが、このデザイン箱には太良の特徴である潮の満ち引きを表現してあります。とてもすてきな箱になっておりますので、つい1週間ほど前できあがったばかりですので、これから全国に向けて発信していきたいと思っています。

続いて(画像)左上が、「みかんと紅茶のオトナジャム」。これは紅茶と洋酒が入っております。紅茶と洋酒が入り、香り豊かなジャムに仕上がっておりますので、道の駅「たらふく館」などでも販売しておりますので、ぜひよろしければお買い上げいただきますようよろしくお願いいたします。続きまして下の「たらみかんシャーベット」ですが、これはみかんがない時期にもたらみかんを味わっていただくことができるようにということで、町の飲食店さんなどのご協力をいただき、またお茶の水大学の皆さんと一緒に開発したシャーベットでございます。これらを年中、町の飲食店さんの「たらふく井」と一緒にご提供させていただいておりますので、こちらも合わせてお願い申し上げます。

続きまして、交流プロジェクトということで、交流を行っている時のようすでございます。これは有明海の筏漁ですね。こういうところにも視察に行き、改めて自分たちの住んでいる町が「なんてすてきな町なんだろう」というようなものを実感したのをよく覚えております。

続きまして、(画像)右上ですが、学生らと一緒に議論をしているところなんです、慣れない会議に頭から湯気が出るぐらい本当にみんな真剣に考えて夢を語り、いい議論ができていますと思っております。

す。こちらは町内の加工所の視察です。これが夜通し、東大みかん愛好会の連中と、みかんについて熱く議論を交わしているところでもあります。

最後になります。私たちの取り組みはみかん農家以外にも花やタマネギ、アスパラ農家、また漁業者、商工業関係の皆さん、さらには太良町出身で、福岡や東京で活躍中の心強い仲間たちに支えられて活動しております。本年度も東大みかん愛好会、Ochas（オチャス）、有田工業高校デザイン科の皆さんと、面白い企画を実施しておりますので、ぜひ、楽しみにしておいてください。

本日のご参加の皆様とも一緒に太良町を盛り上げていきたいと思っていますので、なにとぞご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが今年度、有田工業高校デザイン科の生徒さんが作成してくれている、この妖しい写真の動画を実は作っていただいております。たらみかんの紹介動画を作っていただいております。これらはまだ試作途中で完成版ではございませんが、ぜひ、ご覧になってください。

（動画上映）

完成版は、間もなく完成する予定でございます。インターネット上にアップしますので、ぜひ楽しみに待っていただきますようによりしくお願いいたします。それでもし見かけていただいたならば、どんどん「いいね!」を押していただいて、拡散のご協力をよろしくお願い申し上げます。

これで、私の紹介は終わります。本当にご清聴ありがとうございました。

平尾 ありがとうございます。完成版が楽しみです。皆さん、ご注目ください。東大みかん愛好会はすごく本当に、真面目にみかんのことを考えてるんですね。

早津 そうですね。なんといいですか、本当に純粋でみかんのことが好きで、私たちも本当に力をもらっております。

平尾 早津さん、「外部の目線も大事だ」ということをおっしゃっていて、こうした東大の皆さんとか、みかん農家さんに限らずほかの農産物の生産者さんとかとも、いろいろと地域を巻き込んだ活動をされてますけれども、やっぱり、外部の人の目だったり、ほかの立場の人の目って大事ですか。

早津 そうですね。どうしても自分たちだけで考えておきますと、どうしても視野が狭くなってしまったり、内向きになってしまったりするんですけれども、彼ら、彼女たちと一緒に活動やっていると勇気をもらえますし、本当に仲間ができて非常に楽しくやらせていただいております。

平尾 早津さん、もう1点、地域ブランドという考え方が全国でも主流になってきておりますけども、「たらみかん」もその1つですよ。地域ブランドは比較的農産物とか水産物に比較的区別化、差別化が図りにくいのに対して、地域が独自の基準だったり、工夫を加えたものに地域の名前を付けて、ブランド化を図っていくという考え方なんですけれども、「たらみかん」もそういった考え方というのは、皆さんお持ちですよ。

早津 そうですね。おっしゃる通りだと思いますが、ちょっとすみません、なかなか「たらみかん」というのが、最近では縮小しているところがあるんですけれども、なんとかみんなで盛り上げていきたいなと思って、頑張っているところでございます。

平尾 なんかすごく活動が、遊び心があって楽しいのもまた「たらみかん」の付加価値の1つなのかなと思いつながりながら拝見をしていました。ありがとうございます。

次は本田節さん、よろしくお願いいたします。

本田 皆様、こんにちは。熊本県の人吉市からまいりました本田と申します。よろしくお願いいたします。今、早津さんの話を聞きながら、みかんの木と話が

できるってすごいなと思います。農は農に聞け。お米づくりの農家さんは、稲穂に聞けという言葉聞いたことがあるんですが、それだけほれ込んでおられるから、県庁を辞めてみかん農家をされているんだなというのと、1番面白いやる気というのは、都会から体験に来る女子学生が1番楽しいと言われたことです。だいたい今、若者とか、大学生が都市から地方に来るので、地方は、私たちがやっている地域づくり活動もほとんどの大学生が何を見ても食べても「すごいね」「おいしいね」っていうと、私達はだんだんその気になって、自分たちの住んでいるふるさとに自信や誇りを持つのです。女子大生っていうのはいいですね。多分ここあたりが地方に若者や女子大生が来ると地域に活力が出て楽しく活動できるのだと思います。早津さんもそうかなと思いました。素晴らしいですね。

私は、自分が一歩外に出るときは、「人吉ってどこにあるのですか」と全国の皆さんに尋ねられます。知らない方もいらっしゃるので「熊本県の一番県南で、隣が鹿児島、宮崎の県際なんですけど、基本的には九州の真ん中ですよ」というふうに話をさせていただいております。そして、少しふるさと自慢をさせていただきますが、国宝青井阿蘇神社とか、日本三急流の1つ球磨川であるとか、この地域に28の蔵元の球磨焼酎があって、というような自慢をさせていただくんですね。一歩出歩くということは、自分の住んでいる地域を誇りに思わないと話ができないですからね。皆さんたちも無いものねだりよりも、あるもの探して太良町というのは、こういうすごいおいしいものがあるって、素晴らしい景観があって、歴史があるということを一人ひとりが一歩この地域を出ると、PRできる広報マンになることが、とても大事だろうなと思います。ですから、今日、早津さんの話を聞きながら、私はすごいなと思いました。消滅危惧されている「たら」という名前が付いたてるみかんをブランド化しようという、その意気込みというのに、私感動をしたんですね。

しかしなぜ、私たちがこういう地域づくりだとか、人づくりだとか、いろんな活動を始めたというのは、日本

中の中山間地域や地方に行く抱える問題って共通なんですね。まず食糧とか、農業とか、農村という、それはその問題の中に、なぜこの活動なのかというのは、担い手の問題で、高齢化、少子化、過疎化という問題や産業が低迷、担い手が不足。特に食という取り巻く環境の危機、不信心。これはグローバリゼーションの中で国際的な問題、TPPの問題もあるんですが、それでいて九州農政局レベルではカロリーベースで言うと自給率40%なんですね。

だから、そういうことを皆さんたちが、もう一回足元の課題をきちっと認識しながら、なぜあの人たちがあんな活動をしてるんだろう。なんでこんなことを言ってるんだろうということをみんなで共有していくことが、大事じゃないかなというふうに思っています。

だから、昨日からのシンポジウムを聴きながら、やっぱり勉強になりますね。こういうきっかけとか、気付きというものが、自治体や議会など、それぞれの立場で活動されている皆さんたちが参加されていらっしゃるんですけど、課題解決のために一緒に危機感を感じて行動、実践していかなければ解決できないのだと改めて思いました。

私の「ひまわり亭」という農村レストランは、基本的にはコミュニティーレストランという位置付けをしていますが、なぜ20年前に地域のお母さんたちとこういう活動を始めたかって言いますのは、スタートは市の生涯学習から始めるんですが、地域がどんどん高齢化していったって、独居老人が多くなった。だったら公民館で安否確認をしながら、地域に生産されるものや自分たちが家庭菜園で作っているものを持ち寄って、お弁当の宅配をしようということになったんですね。

しかし、生きがいづくりとか、居場所づくりとか、といってボランティアをやっておりましたが、年を重ねていくお母さんたちが、ある時つぶやいたのが「ボランティアもいいし、いろんなイベントに参加するのも楽しいんだけど、継続していけるような活動がやりたいね。そして年金プラスのお小遣いがあったらもっと元気になるよね」ということで、いろんな先進地を勉強してまわって、みんなで会社をつくりました。なぜならば、

地域には、それぞれのJA女性部の活動、生活改善グループ、農産加工さまざまにあるんですけど「自分たちがやりたい」「自分たちが楽しい」「自分たちがなんかもっと生き生きしたいね」というまさに自発的な気持ちがないと、継続できないし、ここにリスクを自分たちで負うということが大事だと。「行政が何もしてくれない。誰も何もしてくれないって言っていると、あっという間に人生終っちゃうよ」ということで、私たちはみんなで出資をして会社をつくりました。法人化していくことが、外向けにも内向けにも、覚悟をしていくという事だったと思っています。

それで今、会社も20年経過し、来客数も3万から4万ぐらいなんですけど、そういう小さな拠点ですが、私の考えは何十万集まる拠点があってもいいけれども、合併後にはその地域の運営協議会（コミュニティー）の中で2万でもいい、1万でもいい。それを10カ所つくった方が、コンパクトでいいのではないかと考えています。今まさに言うコンパクトシティの考え方を私は提案しています。大きなリスクを負わなくても、地域に合併後に空いている、いろんな公共的な施設や、廃校になった学校でやってもいいだろうし、もとJAのAコープでやってもいいだろうし、コミュニティーセンターが空いているんだったら、そういう施設で地域のお母ちゃんたちや、そしてよそから来る若者、Iターン、Uターン者が、一緒に小さなコミュニティーをつくらって元気な地域を作ろうというのが私の一つの取り組みでありました。

キーワードは、集まるとおばちゃんたち「もったいない」という言葉を必ず言うんですね。「そうだね」って。高齢化って言うけれどだてに人は年を重ねていないのです。経験も、知恵も、技もある。おばちゃん、おじちゃんの、この人的資源というのを、もう1回、考えていきたいと思います。後ろ向きに高齢化と言っても、これは地域の宝だ。特に食というのは、地域のおばちゃんたち、農産加工すごい。食文化すごい。こういうものを、産業につなげていくというのでもいいよねということで、今、どんどん空家も多くなってくるし、古民家を再生し活動拠点としようということになりました。

当初、お金がないから、会員はいろんな我が家に

眠っている食器、鍋、座布団、みんな持っという。新しいもの買わなくてもいいんじゃない。兼業農家、小規模農家というのは、道の駅や物産館に出すんですけど、流通に乗らないものに、もっと付加価値を付けてもいいじゃないかという、「もったいない」という言葉が出てくるのです。まさにノーベル平和賞をもらったアフリカの環境副大臣ワンガリ・マータイさんが日本に来日されたときに、日本の「もったいない」という、この言葉はすごいですね。もともとが、もったいないものからできたものが加工品なんですね。だから、そう考えると、この「もったいない」という発想から、どんどん商品が開発されていく。それが地域のブランドとなっていく。その地域の価値を表現する事になるのではないかと考えております。

私たちは、ひまわり亭のコンセプトを6つの柱にしたんです。その1つに「地域で生産されたものをもっと地域で消費していく活動“地産地消”これ必要だよ。ただ、レストランをやるんじゃなくて情報発信。これもやっぱり大切だね。食文化の創造と伝承。安心安全な食の提供。グリーンツーリズムの推進。食育活動」この6つを柱に活動して参りました。ですから、ひまわり亭というのは、ネットワークづくり、ネットワークをつくるための拠点となりました。このようにさまざまな活動をやりながら、情報発信をさせていただいています。

このような活動を20年やってきたんですが、ちょっと上流の球磨郡のあさぎり町って5つの町村が合併して小さな村がどんどん高齢化、過疎になっていく。空家が多いというところで、今年度は古民家再生による新しい“農泊スタイル”の取り組みということで、ソフト事業としては農水省の農泊推進事業で、今進めているのが「食・農・人総合研究所リュウキンカの郷」という拠点であります。

たぶん、住宅宿泊事業関連法案が来年6月に制定されますが、「空家を活用しましょう。人が住んでなくてもいいよ」と、上限宿泊を180日までとし、これから国際的にインバウンドも含めて2020年のオリンピック、パラリンピックまで「どんどん地方にも人が来ちゃうよ」、そういうときに滞在時間、滞在時間を長くする

ことが地域にもっと経済を落としていくことになるという事業を今やっております、人吉球磨という10市町村の中で広域連携形の活動をさせていただいております。

この拠点は宿泊型研修施設ということで、古民家をリスクを負って再生するということが重要なポイントだと思っております。

この農泊という新しい農村ビジネスをやるためのミュージアムということで推進の拠点になれるよう頑張っております。

このような常に学び合う拠点。空間をつくっていかなければ、地域のお母さんたちが集まってくる場所がないということで、郷土料理伝承塾をずっと20年間やりながら、レシピに納めているということでございます。熊本地震から経験したことでライフラインがなければ現代人は生きていけないのではということで、かまどだったり、囲炉裏だったり、暮らし方の提案をしながら、体験という形でこの活動をやっている研修実践型宿泊交流拠点であります。

現在では大学生たちが合宿したり、これからは若い人たち特に「地域おこし協力隊」がこの地域に25人ぐらいいますので、この若者たちの活動拠点としての活用や、九州7県のツーリズム実践者のコンソーシアム、プラットフォームとして、この拠点を位置付けていきたいと思っています。

最後に私の人生の師匠、球磨郡湯前町下村婦人会市房漬け加工組合の初代会長故山北幸さん、“まだ99歳”とあって4年前に亡くなりましたが、今でいう6次産業のまさにパイオニアであります。山北幸さんの全ての物づくりについての哲学は今に通じる話だと思っております。このツーリズムによる農村ビジネスに共通するものは、最後は“人財”であり、やる気と情熱（パッション）と、この地域に生きていく使命・役割である（ミッション）と、行動・実践する（アクション）この3つが必要かなということで今活動をやらさせていただいております。以上です。

平尾 ありがとうございます。地域資源を大事にするところから、人の生きがいをつくるというのがすく

く印象的なお話でしたけれども、女性のパワーがすごいですね。女性が強い地域って元気がいいですか。

本田 そうですね。食資源を生かしていく、生産から加工から販売の一貫経営ができるというのは、生業（なりわい）を興していく職業というのに、地域の女性たちのパワーなくして、地域の元気はないと。地域の担い手であるという位置付けが、これから地方の元気になってくるなあと思ってるんですね。今、私も多良岳の「オレンジ海道を活かす会」に2年通ってますが、棚田保全をふまえながら、条件不利地域をどう生かしながら、コミュニティービジネスをつくっていくかということで、私は過疎という言葉よりも、その地域の中に非常な可能性を今感じて、それぞれに関わっております。

平尾 お話の中で「法人化してリスクを負う」という、その意識というのは、私もいろんな地域を回らせていただいて、ボランティアで利益が全く出ないまま続けられている取り組みって、なかなか長期間にわたって続かないなという印象を持っているんですけども、本田さんがおっしゃっていたような「法人化してリスクを負う」という意識ってそういったものにもつながりますか。

本田 そうですね。やはり、「自発」という言葉を考えるなら、行政からやらされ感があるのでは、やはりどこかで女性たちが分裂したときに継続できない。



「私たちはここでやりたいんだ」という自発のためには、きちっとした法人化していくとか、きちっとした仕組みをつくっていくということが、これからは大事であって、これは行政が箱ものを造って「あなたたちやりなさい」という上から目線の中では、なかなか継続できない。だからこそ、きちっと明確に法人化していく、そういう仕組みづくりをサポートしていくのが行政である。最初のきっかけは、行政であっていいと思うんですね。そういう女性リーダーを育成していくところを今、私の宿泊型研修施設「リュウキンカの郷」というところで、地域リーダーのコーディネーターとか、プランニングをしていく若者やリーダーを育成していこうと思っております。

平尾 ありがとうございます。あとでいろいろとお話を伺っていきたいと思います。次に山口さん、よろしく願いいたします。

山口 皆さん、こんにちは。今、本田さんから「女性が大事」。今日はたくさん参加をさせていただいておりますけれども、こちらの方からお見受けするところ、だいたい2割ぐらいかな、女性がですね。地域おこし、地域が元気になるには、女性のパワーが大いに必要です。そういった話もさせていただければというふうに思います。

まず「シュシュ」というのは、長崎県大村市です。まさに太良町とは本当に近い仲間なんですけれども、唯一、今回「全国過疎問題シンポジウム」1番、場に合わない人間がまいてまして。実は大村市は長崎県で唯一人口が増えているところです。イノシシも増えてますけど人間も増えています。人間とイノシシとどっちが繁殖力旺盛か。なんで人口が増えるのかというようなことも含めて、やっぱり地域が元気じゃなくてはいけな。過疎化になる前に、なんとか手を打たないといけないということも含めて、今これ9万2000人になってますけど、毎月人口がどんどん増えてまして、今9万3500人ぐらい。

「シュシュ」というのは、フランス語で「お気に入り」という意味でして、長崎県のほぼ中央に位置しまし



て、空港があるところ。その地域の中山間地域、本当に山の中なんですけれども、その地域で自分たち、私もあか抜けてますけど農家。皆さん方と同じ農家とは思えないぐらいのあか抜けです。楽しくないとね。

そういうふうなことで今、やとりまして、自分たちの農地に自分たちが借金して、自分たちが運営するというふうな全国的にも珍しい施設です。先ほどもちょっとお尋ねしますと、太良町は道の駅を含めて行政が本当に、これだけうちの行政もやってくればな。うちは本当に自分たちの農地に、当初は、これから話しましょうかね。

地域の専業農家8戸で今、従業員が72名おります。そのスタッフの8割は女性なんですね。なぜ女性が多いのか。国も女性活躍社会というふうに言ってますけれども、残念ながら国の雇用も7割方ぐらいは、男性かなというふうに言われているところでございます。

なぜ8割か。女性の視点が非常に大事だと思います。なぜかという、皆さん方が「たらふく館」に買い物に行かれたとき、どうでしょう。財布の7割は、8割は女性なんですよね。加工品を、こういうものを、例えば早津さんたちが作りました。でも買う人は女性なんです。男は買わないんですよ。シュシュに来られるお客さん今、年間49万人お客さんにおいていただけてますけど、その約7割、75%は女性。買われる、財布は9割かもしれません。8割、9割だと。男性の役割、運転手と荷物持ちなんですよ。だから、加工品をつくるときに、もっともっと地域おこしを含めて

女性の視点を入れてもらいたいなというふうに思います。

シュシュができた理由というのは、梨農家、みかん農家、カーネーション農家、トマト農家、ぶどう農家、養豚農家、いちご農家、そういった農家がもともと40年ほど前に観光農業で梨狩り、ぶどう狩りをやってました。この時期はたんさんお客さんが来るんだけど、1年中そのお客さんに来てもらうために、どうすればいいかということで取り組みました。

平成7年に自分たちができることからということで、活性化協議会という組織をつくりまして、翌年にビニールハウスで農産物の直売所。もちろん廃ビニールで、廃材のハウスを使って自分たちができることから。その翌年に「手作りジェラート シュシュ」というアイスクリームの工房を造りました。

私、前職が農協の営農指導員を12年してました。本当は果樹の指導員のつもりだったんですけど、辞令が畜産の養豚の指導をしてくれと。「なんでもやりますよ」ということで、やりました。当時、農協経済連、全農を通して、日本ハムにいました。日本ハムはそのお肉をシャウエッセンにしたり、ロースハムにしたり、すごい企業努力をされて、野球球団まで持てるようになりっぱな企業になりましたけれども、農家どんどん減少していきました。

そういう中で自分たちが値段を付けて、自分たちが販売できる施設。そういう価格決定ができる農業、そういうようなことをやっていかないと、今後農業はどんどんどんどん衰退していくだろう。そういうことから、自分自身のわがままで農協を退職しまして、自分自身が専業農家として農業をやって、地域を変えていこうという思いでやりました。

そこでアイスクリームの工房を造って、平成12年に今の施設、総事業費約4億円をかけてやりました。自分たちが借金するわけですから、当時は「農業を通してなんとか地域を元気にしていこう」ということで言っておりましたけども、男のロマンでやりました。

でも家内たちはみんな反対でした。8人の嫁は。「男のロマン、女の不満」と。「絶対無理だ」と、当時

99%うまくいかないだろうというふうに言われてましたけども、99%うまくいかないならば1%の可能性はある。その1%に賭けようということでやりましたけども、今では売場ができて、女性が活躍できることができました。ということで、女の自慢ができることです。男は我慢。朝から午前中は、女性がまんじゅうを作ったり、加工品を作ったり、農業を生かした形で稼げるようになりました。そういうことで今、事業を進めておるところでございます。その後、17年に洋菓子工房、直売所を増設して加工センターということで事業を広げていきました。

今、農業の実情というのは全国で192万人、農業従事者と言われてますけども、平成2年に482万人だったのが、今192万人。平均年齢細かくいうと、66.7歳になったというふうに今、言われています。これだけ減少しておりまして、70歳以上が約半分にということ。そうすると、あと5年するともっともっと高齢化になってくる。逆に考えると、そのときには今の若手の後継者、本当に農業の時代が来るぞということで、逆転の発想で考えています。

そこで1次産業から6次産業、1次産業の農業、2次産業の加工業、3次産業のサービス業を合わせて「足しても掛けても6次産業」と言われますけども、私たちは掛け算の6次産業に取り組みたいと思っています。これなぜかという、今、お米を食べなくてもパンや麺を食べればいいという人が増えてきています。でも、そのお米、残念ながらお米の消費もどんどん減っておりますけれどもパンや麺、長崎でも島原のそうめん、五島のうどん、というりっぱな加工品がありますけれども、その約96%の原料の小麦は、輸入なんですね。その小麦がもし入ってこなかったらどうなるんだろう。今こそ、掛け算の6次産業で日本の農業、太良町の農業がなくなったら、産業は成り立たない。そういうつもりでやっています。

従来の3K産業「きつい。汚い。危険」というふうに言われてますけども、今の農村の現状、「高齢化、後継者不足、荒廃農地」と言われてます。シュシュで目指すのは、観光農業でお客様に感動を与えて、後継者に希望を与える。夢のある農業に自分たちがや

っていこうというふうに考えています。

農産物の直売所も造ります。基本的には半径2キロ以内の農家。お客さんがこの時間にも来ていただきますけれども、1日に多い人は6〜7回、今持って来た農家の商品からお客さんは買われています。そういった消費者視点を考えて取り組んでおりますし、ないものはどんどん作ろうということで、今、温暖化というふうに言われていますけれど、温暖化も悪いことばかりじゃなくてパインやバナナ、ドラゴンフルーツ、南国のフルーツが逆にいえばできるようになった。ないものは作っていく、作ろうという考え方ですね。

それと、そういった農産物を使ってアイス工房をつくったり、パンを作ったり。レストランもやります。例えば新しい農業にチャレンジして青いトマト、黒いトマト、カラフルトマトですね。なかなか青いトマトって売れないんです。そしたら有料の試食の場として、こういった提供しますし、結婚式もやりますし、法事もやります。結婚式も先週もやりまして、今週の土日にも結婚式。でも結婚式は省いておりますけれども、結婚式ってだいたい人生で1度か、2度か、3度かなんですね。1度嫁さんに逃げられたけんって、また2回目も、というふうに。そしたら法事もやろう。法事は農業じゃないじゃないか。花、お供え物、料理、お米、卵、お肉、引き出物も農産物。農業の可能性というのを、農業は厳しいというんじゃない、農業の可能性というのを、こういった事業にも反映させております。

そのほかにもウエディングケーキも作りますし、カボチャは丸ごとではなかなか売れなくなりました。そしたらカボチャのシュークリーム、桃の丸ごとのタルト、こういった商品を作って、まさに仕事を作るということです。それとジュースも「初濃ブルーベリー」、初恋の“はつこい”じゃなくてですね。初めて濃いブルーベリー。遊び心もたくさん入れながら、こういった加工品も作ってお客さんにおいでいただくことを考えてますし、いちご狩り、回転式のベンチ栽培で小さいお子さんから大人の胸の高さ、車いすでも入れるように。最近までは梨狩り、ぶどう狩り。最近は特にふるさと納税にも力を入れとりまして、田舎にわざわざ来てもらうことももちろんでけども、都会の方に、まさに

富裕層の方にも毎月いっぺんと。そういったことで産物を「待ち」ではなく「攻め」の姿勢で取り組んでいこうというふうに思っているところでございます。

そういった取り組みのほかにも今グリーンツーリズム、本田さんのところもそうですけども、うちもグリーンツーリズムも、農家は3世代同居の世代から今、息子たちは通い農業をされてます。そしたら部屋が空いてるんで、空いた部屋を使って、まさに農業ビジネスにつなげていこうということで、最近ではもう、うちも17カ国海外から見えてきて、私は5カ国しか行ったことないですけども、17カ国から来ていただいています。料金までもらってハグできて。ここもうちちょっと笑うところですね。そういった楽しみながら、もう本当に海外旅行した気分ですね。そういったまさに「守り」ではなく、「攻め」の農業。農業の可能性からビジネスにつなげていこうというふうに思っています。

そういった取り組みが評価いただきまして、全国の地産地消コンクールで日本一の賞をいただいたり、グリーンツーリズム大賞で同じく日本一の賞をいただいたりということですね。このときの笑顔が一番すてき。賞金100万円。金は笑顔をつくる。そういったところですね。

今、全国に2万3500カ所ということで言われております。全国で道の駅をはじめ、たくさんの直売所がありますけども、その直売所甲子園の中で日本一という賞をいただいて、このとき賞金50万円だったんで、片目つぶっておりますけど。

やっぱり産業になっていかなければいけない。私、常に言ってるのは「地域を愛する」。太良町の人が太良町を愛することはもちろんだと思います。ただ、太良町を愛するだけでは、ボランティアだけでは続かないと思います。ボランティアと髪の毛は抜けていく一方です。ボランティアが少しでもビジネスになって、年金暮らしの人も自分たちが頑張ったのが金になって、年金プラスアルファというふうになっていけば、この地域が必ず再生をしますし、どんどん人が過疎化になっていけば、ほかの地域から呼び込もうじゃないかと。こんな魅力がたくさんある太良町ですので、ぜひ、そういったことも可能だというふうに、本

当に私も可能性を感じたところでございます。以上で終わらせていただきます。

平尾 ありがとうございます。本当に、シュシュさんと言えば、長崎県民だったら行ったことがない人はいないんじゃないかっていうぐらい、長崎の観光名所の1つのような位置付けで県民は考えていますけども、最初は女性陣からも反対をされて、その成功する1%の可能性にかけて、それが成功したじゃないですか。その成功にこぎつけた秘訣というか、山口さんの思いだったり、前向きな性格かもしれないですけど、秘訣があれば教えていただけますか。

山口 今では「農業振興に情熱を傾けた8名」とかっこよく言われてますが、当時は「逃げ遅れた8名」ですね。盃は傾けよっただけで、情熱は傾けとらんやったです。でも、「もう引くに引けんよね」というふうになってしましまして。でも、会社に土地を貸したんですよ。借地契約でですね。そしたら信用がないから担保に取られたんですね。当然のことですけどね。田舎だから担保力もないですよ。そうすると失敗すると家まで取られてしまうんです。「おいおい。これ真剣にやらんと大変なことだよ」。もう生まれ変わったら、もう2度とあんな冒険はしないぞと思いますけども。成功するまでとにかく続けないと、失敗は許せない。よく例えば道の駅とかも指定管理で管理料までやって赤字を補てんして、修理があつたら行政が補てんしますよ。そんな地域に今度、私は生まれ変わりたいというふうに思ってますけども。そういうことで、引くに引かれないということで。ただ、農業者の視点というのを事業の柱ということで、今も当然ですけども忘れていないつもりであります。

平尾 ありがとうございます。それでは最後に若松さん、お願いいたします。

若松 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました若松と申します。いい似顔絵があるでしょう。これは実は山口県の岩国の錦帯橋の近くでお話に行つたと

きに、わたなべえつこさんという人が似顔絵を描いてくれました。実物見てください。実物よりちょっといいのかなと思ったりしてるんですけども。

私、昨日6時まで高知県高知市にいました。太平洋ですね。ですから、高知の人に「あんたの隣どこ」と聞いたら、「おらとこの隣はアメリカじゃ」と。これぐらい言う人たちの集まり、坂本龍馬のふるさとでございます。昨日の夜8時半、9時ごろ瀬戸内海を渡って広島に渡りました。暗闇だったんですけども、瀬戸内海もおつなものであります。夜の間、たぶん皆さんが寝ているだろう間に関門海峡を通過して、今朝の8時22分にこちらの方におじゃまをしたところでございます。

何年か前でしょうか。私、実は1枚の名刺を、この太良町出身の方からいただきました。そこになんと「月の引力の見える町」となんか、ばかげたことを書いてる人がいて「すごいな」と思ったんです。私も実は「夕日のきれいな町」というのを、標榜してたものですから。私の町は「しずむ夕日が立ちどまる町」ですね。分かりますか。沈む夕日がなんで立ち止まるんや。こういった逆転の発想というのが、町を変えていくのではないかな。そんな思いであります。

少し、双海町の夕日を見ていただきたいと思います。実はこれ「恋人岬」というところをつくって、このきれいなモニュメントの上にすっぽり3月と9月ですか、春分、秋分の日、ここにきれいな夕日が落ちるというストーリーを作って、「この夕日を見たら幸せになる」と私が言うもんですから、騙されて来るわけです。騙した私が悪いのか。騙されて来る人が悪いの



か分かりませんけれども。特にこの穴の中にきれいな夕日が入るということを言ったもんですから、もう3月、9月には押すな押すなの大盛況であります。

そして、この近くに松山の飛行場がありますが、こんなきれいな夕日。これ「飛行機のたまご」と私言ってますけれども、よくこんな写真が撮れるもんだなあと思ったりするほど、美しい夕日が落ちるのです。そして今の時期。あの瀬戸内海の水平線に「だるまの夕日」として落ちていく。たぶん瀬戸内というのは、非常に天気率が良くございますので、1年の中で夕日が見える確率が非常に高いということで、夕日売り出しております。そして、この周辺には棚田がいっぱいあって、棚田に映える夕日であるとか、それから棚田の夕景とか。まさに絵になる光景でございます。

「そうだ。おらの町で夕日による町づくりをしよう」と思いました。そのきっかけは、私が教育委員会で社会教育をやっていたときに「夫婦学級」と「金儲けの公民館活動」というのをやったら、それがかなり有名になってNHKの「明るい農村」というテレビ番組で紹介されることになりました。なんとなく、皆さん、私の顔を見てください。「明るい農村向きの顔をしているな」と思ったりしてるんだろと思うんですが、これを撮りにきたディレクターとカメラマンが間違っ「上灘駅」といってここに降りなさい」と言ったら「下灘駅」に降りてしまったんですね。これが1つのきっかけだったんです。そのとき、NHKの方が「きれいな夕日ですね。日本全国行ったけれど、こんなにきれいな夕日見たことありません。これを町のキャラクターにしたいのにな」と言って帰っていった。たった、これだけなんです。そうか。夕日がきれいなのかと全国調べたけれど、まあ、日本全国、あるは、あるは、であります。島国ですから、夕日がきれいなところは当然、特に日本海に行くと、宍道湖に落ちる夕日です。新潟の佐渡に落ちる夕日。北海道には留萌に、黄金岬というところがあって、氷点下15度になると真四角になって沈む夕日があるという。

でも、そんなことを考えても、なかなかどうしたらいいのか分からないということで、青年たちを集めて「何をしたらいいのか」と言って話をしたら、「夕焼

けコンサートをしよう」と思ったんです。双海町というのは、漁村ですから、日本で一番有名な音楽家は誰かと。北島三郎、鳥羽一郎という。こんなところで、私が「クラシックでベートーベンをしよう」と言ったら、「若松さん、熱があるのと違うか。ベートーベンの『運命』なんか聞きよったら、網が海まで落ちてしまう。ドドドーン」。人が来(こ)んから、「来(こ)ンサート」と言われました。「うまいこと言うな」と思った。どうしようもないですね。

でも、なんとかしようということで、町長のところに行って「町長さん、いい思い付きをしました。夕日で町おこしをしましょう」と言ったら、町長が「やめとけ」と言いました。なんでか。朝日は昇る。夕日は沈む。「沈むような町をつくってどうするんだ。ばかたれが」と言われました。町長が反対することは、ほとんど成功します。「よーし、やってやろうじゃないか」ということで、私は青年たちを集めて「夕焼けコンサートをやる」。場所はどこにするのかといったときに、はたと困りました。私の町にはこんなりっぱ文化ホールはないわけでありまして。「ああ、ここでしょう」というのは、下灘駅という実は寅さんのやって来た駅があるんですね。日本で一番海に近い駅です。昔、駅員さんかプラットホームから釣りをしよったということですから、大変近いんですね。ここでやろう。JRに言ったら「やめてください。あそこは無人駅になっています。もし事故でもあったらどうするんですか」「あんたら、そんなことばかり言うから赤字になるのよ」。そこに「国鉄」と書いてみてください。できたときから赤字の名前なんです。国、金、失う、と書いてあります。「うまいこというぞ」と言って、さあ始めた。できあがったから、町長さんに来てもらって、コンサートの挨拶してもらおうじゃないかと。「私は反対しよるきいかん」言うんですね。「そうですか。4年後が危ない」。すぐ来るんですね。町長、殺すには刃物なんかありません。4年後ですから。やがて町長、上灘駅から乗せて下灘駅を降りたら、町長の挨拶でストーリーを始めようということになった。ところが自分の目の前に1000人もの人で、開業以来の人で埋まったんですね。

町長、なんて挨拶したと思いますか。「只今、ご紹介

介いただきました私が双海町長です。皆さん私も常々思っていました双海の夕日は日本一です」というんです。昨日と全然違う話をするわけです。これがブラウン管にのって、たった10分間の、全国に流されたわけです。たったこれだけで、町の運命が変わるなんて誰も思ってません。

あれから35年。なんか、きまろではありませんけれども35年間続いて、今、全国のああいイベントなんかの大賞をいただいたりしながら、コンサートをやっている姿を見たりすると、私たちはいつの間にか反対とか、失敗とかいうのはたくさんある。今日のお話の中にもずいぶんありましたけれども、私は反対や失敗というものを越えてこそ、本当の意味があるのではないかなあというふうなことを思うんです。

今、私の町、観光列車「伊与灘ものがたり」というのが走っております。特にこの下灘駅というのは、日本の中で死ぬまでに行きたい観光地のベスト10に入るほど人がめっちゃくちゃ来るんですね。地元の人と言うんです。なんで人が来るのか。こんな、なんにもない町に。と言うんですね。なんにもないところがいいんです。私たちはいつのまにか「あるもの」に思いを込めて、生きてるんですけども、これではなかなか難しいんじゃないか。

江口さんから、この町のパンフレットを送っていただきました。事前に。なかには、あるわ、あるわ。太良町というところは、すごいところですね。でも「それがどうしたん」ということなんですね。私たちは、いつの間にか「あるものをどうするのか」ということを、なかなか考えづらいところがあるんだろうと思いますね。

そこでやっぱり、考えていかなきゃいけないことがなんなのかということで、私は青年たちを自分の家の横に私設の公民館「煙会所」という四畳半の囲炉裏を切った部屋に集めて、青年たちに「これからきみたちの時代だ。日本という国を変えたのは、若者の力だった。坂本龍馬の時代、あの維新を起こしたのは若者である。あるいは戦後、多くの若者たちが復員してこの国をつくってくれた。考えてみれば、青年の力というのは、大変なもんだよね。お前たちの時代だぞ」と言ったら、青年たちがこう言いまし

た。「何をばかなことを言っとる。この町は1つもええことはない。私はこの町を離れるかもしれない」と言っていて、言った言葉が「田舎嘆きの10カ条」ですね。田舎には仕事がない。田舎には活気がない。田舎には文化がない。田舎には嫁さんが来ないし、ええ女がおらん。田舎にはプライバシーがない。言うたらいいん言うたら、すぐ言うんですね。田舎には遊び場がない。私の町にはカラオケ喫茶もパチンコもないのであります。田舎にはいい店がない。おらの町にはブティックじゃろがないんですからね。おらの町には狭い道しかない。おらの町には情報が遅くて、少なくて、古い。もう無いかと聞いて一番最後に言った言葉がふるってます。おらの町には信号が3つしかないというんですね。

この話を聞いたときに、若者たちがこんな「田舎の嘆き10カ条」を言って、これ誰が解決するんですか。町長でしょうか。議員でしょうか。役場の職員でしょうか。そう考えてみれば、これは自分たちでやるしかないんじゃないのかと思ってコンサートをやり、いろいろなことをやった結果、少しずつ、少しずつ人が来るようになり、やっぱり人づくりだよ。拠点づくりだよ。住民総参加のオンリーワンをつくっていくことだよ、ということを18時間マラソンシンポジウムと列車1両を借り切って、海周り、山周りを走った「コスモス鉄道2001年の旅」というので分かってきて、それから、みんなで努力をした結果、今、道の駅だけでも55万人ぐらい人が来るのかな。そんなことを考えていくと、私たちはあきらめてはいけないな。だから、思いを込めて地域づくりをしていかなきゃいけないんじゃないのかなあというふうなことを思っているわけです。

結果的には、私は徹底的に夕日にこだわろうということを考えてました。私の町はほとんど「ないもの」ですから、「あるもの」に思いを寄せて。じゃあ夕日。ところが皆さん方が言うんです。「夕日なんて日本全区どこにでもあるのに、なんでこの町がことさらに夕日なの」と言うけれども、「いやいや、夕日なんてものは、月の引力と同じようにメンテナンスは全然いらんのやから。やってみたらいいんじゃないの」ということで、やった結果が30年。10年経ったら物語ができます。

30年経ったら神話ができる。そう思って私たちは思いを込めてやっています。

地元に来て「あなたの町、夕日きれいですか」「いつ沈むんですか」「いつ頃やろか」。みんなそういうんです。じゃあ、夕日の時刻表作ってみよう。こんな話になりました。これが下灘駅という駅のなんにもないところですが、土日になると、外国からもたくさんの人に来るんですね。

「青春18切符」というのがあります。この「18切符」に双海町だけで、過去に4回出てくるんですね。高校生が駅に降りてきました。ここから見るとすごいです。こんな背景、日本のどこかにいます。これも双海町の鉄橋を走るものなんですね。ここでコンサートをやる。こうして海に1番近い駅のコンサートがどんどん有名になってくる。「男はつらいよ」。これで出たのが下灘駅。これご覧ください。こんな田舎のなんにもないところ。ここに今、国道が、バイパスができて、多少、今、海より近いというのは疑わしくなってきましたけれども、こういうものですね。寅さんがやってきて、山田洋次さんがここで撮影をして。

そして、何よりも永六輔との出会いであります。永六輔さんは「夕日博士」といいます。私は役場に35年間勤めておりまして、役場で地域振興課長をしたときは、町長さんが課長以外全く部下のおらん課をつくらしてくれました。日本一小さな課ですね。でも日本一まとまりのいい課ですから、思いを込めてやってきたんです。その夕日課長と、夕焼けの評論家とが出会って、この永六輔さんという人が、どんどん、どんどん紹介してくれるようになりました。

いやあ、世の中ってものは面白いもんだなあっていうふうなことを思いながら、そうじゃ、周辺にいろんなものをつくろうじゃないかと。ここに菜の花畑をつくろうと言ったら、JRが「やめてください。ここに菜の花を植えると、モグラが入って地下があまいから、どんどんどんどん列車が崩壊していきます。落っこちますからいけません」というんですね。そこで考えた。反対されるんやったら、ここにポケットを縫って、粗く縫って、ポケットから種を落としたら、野生の花になるかもしれん。そんなことを思って30人のおばちゃんと一緒に

に、菜の花の種(たね)をどんどんどんどん落とした。そりゃ、JR怒ってきました。

でも、ここにまぎれもなく花が咲き、今、10何年かになりますけれども、あれほど反対したJRは今「菜の花トロッコ列車」を走らせて、儲けとるのであります。まあ、すごいです。マッチ箱のような1両の列車なんです。ここにきれいな花が咲きます。別名「夕日花」いわゆる「酔芙蓉」と言います。朝、真っ白な花が咲きます。昼、ピンクになります。夜、真っ赤になります。皆さんがお酒飲んだときと一緒にです。これを「夕日花」として売り出したところ、またここに人が集まってくる。

私たちは、いつの間にかあきらめていたけれども、やり方によったら、面白いことがいっぱいできるんだなということが分かってくるようになりました。

私たちは危機感で町おこしをしようというのはできません。日本全国が危機なんですから。私たちだけが危機だと思ってもできない。だから、私は3つ言ってるんですね。1つは「楽しいことをしよう」や。そして自分たちで「美しいことをしよう」や。もう1つは、「新しいことをしよう」や。この3つのキーワードをしっかり納めていけば、必ず自分たちの地域に人が帰ってくるのではないか、というふうなことを思うんですね。

そのきっかけは、この人です。実は私の町から25キロ沖合に周防大島という山口県の島が横たわっています。星野哲郎さんのふるさとなんです。この人が民俗学者宮本常一という人なんです。この方が言ってます。「橋がほしい。過疎法がほしい」。みんな今まで離島や半島や過疎地は、いろんな思いを込めていろんな無いものねだりをやってきました。でも、この宮本さんが言ったのは、「あの過疎法があるから、町がよくなるのか。そうではない、過疎法を町が必要とするときに町がよくなるのだ」。

そんなことを考えていけば、私たちは過疎という幻影に惑わされて、今日まできてるし、過疎法があるからいろんな恩恵が受けれたのだけど、それではだめだろうなと思うんですね。だから、私は「過疎」という言葉は使いたくない。「適疎」。へそじゃない。「適疎」。今の人口というのは、増えるわけないんだから、これを適当な疎だと思っていけば、自分たちの

地域はよくなっていくんだろう。そう思えば、一人ひとりの町民がどう自立するかという、自分で立つことと、自分を律すること。このことを考えていけばいいのではないかと思いますね。

有り余ったこの地域の資源をどのようにこれから生かしていくのか。そのためには私はもう竹崎カニとか、コハダとか固有の名詞よりも「月の引力が見える町のコハダ」とか、「月の引力が見える」ということを最大限にPRしていくと、ここの地域のものが東京に行ってもどこにいても、売れていくような時代がくるのではないか。そういう意味では私は自分の町の「しずむ夕日が立ちどまる町」と同じように、ここの「月の引力が見える町」というすごいネームバリューというものをこれから生かして、地域づくりをしていたきたいものだと思っています。大変、雑駁(ざっぱく)な話をしましたけども、ぜひお考えください。

平尾 ありがとうございます。夕日とか、みかんのおいしいところもそうですけれども、それとあと海が近いというのもそうですが、すごく太良町と共通する地域資源がたくさんお持ちですよ。

若松 全く同じ地形なんですね。この町と。海岸線が約16キロございますけれども。これが東西に伸びて16キロ。単調な海岸線ですね。みかん、なんでも取れます。ここの町よりおいしいですよ。だって今、「紅(べに)まどんな」なんて、農家作ってますけど1個1000円ですからね。ここのみかん、1箱なんぼでしょう。1個1000円ですよ。これでも買っていく時代が来たんですね。私たちはボロカろう、安かろうなんて時代じゃない。そういう思いを込めて「しずむ夕日が立ちどまる町」のみかんということになってくると、これが非常に大きなネームバリューになっていくんだということですね。私の町は瀬戸内ですから、小魚がいっぱい取れます。この小魚を小魚として処分したら、もうトロ箱、仲買人さんは足で蹴とりますよ。でもこれを、骨を取りいろんなことをして、加工して「じゃこ天」というのを作りました。そして、このおばちゃんたちが加工場を造ったのですが、おばちゃんたちが発

想したのは「ラヴじゃこ天」ですね。女性たちに人気がある、若者たちに人気があるものを作った。これがたったこの「ラヴじゃこ天」だけで1億円売るんですね。こういった1つの、なにいうんでしょうかね、この地域でないと発信できないようなネームバリューというのを持ったらすごく面白いと思いますね。

平尾 ありがとうございます。たくさんいろいろとお話を伺っていきたいんですけども、これから意見交換をする中で、いろいろともっと話を掘り下げて伺いたいと思います。ここまでパネリストの皆さんの取り組みを伺ってきました。ここからは食に焦点を当てて、皆さんとざくばらんに意見交換を行っていきたいと思います。日本人の食というのが、生命を維持するための食事というところから、今、楽しむための食事というのになっています。その楽しむための食事は、知的な欲求を満たしたりとか、未知の土地の食だったり、食文化に触れられるという地域の食というのが、それにどのような役割を果たすのか。まだまだ有名ではないけども、まだ生かしきれていないけども地域の人だからこそ知っている食とか、食文化の価値とその生かし方について、もう少し具体的にお話を伺っていきたいと思います。

まず最初にこちらのスライドをご覧くださいんですが、「じゃらん」という旅行情報誌あります。そちらが観光動向調査というのをまとめているして、「初めて訪れる地域に期待すること」というのをアンケートを取っているんですけども、1番多かったのが地元ならではの美味しいものが食べたい。そして2番目



が魅力のある特産品やお土産物が買いたい。そして3番目が魅力的な宿泊施設に泊まりたい。そして、そのあとも大事ですが、地元の人のおもてなしの心を感じたい。そして、子ども、若者、大人が楽しめるスポットに行きたいという結果があります。

上位2項目が地域の食に関する分野です。そして、おもてなしの心というの、食に関してもすごく付随してくる大事なポイントではないかと思います。そしてこれ数年連続して、ある地域が食の分野で満足度が断トツの1位なんですけども、どこの地域だと思いますか。実は3位までがある都道府県の、食の満足度というのが3位まで、その都道府県が独占をしています。正解です。北海道です。一番、食に関する満足度が高いのが断トツで札幌です。上位を夕張とか、函館とか、そういった北海道が占めています。

佐賀県では伊万里とか唐津が食品以外の地域産品、いわゆる伊万里焼とか有田焼といった陶磁器の産地というのが1位に、購入目当てということで上位に食い込んでいたりもします。旅の目的の1つに、やはり、このような結果からも食というものはすごく注目をされます。私たちは非日常的なところに伺ったときに、食べたものとか、その土地で得た食経験というのが、その土地そのものを印象付けて、その土地自体の良さとか悪さを評価する基準にもなりかねない、すごく大切な要素だということは皆さんも経験がおありかと思いますが。

今、私たちはインターネットで日本中、世界中の食べ物が手に入ります。それを「食のグローバル化」と言いますが、一方でふるさとの食、料理だったり、お母さんの味だったり、地域の食べ物、スローフードとか地産地消といった「ローカリゼーション」といわれる流れもあります。本田さん。本田さんの取り組みは、まさにふるさとの味を核にした取り組みだと思えますけども、この田舎の食とか、ふるさとの味というのを求めてこられる理由というのは、どういうところからあるんでしょうか。

本田 そうですね。日本の和食がユネスコの無形

文化遺産になったということが、非常に大きな地域の皆さんたちに元気を与えた。訪れるお客さんに「こんな田舎料理、お煮しめと漬物に、山菜に」と言っていた皆さんたちが、非常に身近にある食材を、すべてを手間暇かけているという。それを食べさせるときに「これはね、うちの裏山でね」、こんなんであんなでという言葉かけの中に付加価値を付けてくる。だから、インターネット化のさまざまな情報の中で、そういう食材はもちろん購入はできるけども、そこにある水、そこにある調味料、すべてのものがトータル的にコーディネートされて、炊き立てのごはんがおいしいとか、あのおばあちゃんが作るお煮しめがおいしいとかというのを今、もちろん戦後都会に出て行った団塊の世代のふるさと回帰ももちろんそうなんですけども、若い人たちがとても感性豊かに本物の味を求めてやってきている。それを今、海外からの皆さんたちが、日本のスローフード、和食という食文化というのは、健康にいいというイメージが文化遺産に登録されたことによって意識が高まって、オール九州の中でまずはどこに行き、どういうものを体感するという、体験ではなくて交流と体感によって日本の地域の食文化に触れるという新しい動きがあって、最初20年前に「地域の母ちゃんが作るこんな田舎料理、お客さん来るかよ」と言われたレストランなんですけども、それが年々多くなって来てるんですね。これから地方に可能性があるものについては、日本のうま味を生かした出汁(だし)文化であるとか、発酵調味料であるとか、長寿社会をつくってきた戦後貧しい農村の中で伝えられてくる、つなげなきゃいけないものの和食というものが、非常にとても重要なおもてなしになってきたということを今、実感してますね。

平尾 私が全国各地を渡り歩いて感じた地域の食の魅力とか、輝かせ方というのを1つまとめたものがあるんですけども、ちょっとこちらスライドいいですか。本田さんの先ほどの取り組みの話とかも、安全とか安心とか、新鮮であることとか、手づくりだったり、健康になるとか、健康的になるとか、健康によさそうとかということとか、お母さんたちの料理が素朴である

こととか、日本には四季があって、それぞれの旬がありますので、その季節感だったりとか、あとはその独自のその地域でしか食べられない地域性であったりとか、そういったものを大事になってくるのかなというふうに思いますけども、若松さんもこの中でこだわりを持って取り組んでいらっしゃるキーワードってありますか。

若松 私の町は、みかんはなんでも取れるって言いましたけども、魚は鰹(はも)がたくさん獲れるんですね。これから作っていくのには、若者に食べていただくようなものを作っていかなきゃいけないんじゃないかと思って。「はもかつバーガー」というのを作って、これが若者たちには結構売れています。ひどいものは「ユーヒーヒーコーヒー」を作ったんですね。怒られました。それパクリじゃないのか。上島珈琲からクレームがきて、提訴するという話になったときに、私は丁重に社長さんにお話をして「田舎の人たちが思いを込めて作るんだから、そんなことに天下の上島が」と言ってご理解いただいて、「ユーヒーヒーコーヒー」作って売ったら、まあ売れる売れる売れる売れる。騙した私が悪いのか、騙されて食べるのが悪いのか分からないけども。私たちは歩きながら食べるというのは、お行儀が悪いと教わった時代です。今の若者たちは歩きながら食べるということが、ステイタスになっているんですね。それをやっぱりしなきゃいけない。「夕焼けソフト」とかいろんなことを作ってやっていると、結構若者たちがやって来て、それが若者たちのフェイスブックの、いろんなところで一人歩きし始めてくるとしめたものであります。騙していたものが本物になっていくんですね。

ちょっとご覧ください。私、こういうものを付けて歩いてるんです。電光掲示板ですね。今日博多の駅から列車に乗るとき、これ付けとったら、「なんじゃ」というてみんな見ましたね。大阪の道頓堀もこれ付けて歩きりましたが、大阪のおばちゃんに呼び止められました。「そのお兄ちゃん、お兄ちゃん」。誰のことや。「そこの吉本みたいな兄ちゃん」。僕のことでした。「へえ、あんたの町の夕日はきれいのかい。行って

みたい」言うて、たったこの電光掲示板だけで、10人のおばちゃんが双海町に1泊2日でやってきて、1人10万円落として行ってくださいました。そして帰るときに「お礼がしたいんですが」「いやいやお礼なんかいりません」みんなポケットから財布を出して、小さな汚い状袋の中にごそごそと入れておりました。なんと1人1万円の10万円ですね。太良町とだいぶ違うと思ったりするんですが。

考えてみれば、私たちはいつの間にか、人がする、役場がする。こんなことばっかり考えとったけども、あなたがどうなんだということを考えていかないといけないと思うんですね。そういう意味では一人ひとりが動く広告塔です。私たちは一人ひとりがどう責任を持ち、思いを込めてこの町に生まれ育ち、そしておそらく死んでいくであまりしょうけれども、この町に「住んでよかったよね」と言われるような地域をつくること。それは一人ひとりだろうと思っています。電光掲示板いいですよ。

平尾 ありがとうございます。話が電光掲示板の方に意識がいつてしまいましたけれども、こちらのスライドに立ち返りたいと思いますが。本田さんの取り組みも山口さんの取り組みも1番目のキーワードというのは、すごく大事にされて取り組まれていらっしゃると思いますが、2番目の、その土地でしか味わえない食とか、食経験の追求ということで、新鮮であるということはもちろんそうで、例えば宮城県で私はレンコンの一番おいしい食べ方を農家さんに伺ったら、「さしみだ」っておっしゃってたんですね。「わさび醤油で食べるのが、生のままで食べるのが一番おいしい」とおっしゃっていて、そういったその地域でしか食べられない食べ方、新鮮であるがゆえの食べ方なんかは食経験に含まれるのかなと思っています。早津さん、例えばこの食経験という面で、収穫体験とかもそういったものに含まれると思うんですけど、そういったもので大事にされているものとかありますか。

早津 収穫体験、お客様に太良町に来ていただい

て、太良の町のよさを知っていただくということもあるんですが、何よりもお客様と一緒にお話をする上でヒントをいただくことが非常に多くて、そういうことを私もときどき続けてはいるんですが、ヒントもそうですし、「太良って本当にすてきな町ですね」というふうなこともおっしゃっていただきますし、ありがたいですし、大変こちらが勉強させてもらっているということを実感しております。

平尾 ぜひ、早津さんやみかん農家さんを訪ねて、いろんな話を伺ったりして、生産者の声を聞きながら、そのみかんを食べるという経験を皆さんにもしていただきたいですね。ありがとうございます。

本田 搾るという、搾りたてのおいしさとか、こんにゃくゼリーにしてあるとか、とても収穫の面白いのもあるけど、搾りたての、こうまわりながら、搾りたてを飲むあの新鮮なものというのは、感動ですよ。みかん農家、皆さん来られたら、あれをやった方がいいかなあ。

平尾 みかんを皮ごと入れたら、いったん、みかんが半分にはかっさと割れて、自動的に搾られる、みかんジュースが搾られるという機械を昨日拝見しました。

本田 だって栄養学的には、皮のところに栄養的な、もともと漢方にあるぐらいですから、これからみかんもあの様に目の前で搾って飲ませるとか。丸ごと搾ると栄養的には非常に皮をむいて捨てるよりもいいとか。やっぱりそういう少し価値を高めていく見せ方、飲ませ方、出し方というの昨日いいなって。なんか、もてなされている気持ちになりましたよ。ただおいしいよじゃなくてそういう体で感じるような提供の仕方からやっていくという。昨日のおもてなし、とてもよかったですね。

平尾 私のタイムキープがまずかったせいか、だんだんお時間が少なくなってきました、ここから

先は、皆さん講師とかアドバイザーとして、地域に根ざして教えに行ったりされてます。私も、もちろんしますので、ほかが知りたい方は皆さん、私たちを呼んでください。ちょっと時間がないので、意見交換は終わりとさせていただきますが、最後に折角分科会が太良町で行われるということで、皆さんの太良の皆さんに対するメッセージとか太良のこういうところが素晴らしいよという、思ったことを色紙に入る範囲で漢字1文字か、熟語か、単語でも構いませんので、お書きいただきたいと思います。できた方から手短かに発表していただけますでしょうか。若松さん、お願いします。

若松 私は、魚辺に目が高いと書いて、「めだか」という字を作った男です。それから「旭」という字があるのに、なんで夕日がないんだろうかと。「九」という漢字に、「夕」という漢字を書いて、「九夕(ゆうひ)」という新語をつくりました。今日、皆さん方へのメッセージは、月辺というのは「肥」えるとかいろいろありますよね。この地域、太良にほしいなと思って、月辺に太良と書いて、「月太良(たら)」と読みます。分からない人がほとんどでしょうね。分かってたまるかということですよ。これ「いいね!」と思いますよ。月辺に太良。これで「たら」と読む。誰が読ますんだ。わしらが読ます。これでいいと思います。

平尾 できた方いらっしゃいますか。早津さんお願いします。

早津 「楽(らく)」という字を書かせていただきました。楽(らく)と言いますか、「楽しむ」ということですかね。こういう取り組みもそうなんですが、私自身、みかん作りをするときに、とにかくどうやって楽しもうかなというふうなことを考えて、いつもやるようにしております。こういう取り組み自体も非常になかなか大変なこともございますけども、ぜひ自分で楽しめたらいいなと常々思っておりますし、皆さんと一緒に楽しんでいけたらいいなと思います。ぜひ、よろしく願いいたします。

本田 私は、「繋がる」「繋がり」「繋げる」という「繋」という字を、今日皆様方に最後にまとめとして贈りたいと思います。行政も縦割りを横につなげなきゃ解決できない大きな問題だし、地域間が広域でブランド化していくという、連携というつながりもそうです。しかし、その中で次世代に子や孫たちも含めて、次世代若者にこのふるさをつなげていくという、どうしたらこの地域をつなげるかということ、これからのつながり方がとても大きなキーワードになると思っています。そういう意味合いで、この「つながる」「つながり」「つなげる」という、ぜひ、次に残せるふるさとの誇りを、どうぞ子どもたちにつなげていただければという願いでこのひと言にいたしました。

山口 私は、今、国は働き方改革とか、週休2日とか有給とか言ってますけども、私は「年中夢求(ねんじゅうむきゅう)」、年中休みがないというふうにはぼくよりも、夢を求めて、この太良町がもっと、もっと繁栄するためには、とにかくお客さんに喜んでもらうことも大事でしょう。常に自分たちが夢を求めて取り組むこと。これがまさに人生を楽しむことだというふうに思います。皆さん方と一緒に九州が、全国日本が元気になっていくように、一緒に夢を見たいというふうに思います。そういうことで「年中夢求」ということを考えております。

平尾 ありがとうございます。今日、短い時間だったんですが、お越しいただいた皆さんも、太良町にお住まいの皆さんも少しでも何かやってみようとか、新しいこと始めてみよう、楽しいことやってみようかなって思うような、肩をちょっと後ろから押してあげるようなパネルディスカッションになっていたらとてもうれしいです。短い時間でしたが、ご清聴ありがとうございました。

太良町現地視察

みかん狩体験（針茂果樹園）



安東アスパラ園



海中鳥居



道の駅太良



過去の開催地

第1回 (昭和63年)	鹿児島県	21世紀を拓く地域おこし ～過疎地域の再生と活性化のために～
第2回 (平成2年)	秋田県	明日を築く地域おこし ～過疎からの脱却をめざして～
第3回 (平成3年)	兵庫県	今、過疎新時代 ～その大いなるポテンシャル～
第4回 (平成4年)	島根県	過疎 ～新しい思想を求めて～
第5回 (平成5年)	岩手県	明日の過疎地域を拓く ～イーハトーブからの提言～
第6回 (平成6年)	高知県	新・いなか創造 ～自立と挑戦～
第7回 (平成7年)	新潟県	近き者よろこび、遠き者来るまちづくり
第8回 (平成8年)	広島県	豊かさの実感 ～魅力と誇りの創造～
第9回 (平成9年)	北海道	未来へつなぐ地域づくり ～新たな国土のフロンティアとして～
第10回 (平成10年)	岡山県	21世紀に挑戦する過疎地域 ～新しいライフスタイルに対応した地域の活性化～
第11回 (平成11年)	福島県	新たな時代の過疎対策 ～21世紀の真に豊かな国民生活実現のために～
第12回 (平成12年)	岐阜県	自立と美しく風格ある地域づくり ～豊かな自然・文化・生活の創造～
第13回 (平成13年)	大分県	自立への新たな視点 ～地域資源を活用し、自立した地域を創るヒント～
第14回 (平成14年)	山形県	地域づくりへの新たな挑戦 ～過疎地域の自立と「公益」的役割～
第15回 (平成15年)	宮崎県	小さな地域からの変革 ～住民参加による地域の新たな価値の創造と発信～
第16回 (平成16年)	和歌山県	新たなふるさとづくりを目指して
第17回 (平成17年)	徳島県	変革の時代における地域づくり
第18回 (平成18年)	宮城県	地域の共生、新たなステージへ ～交流居住の時代～
第19回 (平成19年)	福岡県	ふるさとの価値を見つめ直す ～自立と連携・交流による地域づくりの展開～
第20回 (平成20年)	石川県	次代に引継ぐ愛着と誇りの持てる地域づくり ～都市と過疎地域の互惠・共生～
第21回 (平成21年)	長野県	時代に対応した新たな過疎対策 ～日本の原風景 文化、文明を育んだ過疎対策をどう守る～
第22回 (平成22年)	東京都	過疎 新時代 ～都市と過疎地域の新たなパートナーシップの構築～
第23回 (平成23年)	愛媛県	過疎地域の底力 ～地域再生への新たな決意～
第24回 (平成24年)	愛知県	過疎地域でともに歩む ～外からのサポートと内なる価値～
第25回 (平成25年)	長崎県	過疎・離島・半島っていいね! ～本物の価値、コミュニティの知恵、そして誇り～
第26回 (平成26年)	三重県	過疎地域の未来に向けたイノベーション ～つながり、持ち寄り、支え合う「ふるさと」～
第27回 (平成27年)	香川県	過疎・離島で輝く ～地域の資源を磨き、交流を生み出す～
第28回 (平成28年)	奈良県	訪れたい、住みたい、住み続けたい地域 ～過疎地域で幸せな暮らしに出逢う～

全国過疎問題シンポジウム実行委員会事務局

〒840-8570 佐賀市城内一丁目1番59号 佐賀県 地域交流部 さが創生推進課内
TEL.0952-25-7376 FAX.0952-25-7423